静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第215集

中ノ合イセ山遺跡

（第二東名No.79地点）

中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡

（第二東名No.80地点）

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市－2

2010

中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第215集

中ノ合イセ山遺跡

（第二東名No.79地点）

中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡

（第二東名No.80地点）

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市－2

2010

中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡は、県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地として知られる志太平野北部の丘陵地にあり、縄文時代から中世にいたる遺構と遺物が発見された遺跡です。中でも、古墳時代前期の集落は、大型住居跡・掘立柱建物跡・区画溝・川辺の祭祀など当該期の典型的な構造を考古学的におさえることができる遺跡として注目されます。

現地における調査は、第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、日本道路公団静岡建設局の委託により、平成12年10月から平成15年10月にかけて実施しました。丘陵から低地にいたる広い調査範囲から竪穴住居跡・掘立柱建物跡・古墳群を検出したので、空中写真測量を導入して迅速な記録保存に配慮し、効率的な発掘調査を行うことができました。

整理作業では、遺跡の特性に応じて整理をすすめました。脆弱な木製品や鉄製品については、取り上げから保存処理に至るまで本研究所の保存処理室で行いました。

本遺跡の資料は志太平野北部の歴史を明らかにするだけでなく、静岡県の古墳時代前期を研究する上で非常に重要なものと考えられます。そこで、報告書としてまとめるだけでなく、本研究所で調査した関連遺跡とあわせて総合的な考察を行えるように配慮しています。この報告書が研究者のみならず広く県民の方々に活用され、埋蔵文化財への理解と郷土への愛着が一段と深められることを願うものです。

今回の発掘調査ならびに本書の作成にあたって、中日本高速道路株式会社東京支社、藤枝市教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位、地元住民の方々より多大な御理解と御協力をいただきました。さらに、多くの方から御指導、御助言をいただきました。この場を借りて、心よりお礼申し上げます。最後に、現地調査、資料整理に関わった調査研究員、作業員諸氏にも感謝の意を表する次第です。

平成22年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　天野　忍

例　言

1．本書は、静岡県藤枝市中ノ合に所在する中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡の発掘調査報告書である。

2．第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は地区（市町村）単位で実施している。藤枝市域では本書が第２冊目であるため「第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　藤枝市－２」とした。

3．調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。現地調査・資料整理の期間と担当者は以下のとおりである。なお、調査体制は第１章に明記した。

(1) 中ノ合イセ山遺跡

確認調査	平成12年10月～平成12年12月	及川司、飯塚晴夫、大畑要、大林元
	平成14年２月～ 平成14年２月	及川司、鈴木良孝、三井文洋、田中出
本調査	平成14年４月～ 平成14年５月	篠原修二、横山智之

(2) 中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡

確認調査	平成12年12月～平成13年３月	飯塚晴夫、中川律子、大畑要、大林元
	平成13年７月～ 平成13年９月	鈴木良孝、深田雅一
	平成13年12月～平成14年２月	鈴木良孝、三井文洋、中田出
	平成14年10月～平成14年11月	中嶋郁夫、中田出
本調査	平成14年３月～ 平成14年６月	中嶋郁夫、中田出
	平成15年４月～ 平成15年10月	中嶋郁夫、中田出、大林元、大畑要、田村隆太郎
整理作業	平成19年４月～ 平成20年３月	及川司、河合修、鈴木淑子
報告書作成	平成21年４月～ 平成22年３月	及川司、河合修、前嶋秀張

4．本書の執筆は調査研究員　前嶋秀張が行った。

5．調査における協力者などは文末に記載した。

6．石器石材については伊藤通玄氏（静岡大学名誉教授）の指導・助言をいただいた。

7．現地での基準点測量、空中写真撮影及び遺構測量の一部は株式会社フジヤマに委託した。

8．本書で使用した遺物写真図版はすべて当研究所写真室が撮影した。

9．脆弱遺物の取り上げ及び保存処理、木製品の樹種同定は、当研究所保存処理室が実施した。

10．調査の概要は、当研究所の一部で公開されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告書をもって訂正する。

11．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

12．発掘調査の資料は、静岡県教育委員会が保管している。

凡　例

1．座標は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。

2．本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。

例）SB16（SB　遺構の種別　16　遺跡内の遺構種類別通し番号）

SB　竪穴住居跡　　SH　掘立柱建物跡　　SD　溝状遺構　　SF　土坑

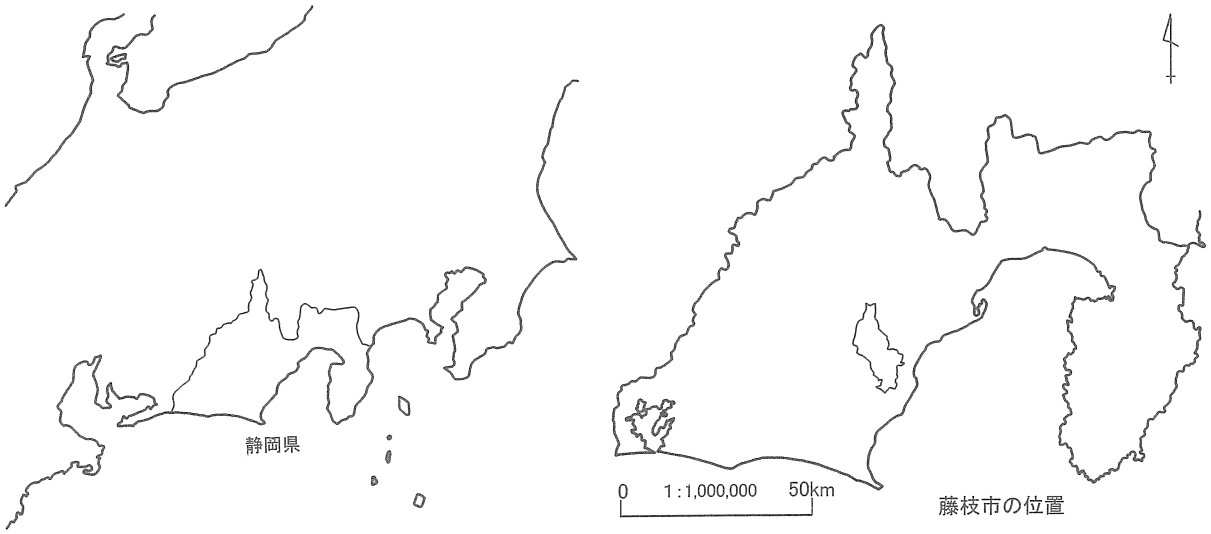
SX　性格不明遺構　　SP　SB 以外の小穴　　P　SB 内のピット

3．遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図版に明記した。

4．遺物番号は、種類ごとに通し番号を付している。

5．本書に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1992）を使用した。

6．本書の図中に用いたスクリーントーンなどの使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。



目　次

序／例言／凡例／目次

第１章　中ノ合イセ山遺跡（第二東名 No79 地点）…… 1
　第１節　位置と環境…… 1
　　1　位置と地理的環境…… 1
　　2　歴史的環境と調査歴…… 1
　第２節　調査の方法と経過…… 5
　　1　調査の体制…… 5
　　2　発掘調査の方法と経過…… 5
　　3　資料整理の方法と経過…… 6
　第３節　概　要…… 6
　　1　地　形…… 6
　　2　土　層…… 6
　第４節　調査の成果…… 8
　　1　遺構と遺物…… 8
　第５節　まとめ……16

第２章　中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡　（第二東名 No80 地点）…… 18
　第１節　位置と環境……18
　　1　位置と地理的環境……18
　　2　歴史的環境と調査歴……19
　第２節　調査の方法と経過……19
　　1　発掘調査の方法と経過……19
　　2　資料整理の方法と経過……21
　第３節　概　要……21
　　1　地形と土層……21
　　2　遺構と遺物……23
　第４節　調査の成果……23
　　1　Ａ区の遺構と遺物……23
　　2　Ｂ区の遺構と遺物……33
　　3　Ｃ区の遺構と遺物……45
　　4　Ｄ区の遺構と遺物……100
　第５節　まとめ……109

写真図版
抄　録

挿図目次

中ノ合イセ山遺跡
第１図　本遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 3
第２図　調査区と周辺地形図 …… 7
第３図　調査区全体図 …… 9
第４図　遺構外出土遺物１ …… 10
第５図　遺構外出土遺物２ …… 11
第６図　遺構外出土遺物３ …… 12
第７図　遺構外出土遺物４ …… 13
第８図　遺構外出土遺物５ …… 14
第９図　遺構外出土遺物６ …… 15
中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡
第 10 図　調査区と周辺の遺跡 …… 18
第 11 図　調査区と周辺地形図 …… 20
第 12 図　調査区と土層柱状図 …… 22
第 13 図　A 区地形測量図 …… 24
第 14 図　中ノ合イセ山１号墳地形測量図・断面図 …… 25
第 15 図　中ノ合イセ山１号墳周辺出土遺物 …… 26
第 16 図　中ノ合イセ山１号墳横穴式石室展開図 …… 27
第 17 図　中ノ合イセ山１号墳横穴式石室検出状況・土層図 …… 28
第 18 図　中ノ合イセ山１号墳横穴式石室基底石・墓壙実測図 …… 29
第 19 図　中ノ合イセ山１号墳石室内出土遺物実測図 …… 30
第 20 図　中ノ合イセ山２号墳地形測量図・断面図 …… 32
第 21 図　中ノ合イセ山２号墳横穴式石室展開図 …… 33
第 22 図　中ノ合イセ山２号墳横穴式石室基底石・墓壙実測図 …… 34
第 23 図　中ノ合イセ山２号墳横穴式石室出土遺物実測図 …… 34
第 24 図　B 区土層柱状図 …… 35
第 25 図　B 区遺構全体図１ …… 36
第 26 図　竪穴住居 SB01・02・03 付近平面・断面図 …… 37
第 27 図　竪穴住居 SB03 遺物出土状況 …… 38
第 28 図　竪穴住居 SB05 遺物出土状況 …… 39
第 29 図　竪穴住居 SB06 遺物出土状況 …… 40
第 30 図　小穴 SP06・07・08 平面・断面図 …… 41
第 31 図　B 区遺構全体図２ …… 42
第 32 図　井戸 SE01 平面・断面図 …… 43
第 33 図　性格不明 SX02 平面・断面図 …… 43
第 34 図　出土遺物実測図 …… 44
第 35 図　C 区遺構全体図 …… 46
第 36 図　C 区土層断面図 …… 47
第 37 図　竪穴住居 SB07・08・09 付近平面・断面図 …… 49
第 38 図　竪穴住居 SB07・09 柱穴・炉・遺物出土状況 …… 50
第 39 図　竪穴住居 SB10 平面・断面図 …… 51
第 40 図　竪穴住居 SB10 遺物出土状況 …… 52
第 41 図　竪穴住居 SB10 炉・遺物出土状況 …… 53
第 42 図　竪穴住居 SB11 平面・断面図 …… 53
第 43 図　竪穴住居 SB12・13 付近平面・断面図 …… 54
第 44 図　竪穴住居 SB14 付近平面・断面図 …… 55
第 45 図　竪穴住居 SB15 平面・断面図 …… 56
第 46 図　竪穴住居 SB16・17 付近平面・断面図 …… 57
第 47 図　竪穴住居 SB16 炉・平面・断面図 …… 58
第 48 図　掘立柱建物 SH01 平面・断面図 …… 58
第 49 図　溝状遺構 SD08 付近平面・断面図 …… 59
第 50 図　溝状遺構 SD09 付近平面・断面図 …… 59
第 51 図　性格不明 SX03・04 付近全体図 …… 60
第 52 図　性格不明 SX03・04-A 平面図 …… 61
第 53 図　性格不明 SX03・04-A 断面図 …… 62
第 54 図　性格不明 SX03・04-A 遺物出土状況 …… 63
第 55 図　性格不明 SX04-B・04-D 遺物出土状況 …… 64
第 56 図　性格不明 SX04-C 遺物出土状況 …… 66
第 57 図　性格不明 SX04-E 遺物出土状況 …… 69
第 58 図　小穴 SP62 平面・断面図 …… 69
第 59 図　竪穴住居 SB07 出土遺物実測図 …… 70

第 60 図　竪穴住居 SB07・10・14 出土遺物実測図・・・

写真図版目次

図版１　中ノ合イセ山古墳群遠景（南より）
中ノ合イセ山遺跡全景（北より）

図版２　中ノ合イセ山古墳群（南より）
中ノ合遺跡Ｂ区（南より）

図版３　中ノ合遺跡Ｃ区（南より）
中ノ合遺跡Ｄ区（西より）

図版４　SX03（北より）
SX04-C 出土遺物

図版５　中ノ合遺跡遠景（南より）
中ノ合イセ山遺跡土層堆積状況（北より）

図版６　土坑状遺構半截状況（南より）
遺物出土状況（土器）
遺物出土状況（石器）
倒木痕半截状況（北より）
遺物出土状況（土器）
遺物出土状況（石器）

図版７　出土遺物１（土器）
出土遺物２（石器）

図版８　出土遺物３（石器）
出土遺物４（須恵器･灰釉陶器･山茶碗）

図版９　中ノ合イセ山古墳群遠景（南より）
中ノ合イセ山古墳群全景

図版 10　中ノ合イセ山古墳群近景（南より）
１号墳全景（西より）

図版 11　１号墳石室検出状況（南より）
１号墳石室完掘状況（南より）
１号墳閉塞石検出状況（南より）

図版 12　１号墳奥壁検出状況（南より）
１号墳石室右側壁（東より）

図版 13　１号墳石室右側壁・墓道（東より）
１号墳石室左側壁・墓道（西より）

図版 14　１号墳石室基底石（南より）
１号墳周溝内須恵器出土状況（南より）
１号墳石室内刀子出土状況（南より）
１号墳墓壙（南より）
１号墳石室内刀子出土状況（南より）
１号墳石室内鉄鏃出土状況（南より）

図版 15　１号墳周溝内出土須恵器
１号墳石室内出土鉄鏃・刀子

図版 16　２号墳石室基底石（南より）
２号墳石室内出土刀子
２号墳墓壙（南より）

図版 17　中ノ合遺跡Ｂ区全景（北より）
中ノ合遺跡Ｂ区第１面全景（東より）

図版 18　SB01・02・03 検出状況（南より）
SB03 カマド検出状況（東より）

図版 19　SB03 遺物出土状況（南より）
SB03 遺物出土状況（西より）
SB03 遺物出土状況（南より）

図版 20　SB05 検出状況（南より）
SB05 遺物出土状況（南より）

図版 21　SB06 遺物出土状況（南より）
SB06 カマド検出状況（南より）

図版 22　SB06 遺物出土状況（南より）
SB06 完掘状況（南より）
SB06 遺物出土状況（南より）

図版 23　SP06・07・08 完掘状況（西より）
中ノ合遺跡Ｂ区第２面全景（東より）

図版 24　SE01 検出状況（西より）
SX01 検出状況（西より）

図版 25　SX02 検出状況（北より）
SX02 遺物出土状況（北より）

図版 26　中ノ合遺跡Ｃ区全景（南より）
SB07・08・09 検出状況（南より）

図版 27　SB07 炉断面（東より）
SB07 柱穴礎板（南より）
SB07 土坑（西より）
SB07 柱穴（南より）
SB07 土坑（南より）

図版 28　SB07 遺物出土状況（南より）
SB09 炉断面（南より）

図版 29　SB10 検出状況（南より）
SB10 完掘状況（南より）

図版 30　SB10 炉断面（南より）
SB10 土坑（東より）
SB10 遺物出土状況（南より）

SB10 土坑（南より）
SB10 遺物出土状況（南より）
図版 31　SB12・13・14 検出状況（南より）
SB14 炉断面（南より）
図版 32　SB16・17 検出状況（南より）
SB17 炉検出状況（東より）
SB17 遺物出土状況（南より）
SB16 炉検出状況（南より）
図版 33　SX03 検出状況（北より）
SX03 検出状況（南より）
図版 34　SX04-A 遺物出土状況（西より）
SX04-B 遺物出土状況（西より）
図版 35　SX04-C 遺物出土状況（東より）
SX04-D 遺物出土状況（北より）
図版 36　SX04-E 遺物出土状況（西より）
SF01 検出状況（西より）
図版 37　SF02 検出状況（南より）
SP62 礎板検出状況（南より）
図版 38　D 区調査区近景（北より）
D 区調査区全景（北より）
図版 39　SP18 遺物出土状況
SP103・104 遺物出土状況
図版 40　SP141・142 半截状況
SP167 半截状況
図版 41　SB03 出土遺物
SB06 出土遺物
出土遺物 1
図版 42　出土遺物 2
出土遺物 3
図版 43　出土遺物 4
SB14 出土遺物
図版 44　SB01 出土遺物
SB14 出土遺物
SX03 出土遺物
図版 45　SX04-A 出土遺物
図版 46　SX04-A 出土遺物
図版 47　SX04-A 出土遺物
SX04-B 出土遺物
図版 48　SX04-B 出土遺物
SX04-C 出土遺物
図版 49　SX04-C 出土遺物
図版 50　SX04-C 出土遺物
図版 51　SX04-C 出土遺物
出土遺物 1
図版 52　SX04-C 出土遺物
SX04-D 出土遺物
図版 53　SX04-D 出土遺物
図版 54　SX04-D 出土遺物
SX04-E 出土遺物
図版 55　SX04-E 出土遺物
出土遺物 2
図版 56　出土遺物 3
図版 57　出土遺物 4
図版 58　出土遺物 5
図版 59　出土遺物 6
図版 60　出土遺物 7
図版 61　SX03 出土遺物
Q-4 グリッド出土遺物
図版 62　SX03 出土遺物
図版 63　SX03 出土遺物
SB07 柱穴礎板
図版 64　SP62・TP09・SX03 出土遺物
E-3 グリッド出土種子
図版 65　出土遺物 8
出土遺物 9
図版 66　出土遺物 10
出土遺物 11
図版 67　出土遺物 12
出土遺物 13
図版 68　出土遺物 14
出土遺物 15

第１章　中ノ合イセ山遺跡

（第二東名 No79 地点）

第１節　位置と環境

１　位置と地理的環境

中ノ合イセ山遺跡は、東海道線藤枝駅から北に 6.5㎞、標高 107ｍの丘陵に分布する遺跡である。藤枝市の地形は北部の山地と南部の平野に分かれている。北部は清笹峠、高根山（標高 871ｍ）、菩提山と連なる山地部分である。南部は大井川の扇状地と瀬戸川や葉梨川に沿った低地が広がっており、志太平野と呼ばれている。北部の山地に源を発した瀬戸川と葉梨川は南流して志太平野を潤し、駿河湾に注いでいる。

この丘陵部分の山地は約 5,000 万年前といわれる古第三紀の海底に堆積した瀬戸川層群から成り、瀬戸川地向斜によって海水準まで隆起した後、東北―南西方向を軸とする褶曲作用を受けたと考えられている。その後、継続的な隆起と氷河期の海面低下により浸食作用が高まり、瀬戸川や葉梨川などの浸食谷が形成されたという。

完新世に入ると 9,000～6,000 年前に温暖化で海面が上昇し、標高５ｍ付近まで海進したと推定されている。水没した浸食谷は、瀬戸川や葉梨川の堆積物により埋められて、谷平野となっている。

２　歴史的環境と調査歴

中ノ合イセ山遺跡（１）は藤枝市街の北側を流れる葉梨川に沿った丘陵から低地にかけて形成された遺跡である。地形的には、北側に高根山を頂点とする山地、南側に大井川扇状地が広がっている。

旧石器時代

旧石器時代遺跡は調査例が無いので不明な点が多い。採集資料としてはナイフ形石器と細石器が天ケ谷遺跡（３）で採集されている。近隣の調査例では、大井川右岸の牧ノ原台地で石器集中地点を検出しており、旧石器時代遺跡の存在が明らかになりつつある。

縄文時代

縄文時代も調査例が少なく不明な点が多い。住居跡は２遺跡で１基ずつ計２基検出している。萩ケ谷遺跡（４）は瀬戸川中流域にあり、細い尾根の中段から石囲炉をもつ直径５ｍほどの竪穴住居跡を１基検出した。この床面から中期後半の曽利式土器が出土している。寺島大谷遺跡（５）は、細い尾根の中段から直径４ｍほどの竪穴式住居１基が検出されており、中期の勝坂式土器を伴う。

弥生時代

前期に平行する条痕文系土器は、萩ヶ谷遺跡Ｉ地区で出土した。これに続く中期初頭の丸子式土器は、荘館山遺跡（６）・蛭ヶ谷遺跡（７）・滝川遺跡（８）で出土しており、大型の打製石斧を伴う例が多い。これらの遺跡は前時代と同じ丘陵上に位置する。

中期中葉になると朝比奈川の自然堤防上に清水遺跡（９）、葉梨川沿いの丘陵裾微高地上に上藪田川の丁遺跡(10)が営まれる。清水遺跡は土坑から土器と木製農耕具が出土し、上藪田川の丁遺跡では用水路に関わる堰状の遺構などを検出した。いずれも水田耕作に関わる遺跡である。

後期中葉には上藪田モミダ遺跡(11)で土坑や礎板や杭列が検出され、引き続き低地部で集落が営まれていたことがわかる。

後期には低地に面した丘陵の集落が増えていく。白砂谷遺跡(12)では、同期から古墳時代前期の竪穴住居跡120基・方形周溝墓等が検出されている。隣接する荘館山遺跡(６)でも、後期の住居跡群と丘陵を切断する環濠の構築が明らかとなった。丘陵の遺跡は、稲ヶ谷遺跡(13)・東浦遺跡(14)の他、山王前遺跡(15)・落合西遺跡(16) などがある。その後、古墳時代前期になると丘陵の遺跡が減少していく。墓は清水遺跡(９)・秋合遺跡(17)・東浦遺跡(14)で方形周溝墓が検出されているが、帰属時期など不明な点が多い。

古墳時代

古墳は前期後葉（４世紀代）の時ヶ谷五鬼面１号墳(18)が古いと考えられている。これは直径20ｍの円墳で、特徴的な長大な木棺に鏡や銅鏃を副葬している。その後、４世紀末から５世紀代には東浦古墳群(19)、女池ヶ谷古墳群(20)、釣瓶落古墳群(21)、仮宿沢渡古墳群(22)、若王子古墳群(23)が相次いで築かれたとされる。これらの古墳群は、小型の円墳・方墳で構成され、全般的に副葬品も少なく、木棺直葬を伴う在地型古墳群（方形周溝墓の系譜）として注目される。一方、６世紀後半の古墳になると、瀬戸Ｅ９号古墳(24)で双龍式環頭太刀、八幡２号墳(25)で変形剣菱形杏葉・馬鈴が豪華な馬具として副葬され、志太地域の古墳が権力を象徴するものになったことを伺わせる。類例が多い後期古墳は７世紀から８世紀にかけて築造されるが、中期の古墳より副葬品に乏しく、僅かに鉄鏃や刀子が伴う例がある。

４世紀の集落として小深田遺跡(26)が注目される。溝によって方形に区画された敷地内に竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡が配置されている点が一般集落と異なり、小深田西古墳群(27)の被葬者の居館と推定している。ここでは、東海地方西部系（伊勢湾岸系の古式土師器やＳ字口縁の台付甕）と畿内系統の土器が出土しており、同地域との結びつきを示している。

古墳時代の窯は、入野高岸古窯(28)や衣原古窯(29)がある。これらは７世紀代の須恵器窯として操業していたとされる。

志太地域の水田跡は、道場田遺跡(30)で良好な古墳時代前期の水田を調査している。

一般的な集落としては、古墳時代中期（５世紀）の集落、宮ノ腰遺跡(31)が挙げられる。竪穴住居跡の他に掘立柱建物跡が伴うことを示している。

二東名No81地点寺家前遺跡(32)では、10ｍほどの四面庇付き掘立柱建物跡と周辺建物が計画的に配置され、豪族居館の可能性がある。

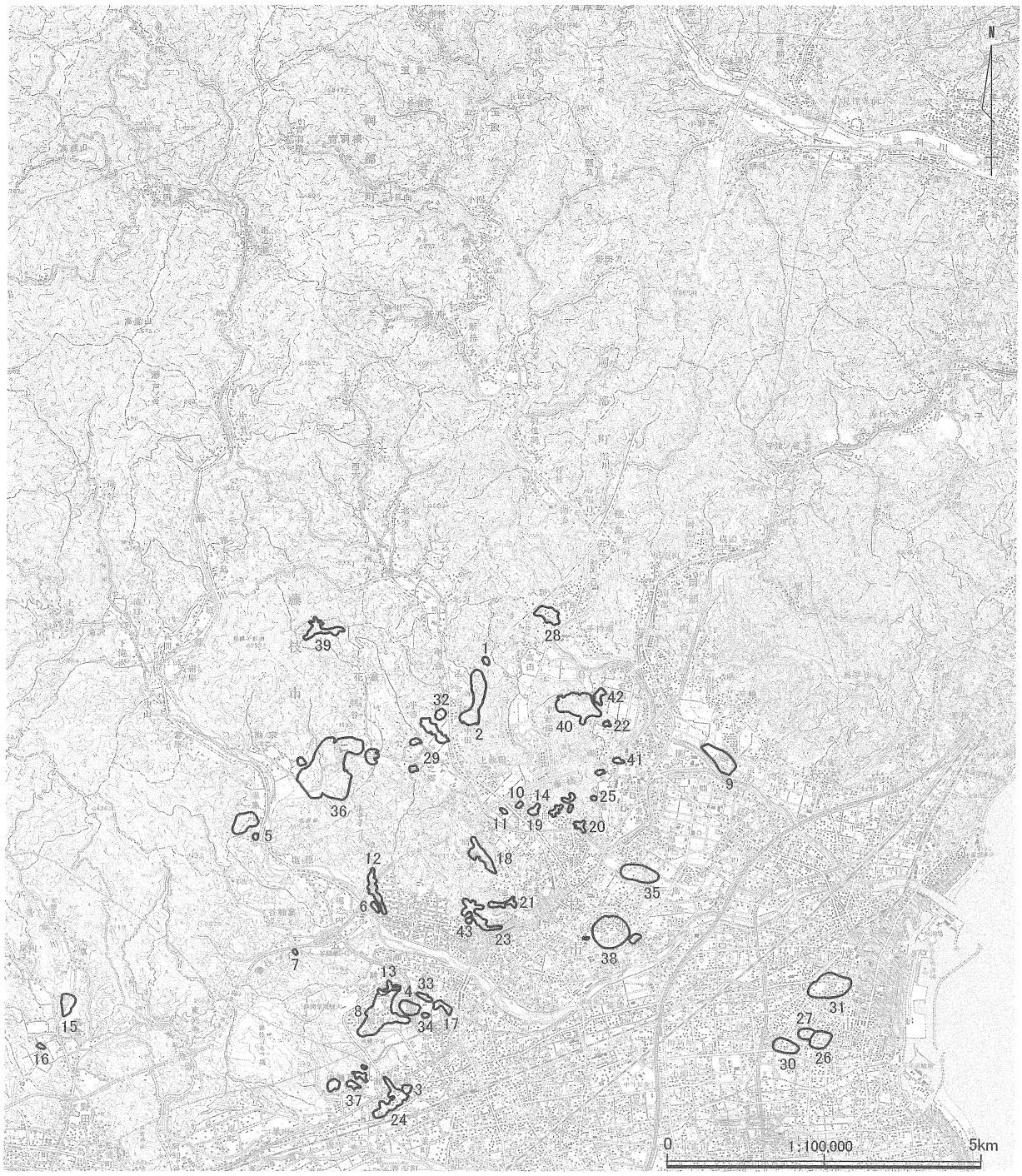
奈良・平安時代

奈良・平安時代になると、志太平野では大井川河口に海岸砂丘が形成され、瀬戸川などの中小河川が後背湿地を形成していく。この低湿地には微高地が点在しており、大井川の扇状地より安定した集落を営むことが可能であった。

７世紀以降、中央集権国家が成立すると律令体制を基軸とする地方の政治組織が整えられる。志太平野の集落が駿河国志太郡と益津郡に編成され、官衙を中心とした地方政治に組み込まれていく。この官衙を示す遺跡として御子ヶ谷遺跡(33)が挙げられる。ここでは、同時代の一般集落では見られない板塀で外周を囲まれた30基の掘立柱建物跡とともに木簡や墨書土器から地方官制の「大領」、官衙機能の「厨」、国郡里制の「志太」などの文字が発見され、国指定史跡「志太郡衙跡」となっている。

官衙は、施設の分散配置が知られており、厨跡の秋合遺跡(17)や工房跡の山廻遺跡(34)、倉庫や工房として水守遺跡(35)などが、官衙を支える遺跡として機能していたと思われる。この時期、集落は数基の竪穴住居跡を主体とした蛭ヶ谷遺跡(７)や東浦遺跡(14)があり、祭祀的な大型住居跡をもつ清水遺跡(9)も注目される。

生産遺跡は御子ヶ谷遺跡の北側４㎞に助宗古窯(36)がある。丘陵に築かれた約100基の穴窯は８世紀後半から９世紀に須恵器を生産している。製品は、静岡市・富士市・沼津市などの一般集落遺跡で出土



第１図　本遺跡の位置と周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	中ノ合イセ山遺跡	12	白砂谷遺跡	23	若王子古墳群	34	山廻遺跡
2	中ノ合遺跡	13	稲ヶ谷遺跡	24	瀬戸Ｅ九号古墳	35	水守遺跡
3	天ヶ谷遺跡	14	東浦遺跡	25	八幡２号墳	36	助宗古窯
4	萩ヶ谷遺跡	15	山王前遺跡	26	小深田遺跡	37	内瀬戸火葬墓群
5	寺島大谷遺跡	16	落合西遺跡	27	小深田西古墳群	38	田中城
6	荘館山遺跡	17	秋合遺跡	28	入野高岸古窯	39	花倉城
7	蛭ヶ谷遺跡	18	時ヶ谷五鬼面一号墳	29	衣原古窯	40	朝日山城
8	滝川遺跡	19	東浦古墳群	30	道場田遺跡	41	潮城
9	清水遺跡	20	女池ヶ谷古墳群	31	宮ノ腰遺跡	42	仮宿堤ノ坪遺跡
10	上藪田川の丁遺跡	21	釣瓶落古墳群	32	寺家前遺跡	43	鬼願寺
11	上藪田モミダ遺跡	22	仮宿沢渡古墳群	33	御子ヶ谷遺跡		

している。

墳墓は終末期古墳と火葬墓に特徴がある。全長1.5m～2.0mの小規模な石室や全長1m以下の竪穴式の石室状埋葬施設が普及し、内瀬戸火葬墓群(37)が新たな墳墓として定着していく。

鎌倉時代

古代国家を支えてきた中小河川の後背湿地は平安海進等により湿田化や塩害が進み、生産力を落とし始める。乾田から湿田への変化は平野部の集落遺跡の減少と重なっているが、調査例が少なく、不明な点も多い。

中世の遺跡として城館跡・集落跡・墳墓等がある。城館跡として平城の田中城(38)は全国的に珍しい円形の縄張りと今川から明治時代まで志太地域の重要拠点を押さえる城として有名である。これ以外にも花倉城(39)、朝日山城(40)、潮城(41)が交通の要衝に配置されている。

集落遺跡は調査例が少ない。平野部に広がる奈良・平安時代の集落は終わりを迎え、丘陵裾野に移動すると考えられる。ここでは、従前の竪穴住居に替わって不規則な柱穴群が検出される例がある。城館とこれを支える集落が散在したと考えられている。類例としては、朝日山城のある牛伏山の仮宿堤ノ坪遺跡(42)では、12世紀から13世紀の山茶碗片が出土した。朱塗りの仏像片や高台部分が二重の土器などから信仰に関わる遺跡と考えられる。

墳墓は鬼願寺(43)の中世墳墓群が貴重である。集石墓とこれに伴う蔵骨器、石塔、板碑が保存されている。

中ノ合イセ山遺跡は、第二東名建設事業に伴って調査した地点である。本事業に着手する以前の調査としては、県教育委員会文化課と藤枝市教育委員会が実施した現地踏査がある。この踏査では、当該地の東0.8kmに観音前遺跡。南西1.3kmに葉梨館。さらに、2km以内に朝日山城・借宿館・寺屋敷城館があるという歴史的環境を確認し、現地の地形から中世山城の施設が所在する可能性があることが指摘された。

第2表　藤枝地区の調査体制

		12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
所長		斎藤　忠	斎藤　忠	斉藤　忠	斉藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	清水　哲	天野　忍
副所長		山下　晃	山下　晃	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫					
総務部・総務課	常務理事 兼総務部長	伊藤友雄	粂田徳幸	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫	平松公夫	清水　哲	清水　哲	天野　忍
	総務次長				鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎		大場正夫	松村　亨
	総務課長	杉木敏雄	本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎	大場正夫	大場正夫	松村　亨
	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸				
	総務係長									山内小百合	山内小百合
	会計係長									杉山和枝	杉山和枝
	副主任	鈴木秀幸	鈴木秀幸			中鉢京子	中鉢京子	中鉢京子	中鉢京子	中鉢京子	中鉢京子
	主事			鈴木秋博	鈴木秋博						
調査研究部・調査課	部長	佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川素久	石川素久			
	担当次長	及川　司	及川　司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川　司	及川　司	及川　司	及川　司
								稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸
	次長心得										
	担当課長	及川　司	及川　司	篠原修二	中嶋郁夫	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川　司	及川　司	及川　司	及川　司
	係長							河合　修	河合　修	河合　修	河合　修
	主任調査研究員	飯塚晴夫	鈴木良孝			長谷川睦					
	調査研究員	大畑　要 中川律子 蔵本俊明 中田　出 川上　努 大林　元	深田雅一 三井文洋 横山智之 長谷川睦 蔵本俊明 中田　出 川上　努	大畑　要 横山智之 長谷川睦 中田　出 田中　淳 山本剛史	三井文洋 鈴木昌明 山本剛史 長谷川睦 中田　出 河合　敦 田中　淳 小木　充 川上　努 田村隆太郎 大林　元 筒井　京	増田充弘 中田　出 小林正和 河合　敦 勝又直人 大場隆幸 田村隆太郎 木村淑子	永島宏一 北野寿一 小林正和 河合　敦 菊池吉修 井鍋誉之 大場隆幸	北野寿一 中谷哲久 佐々木和也 小林正和 菊池吉修 松川理治 伊藤嘉孝	菊池吉修 井鍋誉之 松川理治	中川律子	中川律子 前嶋秀張

第２節　調査の方法と経過

１　調査の体制

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所では、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査にあたり、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の管轄に合わせ、工区を設定し調査にあたることとした。本書で扱う藤枝地区は静岡工区に含まれる。藤枝地区の調査では藤枝市に設置した藤枝地区事務所を拠点として、各現地調査を実施している。

本書で取り扱うNo79地点中ノ合イセ山遺跡・No80地点中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡の調査は、第２表にある体制で実施した。なお、藤枝地区全体の体制については、既に記したものがある。(静岡県埋蔵文化財調査研究所2010)

２　発掘調査の方法と経過

本調査は平成14年４月から平成14年５月にかけて約２ケ月間実施した。本調査対象面積は500㎡である。まず、重機で進入路を確保し、表土除去を行い、安全管理を心がけながら現地設営を行った。次に、調査区中央に土層帯を設定し、土層断面を検討しながら遺物包含層の掘削と遺構検出作業を開始した。この包含層掘削では、縄文時代の土器片、石器、剥片、黒曜石片等の遺物が出土した。これにあわせて、遺物出土状況の写真撮影、遺物の取り上げ、土層断面図作成作業による記録保存を行った。包含層掘削の終了後、確認調査で検出した土坑状遺構を半截し、土層断面を検討した。さらに、堆積土を注意深く除去しながら、遺構検出作業を継続すると無遺物層である第５層褐色土に達したため、検出作業を終了した。この間に遺構は検出されなかった。そこで、完掘状況写真を撮影し、遺構平面図作成作業を行った。５月末、撤去工を完了して調査を終了した。

実測図の作成については、２級基準点より３級基準点と４級基準点を打設し、細部はトータルステーションを利用して手実測した。こうして、遺構検出状況図・土層断面図を図化し、必要に応じて遺物分

写真　本調査の状況

布図・地形測量を追加した。これらの記録写真は、35㎜カラーネガフィルムを用いて撮影した。

3　資料整理の方法と経過

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査では、現地調査を優先するという方針により、各工事事務所の現地調査が終了する段階からまとめて資料整理・報告書作成を実施することになった。そこで、現地調査終了時から基礎整理作業として、遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測・写真整理・図面整理・図面修正・各種台帳作成を始め、本格的な整理作業と報告書の作成に備えた。

静岡工区では、平成15年度末の時点で現地調査がほぼ終了したことから、新たに整理作業と報告書作成に取り組むこととなった。中ノ合イセ山遺跡は、資料整理を必要とする調査地点の中で隣接する中ノ合遺跡と組み合わせて整理作業が行われ、遺構図・遺物実測図の修正・編集・トレース・遺物の写真撮影・報告書の執筆を経て報告書を作成した。報告書作成用の遺物写真は6×7判のモノクロ及びカラーポジを用いて撮影した。整理作業の過程で調査区名称をアルファベットに変更し、遺構番号をA区からの通し番号に修正した。

第3節　概　要

1　地　形

中ノ合イセ山遺跡は、岡部町との市境に近い、藤枝市高田市場ヶ谷中ノ合イセ山に所在する。遺跡は、調査区の北西から南東にのびる丘陵の稜線から、南西方向に張り出した標高107ｍの平坦地に立地する。西側には約1㎞離れた場所を葉梨川が南流し、眼下には中ノ合イセ山古墳群と中ノ合遺跡を望むことが出来る。

遺跡の立地する平坦面は、西側わずか23ｍ程で急斜面となる。その山肌は、地山が露出して直接薄い表土が覆うだけの場所が多く、長い年月の浸食を物語る。

2　土　層

調査区の基本土層は、本調査で観察した土層の変化を標準土層とした。ここで、各土層の特徴にふれておく。

第1層　褐色土層は現表土である。

第2層　褐色土層は細砂層でしまりと粘性に欠ける。

第3層　褐色土層は2㎜～5㎜の小礫を多く含む。炭化物を僅かに含む。

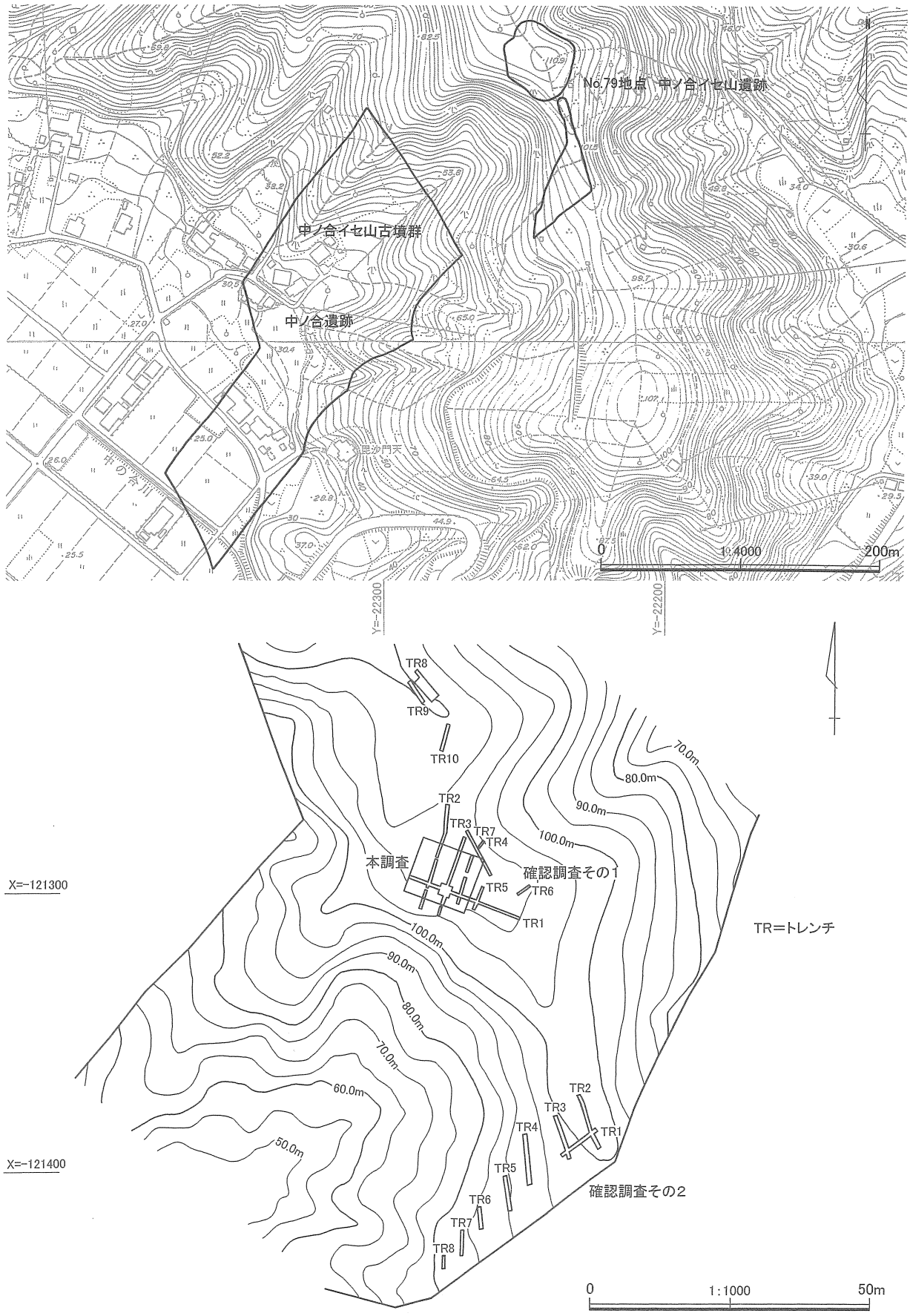
第4層　褐色土層は第3層より小礫が少なく、調査区中央部では拳大の礫を多く含む。

第5層　褐色土層は、2㎜～5㎜の小礫を含む。しまり粘性ともに欠ける。

第6層　黄褐色土層はしまりが強くやや粘性がある。

第7層　褐色土層は2㎜程度の礫を少量含み、しまりが強い。

縄文時代の遺物は第3層と第4層から出土した。須恵器・灰釉陶器・山茶碗は第1層から出土した。第5層以下には炭化物や遺物が全く見られない自然堆積層が連続していた。



第２図　調査区と周辺地形図

第４節　調査の成果

１　遺構と遺物

遺構

今回の調査では、風による倒木痕が数カ所において確認された他は、明確に遺構として断定できる痕跡は検出されなかった。

平成12年度の確認調査では、土坑状遺構を１基確認している。そこで、本調査では遺構が確認された場所と周辺部を綿密に精査し、平面プランの検出に努めたが、遺構と認識できるほど、明確な痕跡を見つけ出すことができなかった。断ち割りによる断面観察においても、土坑の掘り込み痕は確認できなかった。前回の調査で遺構としての認識根拠となった炭化物を含む埋土は、土坑と確認された場所付近では周辺域と比較してやや多く見られ、この集中範囲を土坑としてとらえたものと思われる。しかし、周囲には広く炭化物が認められ、拡張した土層断面でも５cmから７cmの厚さで広範囲に同一層が堆積していることを確認した。

また、調査区内を縦横する土層帯の断面観察により、調査区全体が土坑状遺構と認識された南西方向付近に向かい、穏やかに傾斜する擂鉢状の地形を形成していること。そして、その底部を少しずつ埋没させるように周辺部からの流れ込みによる堆積が繰り返されてきたことが推定された。

遺物

遺物は縄文時代の土器27点、縄文時代の石器29点、須恵器14点、灰釉陶器７点、山茶碗26点の合計103点が出土している。

縄文時代の土器は小破片が多く、時期や形式の推定が困難であった。そこで、刻み目のある隆帯がみられるものや条痕文と思われるものを中心に12点を図示した。

刻み目のある隆帯を貼り付けるもの

１は縦位に隆帯を貼り付けている。２～４は平縁の口縁部付近の破片である。刻み目のある隆帯を水平に貼付し、ヘラによる連続刺突が観察できる。いずれも器壁が６㎜と薄く、２は口唇部に刻み目を施す。

条痕文を施すもの

５～７は、斜位に条痕文を施している。内面には擦痕が残り、器壁が12㎜と厚い。８～11は胎土が５～７に類似しており、胴部の破片と思われる。12は器壁が19㎜と厚く、内彎気味であることから、底部付近の破片と思われる。

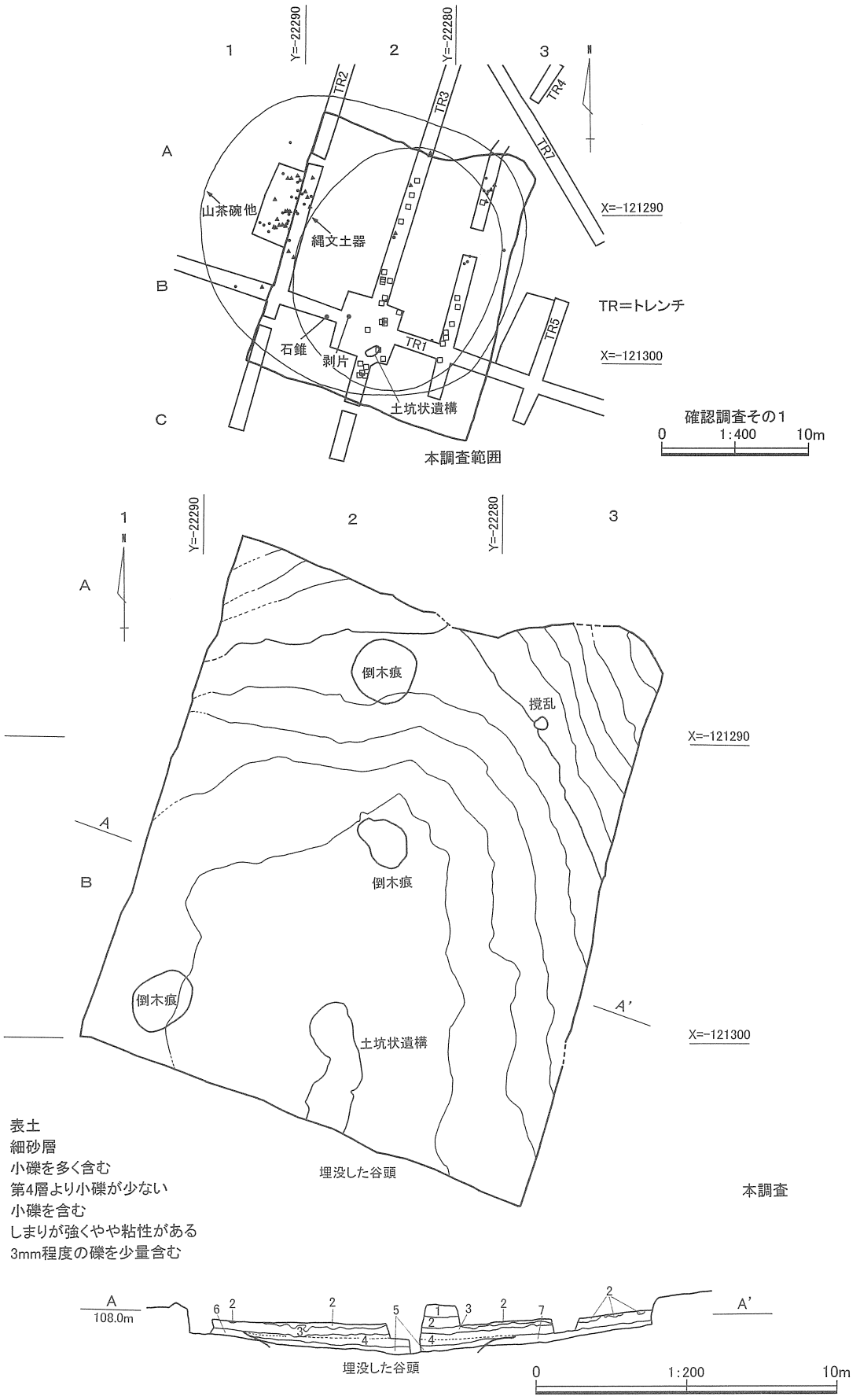
１～４は平口縁で口縁部に刻み目を施すこと。刻み目のある隆帯を水平に貼付し一部にヘラによる連続刺突が観察できること。器壁が６㎜と薄手であることなどから、入海式土器に類似した特徴がうかがえる。５～12は条痕が認められることから早期末の条痕文系土器群に属するものと思われる。

石器は29点出土し、図示可能な26点を掲載した。内訳は、石鏃１点、石斧１点、削器３点、敲石１点、石錐１点、楔形石器１点、石核２点、剥片類７点、磨石７点、石皿２点である。

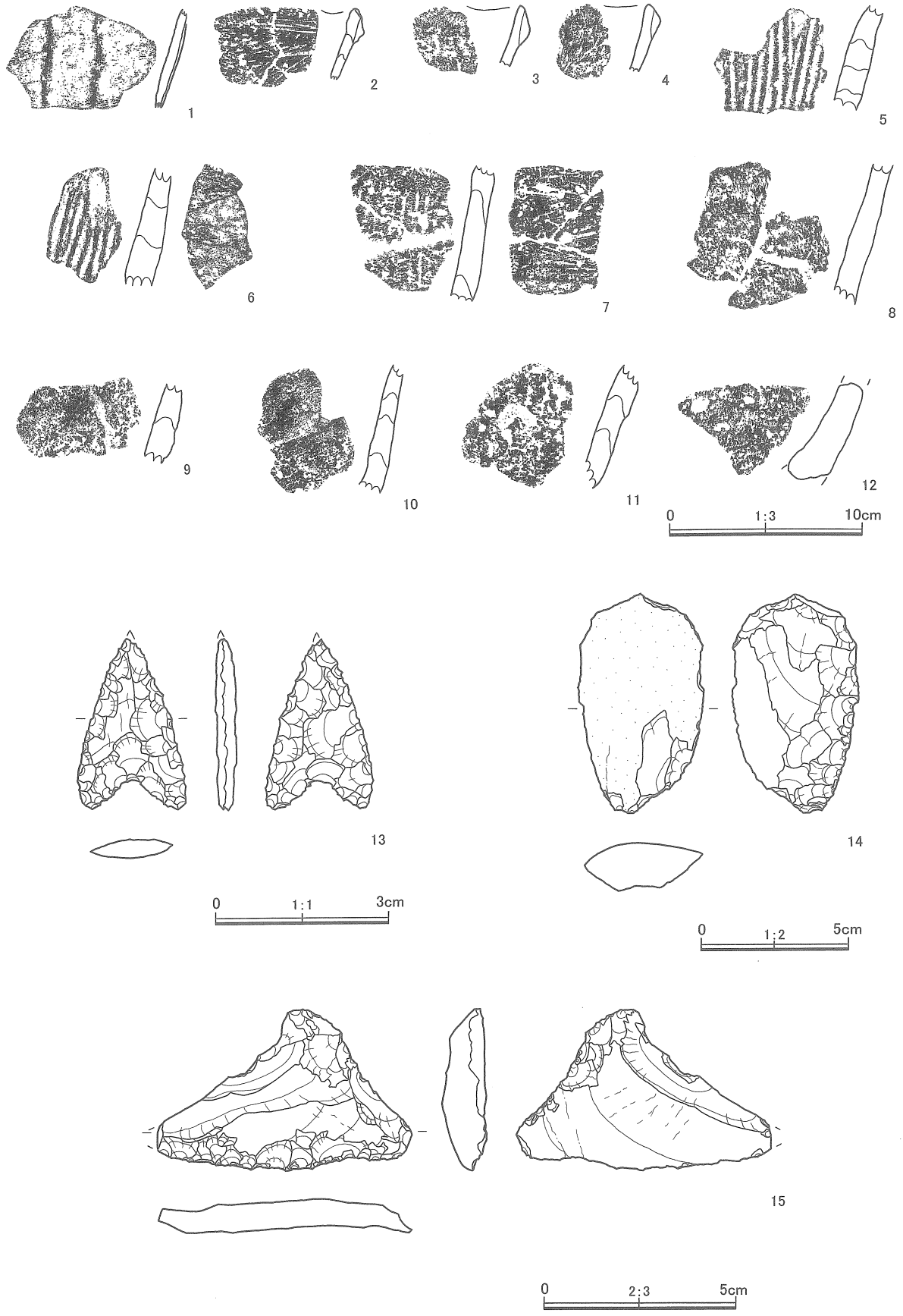
石鏃　13はＶ字状の抉りを有する大型の長三角形鏃である。側縁部中位に膨らみをもつ器体で、脚は弧状をなし、調整は比較的丁寧に施されている。一部に素材剥片の剥離面が残されている。

石斧　14は石斧の一部である。円礫の表皮付き剥片を素材とし、調整剥離を施して器体を整形する。

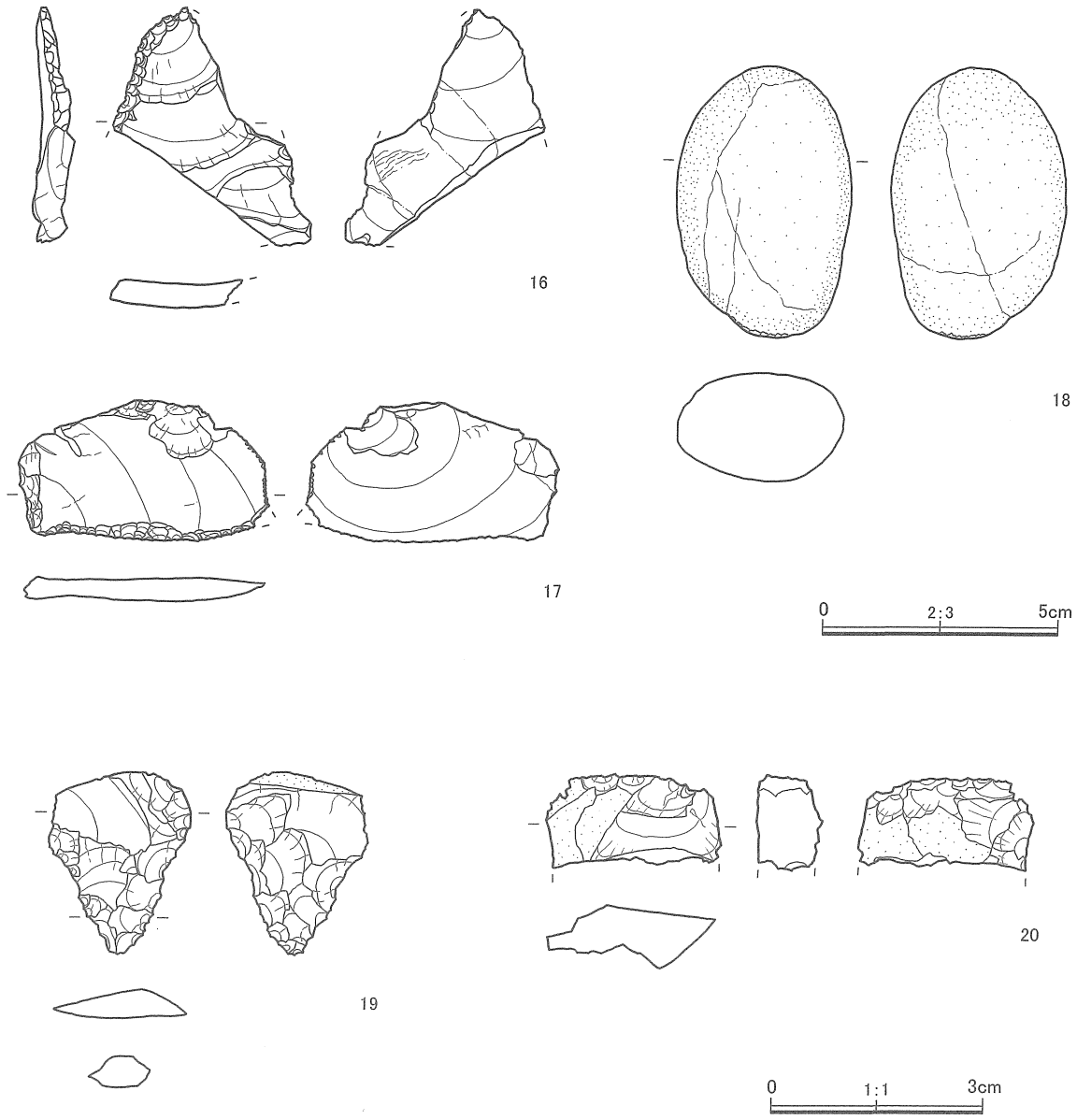
削器　15～17は削器である。素材の形状により横長の削器(15･17)と縦長の削器(16)がある。前者は幅広い剥片を横位に用い、主要剥離面側から粗い調整剥離(15)あるいは細かな調整剥離(17)を行い、刃部を作出する。15は器体左側が折損しており、折損面を打面とする調整剥離が観察できる。後者は縦


1
2
3
Y=-22290
Y=-22280
TR2
TR3
TR4
TR7
A
B
C
山茶碗他
縄文土器
石錐
剥片
TR1
TR5
土坑状遺構
X=-121290
X=-121300
TR=トレンチ
確認調査その1
0
1:400
10m
本調査範囲
倒木痕
撹乱
A'
埋没した谷頭
本調査
1 褐色土層　表土
2 褐色土層　細砂層
3 褐色土層　小礫を多く含む
4 褐色土層　第4層より小礫が少ない
5 褐色土層　小礫を含む
6 黄褐色土　しまりが強くやや粘性がある
7 褐色土層　3mm程度の礫を少量含む
108.0m
埋没した谷頭
0
1:200
10m

第３図　調査区全体図



第４図　遺構外出土遺物１



第５図　遺構外出土遺物２

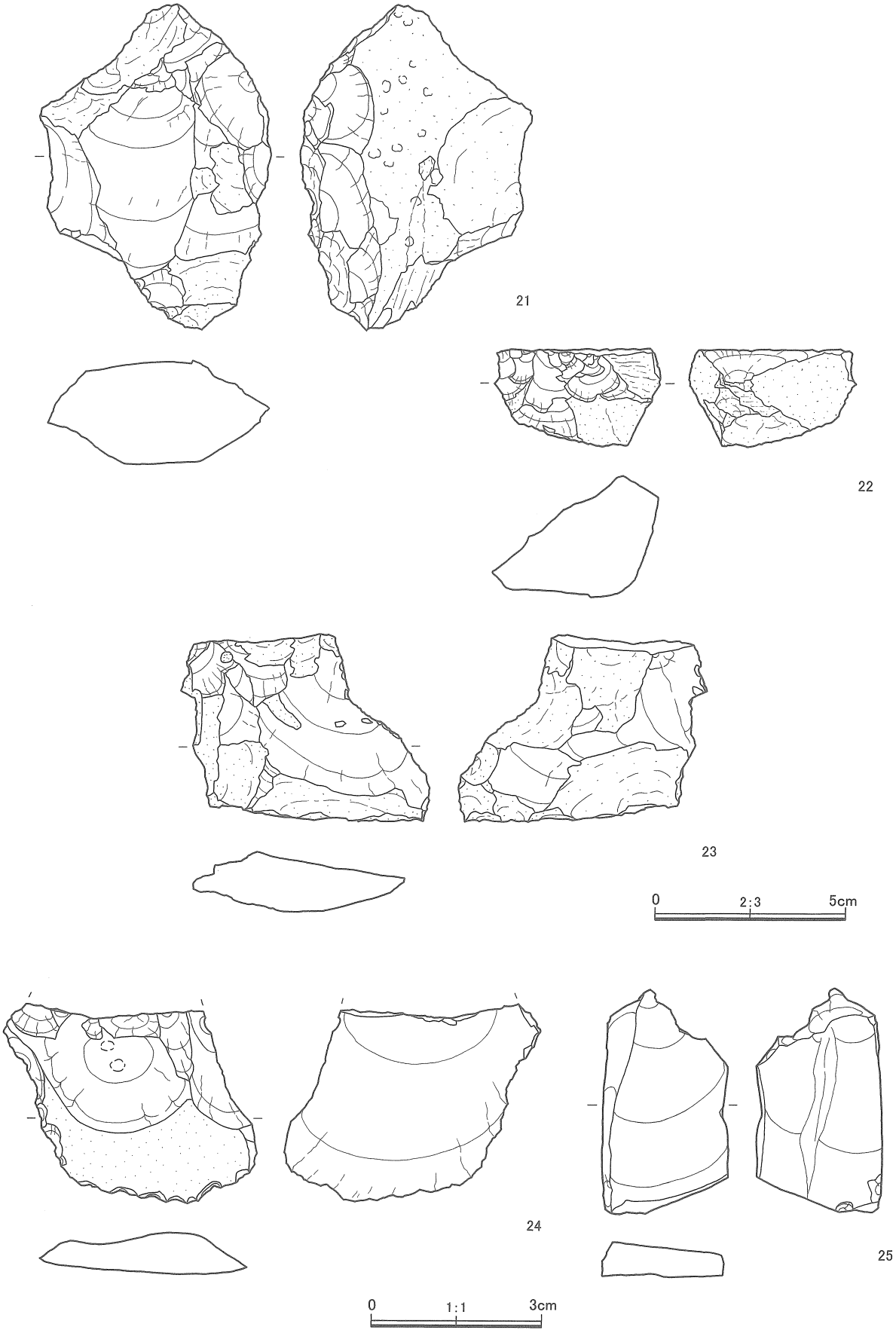
長の削器(16)である。素材剥片を縦位に用い、主要剥離面側から細かな調整剥離を行い、刃部を作出する。器体の下半部を折損している。

敲石　18 は敲石である。円礫の端部が加撃により潰れている。

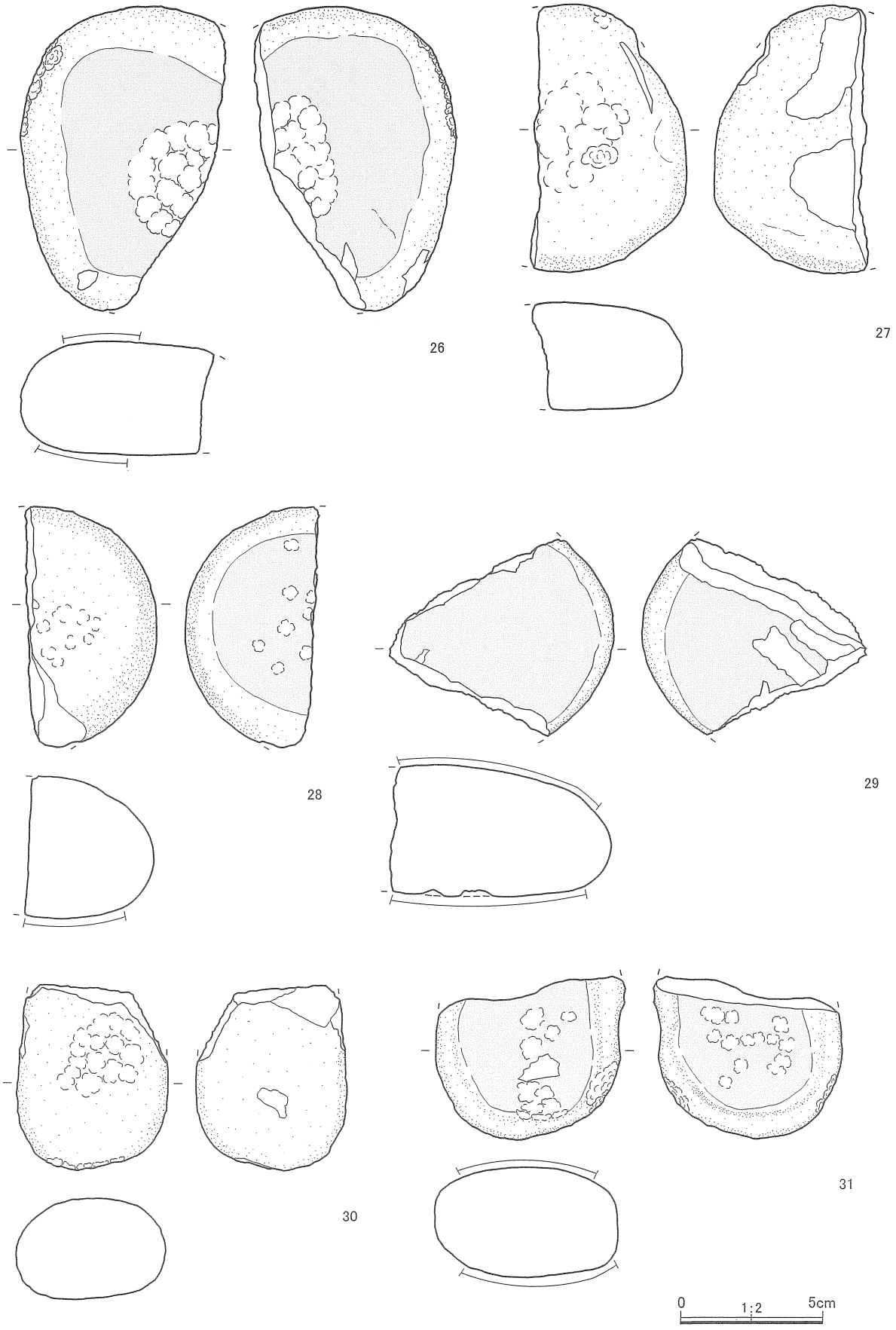
石錐　19 は石錐である。素材剥片を縦位に用い、主要剥離面と剥離面から調整剥離を行い、刃部を作出する。

楔形石器　20 は楔形石器の一部である。打面が線状に潰れ、剥離痕は階段状剥離が多い。下半部を欠損する。

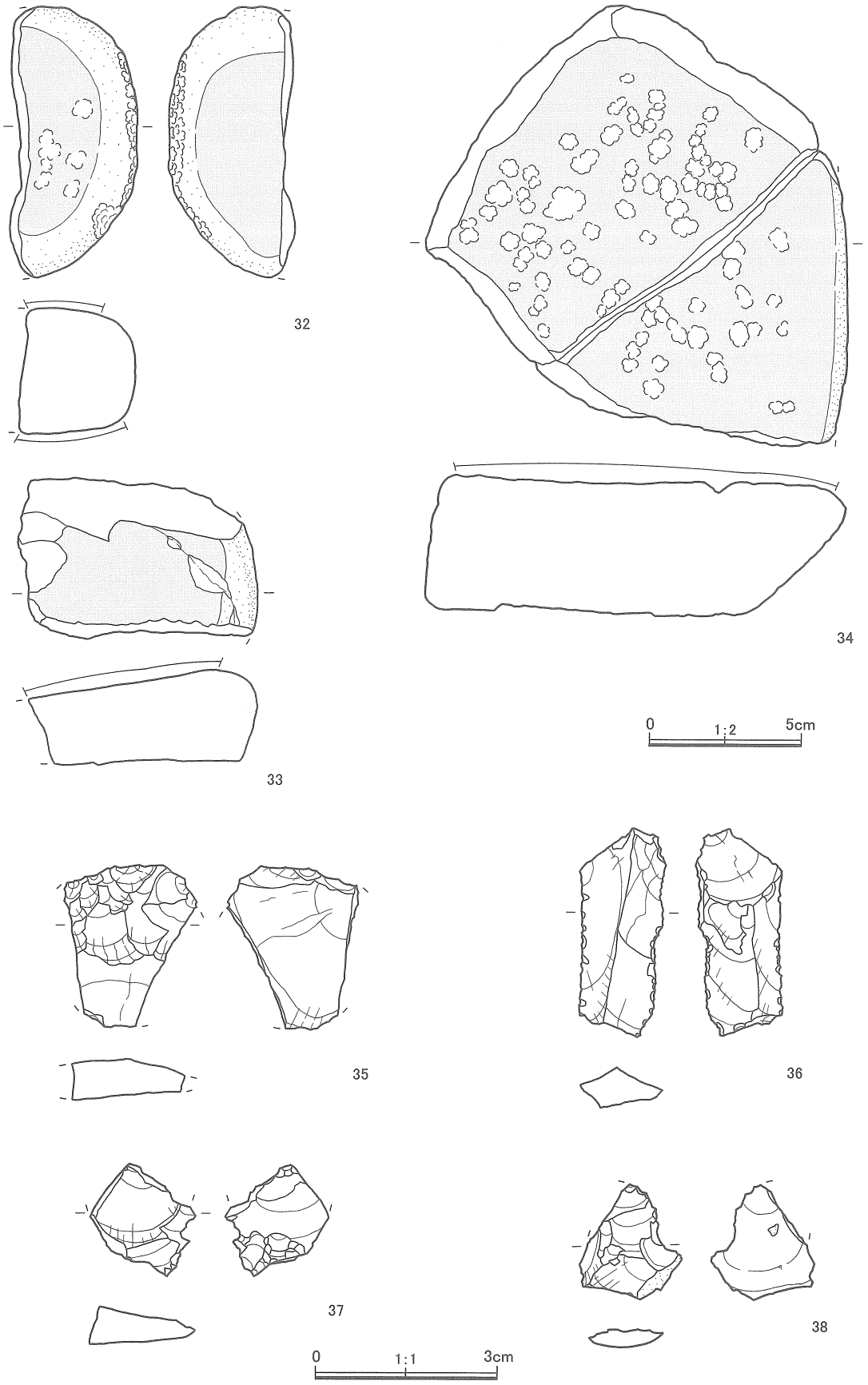
石核　21 は円礫を素材とした単設打面石核である。打面は、複数の調整剥離によって整えられた調整打面で、この打面から剥離された剥離痕が正面に観察できる。裏面には、正面を打面とした調整剥離が観察できることから、連続した剥片剥離作業の中で石核調整が行われていたことが推定される。石核調整を除く剥片剥離方向は同一方向に限られる。 22 は剥片剥離工程の中に 90 度打面転移技術をもつものである。礫面あるいは節理面を残している。剥離作業面の観察では、定型的な剥片の作出が困難と



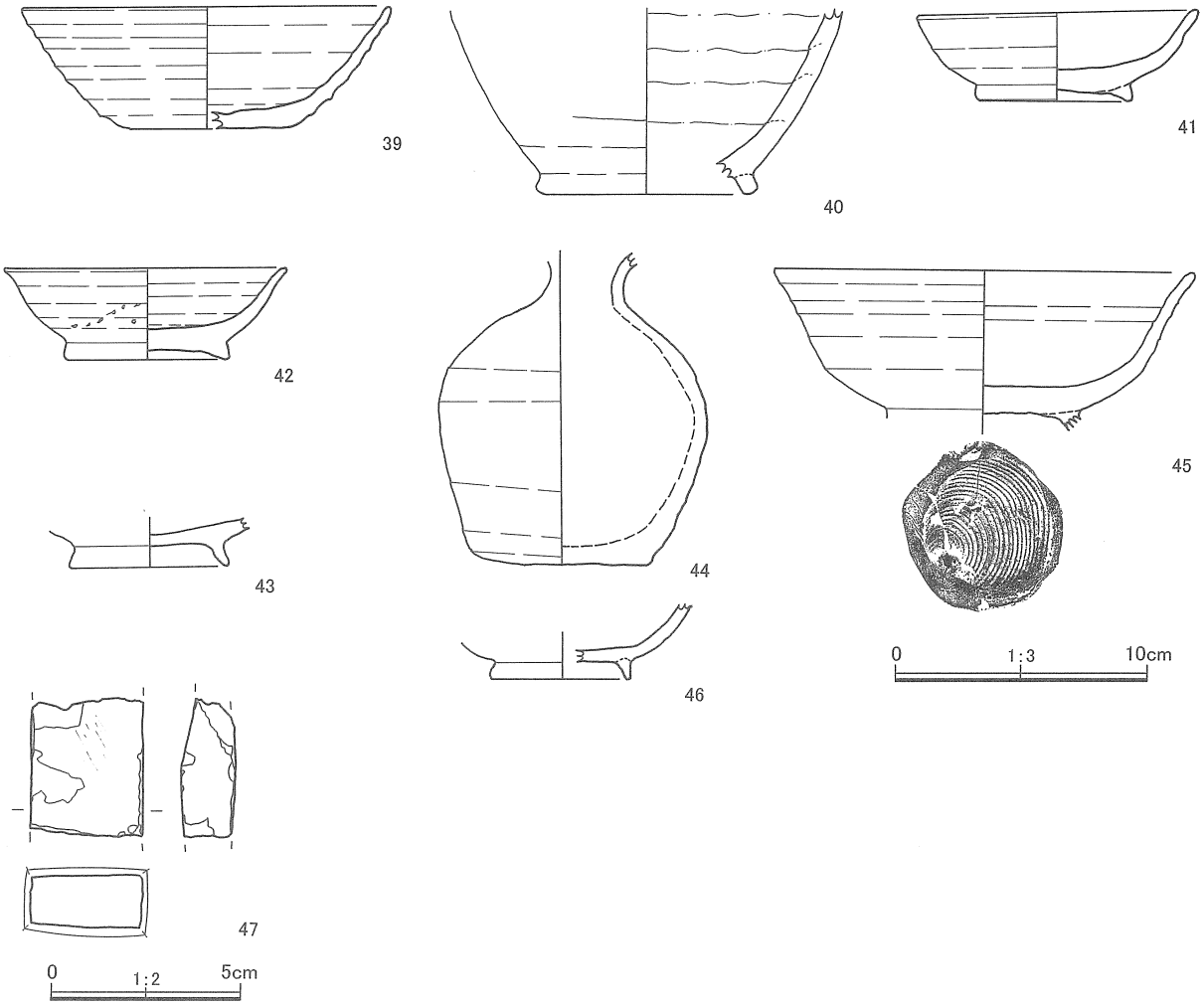
第６図　遺構外出土遺物３



第７図　遺構外出土遺物４



第８図　遺構外出土遺物５



第９図　遺構外出土遺物６

思われる。

剥片類　23 と 24 は使用痕がある剥片である。23 の打面は単剥離打面。剥離面に観察される剥離痕の剥離方向と主要剥離面の剥離方向が一致しており、単設打面石核の存在が予測される。右側縁に微細な剥離が認められる。24 は円礫面を残す剥片剥離作業初期段階の縦長剥片を素材とし、左側縁と下端部に主要剥離面側からの微細な剥離が観察できる。 25、35～38 は剥片である。25 は剥離面に観察される剥離痕の剥離方向と主要剥離面の剥離方向が一致しており、単設打面石核の存在が予測される。35、37、38 は二次加工に伴う微細な剥片である。

磨石　26～32 は磨石である。いずれも円礫を素材として、器体の表面と裏面に擦り面、側面に打痕が残る。26 は 1/3 を欠損する。 27、28、30 ～ 32 は 1/2 を欠損する。29 は 3/4 を欠損する。

石皿　33 は石皿の断片である。板状の礫を素材として上面に凹んだ擦り面が認められる。器体は 3/4 を欠損する。34 は接合した石皿の破片である。板状礫を素材として上面に擦り面と打痕が認められる。器体は大きく欠損している。

須恵器　39 は須恵器の杯身である。無高台で受部をもたない。内外面は回転ナデ調整。底部は手持ちヘラ削りで整える。8 世紀の製品であろう。

灰釉陶器　40 は灰釉陶器の長頸壺底部である。高台は貼り付け高台で外側に張り出す。表面採集品。11 世紀の製品であろう。 41 ～ 43 は灰釉陶器の小碗である。42 は全体的に器壁が薄く、体部は内彎し

ながら立ち上がる。体部の内外面はロクロによる回転ナデ調整で仕上げる。ロクロの回転は右回り。高台は貼り付け高台。接合部及び底部は回転糸切りの後、ナデ調整を施す。旗指古窯で作られた11世紀の製品であろう。43は碗の高台部。11世紀の製品であろうか。44は灰釉陶器の瓶である。旗指古窯の製品であろうか。11世紀の製品と思われる。

山茶碗　45は山茶碗の大碗である。体部の内外面はロクロによる回転ナデ調整で仕上げる。ロクロの回転は右回り。高台は貼り付け高台でやや外側に張り出し気味。接合部はナデ調整を施す。底部高台内に回転糸切り痕が残る。東遠江地域の製品であろうか。11世紀。46は山茶碗の小碗である。付高台で無釉陶器の山茶碗である。12世紀の製品であろう。

砥石　47は灰白色の砥石。表裏面に研磨による摩耗が著しい。1/2を欠損する。

第5節　まとめ

今回の調査では、縄文時代を中心として中世に至る包含層を調査した。

縄文時代は、薄手の土器の一部に刻み目のある隆帯とヘラによる連続刺突が観察できることや厚手の条痕文の様子から、縄文時代早期末の土器群の一部と考えることができる。また、石器類は狩猟具・農具・工具に乏しいものの、調理具の比率がやや多い傾向にある。出土土器に当該期以外の時期を含まないことから、縄文時代早期の石器群と位置づけることも可能と思われる。また、遺物包含層の状況から推定すると、当該期の人々が住居跡や集石などの遺構を伴わない一時的なキャンプ地として本遺跡を利用したものと考えられる。

第3表　縄文土器観察表

図版番号	挿図番号	調査区	出土位置	層位	種別	器種	部位	残存率	胎土	色調	備考
4	1	確認2	B－2	3	縄文土器	尖底土器	口縁部	3%	1mm以下の礫多い	10YR6/4 にぶい黄橙	
4	2	確認2	TR3	4	縄文土器	尖底土器	口縁部	2%	細砂含む石英雲母含む	10YR7/3 にぶい黄橙	
4	3	確認2	TR4	4	縄文土器	尖底土器	口縁部	1%	やや粗　石英含む	10YR7/3 にぶい黄橙	
4	4	確認2	TR4	4	縄文土器	尖底土器	口縁部	1%	やや粗　石英含む	10YR7/3 にぶい黄橙	
4	5	確認3	C－2	4	縄文土器	尖底土器	胴部	2%	1mm以下の礫	7.5YR6/4 にぶい橙	
4	6	確認3	B－2	4	縄文土器	尖底土器	胴部	2%	1mm以下の礫	7.5YR5/4 にぶい褐	
4	7	確認2	TR1 拡張区	4	縄文土器	尖底土器	胴部	3%	細砂含む石英雲母含む	5YR5/6 明赤褐	
4	8	確認2	TR1 拡張区	4	縄文土器	尖底土器	胴部	3%	やや粗　石英含む	5YR6/4 にぶい橙	
4	9	確認2	TR1 拡張区	4	縄文土器	尖底土器	胴部	2%	細砂含む石英雲母含む	5YR5/6 明赤褐	
4	10	確認1	TR1	4	縄文土器	尖底土器	胴部	2%	細砂含む細かい雲母	5YR5/6 明赤褐	
4	11	確認1	TR1	4	縄文土器	尖底土器	胴部	3%	0.5 ミリ以下の礫	5YR5/6 明赤褐	
4	12	確認2		4	縄文土器	尖底土器	底部	2%	0.5～1mm大の礫　雲母含む	5YR6/6 橙	

第4表　縄文石器観察表

図版番号	挿図番号	器種	材質	区	層位・遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
4	13	石鏃	凝灰質珪質頁岩	－	表土	(3.0)	1.85	0.35	(1.5)	
4	14	打製石斧	砂岩	－	3層	(7.65)	(4.35)	1.7	(56.7)	
4	15	削器	珪質頁岩	－	4層	4.25	(6.65)	1.2	(24.5)	
5	16	削器	凝灰質珪質頁岩	－	4層・東西南北ベルト	(5.0)	(4.2)	(0.9)	(7.8)	
5	17	削器	珪質頁岩	－	3層	3.0	(5.35)	0.7	(10.5)	
5	18	敲石	砂岩	－	4層	5.8	3.8	2.3	60.4	
5	19	石錐	砂岩	－	3層	2.6	2.0	0.45	2.4	
5	20	楔形石器	黒曜石	－	4層	(1.3)	(2.45)	(0.85)	(2.4)	
6	21	石核	頁岩	－	4層	8.6	6.1	(2.75)	141.4	
6	22	石核	砂岩	－	3.4層	2.6	4.45	3.2	34.3	
6	23	使用痕剥片	砂岩	－	排土	5.0	6.6	1.7	45.0	
6	24	使用痕剥片	砂岩	－	3層	(3.45)	4.45	0.8	(9.1)	
6	25	剥片	砂岩	－	4層	3.9	2.2	0.6	6.2	
7	26	磨石	砂岩	－	－	(10.65)	(7.1)	4.0	(403.9)	
7	27	磨石	砂岩	－	3？層	9.35	(5.4)	3.8	(232.8)	
7	28	磨石	砂岩	－	4層	(8.4)	(4.6)	(5.0)	(221.0)	
7	29	磨石	礫岩	－	3層	(6.85)	(7.8)	4.6	(261.5)	
7	30	磨石	砂岩	－	4？層	(6.45)	5.25	(3.5)	(167.0)	
7	31	磨石	砂岩	－	3.4層	(5.7)	(6.6)	(3.9)	(180.4)	
8	32	磨石	砂岩	－	3層	(8.95)	(4.15)	(4.2)	(210.2)	
8	33	石皿	中粒砂岩	－	4層	(5.35)	(7.85)	3.2	(173.9)	
8	34	石皿	砂岩	－	3.4層	(13.9)	(14.6)	4.7	(1074.9)	
8	35	剥片	砂岩	－	3層	2.7	(2.15)	(0.7)	(3.7)	
8	36	剥片	黒曜石	－	3層	3.45	1.4	0.7	2.6	
8	37	剥片	黒曜石	－	排土	(1.85)	(1.7)	(0.65)	(1.4)	
8	38	剥片	黒曜石	－	4層	(1.9)	1.7	0.4	(0.7)	

第5表　須恵器・灰釉陶器・山茶碗観察表

図版番号	挿図番号	調査区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ器高(cm)	体部径器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	備考
9	39		TR2 拡西	須恵器	杯身	口縁部 胴部 底部	20%	4.9		(14.7)	(6.2)	緻密	10YR6/1 褐灰	
9	40	確認1	表彩	灰釉陶器	長頸壺	胴部 底部	20%	(7.4)	(15.9)		(8.9)	1mm以下の礫	2.5Y7/3 淺黄	
9	41	確認1	TR3	灰釉陶器	碗	口縁部 胴部 底部	80%	3.6		11.1	6.0	密(白色砂粒含む)	2.5Y7/1 灰白	
9	42	確認1	TR4	灰釉陶器	碗	口縁部 胴部 底部	45%	3.7		(11.2)	6.2	1～6mm大の礫	10YR7/2 にぶい黄橙	
9	43	確認1	TR2	灰釉陶器	碗	底部	25%	(1.5)			(6.4)	0.5mm以下の礫	5Y7/1 灰白	
9	44	確認1	TR3	灰釉陶器	瓶	胴部 底部	90%	(12.65)	10.7		7.2	密(白色砂粒含む)	7.5Y7/ 灰白	
9	45	確認1	TR2 拡西	山茶碗	大碗	口縁部 胴部	30%	(6.4)		(16.8)		密(白色砂粒含む)	7.5Y6/1 灰	
9	46	確認1	TR2 拡西	山茶碗	小碗	底部	25%	(3.0)			5.5	0.5mm以下の礫	5Y6/2 灰オリーブ	

第6表　石製品観察表

図版番号	挿図番号	器種	材質	区	層位・遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
9	47	砥石	凝灰岩質砂岩	－	表土	(3.7)	2.95	1.45	(25.3)	

第２章　中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡

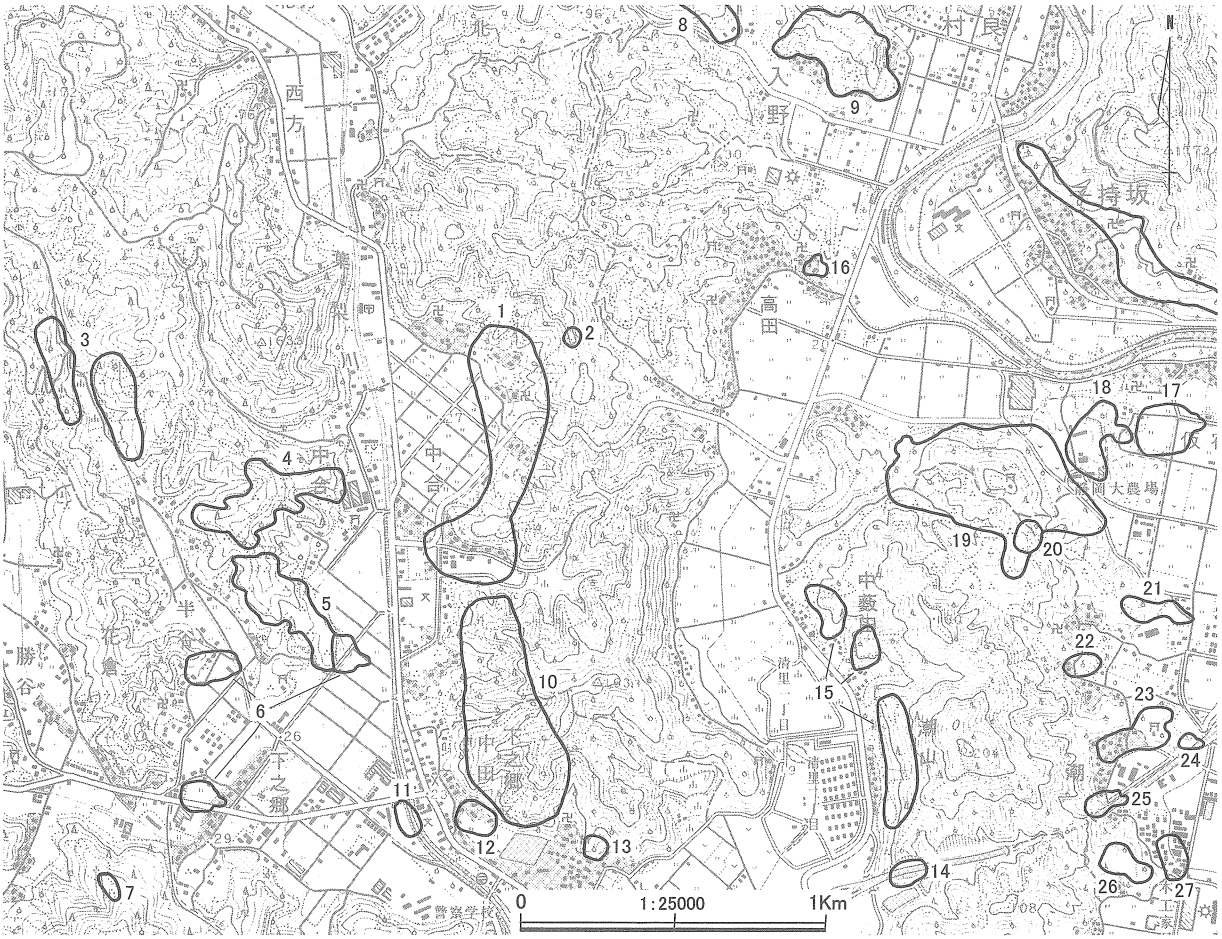
（第二東名 No80 地点）

第１節　位置と環境

１　位置と地理的環境

中ノ合イセ山古墳群と中ノ合遺跡は、藤枝市街地の北東約３km、藤枝市中ノ合 97 他に位置する。葉梨川によって形成された沖積平野の東岸にあたり、低地から丘陵にかけて立地する。現在、低地は田畑として多く利用され、一部に家屋などが建てられている。一方、丘陵は林や竹林の他、茶畑として利用されている。特に付近は、茶の産地として知られている。

この丘陵は新第三期に属する大井川層群野田累層及び中ノ合累層に分類される地層で、砂岩泥岩互層及び塊状砂岩からなる基盤層である。この地層は、隆起と褶曲による浸食谷が発達したが、第四期完新



第１０図　調査区と周辺の遺跡

第７表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	中ノ合遺跡	8	入野西遺跡	15	中藪田遺跡	22	塩尻遺跡
2	中ノ合イセ山遺跡	9	入野東遺跡	16	観音前遺跡	23	潮遺跡
3	上半谷遺跡	10	葉梨・中田遺跡	17	仮宿館	24	潮城遺跡
4	寺家山遺跡	11	中田Ⅰ遺跡	18	仮宿・山崎遺跡	25	谷田遺跡
5	衣原遺跡群	12	中田Ⅲ遺跡	19	朝日山遺跡	26	場知郷遺跡
6	葉梨館	13	谷向遺跡	20	堤坪遺跡	27	根添遺跡
7	岩下遺跡	14	三ツ池遺跡	21	大島遺跡		

世以降には後背低地堆積物が厚く堆積し、谷底平野を形成した。

2　歴史的環境と調査歴

中ノ合イセ山古墳群と中ノ合遺跡周辺部をみると、丘陵上には古墳群が多く分布している。葉梨川を挟んだ西側には衣原古墳群や寺家前古墳群があり、古墳時代後期から終末期を中心とした古墳が多数分布している。一方、低地の遺跡は第二東名関連遺跡として寺家前遺跡で、集落や水田の調査が行われている。

中ノ合遺跡は昭和59年市道中ノ合・山根線の道路改良工事に伴う確認調査で所在が明らかとなり、昭和60年に一部を発掘調査した周知の埋蔵文化財包蔵地である。

今回の調査対象は中ノ合遺跡の北東部にあたり、丘陵から低地に至る範囲を対象としている。

第2節　調査の方法と経過

1　発掘調査の方法と経過

本調査は4箇所の対象範囲を東側から丘陵上をA区、その丘陵の裾部をB区、さらに西側の丘陵裾部をC区、南側の丘陵裾部をD区と呼称した。これらの調査は工事工程との調整により、平成13年度末からD区の本調査を開始し、平成15年度にA区・B区・C区の本調査を行った。

調査工程は、本調査範囲を現地立会で確認し、重機を用いて表土を除去した。遺構と遺物は、国家座標に基づいて記録した。4級基準点測量・10m方眼のグリッド杭を打設し、これを基準として本調査範囲図・遺構検出状況図・土層断面図・遺物分布図・地形測量図面を作成した。遺構番号は調査の進展に組み合わせて北西から南東方向に付した。遺物番号は、遺構内出土遺物は原位置を保っているものについては10分の1から20分の1で出土状況図を作成し、遺物番号を付して取り上げた。遺構外出土遺物はグリッドごとに取り上げた。

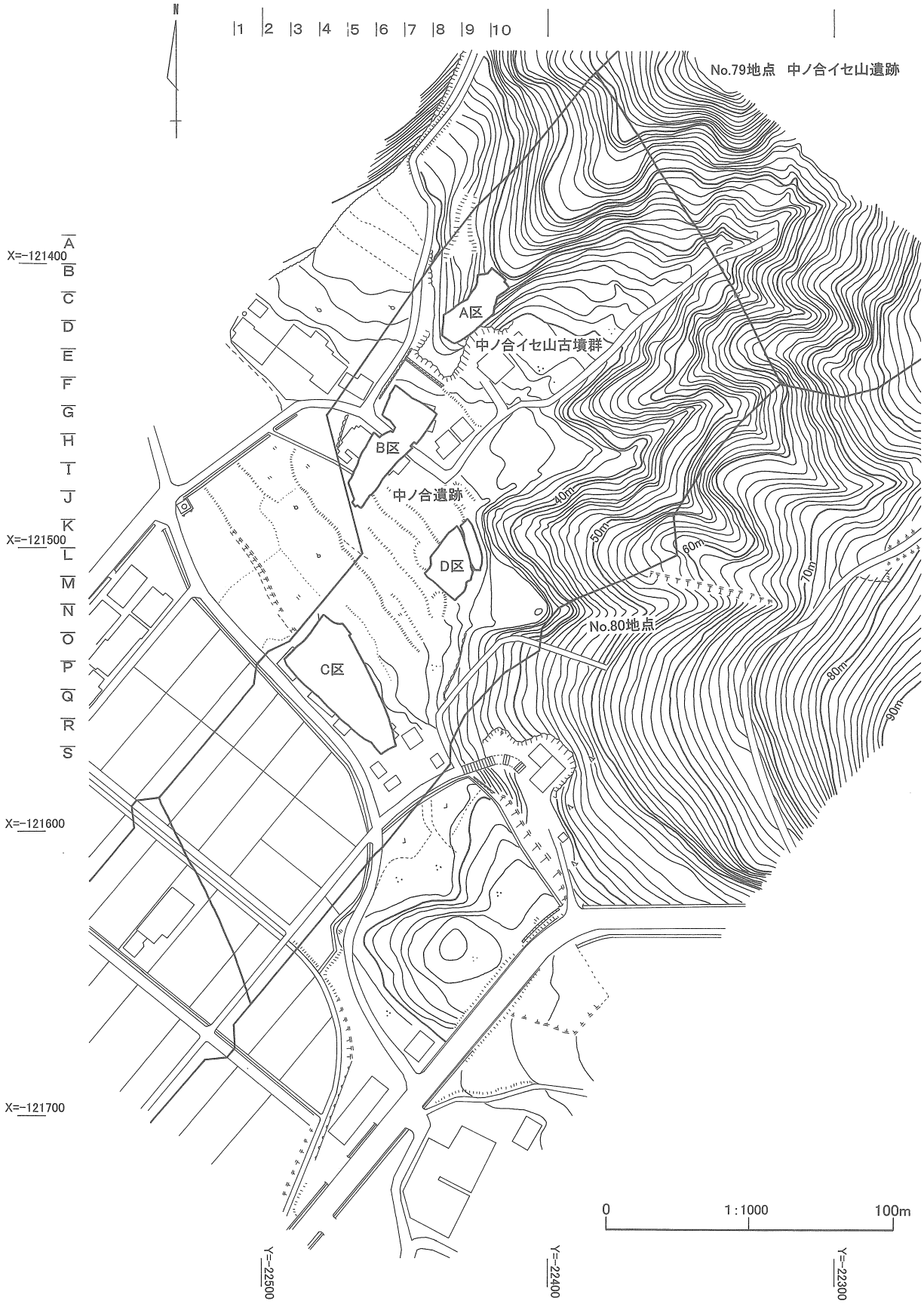
測量はトータルステーションを利用し、全体図は空中写真測量を委託して作成した。写真撮影は6×7版のモノクロとカラーリバーサル。35㎜版のカラーネガ・モノクロ・カラーリバーサルを使用し、全体写真は空中写真撮影を委託により実施した。

本調査は平成14年3月から平成14年6月までの4ヶ月間と平成15年2月から平成15年12月の11ヶ月間の計13ヶ月間実施した。各調査区の経過は以下のとおりである。

A区　平成15年6月から重機掘削と人力掘削を併用して表土を除去する。主体部・羨道部・周溝の残存状況を確かめ、手実測・空中写真撮影・空中写真測量にて図化する。9月古墳解体作業に伴う記録を行い、調査を終了した。

B区　平成15年10月から表土除去を開始した。古墳時代終末期以降の遺構検出を行い、個別遺構の精査・図化・写真撮影を繰り返し、11月に遺構面全体の空中写真撮影と空中写真実測を行う。12月は下層の古墳時代前期の遺構検出を行い、個別遺構の精査・図化・写真撮影を繰り返し、遺構面全体の空中写真撮影と空中写真実測の後、調査を終了した。

C区　平成15年2月からプレハブを設置し、重機による表土除去を開始するとともに排土を11tダンプトラックにて場外搬出した。湧水対策として包含層の上面で排水溝を掘削し、排水ポンプにて排水を行った。3月から遺構検出作業と包含層掘削を開始した。この段階で記録写真撮影を始め、遺構検出状況図を作成した。4月から5月にかけて包含層掘削と遺構検出・精査・記録作業を繰り返し、空中写



第 11 図　調査区と周辺地形図

真撮影と空中写真測量の後、調査を終了した。

D区　平成14年3月から本調査を開始した。まず、中世遺構の平面プランを確定し、掘削調査するとともに1/20遺構平面図を作成した。遺構掘削と実測作業終了後、高所作業車にて全体写真を撮影した。次に試掘溝を掘削して奈良・平安時代の包含層を確認し、包含層掘削を開始した。包含層掘削終了後、下層の古墳時代包含層の試掘溝を掘削し、無遺物層であることを確認した。必要な土層断面図を作成してから重機による埋め戻しを行い終了した。

2　資料整理の方法と経過

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査については、現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階から実施することになった。そこで、現地調査終了時点から本格的な整理作業を開始するまでの期間、基礎整理作業（出土遺物の洗浄・注記・接合・復原・実測・写真整理・図面整理・各種台帳作成・保存処理）を行い、整理作業の準備とした。

平成15年3月の時点で静岡工区藤枝地区の現地調査がほぼ終了したことから、平成19年4月から中原整理事務所にて整理作業を開始した。これまでの基礎整理作業に加え、遺構図と遺物実測図の修正・編集作業を開始した。その後、平成21年4月から遺構図や遺物実測図のトレース・遺物の写真撮影・写真図版作成・報告書の執筆・頁割り付け・校正などを行い、同年11月に本報告書の作成作業を終了し、収納・移管作業に移行した。なお、遺物の写真撮影は6×7判のモノクロ及びカラーポジを用いた。

第3節　概　要

1　地形と土層

中ノ合遺跡と中ノ合イセ山古墳群は、中ノ合イセ山遺跡の所在する丘陵の稜線から、南西方向に張り出した標高48mの緩斜面から標高25mの低地にかけて立地する。東側には約300m離れた丘陵上に中ノ合イセ山遺跡が位置する。西側には約500m離れた場所を葉梨川が南流し、寺家前遺跡や衣原遺跡群を望むことが出来る。

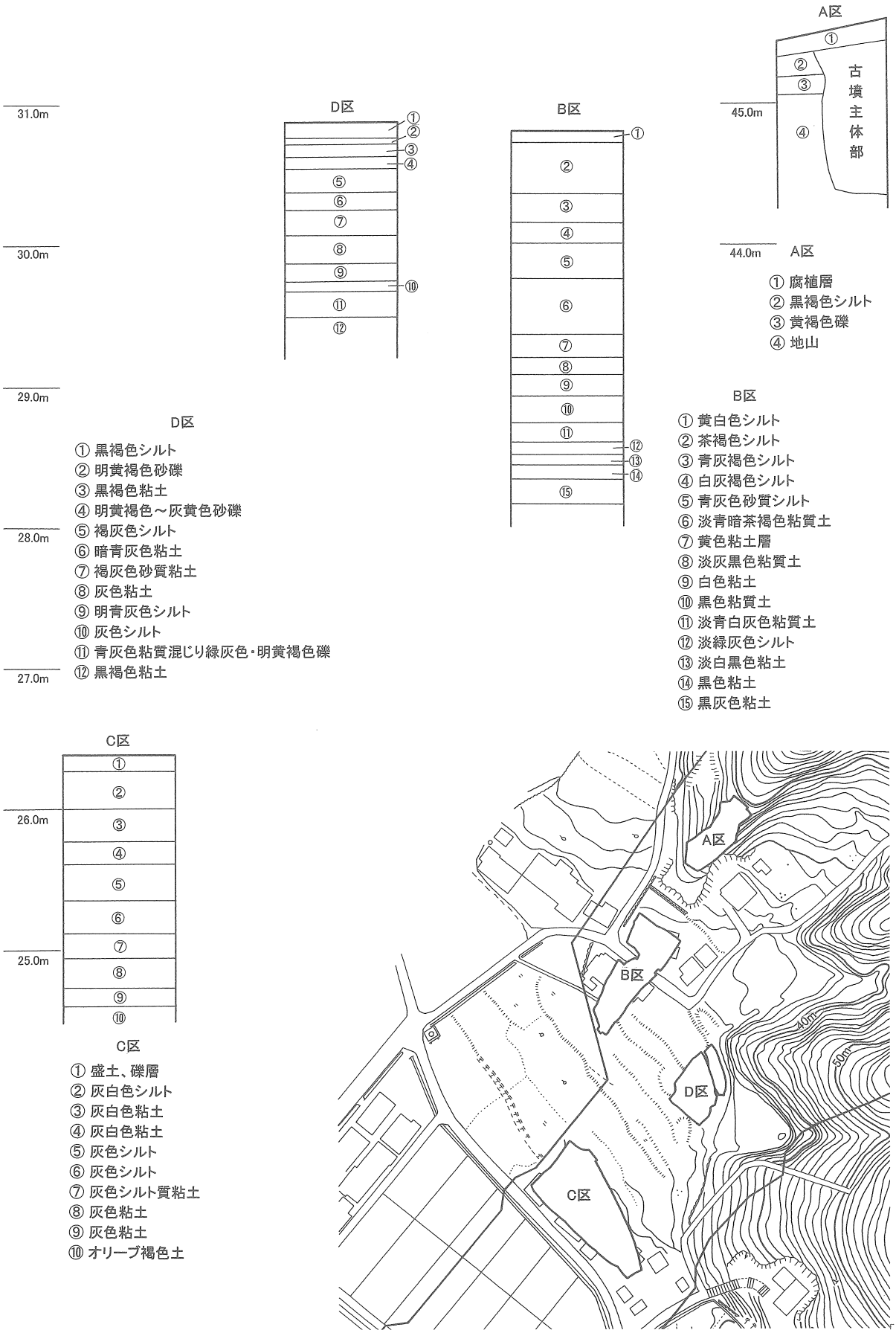
各調査区の土層は、A区が丘陵における土層の堆積状況を示しており、B区からD区の土層が低地の堆積状況を示していた。

A区　中ノ合イセ山遺跡の所在する丘陵の稜線から南西方向に張り出した標高48m～45m付近に位置する。砂岩泥岩互層及び塊状砂岩からなる第4層地山の上位に第3層黄褐色礫が堆積している。これらを掘り込んで古墳時代後期の古墳主体部及び周溝が構築されていた。

B区　A区の西側、丘陵裾部に位置する。葉梨川や中ノ合川によりシルト・粘質土・粘土が堆積している。第6層淡青暗茶褐色粘質土から平安時代の土器が出土する。第15層黒灰色粘土から古墳時代前期の遺構を検出した。

C区　B区の南西、丘陵裾部に位置する。B区と同様にシルト・粘質土・粘土が堆積している。第10層オリーブ褐色土から古墳時代前期の土師器が出土した。

D区　B区の東、丘陵裾部に位置する。B区と同様にシルト・粘質土・粘土が堆積している。第1層黒褐色シルトから灰釉陶器、第9層明青灰色シルトから第12層黒褐色粘土にかけて土師器が出土した。



第 12 図　調査区と土層柱状図

2　遺構と遺物

A区　中ノ合イセ山古墳群として古墳を２基を調査した。

B区　中ノ合遺跡として２枚の遺構検出面を調査した。

第１面は古墳時代後期に属すると思われる。主な遺構は竪穴住居跡６基である。

第２面は古墳時代前期に属すると思われる。主な遺構は小穴18基、流路３基、溝７基、性格不明の遺構２基である。これ以外に奈良・平安時代以降と推定される井戸１基がある。

C区　中ノ合遺跡として１枚の遺構検出面を調査した。

第１面は古墳時代前期と推定される。主な遺構は竪穴住居跡11基、掘立柱建物跡１基、土壙２基、小穴26基、溝２基、性格不明の遺構２基である。

D区　中ノ合遺跡として２枚の遺構検出面を調査した。第１面は平安時代から中世と推定される。主な遺構は道状遺構１基と小穴25基である。第２面は古墳時代前期の遺構検出面である。

第４節　調査の成果

1　A区の遺構と遺物

本調査区では古墳２基を調査した。中ノ合イセ山１号墳は墳丘の直径6.5mの円墳で、墳丘・周溝・埋葬施設が残存していた。埋葬施設は内法全長5.9mの横穴式石室で、側壁・奥壁は角石を主体とし、奥壁は上下に２石を立てて構築している。石室出入口の両側壁には立柱石を立てている。石室形態上は羨道と玄室の区別が無い。石室平面形は胴張りが顕著で、床には小石が敷かれていた。立柱石付近には閉塞石が残存していた。遺物は古墳の周辺部から須恵器が出土した。さらに、埋葬施設の床面から鉄製品が出土した。

中ノ合イセ山２号墳は埋葬施設が一部残存していた。埋葬施設は横穴式石室で、奥壁より２mほど残っていた。遺物は埋葬施設の床面から鉄製品が出土した。

中ノ合イセ山１号墳

（１）　墳丘（第14図）

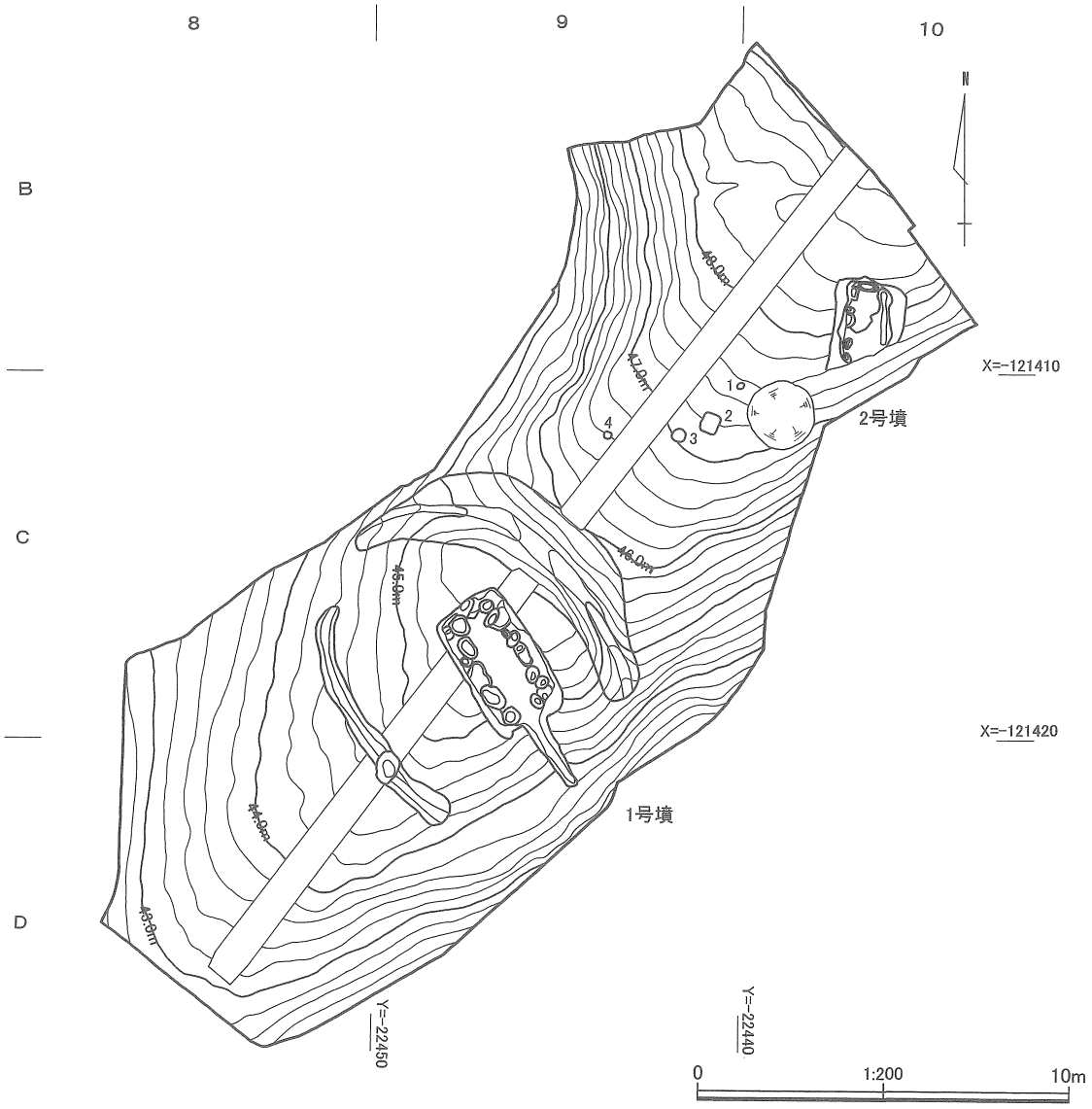
立地と墳丘の現状

A区の中央C～D-８～９グリッド、２号墳の西40mに位置する。北東から南西に下がる尾根頂部、標高45m付近に位置する。葉梨川流域への眺望は良く、寺家前遺跡や衣原遺跡群を望むことが出来る。この尾根は谷の侵食により急斜面や崖面があり、斜面の崩落や流土によって頂部が狭い尾根となっている。

この古墳は以前から周知されていたわけではなかったが、頂部に設定した試掘溝により、石室石材の一部を検出した古墳である。

周溝

表土を除去すると、墳丘の東側と西側に弧状の周溝を検出した。北側と南側は斜面の崩落や流土の影響で確認することができなかった。東側の周溝は平面形が三日月状で、尾根を横断する中央部の幅が最も広く2.1m、深さ0.6mである。断面形態は椀形を呈する。周溝の底面は尾根を横断する中央部がやや高く、北側と南側の谷に向けて緩やかに傾斜する。西側の周溝はやや直線的で幅が0.6mと狭く、深さも0.2mと浅い。断面形が椀形を呈する。底面は尾根を横断する中央部が僅かに高く、北側と南側の谷に向けて緩やかに傾斜する。



小穴の表記はSP○○としているが、本図中ではSPを省略している。

第13図　A区地形測量図

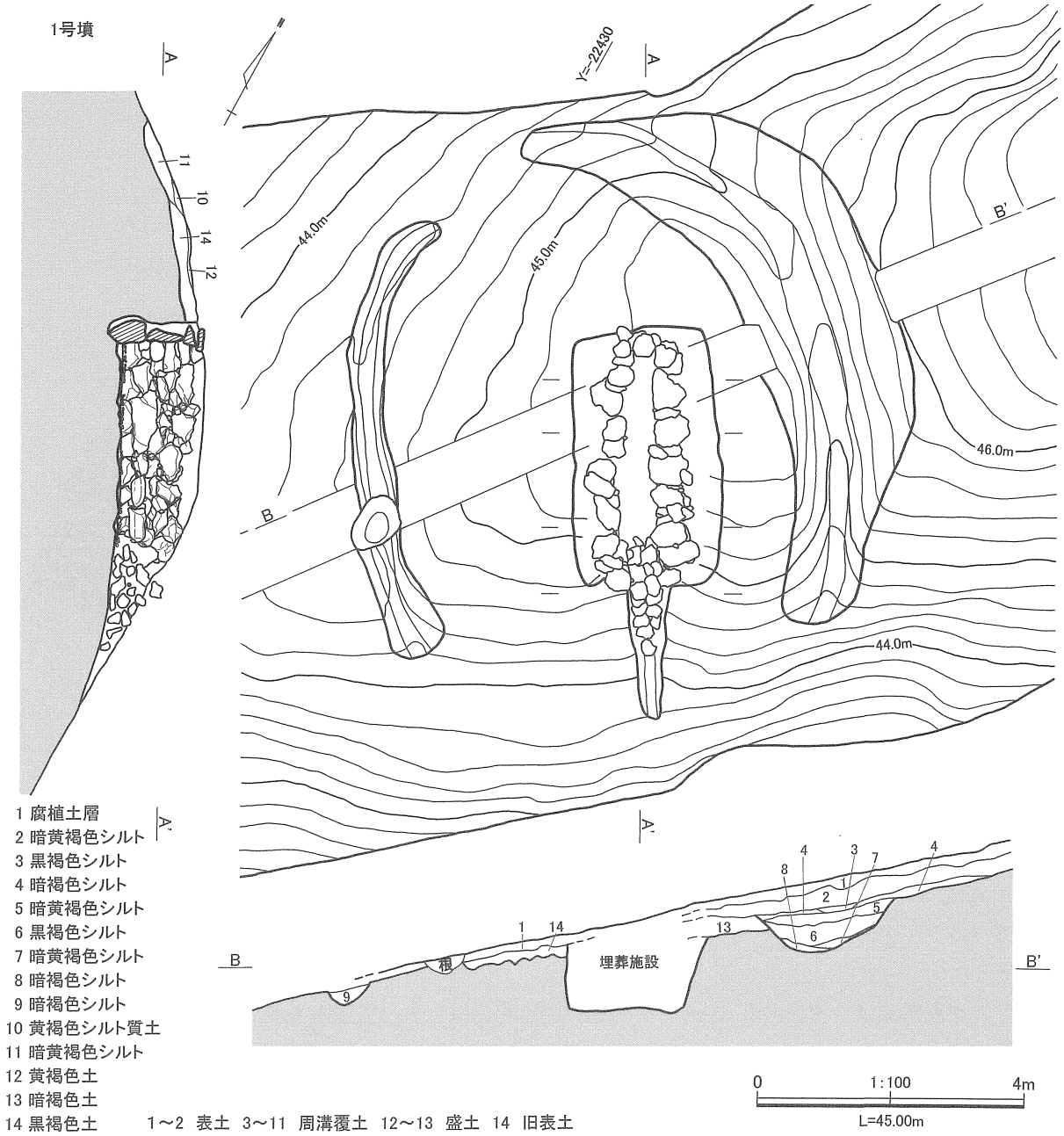
墳丘

周溝によって区画した墳丘は、西側の周溝がやや直線的に掘削されることにより「D」字形に近い円墳である。墳丘の規模が周溝上端で東西約6.0m。周溝底面内側で東西6.5m。墳丘の高さは、開口部側から見ると東側0.5m西側0.3mほどである。墳丘の下半は周溝を掘って作り出したものである。上半の盛土は残りが悪く、埋葬施設の東側に東西1m南北4mの細長い範囲に認められ、残存する盛土高は0.2mである。盛土には軟礫を含む黒褐色土が混入しており、周溝の掘削や墳丘の削り出しで生じた土を用いた可能性が高い。

旧表土は墳丘の北側と西側にだけ残されており、東側には認められなかった。高さを均すような整地が行われ、周囲より高い東側の旧表土が削り取られた可能性がある。

遺物は周辺部から須恵器の長頸壷（1）の破片、周溝から須恵器の大甕（2）の破片が出土している。1は長頸壷の肩部と思われる。内外面にロクロ整形に伴うナデが観察できる。2は須恵器の大甕の破片で、体部に平行タタキが残る。

（2）　埋葬施設（第16図～第18図）



第14図　中ノ合イセ山1号墳地形測量図・断面図

横穴式石室

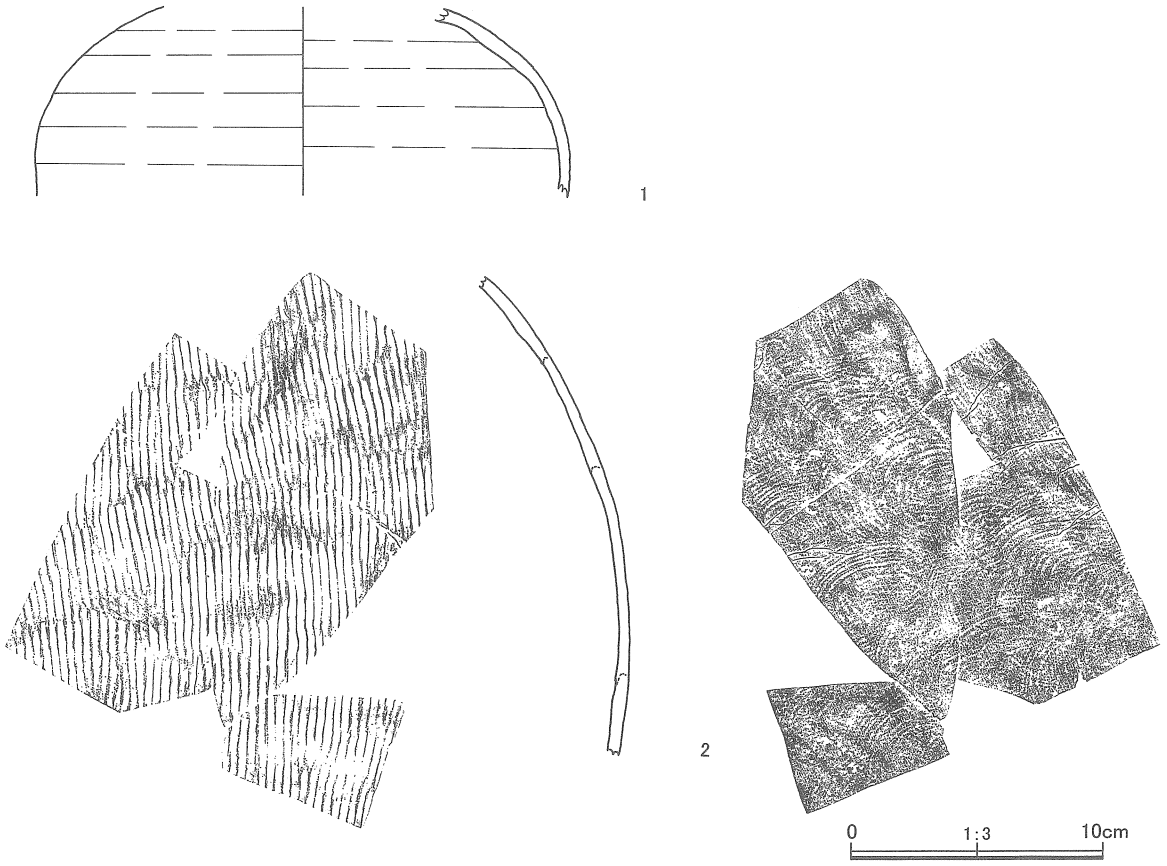
1号墳の埋葬施設は墳丘の東寄りに築造した、角石を使用した無袖式横穴式石室である。石室は丘陵主軸方位を意識しつつ、葉梨川の低地に向けて開口するという見晴らしの良い計画性が伺える。検出時には、天井石は失われており、奥壁・側壁・閉塞施設を確認した。

墓壙

墓壙は標高約45.4mの旧地表から1.1m掘り込まれ、壙底が44.3mをはかる。平面形は羽子板状で、内部に構築した石室が墓壙の長方形部分に納まり、その南側の細長い溝は墓道にあたる。

墓壙は全長5.9m、残存高1.1mをはかる。墓壙長は3.9m、同奥壁側幅2.0m、同中央幅2.2m、同玄門幅2.1mをはかる。墓道は残存長2.0m、幅0.5mをはかる。壙底には奥壁、側壁の基底石を据える浅い鉢状掘り込みがある。墓壙と石室との間は客土を充填している。

石室



第15図　中ノ合イセ山1号墳周辺出土遺物

石室の石室長は3.2m、石室幅が奥壁側0.55m、同中央0.95m、同玄門0.7mをはかる。玄室が単室の無袖式横穴石室である。奥壁から右側壁で2.9m、左側壁で2.9mのところに立柱石を据えている。主軸方位はN-29°-Wをとり、南側に向けて開口する。

玄室

玄室の平面形態は、奥壁側0.55mと玄門側0.7mと比較して、玄室中央が0.95mと幅広く、胴張りがある。持ち送りは、残りの良い奥壁側の左側壁で約12度、右側壁で15度内傾する。天井石は確認調査時に天井部から動いた状態で検出したので取り除いている。

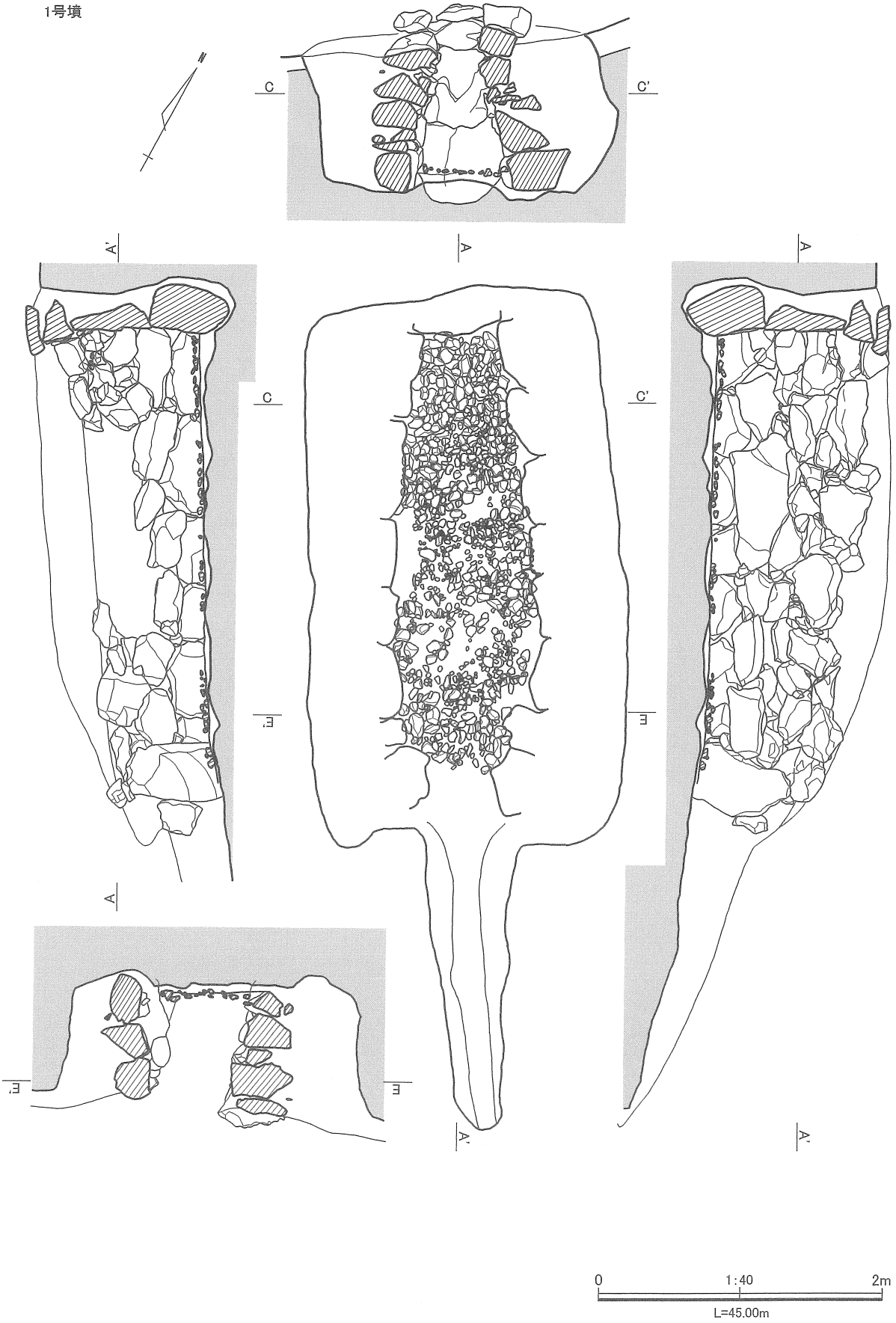
奥壁は2段2枚が確認できる。鏡石は平坦面を内面に向けた角石で幅0.6m、高さ0.6m、厚さ0.3mをはかる。鏡石の上端は、右側壁或いは左側壁の2段目上面と同一平面に近い。この鏡石は9度後ろに傾いている。奥壁の2段目は幅0.5m、高さ0.6m、厚さ0.2mの板状で鏡石の平坦面に合わせて組まれている。

側壁の壁体は角石の小口を石室側に向けた小口積みを行う。玄室から羨道を見た右側壁（西側壁）は基底石から最大5段高さ0.9m、左側壁は最大5段1.1m残存している。これらの側壁は各段ともに目地が通っている。側壁は奥壁を挟むように組み上げている。

立柱石は地山を掘り込んで組まれ、墓壙との間に裏込め石を詰めて支保する。この玄門の幅は0.4mである。

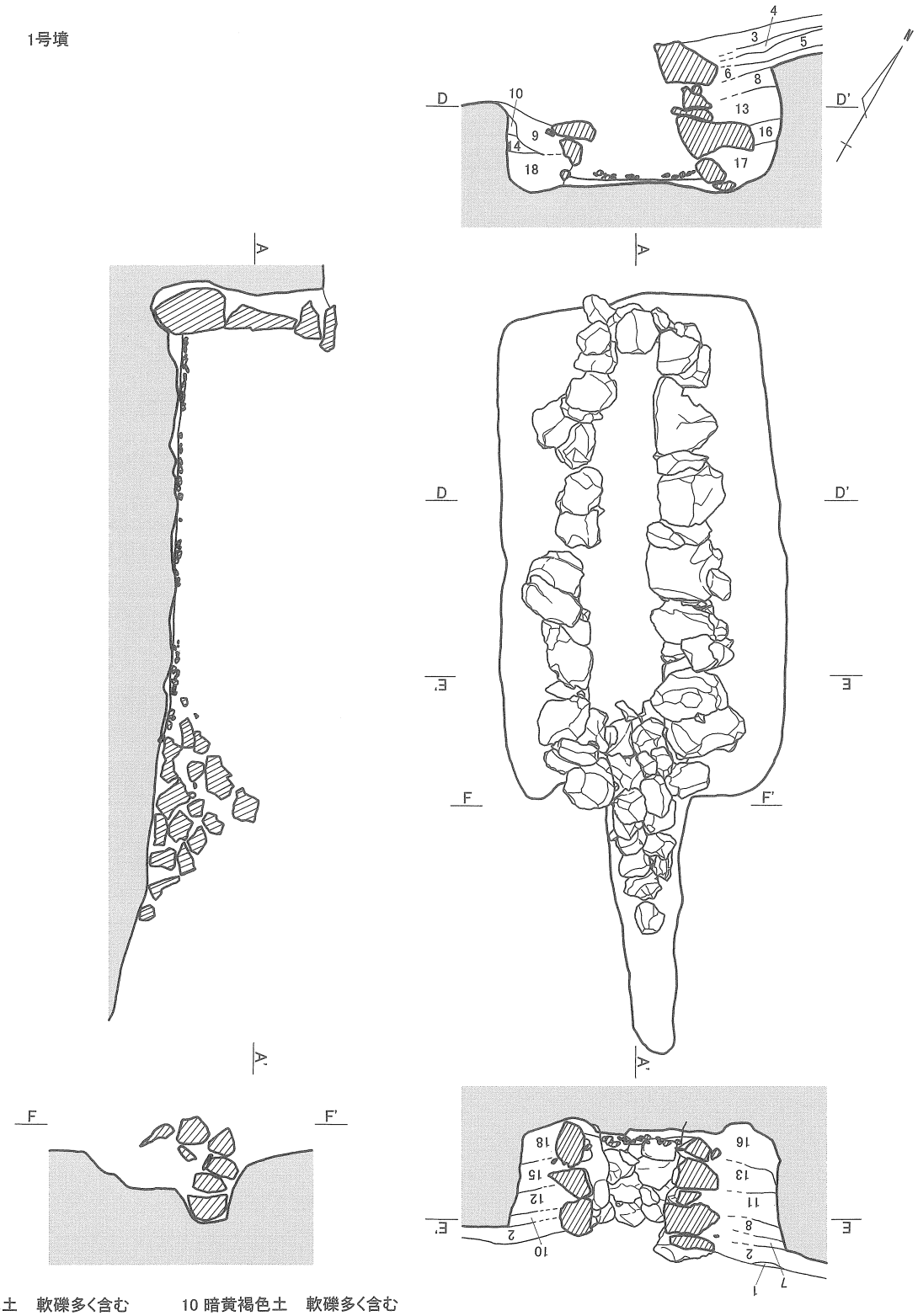
墓道

墓道は石室の前端（立柱石のある玄門）から南方に2.2m検出した。これより南側が丘陵斜面の崩落などで失われている。地山を幅0.6mで法面を65度から80度で0.4m掘り下げ、下部の幅を0.2mとしている。断面形は逆台形を呈する。



第 16 図　中ノ合イセ山 1 号墳横穴式石室展開図

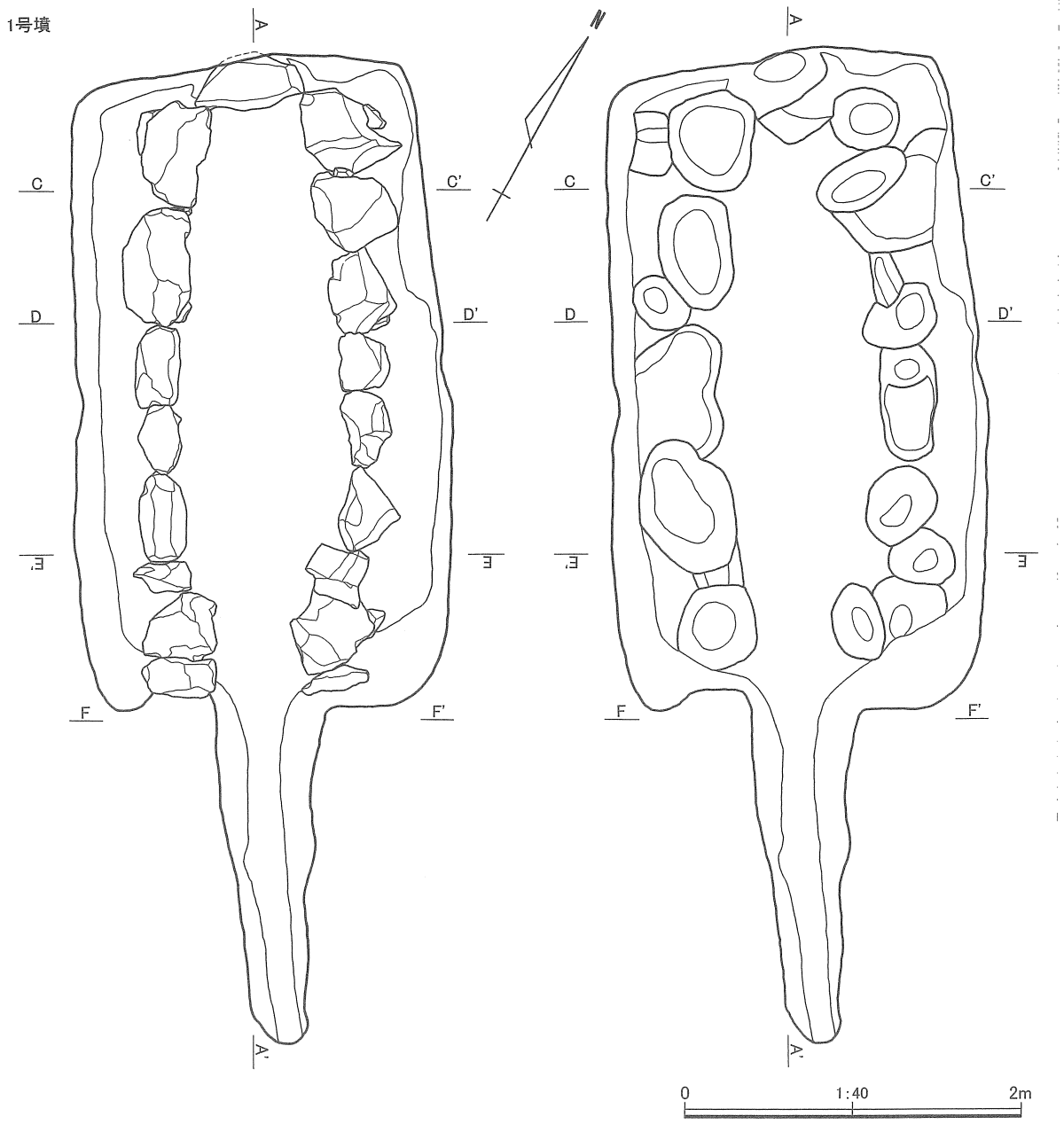
1号墳



1 暗黄褐色土　軟礫多く含む
2 暗褐色土
3 黒褐色土
4 黄褐色土　黒褐色土混入
5 黒褐色土
6 暗黄褐色土　軟礫多く含む
7 暗黄褐色土
8 黒褐色土
9 暗黄褐色土
10 暗黄褐色土　軟礫多く含む
11 暗黄褐色土　軟礫多く含む
12 暗黄褐色土　軟礫多く含む
13 黄褐色土　黒褐色土混入。軟礫多く含む
14 暗黄褐色土　軟礫多く含む
15 黄褐色土　黒褐色土混入。軟礫多く含む
16 暗黄褐色土　軟礫多く含む
17 暗黄褐色土　軟礫多く含む
18 暗黄褐色土　軟礫多く含む

0　1:40　2m
L=45.00m

第 17 図　中ノ合イセ山 1 号墳横穴式石室検出状況・土層図



第18図　中ノ合イセ山1号墳横穴式石室基底石・墓壙実測図

閉塞石は立柱石の玄門付近から墓道中央付近まで1.2mの長さで一段目を積み、縦断面が三角形となるように計4段積み上げている。

床石

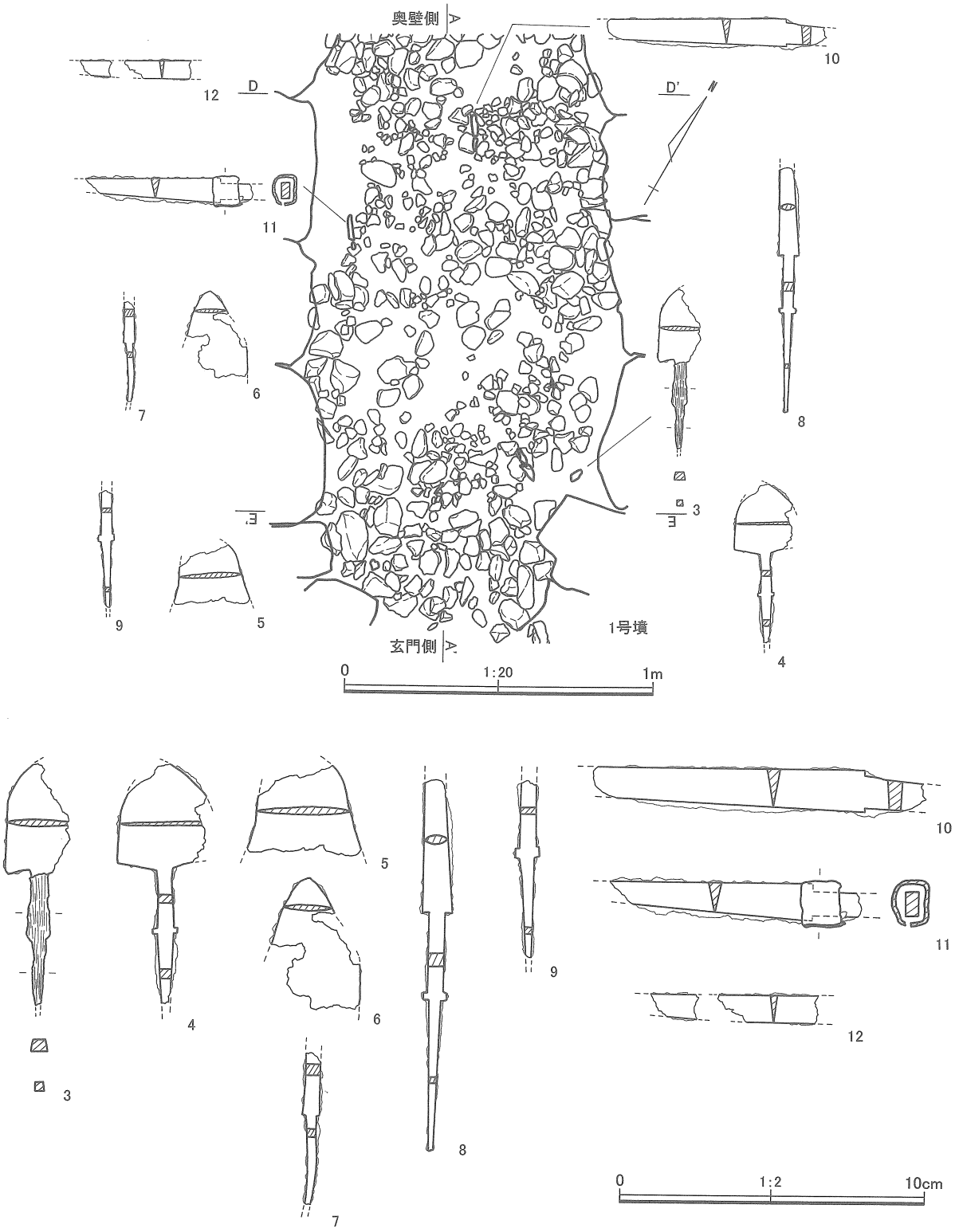
床石は墓壙掘り方を均して円礫を敷き詰めている。奥壁の鏡石から1.1mまでは20cm程度の礫を隙間なく敷き詰めているが、玄門に近づくと空白部分がある。

基底石

基底石は長軸側を側壁面にして据えている。

（3）　出土遺物

石室内から鉄鏃7点、刀子3点の合計10点が出土している。出土位置は玄門側中央より刀子(10)。玄門中央の右側壁から刀子(11)。玄門側の左側壁から鉄鏃(3)が出土した。これ以外の鉄製品は一括で



第19図　中ノ合イセ山1号墳石室内出土遺物実測図

取り上げている。

3～9は鉄鏃である。鏃身の形状が推定できるのは5点である。このうち、平根式が4点、尖根式が1点である。3～6は平根式で三角形式と思われる。3は残存長8.05cm、鏃身長3.7cm、頸部長2.1cm、茎長2.2cm、重さ5.1gをはかる。4は棘関である。残存長8.0cm、鏃身長3.4cm、頸部長2.2cm、茎長

2.3cm、重さ5.1gをはかる。５・６は頭部のみ遺存した。８は尖根長三角形式と思われる。鏃身が両丸造りで棘関である。残存長12.35cm、鏃身長4.5cm、頸部長2.5cm、茎部長5.0cm、重さ6.2gをはかる。７・９は鉄鏃の頸部と茎部のみが遺存した。

10～12は刀子である。刃部と茎部が遺存したものが２点。刃部のみの遺存が１点である。10は両角関で茎断面が長台形である。茎断面は棟側の厚さがやや厚い台形である。残存長11.0cm、刃部残存長9.0cm、刃幅1.4cm、棟厚さ0.4cm、茎長1.9cm、関側幅1.0cmをはかる。11は金祖が遺存する。刃部と茎部の状態から両角関と思われる。茎断面が長方形である。残存長8.35cm、刃部長6.7cm、幅1.2cm、棟厚さ0.7cmをはかる。茎長1.6cm、関側幅1.2cm、茎厚さ0.4cm、重さ12.7gをはかる。12は接合しないが同一個体と思われる刃部破片である。刃部残存長1.6cmと3.3cm、刃幅1.0cm、棟厚さ0.2cm、重さ0.9gと1.5gをはかる。

（４） 築造時期

１号墳の築造および造葬の時期は、石室の形態・構造からみて、古墳時代後期末～終末期であると推測できるが、詳細な時期の根拠となる出土遺物が少ない。

中ノ合イセ山２号墳

（１） 墳丘（第20図）

立地と墳丘の現状

立地は、丘陵頂部で標高48m付近の緩斜面に位置する。

また、墳丘南側は急な斜面となっており、石室の一部及び墓道が確認できなかった。

墳丘と周溝

墳丘は自然地形を利用しており、周溝は検出されなかった。

（２） 埋葬施設（第21図・第22図）

２号墳の埋葬施設は尾根の平坦部を墳丘の一部として利用し、角石を使用した横穴式石室である。石室はN-5°-Eと真北もしくは丘陵全体の主軸方位を意識し、南側が谷部に向けて開口している。検出時には、天井石や側壁や墓道が失われており、石室の一部を確認した。

横穴式石室

墓壙は標高約48mの旧地表から0.6m掘り込まれ、壙底が47.4mをはかる。平面形は長方形と推定される。墓壙の残存長は全長2.6m、残存高0.6mをはかる。壙底に奥壁、側壁の基底石を据える浅い鉢状の掘り込みと溝がある。墓壙と石室との間は客土を充填している。

石室

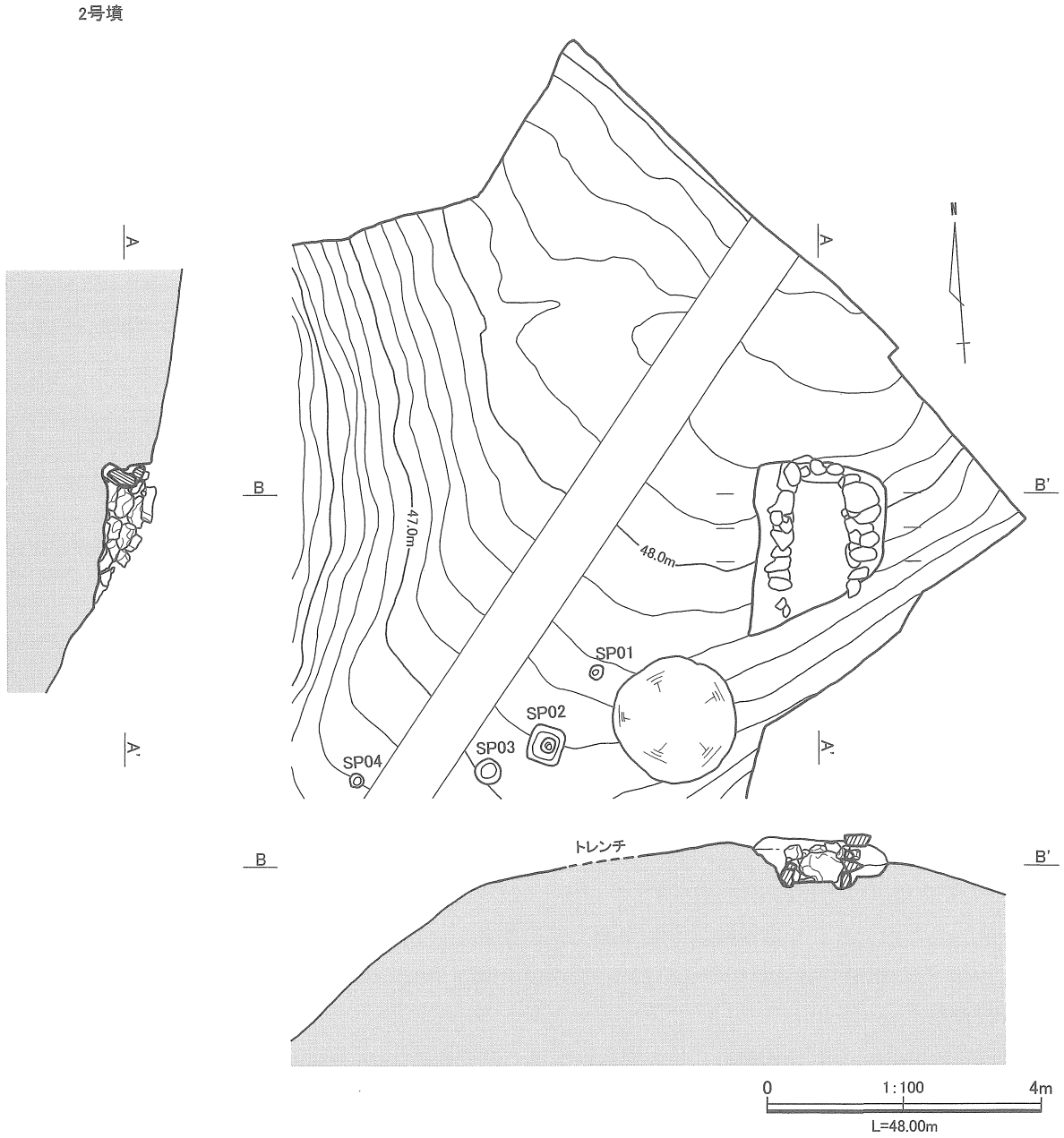
石室は長さ2.1m、幅は奥壁側0.6m、同中央0.8mをはかる、無袖式の横穴石室と思われる。主軸方位はN-7°-Eをとり、南側に向けて開口する。平面形態は、奥壁側0.6mと比較して、玄室中央が0.8mと胴張りがある。持ち送りは、残りの良い奥壁側の左側壁でやや内傾する程度である。天井石は確認できない。奥壁は１段１枚が確認できる。鏡石は石室側に17°傾く。平坦面を内面に向けた角石で幅0.6m、高さ0.5m、厚さ0.2mである。鏡石の上端は、右側壁あるいは左側壁の２段目上面と同一平面に近い。

側壁の壁体は角石の小口を石室側に向けた小口積みを行う。玄室から羨道を見た右側壁（東側壁）は基底石から最大３段高さ0.5m、左側壁は最大４段高さ0.7m残存している。これらの側壁は各段ともに目地が通っている。側壁は奥壁を挟むように組み上げている。

床

床は墓壙掘り方を均している。礫などは検出されなかった。

基底石



第20図　中ノ合イセ山2号墳地形測量図・断面図

基底石は長軸側を側壁面にして据えている。

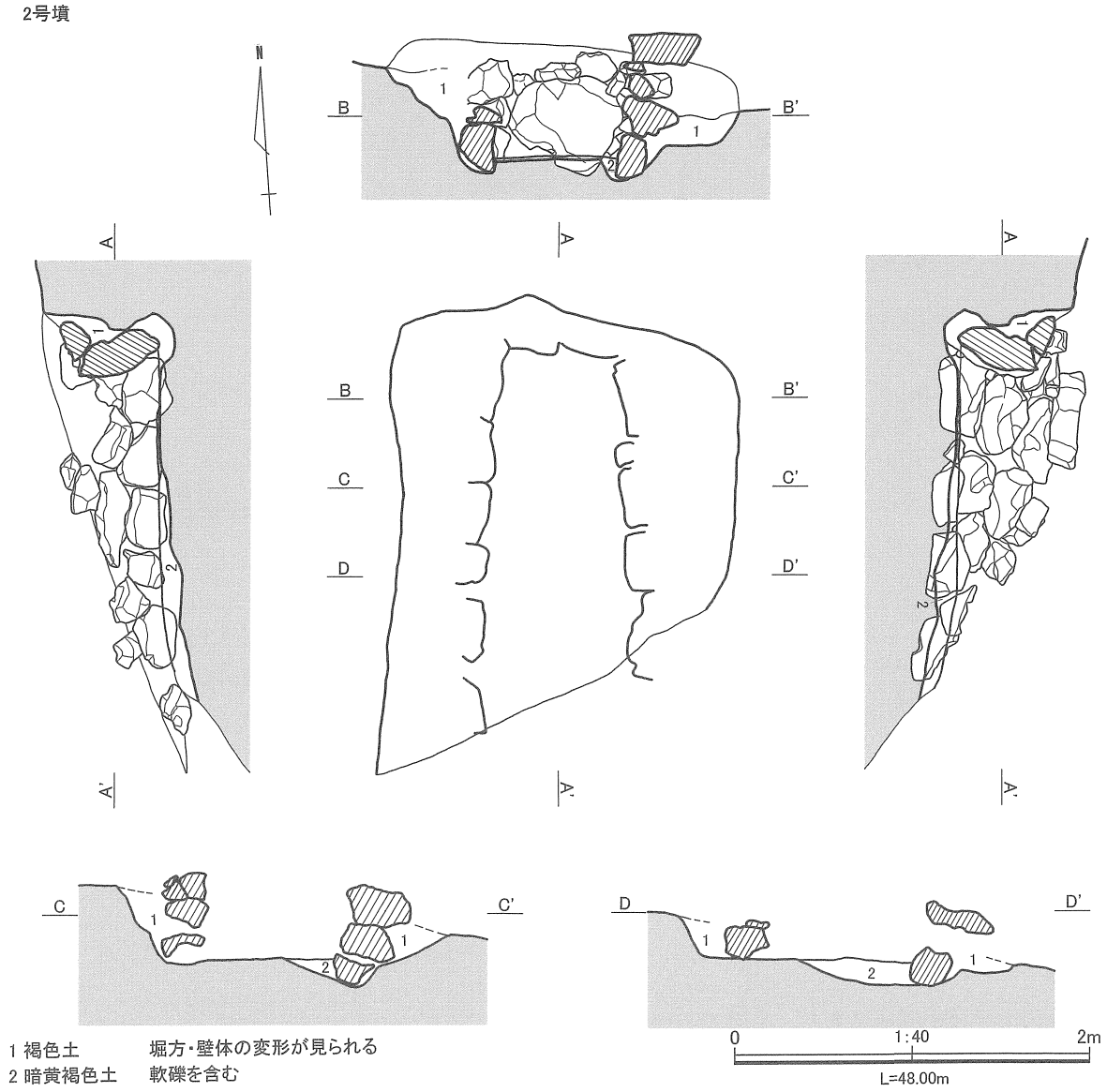
（3）　出土遺物（第23図）

遺物は石室内から、鉄鏃1点と刀子2点を一括で取り上げている。

13は鉄鏃茎部片である。一部に棘関が遺存する。残存長1.8cm、重さ1.0g。14と15は刀子刃部片である。15は残存長4.7cm、刃幅1.4cm、棟厚さ0.3cm　重量3.9g。14は残存長1.7cm、刃幅1.1cm、棟厚さ0.3cm重さ0.9gをはかる。

（4）　築造時期

中ノ合イセ山2号墳の築造の時期は、石室の形態・構造と出土遺物から特定することができないが、隣接する中ノ合イセ山1号墳と古墳群を構成することから、古墳時代後期末～終末期に構築したものと推測している。



第21図　中ノ合イセ山2号墳横穴式石室展開図

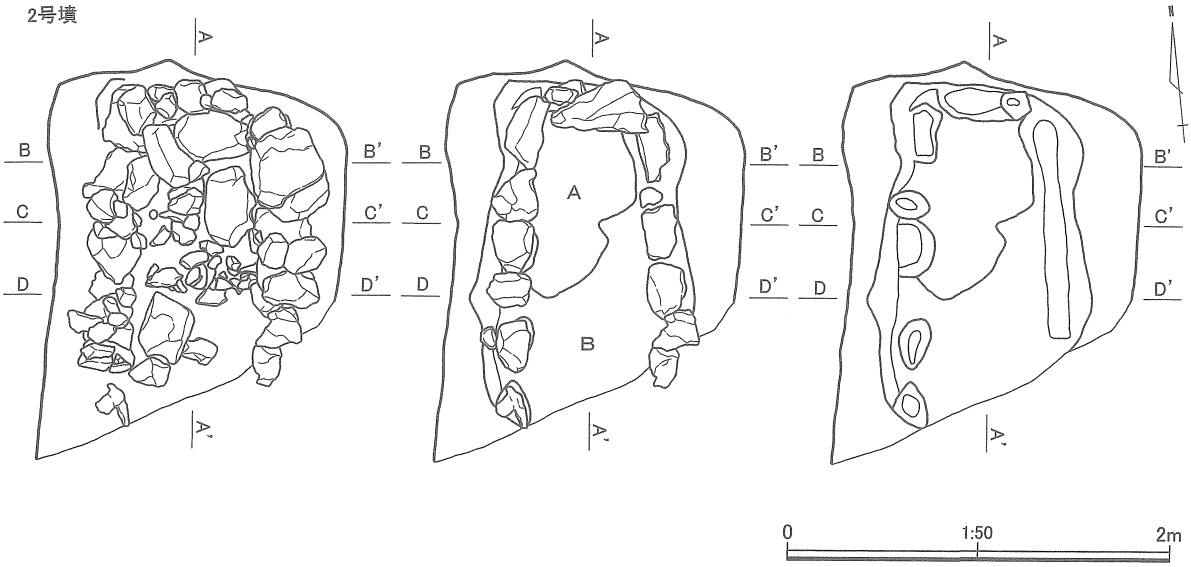
2　B区の遺構と遺物

土層

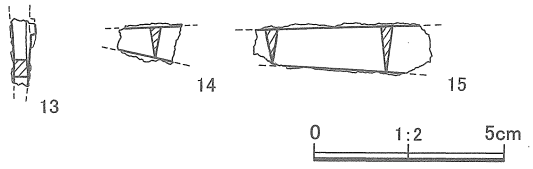
B区は緩やかな斜面地にシルト・粘質土・粘土を主体とする堆積物がレンズ状に堆積していた。以下、土層の概要を説明する。

第1a層黄白色シルト層は盛土である。第1b層暗青色シルト層は整地層である。第2層から第7層はシルト層で平安時代以降の中世から現代にかけて堆積したと推定される。第8層青灰色砂質シルト層は平安時代以降の盛土層と思われる。第10層淡青暗茶褐色粘質土層は平安時代の遺物を含む。第11層青灰色粘質土層は古墳時代の土師器が出土する。主に調査区南東部に堆積していた。第13層暗青灰色粘質土層は古墳時代の遺物を含む。第15層黄色粘土層は調査区北東部に堆積していた。丘陵を構成する泥岩の転礫を多く含むことから、丘陵崩落に伴う二次堆積層と推定している。第27層黒灰色粘土層は古墳時代前期の遺構検出面である。

遺構



第22図　中ノ合イセ山2号墳横穴式石室基底石・墓壙実測図



第23図　中ノ合イセ山2号墳横穴式石室出土遺物実測図

第1面　第15層黄色粘土層を遺構検出面として、調査区北東部で古墳時代終末期の竪穴住居跡6基と小穴16基を検出した。竪穴住居跡はいずれも方形で、一部にカマドが残存していた。

第2面　第27層黒灰色粘土を遺構検出面として、調査区南西部および北東部で古墳時代前期の遺構を中心に調査した。性格不明の遺構2基・井戸1基・小穴19基・溝7基・自然流路3基を検出した。

遺物

遺物の大半は土師器であり、小破片の出土が多い。

第1面　古墳時代終末期の遺物がSB04・SB06から出土した。

第2面　古墳時代前期の遺物がSX01･SX02から出土した。平安時代の遺物がSR02から出土している。

第1面

竪穴住居跡

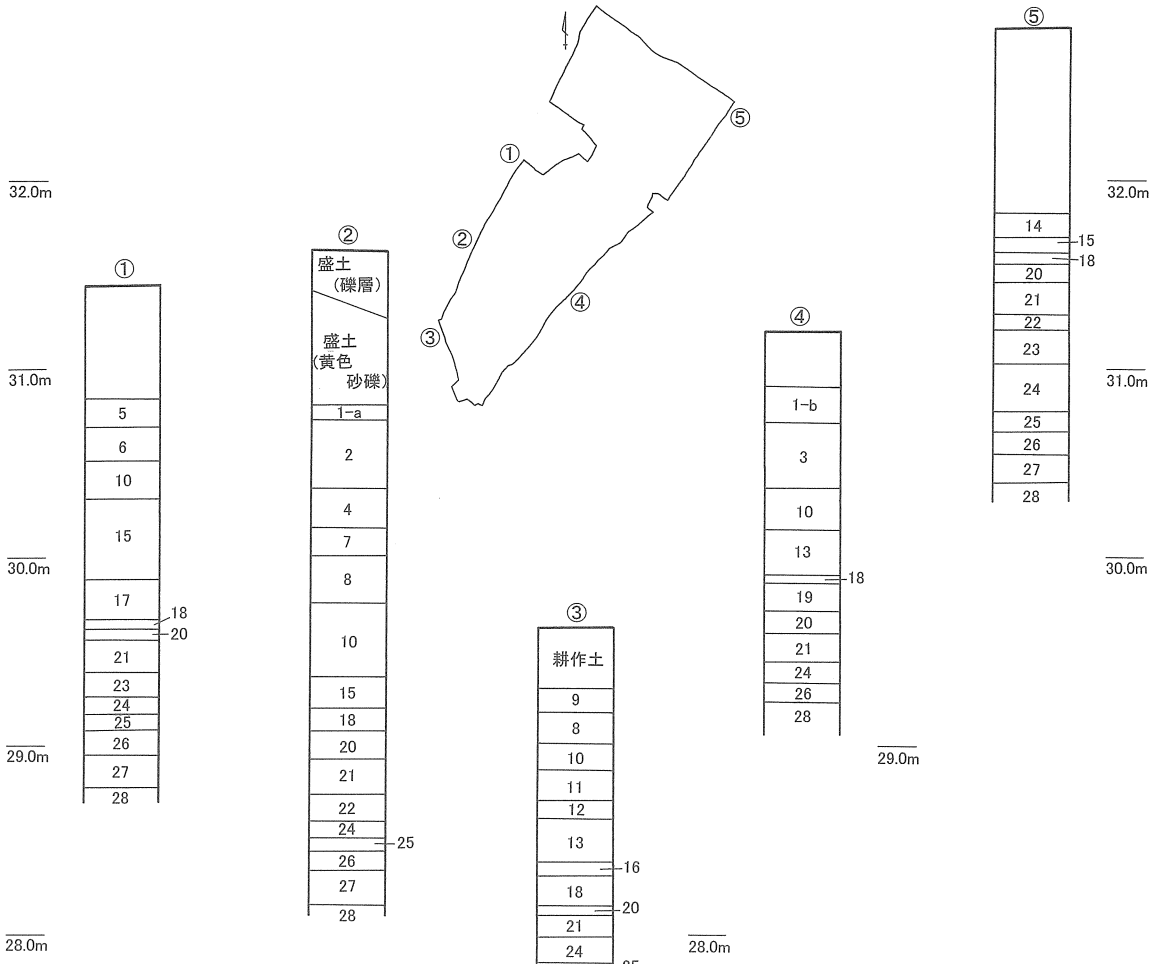
竪穴住居跡は6基検出した。SB01～SB04は平面的に重複することから、時間的な前後関係があると思われる。この内、SB01・SB03・SB04は主軸方位が類似している。

SB01（第26図）

SB01はB区の北西F～G-6～7グリッド、標高32.8mに位置する。平面プランは方形で北東部分を検出した。残存長は東西2.2m南北0.6mである。主軸方位は概ねN-3°-Wである。遺構検出面からの掘り込みが浅く、壁溝も不明瞭で張り床などが観察できない状況から掘方をとらえたものと思われる。柱穴は、立て替えのある浅い穴2箇所を想定した。柱間距離は2.4mである。カマドなどは検出されなかった。SB02・SB03・SB04と重複するが新旧関係は判然としない。遺物も出土していない。

SB02（第26図）

SB02はB区の北西F～G-6～7グリッド、標高32.8mに位置する。平面プランは角が丸い方形で北壁の一部を検出した。残存長は南北2.1m、東西0.9m、深さ0.1mであった。東壁は概ねN-39°-Wである。床面は不明瞭で、掘方から概要をとらえた。



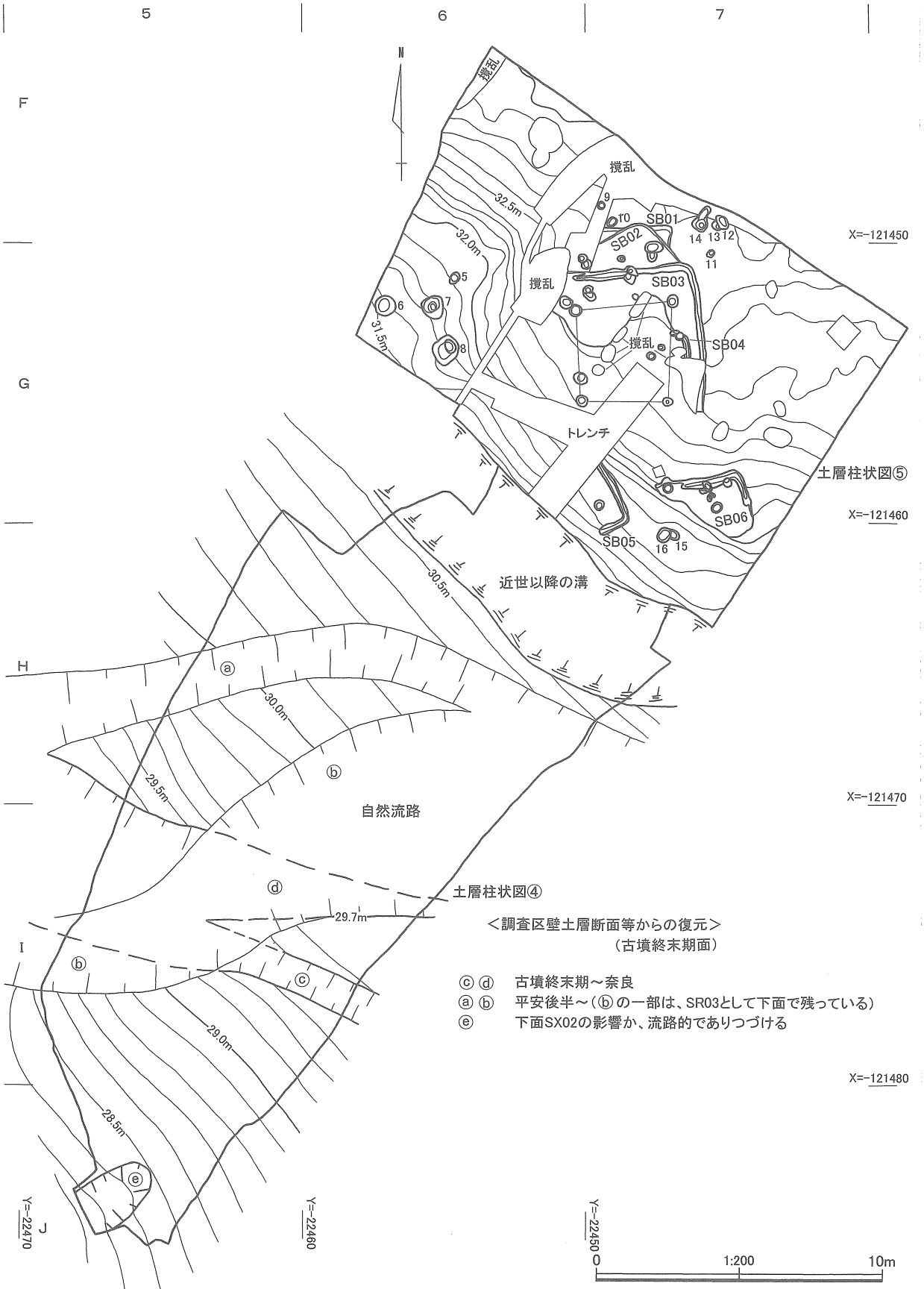
1-a 黄白色シルト	しまりややあり。粘性ややなし	15 黄色粘土層	しまりややなし。粘性ややあり
1-b 暗青色シルト	しまりややなし。粘性ややなし	16 白色粘土層	しまりややあり。粘性あり
2 茶褐色シルト	しまりややあり。粘性ややなし	17 灰白色粘質土層	しまりややあり。粘性ややあり
3-a 青褐色シルト	しまりややあり。粘性ややなし	18 淡灰黒色粘質土	しまりややあり。粘性ややあり
4 青灰褐色シルト	しまりややあり。粘性ややなし	19 青灰色粘質土	しまりあり。粘性ややあり
5 明茶褐色シルト	しまりややあり。粘性ややなし	20 白色粘土	しまりあり。粘性あり
6 明茶褐色シルト	しまりややあり。粘性ややなし	21 黒色粘質土	しまりややあり。粘性ややあり
7 白灰褐色シルト	しまりややあり。粘性ややなし	22 淡青白灰色粘質土	しまりややあり。粘性ややあり
8 青灰色砂質シルト	しまりややあり。粘性ややなし	23 青灰色粘質土	しまりややあり。粘性ややあり
9 橙色粘質土	しまりややなし。粘性ややあり	24 淡緑灰色シルト	しまりややあり。粘性ややなし
10 淡青暗茶褐色粘質土	しまりややあり。粘性ややあり	25 淡白黒色粘土	しまりあり。粘性あり
11 青灰色粘質土	しまりややあり。粘性ややあり	26 黒色粘土	しまりあり。粘性あり
12 明青灰色粘質土	しまりややあり。粘性ややあり	27 黒灰色粘土	しまりあり。粘性あり
13 暗青灰色粘質土	しまりややあり。粘性ややあり	28 緑白色礫層	しまりあり。粘性なし
14 褐色砂礫層	しまりややなし。粘性ややなし	29 白色粘土	しまりあり。粘性あり

第24図　B区土層柱状図

柱穴は北壁に近い2箇所を推定した。柱穴は直径0.3m、床面からの深さ0.1mの皿状で柱間距離は東西2.4mをはかる。SB01･SB03･SB04は重複するが新旧関係が判然としない。遺物は出土していない。

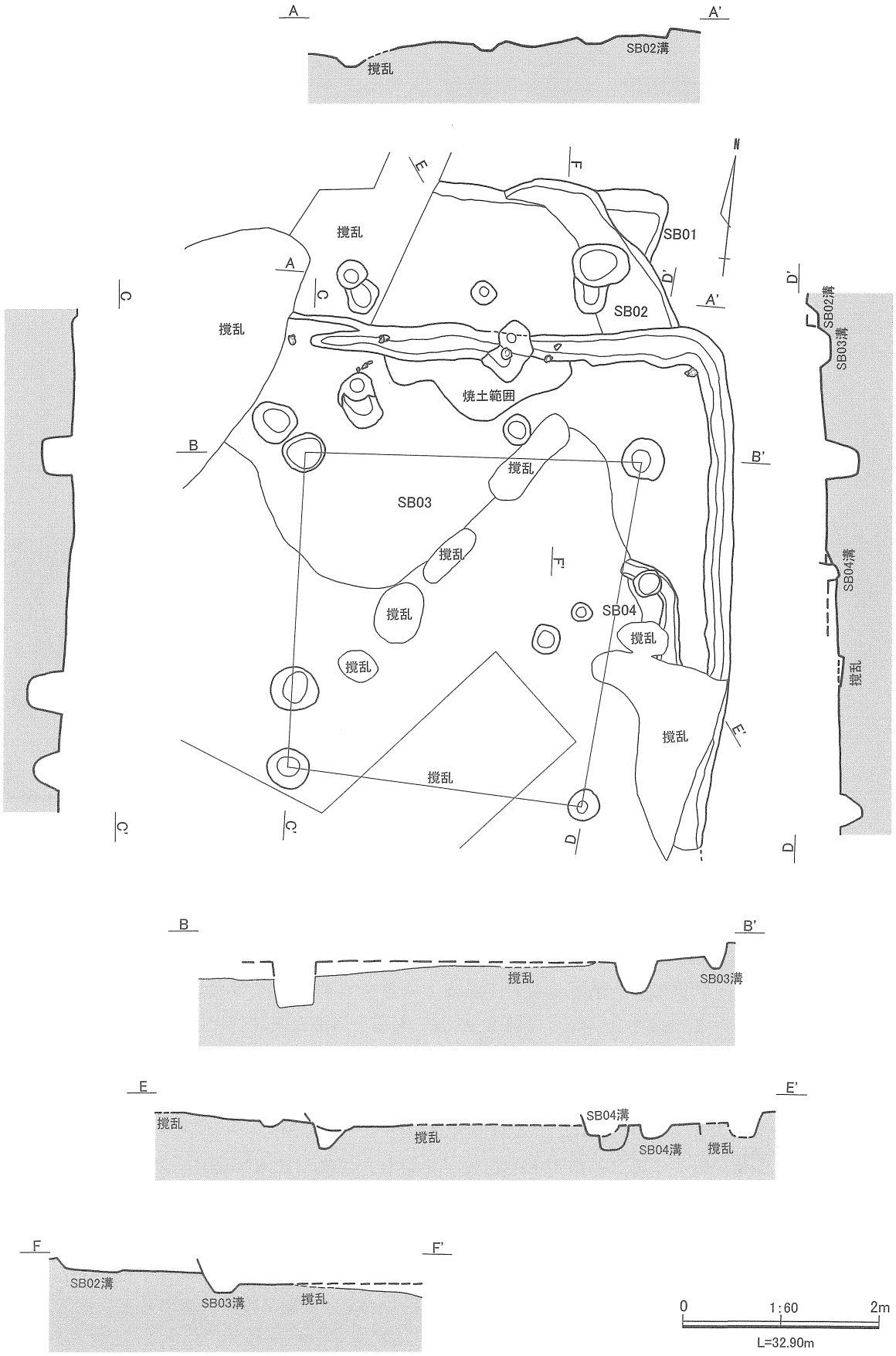
SB03（第26図・第27図・第34図）

SB03はB区の北西G-6～7グリッド、標高32.8mに位置する。重複する4軒の内、掘り込みが深い竪穴住居跡である。残存長は東西4.5m、南北5.4m、深さ0.15mである。主軸方位はN-3°-Wである。北壁と東壁に沿って幅0.2m、床面からの深さ0.1mほどの壁溝がめぐる。カマドは遺存状態が悪く、北壁中央で燃焼室から煙道と思われる掘り込みと東西0.9m、南北0.9mの範囲に焼土を検出した。主柱穴は4箇所である。各柱穴は直径0.3mほどの円形で床面より0.3m掘り込んでいる。SB01・SB02・SB04と重複するが、新旧関係は判然としない。

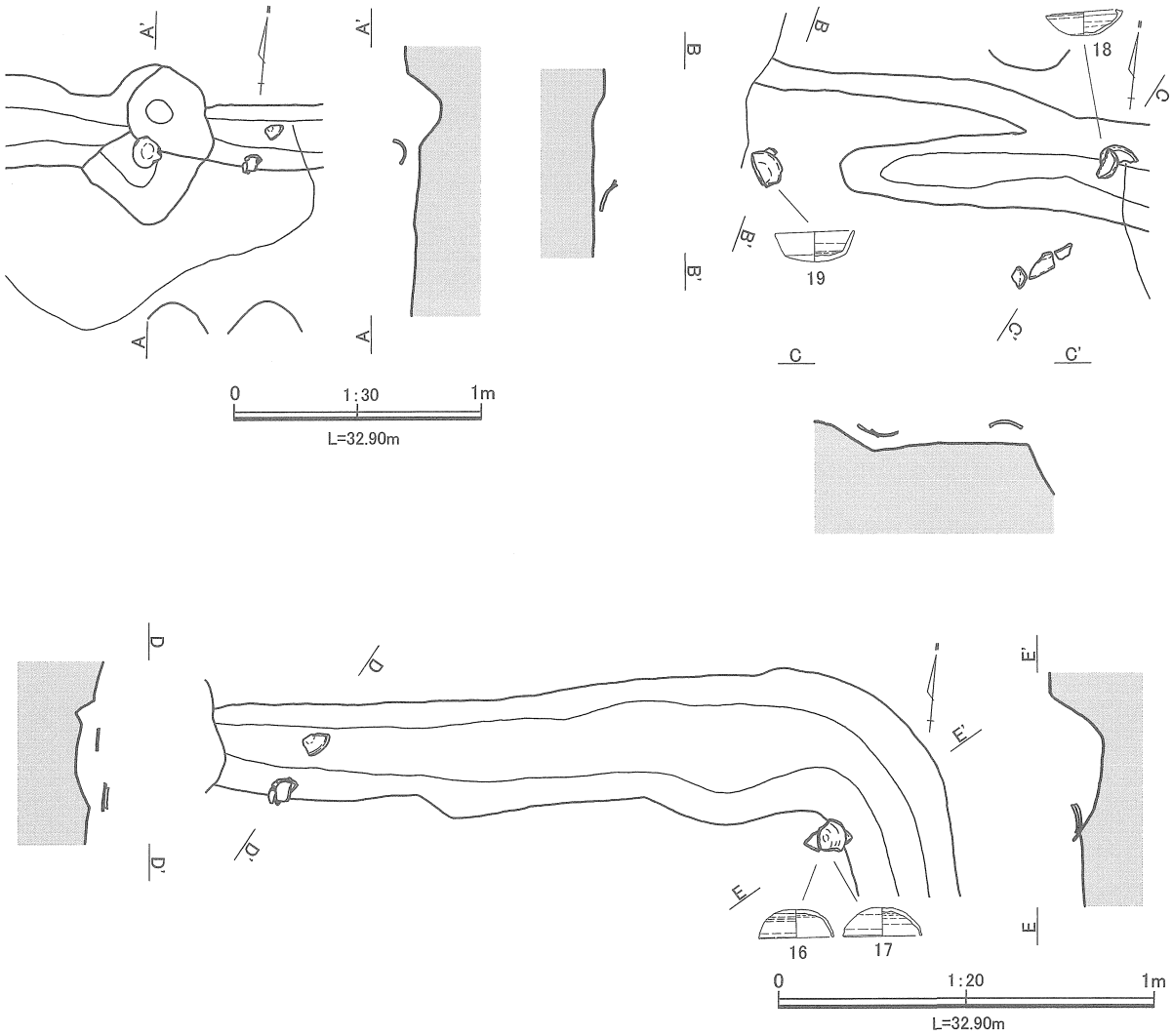


小穴の表記はSP○○としているが、本図中ではSPを省略している。

第25図　B区遺構全体図1



第 26 図　竪穴住居 SB01・02・03 付近平面・断面図



第27図　竪穴住居SB03遺物出土状況

出土遺物は北壁を中心に須恵器(16～19)が出土した。これらは杯蓋(16・17)と杯身(18・19)である。16は須恵器蓋である。丸みを帯びたなだらかな天井部をもち、口縁部との境で弱く折れる。口径10.0cm、器高3.9cmをはかる。外面は天井部にヘラ削り、口縁部にかけてナデで整える。口唇部は丸くおさめる。胎土は緻密で白色粒子が混じる。焼成は良好である。灰色を呈する。17は須恵器蓋である。体部からなだらかに口縁部へ至る。口径10.5cm、器高3.95cmである。外面は天井部にヘラ削り、口縁部にかけてナデて整える。口縁部はやや外反気味で口唇部を丸く整える。胎土は緻密で白色粒子を含む。焼成は良好である。灰白色を呈する。18は須恵器の杯身で、受け部を短く水平気味に引き出す。体部外面は、なだらかに丸みをもつ底部に移行する。底面外面は、ヘラで切り離し、ヘラ削りで整える。最大径10.5cm、器高3.2cmである。胎土は緻密で白色粒子を含む。焼成は良好である。灰白色を呈する。19は須恵器の杯身で受け部をもたない。底部は丸みを帯び、口縁部が外反気味に立ち上がる。底部外面はヘラで切り離した後、ヘラ削りで整える。口径10.6cm、器高4.1cm、胎土が緻密で白色粒子を含む。焼成は良好である。灰白色を呈する。

これらの須恵器の杯は、鈴木敏則氏の須恵器編年（鈴木2001）Ⅳ期前段階に属すると考えられる。

SB04（第26図）

SB04はB区のG-6～7グリッド、標高32.7mに位置する。竪穴住居跡の北東隅を検出したもので、規模が不明である。残存長は東西0.25m、南北1.0mをはかる。北壁と東壁に沿った幅0.2m、床面か

らの深さ0.1mほどの壁溝がめぐる。柱穴を1箇所検出した。遺物は出土していない。

SB05（第26図・第28図）

SB05はB区H～G-6グリッド、標高31.8mに位置する。規模が不明で残存長が東西1.0m、南北2.4mである。直径0.3m深さ0.1mほどの柱穴を1箇所検出した。東壁と南壁に沿って幅0.2m、床面からの深さ0.1mほどの壁溝がめぐる。遺物は出土していない。

SB06（第26図・第29図・第34図）

SB06はB区の北西G～H-7グリッド、標高32.1mに位置する。規模が不明で残存長が東西3.5m、南北2.2m、深さ0.2mをはかる。主軸方位はN-12°-Wである。北壁と東壁に沿って幅0.4m、床面からの深さ0.1mほどの壁溝がめぐる。北壁に東西1m南北0.6mの範囲にカマドが認められた。カマドは床面とほぼ同一面に燃焼室、北壁を15cm掘り込んで煙出しとしている。右袖は北壁から長さ50cm、幅20cm、高さ5cmに淡青褐色土を積み、袖石か支脚に用いられた石が残っていた。主柱穴は1箇所検出した。直径0.35mほどの円形で床面より0.13m掘り込んでいる。

出土遺物はカマドの東側を中心に土師器の鉢(20)や甕(21)が出土した。20は土師器の鉢である。大型で、口縁が、く字状である。口径17.3cm、器高12.3cmをはかる。内外面ともハケとナデが残る。21は土師器の甕である。口径20.0cmで口縁部が、く字状に外反し、口唇部内面が肥厚する。にぶい橙色を呈する。胎土には1～3mm大の砂粒を多く含む。球胴甕の口縁部と思われる。これらの土師器は古墳時代後期に属すると思われる。

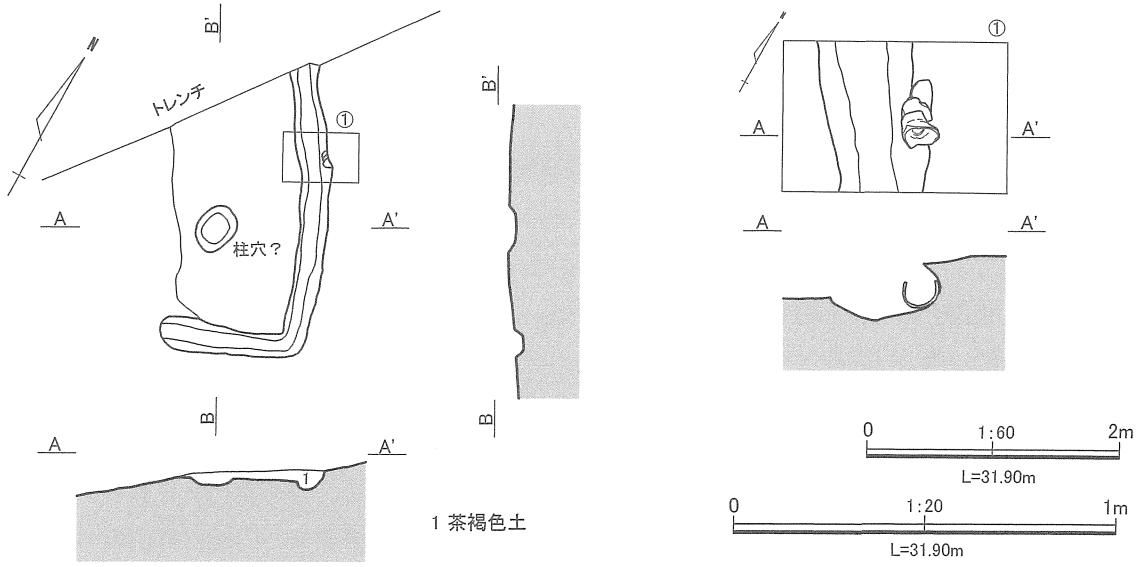
SP06・SP07・SP08（第30図）

SP06・SP07・SP08は、G-6グリッドに集中して検出した。地形は北東から南西に傾く斜面で、東側5mにはSB01～SB04の竪穴住居跡がある。平面形態は円形や隅丸方形などがあり、長軸が1.0mから0.7m、短軸が0.7m、深さ0.35m～0.6mをはかる。SP06・SP07・SP08は土層断面に柱痕と思われる土色の変化を確認した。この他、SP07は底面に柱の据え穴と思われる小穴を伴う。これらの断面形は逆台形を呈する。

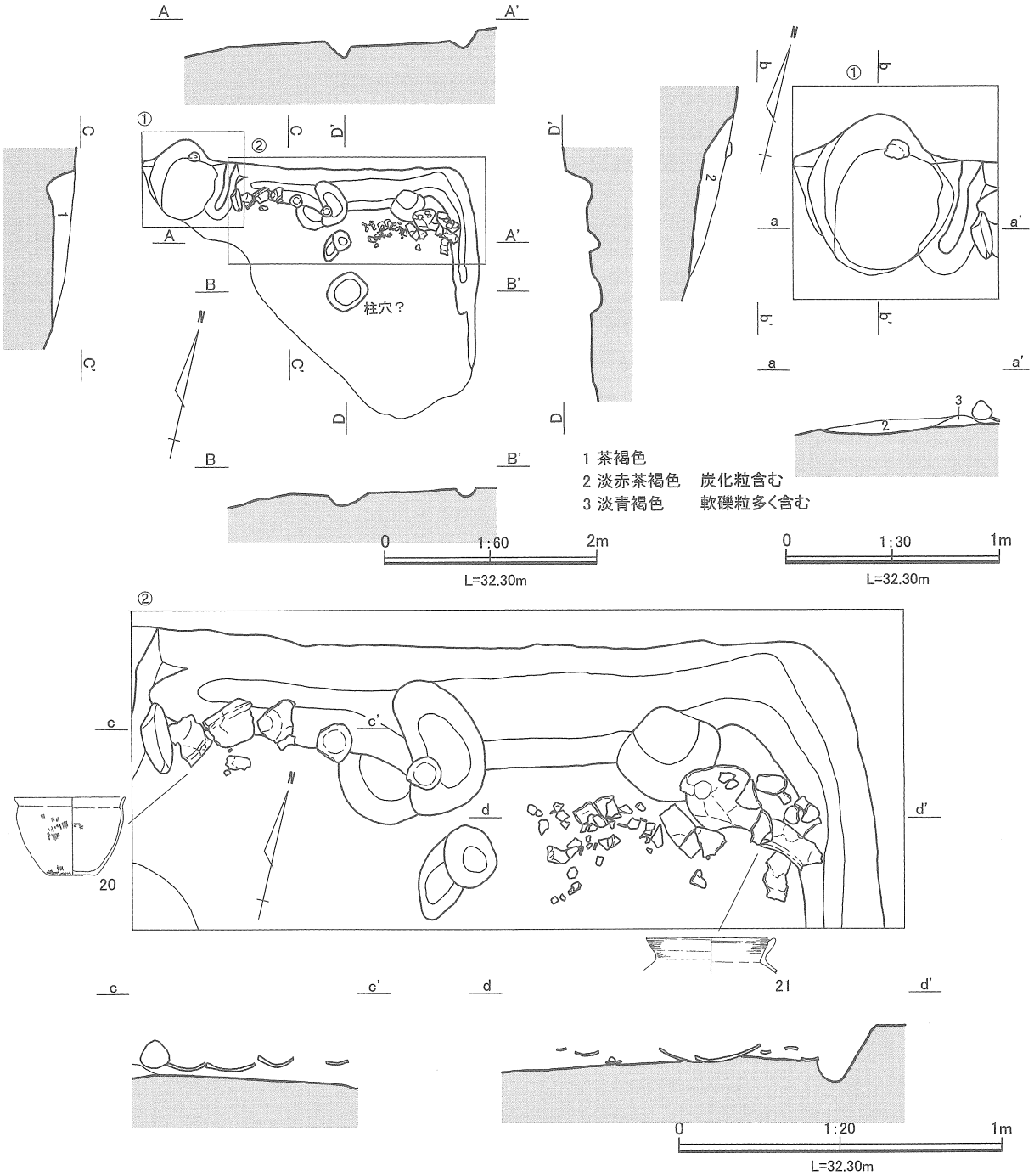
第2面

SE01（第32図）

SE01は調査区の中央で検出した。平面形は長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.6mのいびつな円形を呈していた。断面形は逆台形状で底面を平らに整えている。井側は35cmほどの四角い根石を内径0.55m



第28図　竪穴住居SB05遺物出土状況



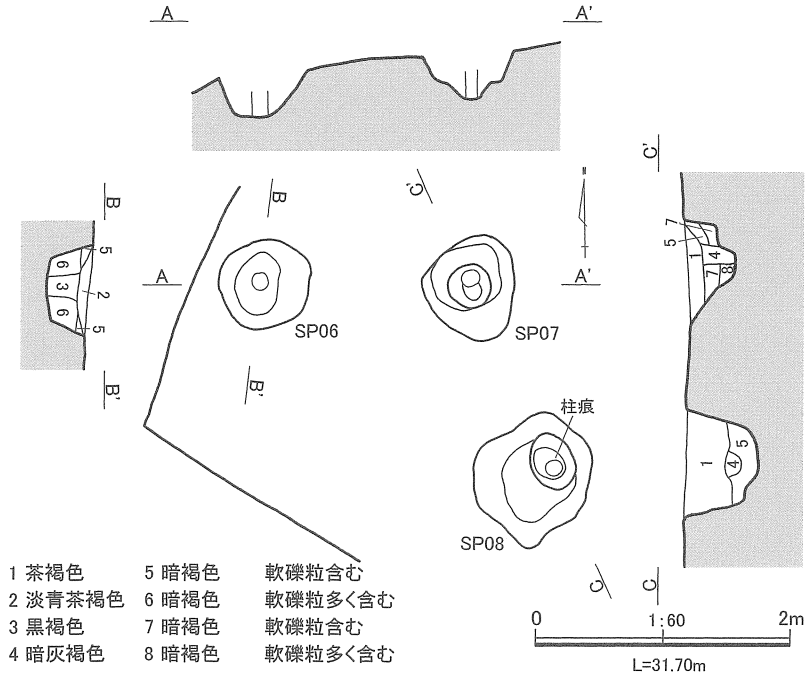
第29図　竪穴住居SB06遺物出土状況

の円になるように据えており、さらに面取りした板状の石を平坦面が内側を向くように6段程積み上げている。この掘方と井側の間には粘質土を充填していた。湧水層は第29層白色粘土層より下位の砂礫層と思われる。年代を推し量る遺物は出土しなかった。

SX02（第33図・第34図）

SX02は、B区の南西J-5グリッドの標高27.5mで検出した。調査区内では、最も低い場所に位置する。規模が、長さ1.8m幅0.7mをはかる。平面形は、排水溝で攪乱を受けて不明である。断面形が逆台形を呈する。出土した土師器は、土師器の壷(22・23)、鉢(24・25)、台付甕(26)である。

広口壷は、外傾・外反する口縁をもつもの(22)がある。外面に横位のナデ、内面に横位のヘラミガキを施す。口径が13.6cm、頸部径が8.2cmである。23は平底壷の底部で、底径が7.6cmである。外面に



第30図　小穴SP06・07・08平面・断面図

ハケが残る。

小型の鉢は口縁部が比較的直線的なもの(25)があり、内外面に斜位のハケ、底部にヘラ削りが観察できる。24は、小型の鉢底部である。底径が5.6cm、外面に縦位のハケが残る。25は口径11.7cm、器高4.6cmをはかる。

台付甕は台付甕脚部(26)である。内外面をハケで整える。底径10.2cmをはかる。

これらの土師器は、広口壷、小型の鉢、台付甕の特徴から古墳時代前期の土師器と考えられる。

自然流路（第25図）

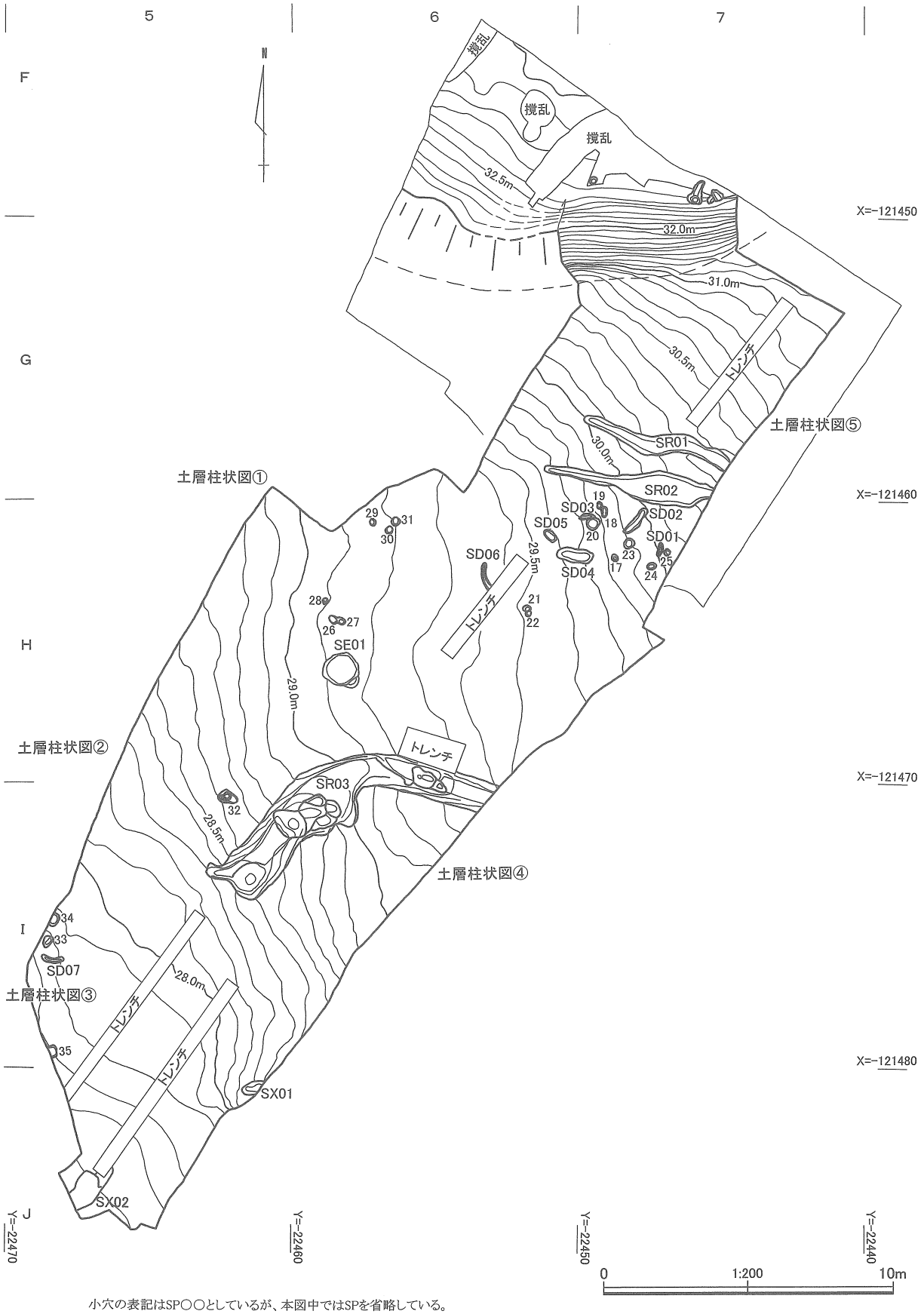
自然流路は、第1面の調査で調査区中央から南西にかけて検出した。調査区を南北に横断する試掘溝を設定して掘削調査を行ったところ、自然流路であることが判明した。その後、第2面で調査区の法面を検討した結果、概ね3箇所に河床と思われる土層の変化を確認し、標高が高い北東から標高が低い南西に向けて流れていたと推定した。

SR03（第31図・第34図）

G-6グリッドで検出した自然流路である。山茶碗(27) が出土した。27は山茶碗の大碗である。糸切り底に三日月状の高台を貼り付けている。平安時代末に属すると思われる。

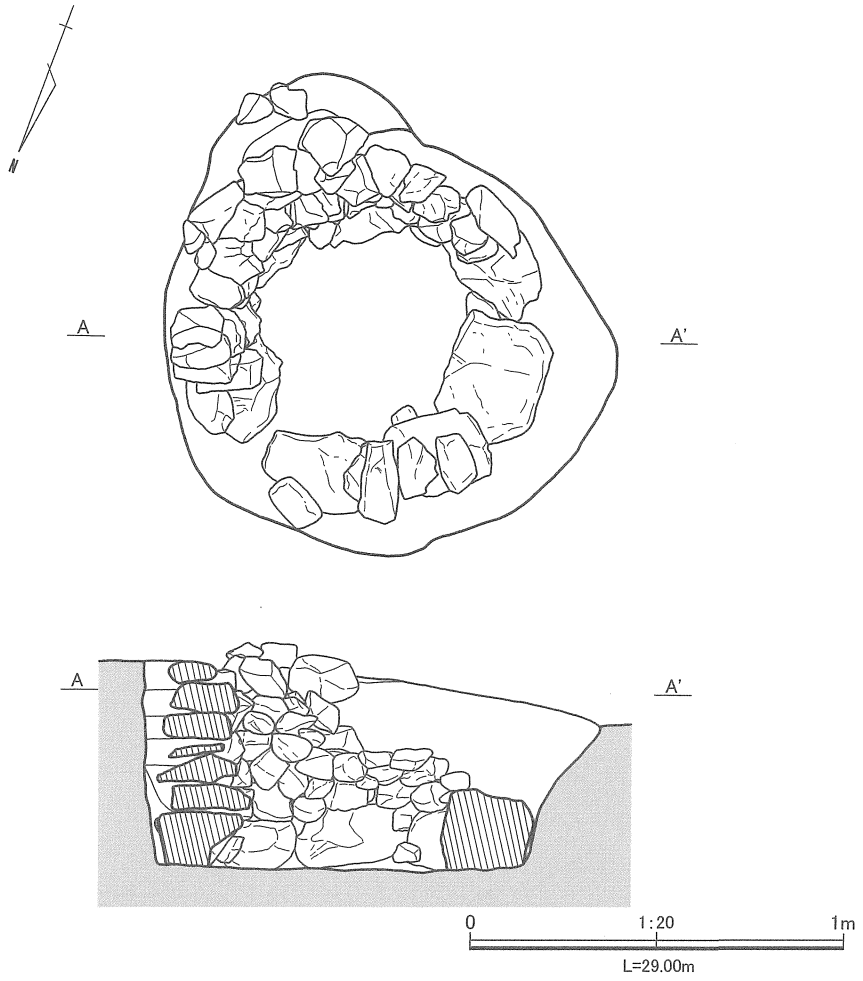
遺構外出土遺物（第34図）

B区の遺構外遺物は、調査区の包含層から出土した土師器壷(28)、清郷型甕(29)と確認調査時に表面採集した水注(30)がある。28は古墳時代の土師器壷底部である。北側の谷部で出土した。29は清郷型甕の口縁部である。調査区中央付近の整地土から出土した。30は鉄釉耳付水注である。確認調査時に調査区北側の撹乱層から出土した。削り高台を有するので17世紀代と思われる。31は徳利の破片である。志戸呂窯の17世紀前半と思われる。確認調査時に出土した。32は瀬戸の片口底部片である。近世と思われる。確認調査時に出土した。33は調査区西壁の自然流路から出土した銭貨である。銅銭の腐蝕が進み銭貨名が不明である。鋳上がりが悪く、掘りも浅い。穿が丸くなっており模鋳銭の可能性がある。長さ2.4cm、幅2.4cm、厚さ0.1cm、重さ2.0gをはかる。

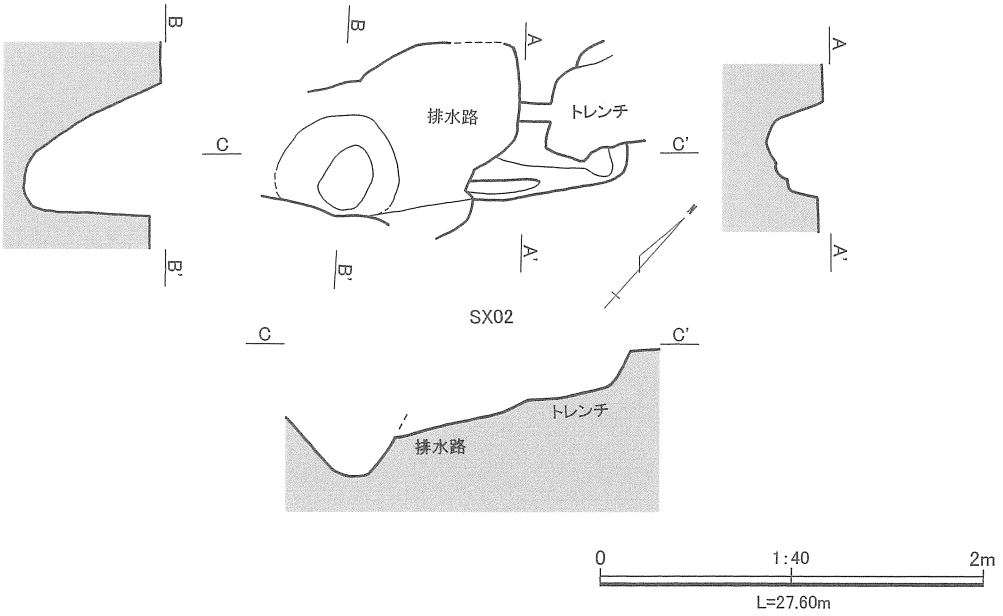


小穴の表記はSP○○としているが、本図中ではSPを省略している。

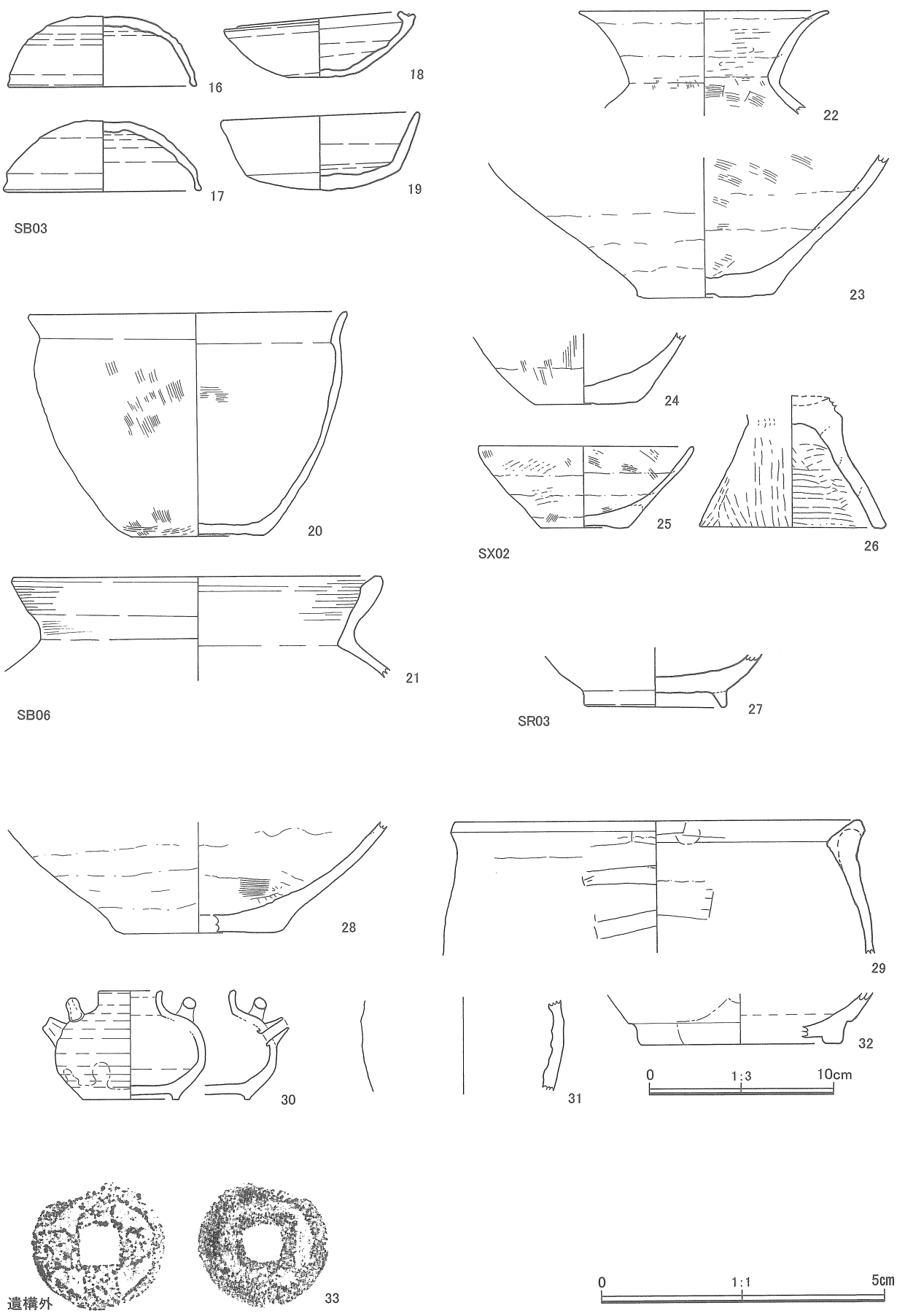
第31図　B区遺構全体図2



第 32 図　井戸 SE01 平面・断面図



第 33 図　性格不明 SX02 平面・断面図



第34図　出土遺物実測図

3　C区の遺構と遺物

遺構

古墳時代前期の集落跡を調査した。旧地形は、北東部の微高地と南西部の低地に分かれている。

微高地では竪穴住居跡11基・掘立柱建物1基・性格不明の遺構6基・小穴26基・土坑2基・溝2基を検出した。竪穴住居跡は方形で、中央付近に炉、四方に柱穴を伴うものが多い。これらの中には、壁溝や貯蔵穴などを伴うものもある。

一辺が5m前後の竪穴住居跡が多い中で、SB07は一辺約8.6mと大型の竪穴住居跡である。4基の柱穴も大きく、北東の柱穴から礎板を検出した。また、床に敷いていたと考えられる炭化材（繊維）も確認した。床面の炭化材（繊維）はSB17でも確認した。

SB10では、焼土および炭化した木材を覆土中で検出し、焼失した竪穴住居跡であったことを確認した。SD08は検出層位から古墳時代前期よりも新しいものと考えられる。SD09は古墳時代前期の溝である。排水もしくは区画を目的としたものと考えられる。

低地では、比較的広い範囲に土師器が集積していた。SX04-A（土器集積）を取り除くと、谷部の一部にSX03（木組み遺構）を検出した。木組みによって土手の通路をつくったもの、もしくは水流を調整するものと想定している。

土器は、古墳時代前期の土師器が多量に出土している。低地からの出土が大半を占めるが、竪穴住居跡などの遺構や包含層からも出土している。

遺物

土師器は、壷・鉢・高坏・器台・甕などの多様な形式が認められる。これらの中には、二重口縁の壷、底部穿孔の壷、器台、小型の高坏および鉢など、装飾性の高い土器もしくは通常生活と異なる場面で使用される頻度が高い土器が認められる。また、北陸系器台、東海西部に分布の中心をもつS字状口縁台付甕や瓢形の壷土器など外来系の土器も出土している。

木製品は、木組遺構に転用した建物跡の部材のほか、鋤・鍬などといった農耕具の柄の一部が出土している。これら木製品は、低地から出土している。

土層

C区の土層は、微高地の土層堆積状況と低地の堆積状況に分かれている。微高地の堆積状況は、D-D′ラインで観察した。ここでは、第10層灰色～灰白色シルト層が遺構検出面である。この上位にオリーブ黒粘土層などの遺物包含層が堆積している。竪穴住居跡などの遺構は灰色～白色粘土層を掘り込んで構築していた。

微高地から低地への堆積状況はA-A′ラインで観察した。ここでは、微高地を構成する第14層灰色粘土層が堆積した後、低地が形成されたことを確かめた。この低地は、第5層オリーブ黒粘土などが堆積して埋没している。

木組み遺構は灰色粘土より上位に組まれていた。土器集積は木組み遺構の構築後に集積したものである。

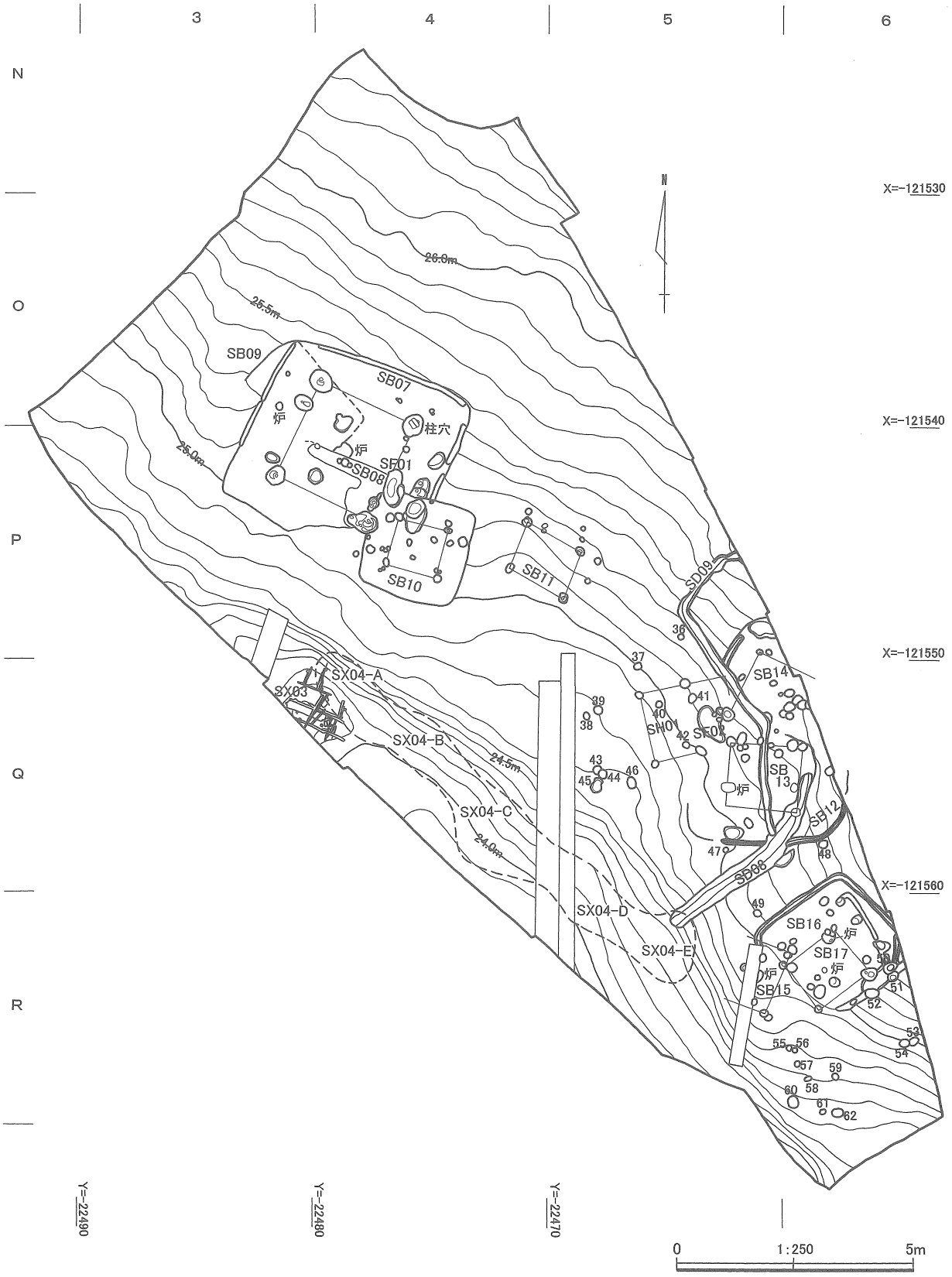
竪穴住居跡

SB07（第37図・第38図・第59図・第60図・第87図）

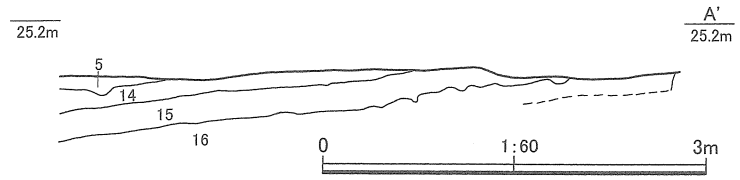
SB07はC区の北西O～P-3～4グリッド、標高25.3mに位置する。規模が東西8.4m、南北の残存長5.2m、掘り込みが0.4mである。主軸方位はN-21°-Eである。北壁と東壁に沿って幅0.2m、床面からの深さ0.1mほどの壁溝がめぐる。中央には東西0.8m南北0.6mの範囲に焼土が認められた。主柱穴は4箇所検出した。各柱穴は、直径1.0m～0.7mほどの円形で床面より約0.8m掘り込んでいる。

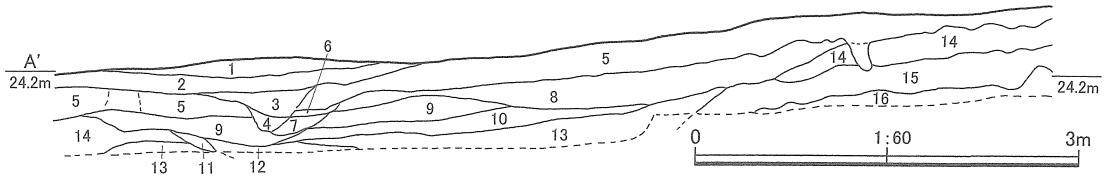
主柱穴４基には柱痕が残り、柱痕下底部から礎板(320)を検出した。

礎板(320)は木取りが板目で、上下の端部は表面と裏面から刃を入れて切断している。両側面と裏面に加工痕が残る。長さ 42.5cm、幅 28.5cm、厚さ 5.0cmをはかる。

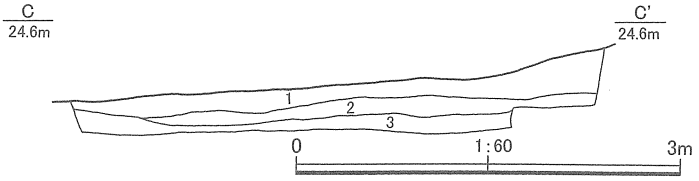


第 35 図　C 区遺構全体図

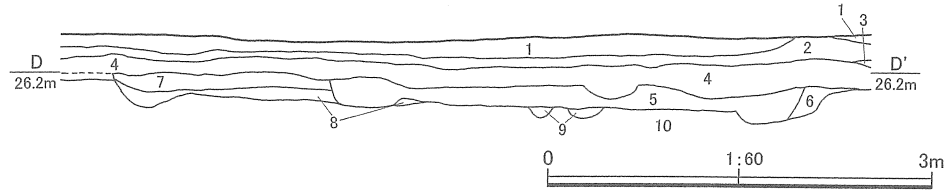




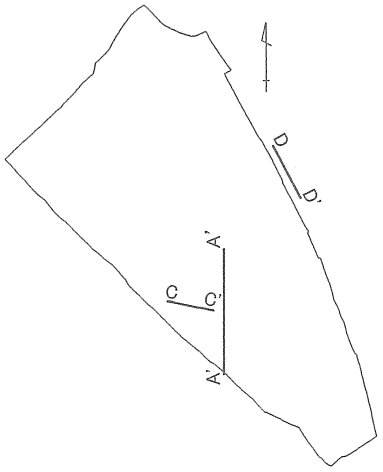
1 灰白色シルト
2 泥炭質粘土
3 オリーブ黒粘土
4 オリーブ黒粘土
5 オリーブ黒粘土
6 オリーブ黒粘土
7 灰色粘土
8 灰色粘土
9 灰色粘土
10 灰色～明オリーブ灰色砂礫
11 明オリーブ灰色粗砂
12 灰色粘土
13 灰色粘土
14 灰色粘土
15 灰色粘土
16 灰白色粘土



1 黒色土
2 淡黄灰色粘質土
3 淡黄灰色粘土及び砂礫層



1 淺黄色、砂礫混じり、灰色シルト
2 オリーブ黒粘土
3 灰色シルト層
4 オリーブ黒粘土
5 灰色～オリーブ黒粘土
6 灰色粘土層
7 灰色粘土
8 オリーブ黒粘土
9 砂礫混じり、オリーブ黒粘土
10 ベース土・灰色～灰白色シルト、砂礫層



第36図　C区土層断面図

土師器は、炉の北側より鉢(35)、高坏(36・37)、甕(39)が一括して出土した。この他、東壁北側より壷(34)が出土した。器種は広口壷(34)、小型鉢(35)、有段口縁高坏(36・37)、小型器台(38)、S字状口縁台付甕(39)、く字状口縁台付甕(40・42)である。

広口壷は、口縁部が外反し長頸のもの(34)がある。口頸部をハケとナデで整える。体部をヘラミガキ、内面をハケで整える。胎土は緻密で、淡橙色を呈する。口径14.0cm、器高25.5cmをはかる。

小型の鉢は、口径が体部径より小さいもの(35)がある。手捏ねで成形した土器と思われる。高さ6.5cm、口径6.1cmをはかる。

有段高坏は、杯部に段をもつもの(36・37)がある。36は杯部と脚部にヘラミガキを施し、脚部には3穴の透かし穴がある。橙色を呈する。杯部の口径が23.4cmをはかる。37は全体的に摩耗がすすんでいる。にぶい橙色を呈する。杯部の口径は22.8cmをはかる。

小型器台は、受け部が内彎して浅い碗形を示すもの(38)がある。ほぼ完形品で内外面ともにナデ調整を施す。

口径6.6cm、器高6.8cmをはかる。黄橙色を呈する。

S字状口縁台付甕(39)は肩部を斜位のハケと水平のハケで整える。器壁が4mmと薄く、胎土が緻密で雲母と白色砂粒を含む。

く字状口縁台付甕は、口縁部が外傾・外反し、口縁端部に明瞭な面をもたず、端部を丸く調整する(40・42)。中型のもの(40・41)と小型のもの(42・43)があり、ハケで整える(40～43)。40・42は口縁部から胴部、41・43は脚部である。40は口径が26.4cmをはかる。赤灰色を呈する。41は底径が10.0cmをはかる。胎土がやや粗く、にぶい黄橙色を呈する。42は口径が14.2cmをはかる。胎土がやや粗く、にぶい橙色を呈する。43は底径が7.3cmをはかる。胎土が緻密である。これらの土師器は、壷、鉢、高坏、甕の特徴から古墳時代前期に属すると思われる。

SB08(第37図)

SB08はC区の北西P-3～4グリッド、標高25.0mに位置する。規模が東西の残存長3.6m、南北の残存長2.7mをはかる。主軸方位はN-22°-Wである。主柱穴は2箇所検出した。各柱穴は直径0.6mほどの亜円形で、床面より0.15m掘り込んでいる。出土遺物は無い。

SB09(第37図・第38図)

SB09はC区の北西O～P-3～4グリッド、標高25.3mに位置する。規模が東西4.8m、南北の残存長2.7mをはかる。主軸方位はN-48°-Eである。掘り込みは、深さ0.05mと浅い。中央には東西0.35m南北0.4mの範囲に焼土が認められた。柱穴と思われる小穴を1箇所検出したが、直径20cm程であった。出土遺物は無い。

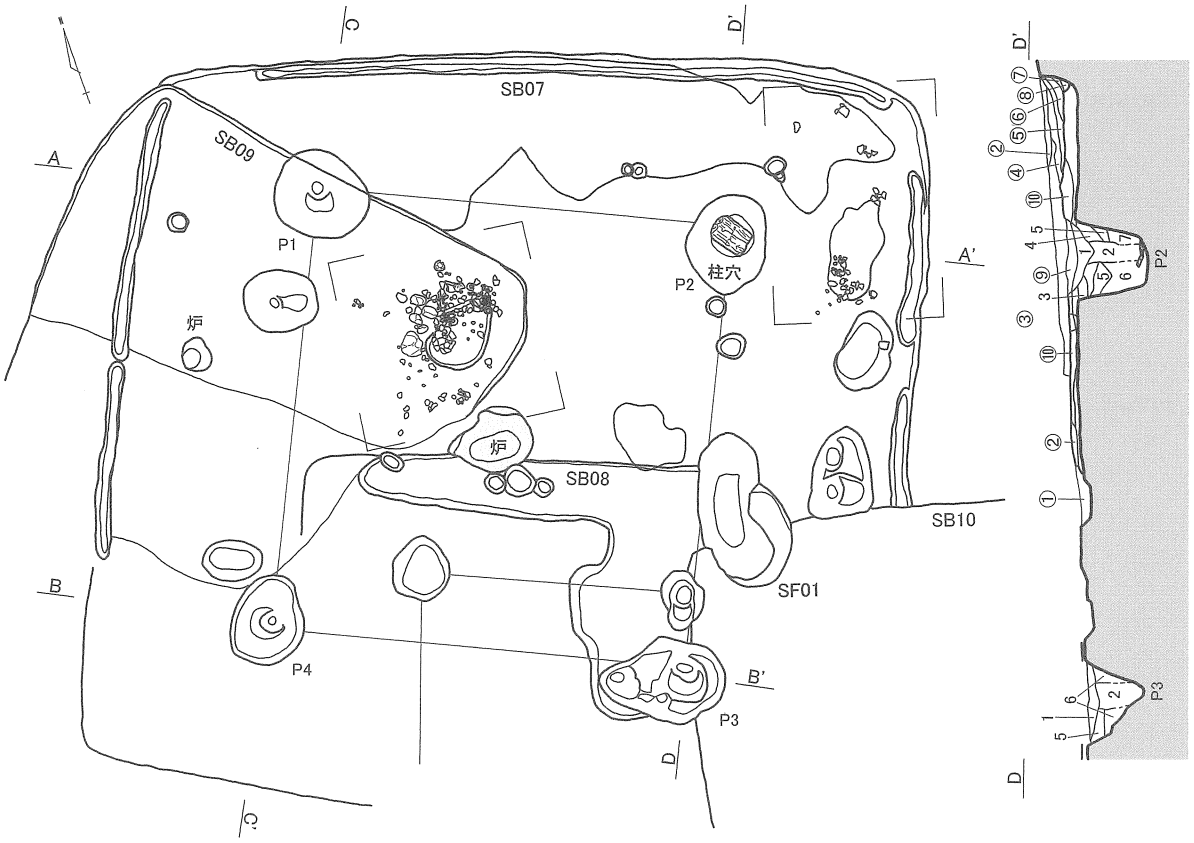
SB10(第39図～第41図・第60図)

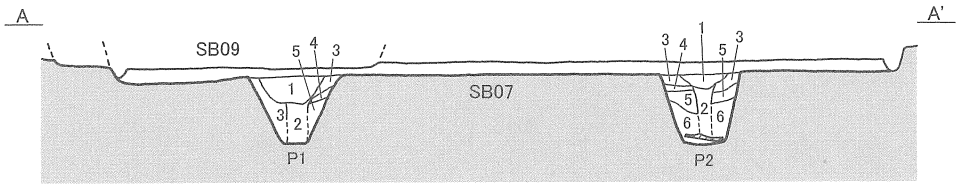
SB10はC区の北西P-4グリッド、標高25.2mに位置する。規模が東西4.4m、南北4.5m、深さ0.15mをはかる。主軸方位はN-14°-Eである。面積は18.1㎡である。覆土中には、東西3.2m、南北3.5mの範囲に炭化材(繊維)を検出した。床面中央には東西0.5m南北0.5mの範囲に粘土と炭化物が認められた。主柱穴が4箇所ある。直径0.4m～0.3mほどの円形で、床面より0.35m掘り込んでいた。土層断面では、柱痕と思われる土色の変化を確認した。炉の北側に東西0.7m南北0.9mの貯蔵穴と思われる土坑が付属する。

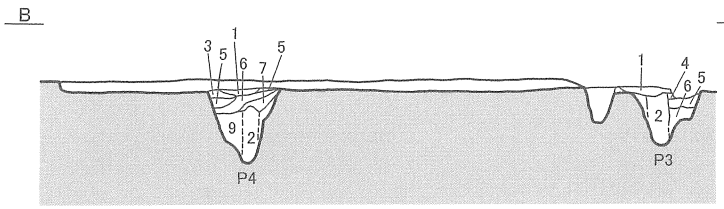
土師器は西壁付近から壷(44)と甕(46～47)、炉の西側から甕(48)、北壁から鉢(45)が出土した。

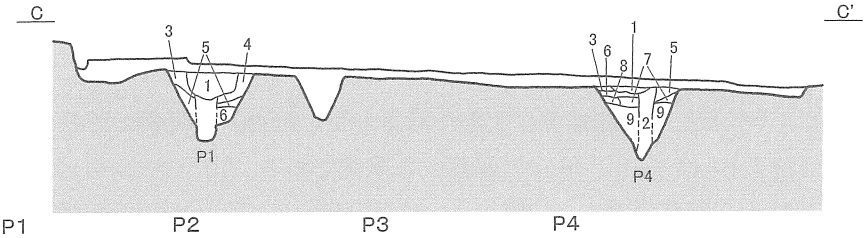
壷(44)は胴部から底部である。底部は平底で胴部に一部ヘラミガキが観察できる。

鉢(45)は口径が体部径より小さいもので有孔鉢である。内外面にハケを施す。胎土はやや粗く、浅黄橙色を呈する。口径11.7cm、器高15.0cmをはかる。









SB07覆土
① 褐色土
② 淡灰暗青色粘質土
③ 黒色土
④ 淡灰暗褐色土
⑤ 黒色土
⑥ 淡灰暗褐色土
⑦ 淡灰暗褐色土
⑧ 淡灰暗褐色土
⑨ 淡青灰色粘質土
⑩ 淡青灰色粘質土

P1
1 黒色土
2 黒灰色土
3 黒灰色粘質土
4 暗灰色粘質土
5 暗灰色粘質土
6 暗灰色粘質土

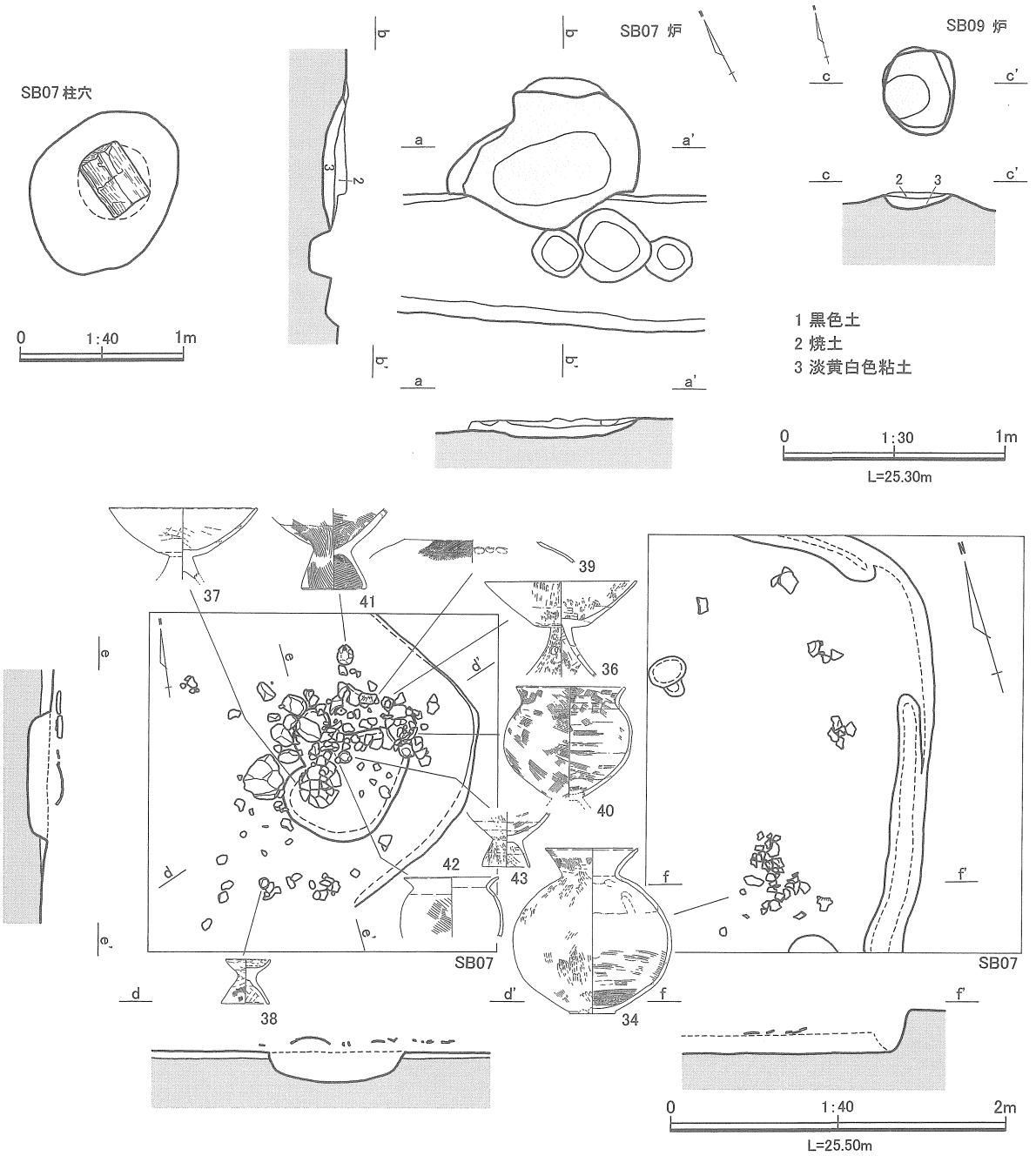
P2
1 黒色土
2 淡灰黒色粘質土
3 淡灰黒色粘質土
4 暗灰色粘質土
5 淡灰黒色粘質土
6 暗灰色粘質土
7 暗灰色粘質土

P3
1 黒色土
2 黒色粘質土
3 黒色土
4 暗灰色粘質土
5 暗灰色粘質土
6 暗灰色粘質土
7 淡灰黒色粘質土

P4
1 黒色土層
2 黒灰色粘質土
3 淡灰黒色粘質土
4 青灰黒色粘質土
5 暗灰色粘質土
6 青灰黒色粘質土
7 淡灰黒色粘質土
8 青灰黒色粘質土
9 暗灰色粘質土

0　1:80　4m
L=25.70m

第 37 図　竪穴住居 SB07・08・09 付近平面・断面図



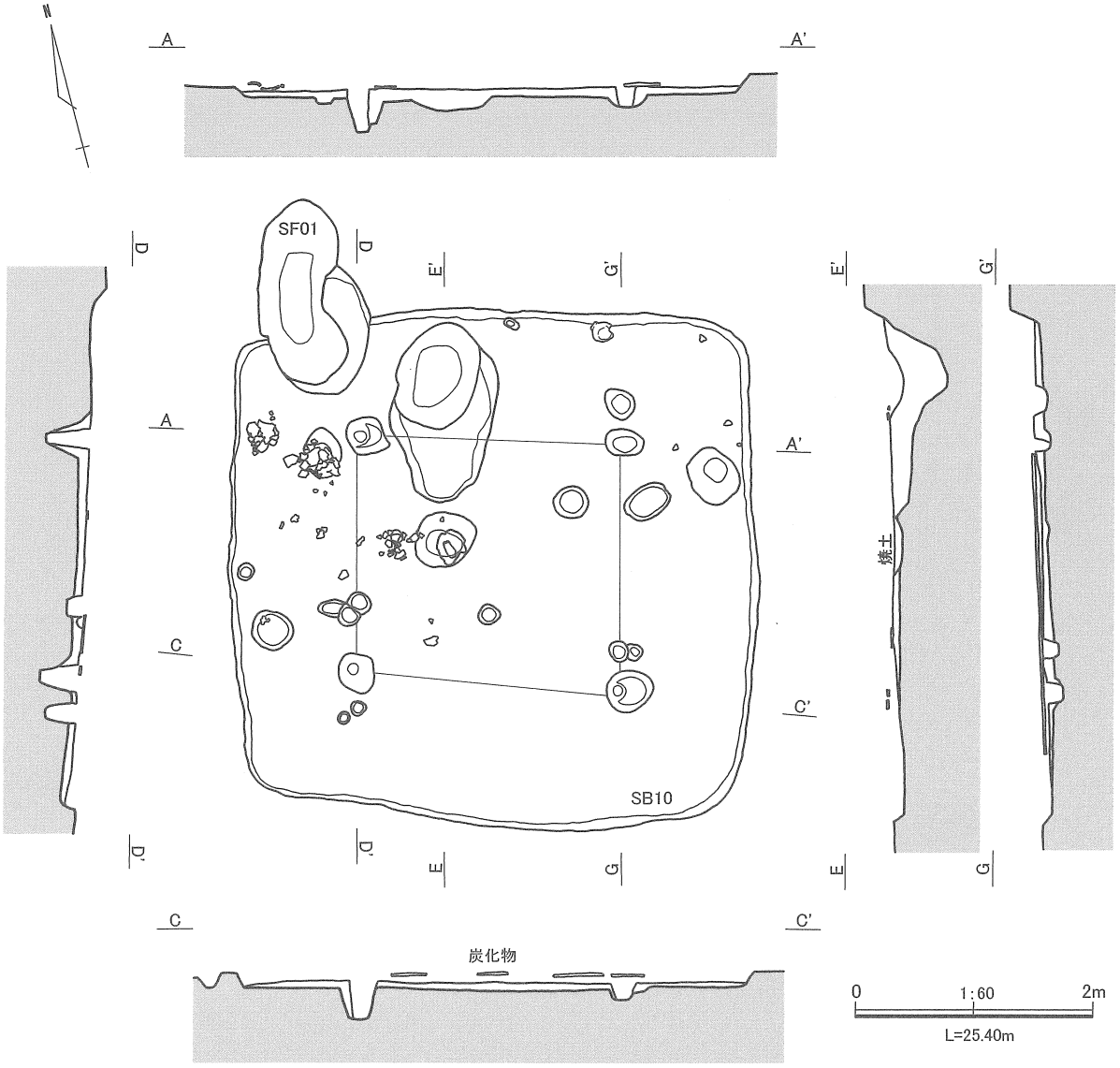
第38図　竪穴住居SB07・09柱穴・炉・遺物出土状況

く字状口縁台付甕は口縁部が大きく外傾し、口縁端部に明瞭な面をもつもの(46)と明瞭な面をもたないもの(47)がある。器体はハケで整える(46～49)。46は口縁部から胴部である。口径が18.6cm、胎土は密で淡橙色を呈する。47は口縁部から胴部である。口径は18.0cmをはかる。胎土は密で淡橙色を呈する。48は底部から脚部である。台脚の底径が10.0cmをはかる。胎土が密で褐灰色を呈する。49は脚部である。台脚径10.2cmをはかる。内外面ともにハケで整える。胎土は密で焼成は良好である。淡橙色を呈する。

これらの土師器は壷、鉢、甕の特徴から古墳時代前期に属すると思われる。

SB11（第42図）

SB11はC区の中央P-4～5グリッド、標高25.2mに位置する。掘方が浅く、形態や規模が不明である。4箇所の柱穴は、直径0.4m～0.3mほどの円形で検出面より0.25m掘り込んでいる。遺物は出



第39図　竪穴住居SB10平面・断面図

土していない。

SB12（第43図）

SB12はC区の南東Q-5～4グリッド、標高25.1mに位置する。平面形が方形を呈する。規模が残存長で東西5.3m、南北1.5m、深さ0.05mをはかる。南壁に幅0.2mの壁溝がめぐる。主柱穴の4箇所は直径0.4mほどの円形で床面より0.3m掘り込んでいる。遺物は出土していない。

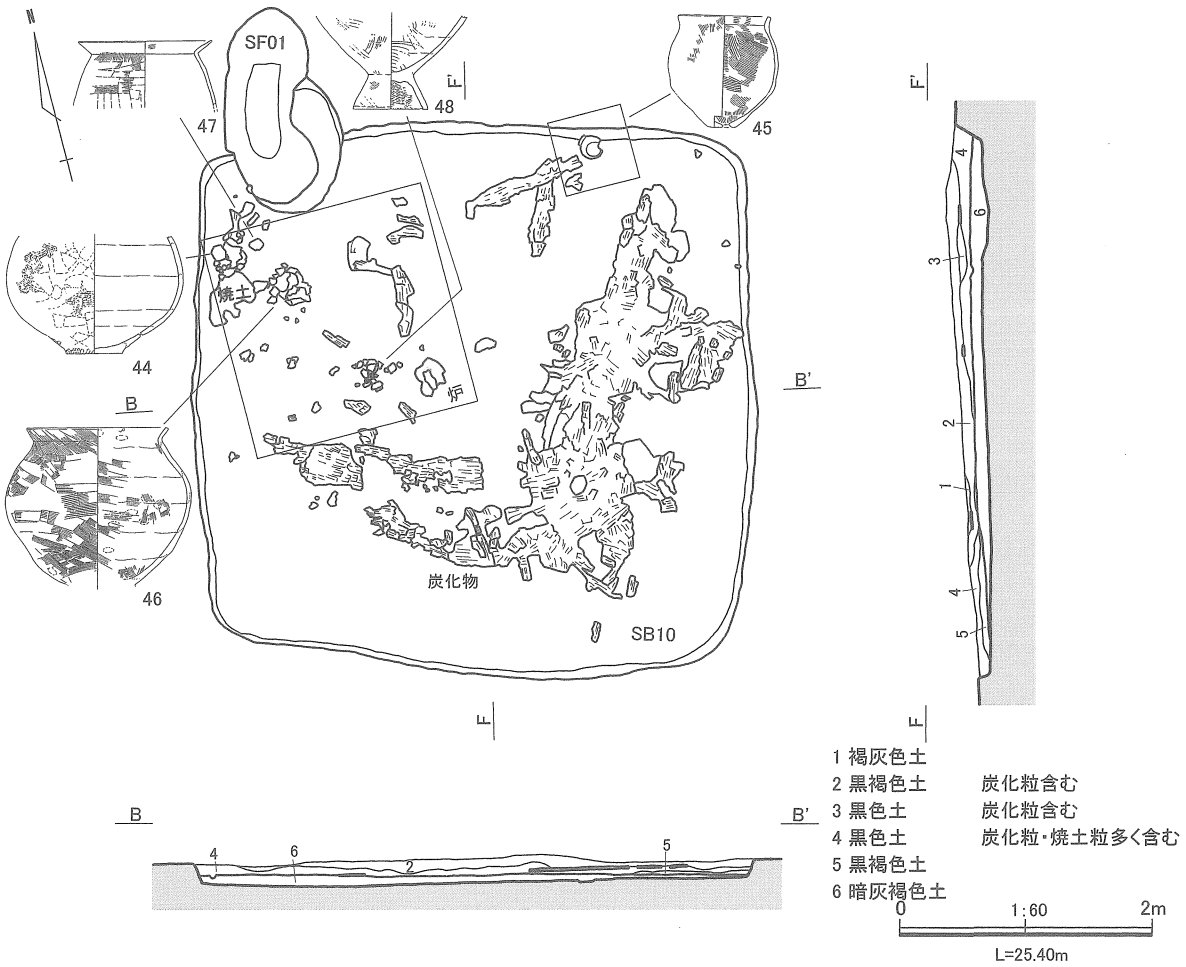
SB13（第43図）

SB13はC区の北西Q-5～6グリッド、標高25.2mに位置する。規模が壁溝の残存長で東西2.6m、南北5.7m、深さ0.2mをはかる。2箇所の柱穴は直径0.4m～0.3mほどの円形で、床面より0.07m掘り込んでいる。遺物は出土していない。

SB14（第44図・第60図）

SB14はC区のP～Q-5～6グリッド、標高25.4mに位置する。規模が残存長で東西4.0m、南北4.3m、深さ0.2mをはかる。西壁に沿って幅0.2m、床面からの深さ0.1mほどの壁溝がめぐる。主柱穴を4箇所検出した。各柱穴は直径0.7m～0.3mほどの円形で床面より0.5m掘り込んでいる。

出土遺物は器台(50)である。50は小型の椀形器台で口径3.5cm、高さ3.8cm、底径3.2cmと小さい。



第40図　竪穴住居SB10遺物出土状況

この土師器の器台は古墳時代前期に属すると思われる。

SB15（第45図）

SB15はC区の南東R-5～6グリッド、標高24.9mに位置する。規模が西側柱穴から炉までの残存長で東西2.5m、南北4.2mをはかる。床面中央には南北0.9mの炉が認められた。東側2箇所の柱穴は、直径0.5mほどの円形で床面より0.3m掘り込んでいる。これらの柱穴には建替えと思われる重複が認められた。遺物は出土していない。

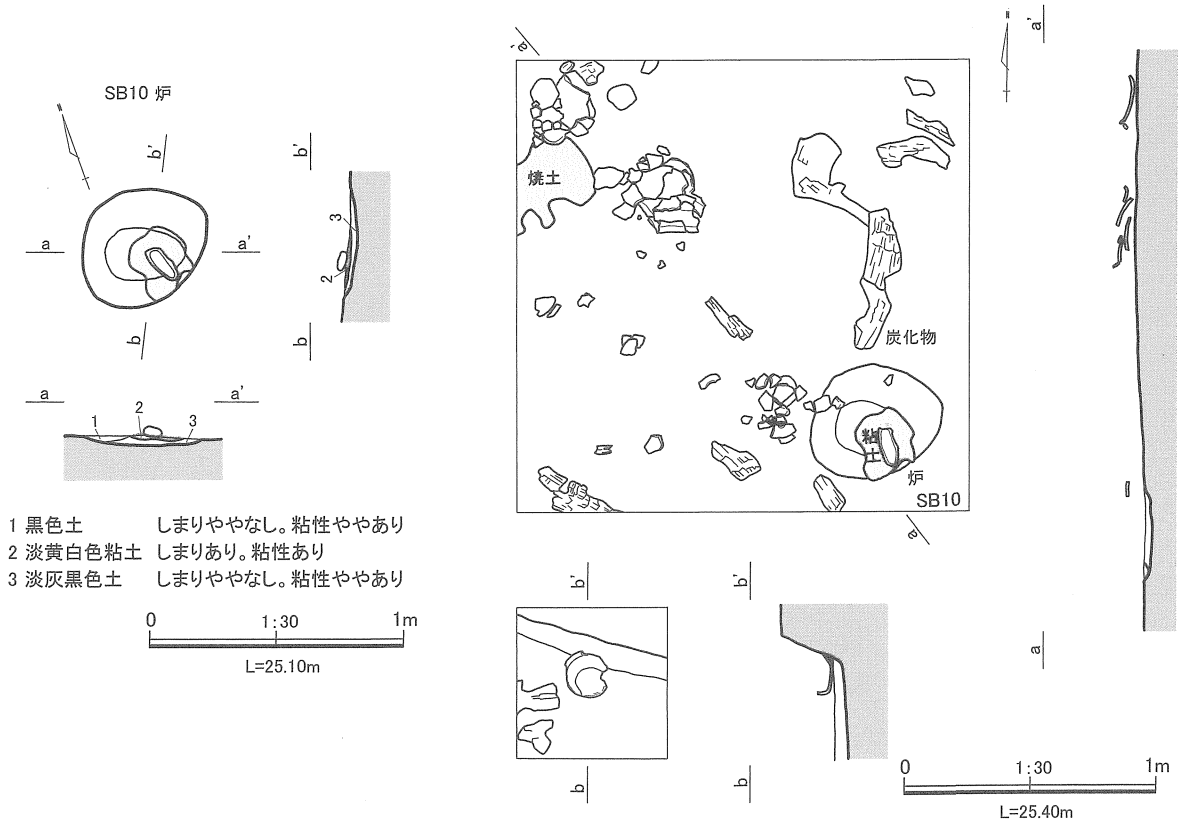
SB16（第46図・第47図）

SB16はC区の南東R-5～6グリッド、標高25.3mに位置する。規模が東西4.7m、南北が残存長5.0mで東壁と北壁と南壁に沿って幅0.2m、床面からの深さ0.1mほどの壁溝が周る。主軸方位はN-35°-Wである。

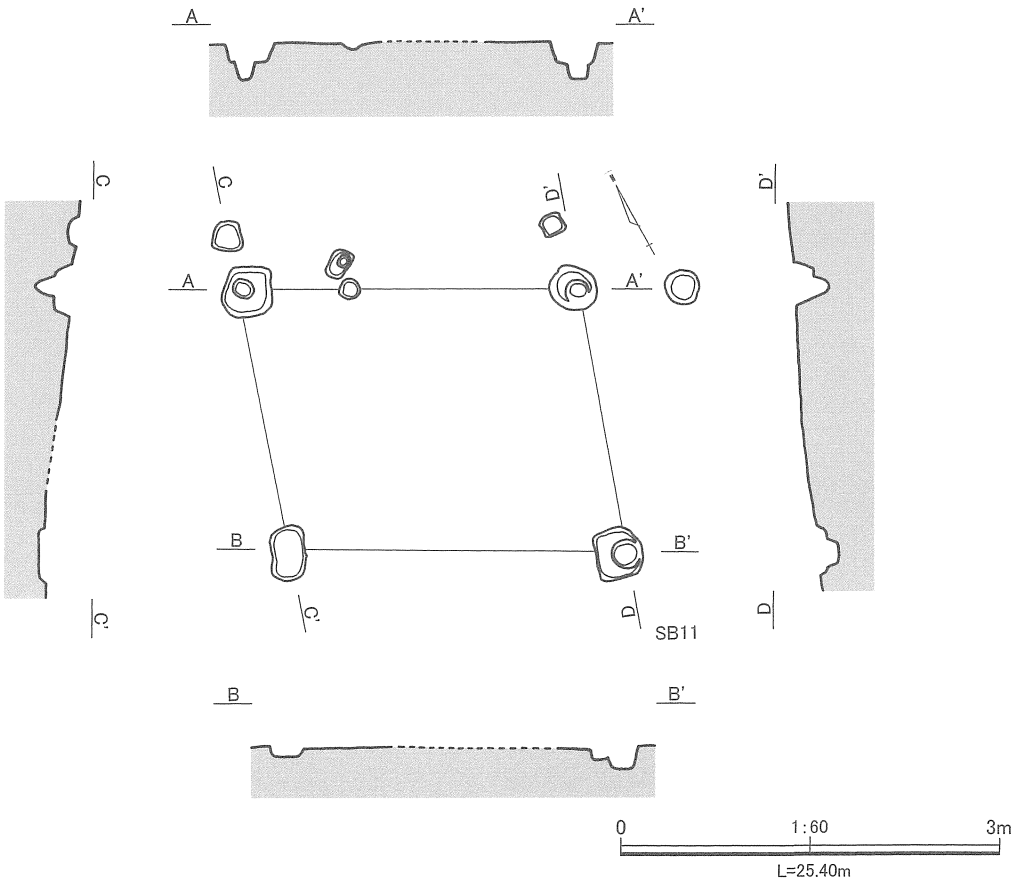
柱穴に囲まれた中央には東西0.6m、南北0.5mの範囲に炉と思われる焼土を認めた。炉の北東には南北2.0m、東西2.0mの範囲に炭化物が分布していた。主柱穴は4箇所。各柱穴は直径0.6m～0.3mほどの円形で床面より0.4m掘り込んでいる。

SB17（第46図）

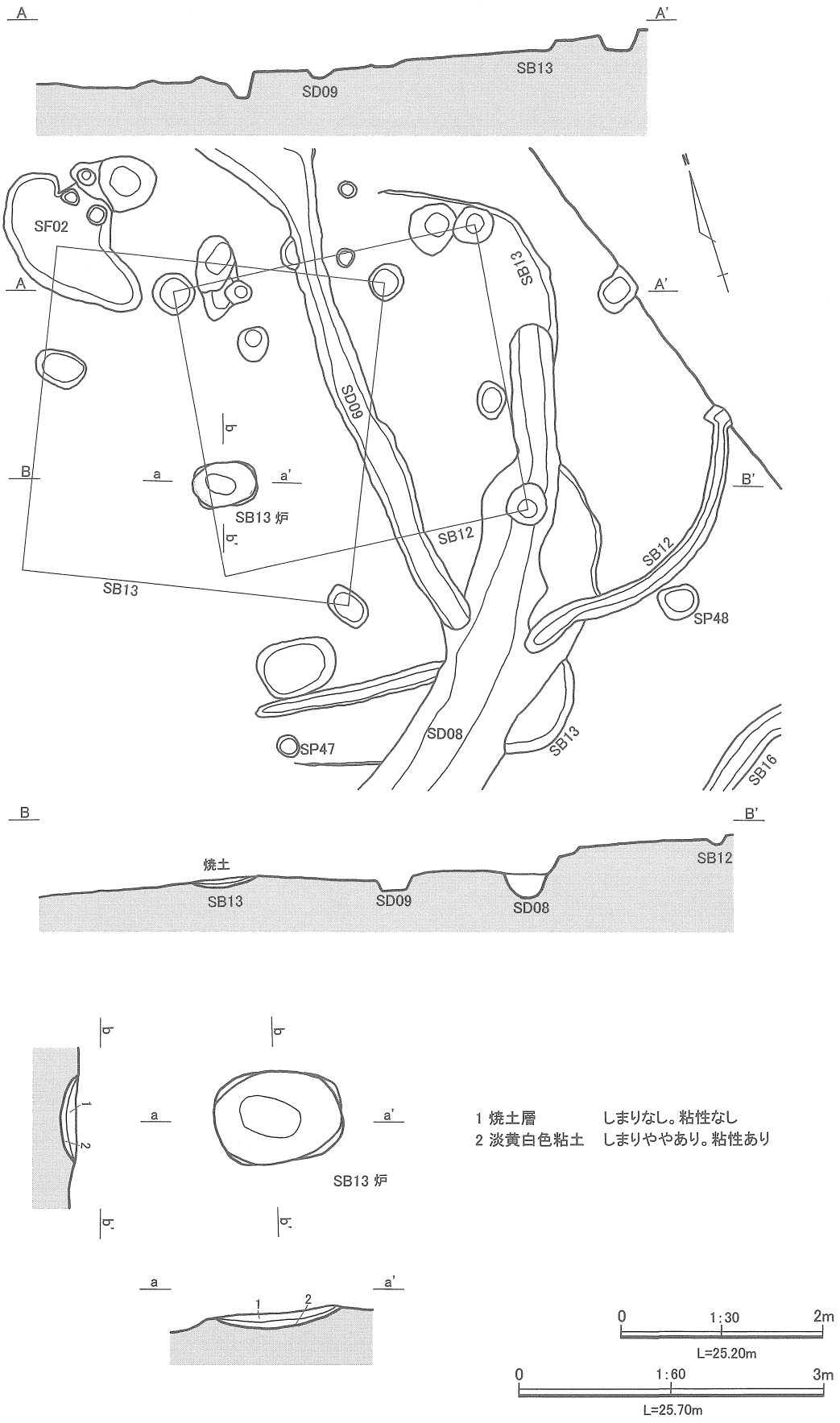
SB17はC区のR-5～6グリッド、標高25.2mに位置する。規模が残存長で東西4.3m、南北3.5m、深さ0.1mをはかる。東壁に沿って幅0.2m、床面からの深さ0.1mほどの壁溝がめぐる。柱穴に囲まれた床面中央には東西0.3m、南北0.25mの範囲に炉と思われる色調の変化が認められた。主柱穴は4箇所検出した。各柱穴は直径0.7m～0.3mほどの円形で床面より0.5m掘り込んでいる。貯蔵穴と



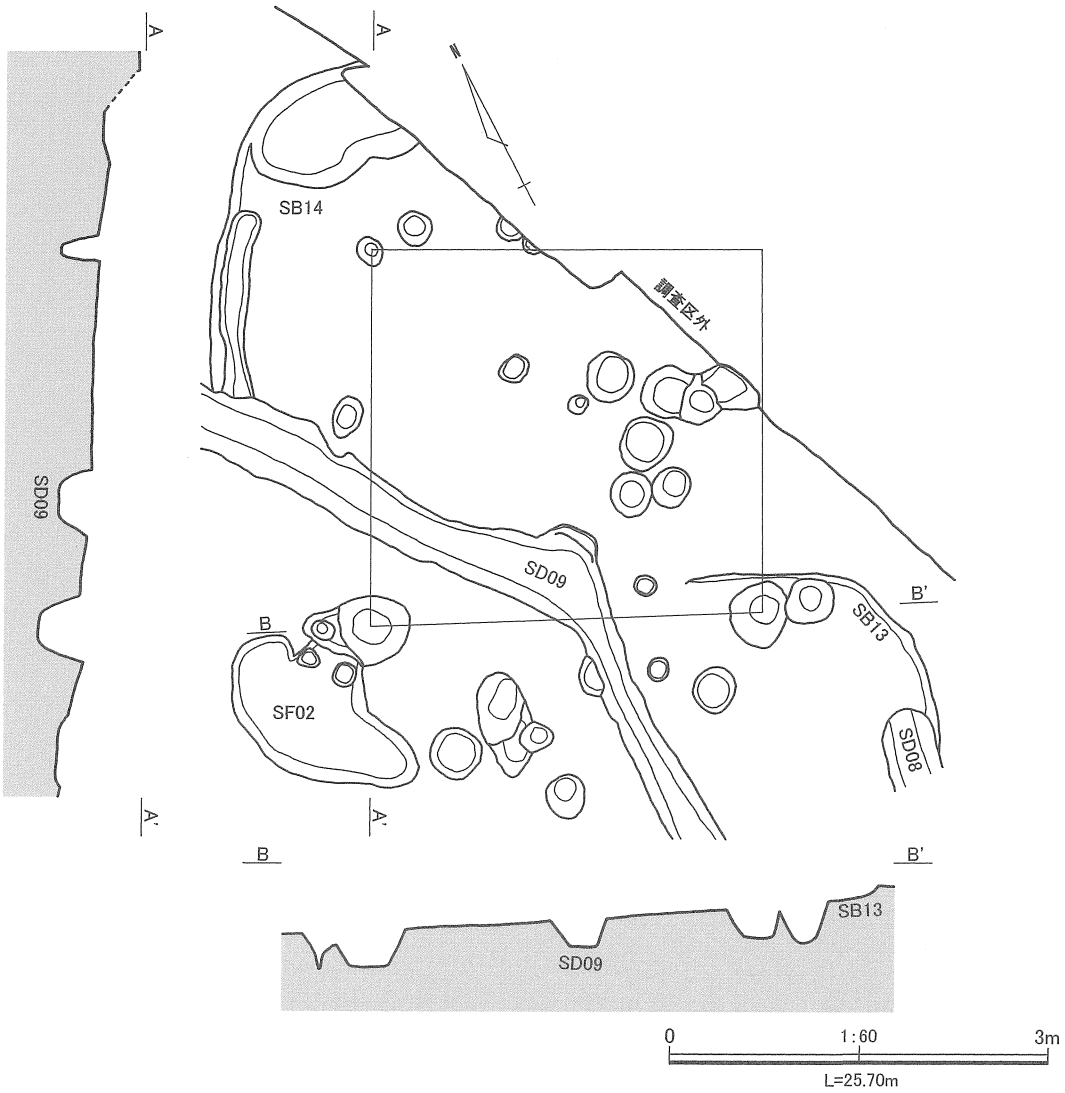
第41図　竪穴住居SB10炉・遺物出土状況



第42図　竪穴住居SB11平面・断面図



第43図　竪穴住居SB12・13付近平面・断面図



第44図　竪穴住居SB14付近平面・断面図

思われる土坑が付属する。遺物は出土していない。

掘立柱建物

SH01（第48図）

SH01は調査区の中央Q-5グリッド、標高25.0mに位置する側柱建物である。規模が桁行2間（3.8m）、梁行1間（3.0m）で面積は11.4㎡である。主軸方位はN-75°-Eである。柱穴は円形で直径が0.4m前後であった。北東の柱穴はSD09に切られている。遺物は出土していない。

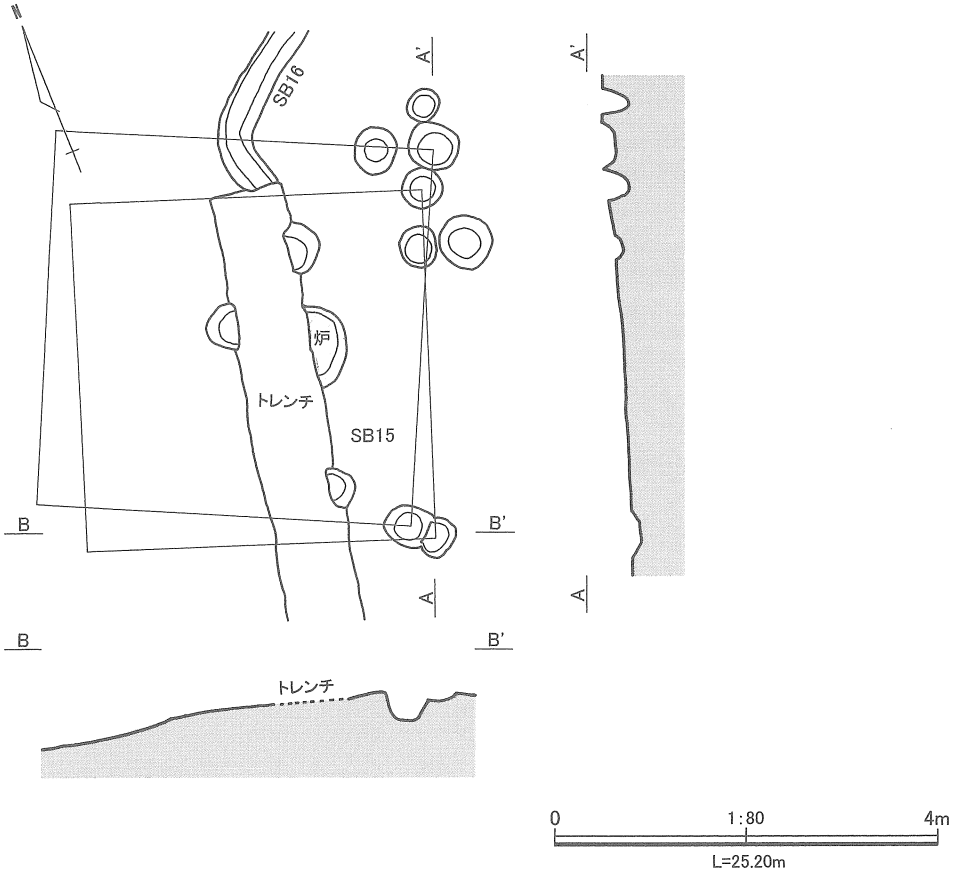
溝

SD08（第49図）

SD08は調査区の南東Q～R-5～6グリッド、標高25.5m～25.0mに位置する。規模が延長8.5m、上端の幅0.9m、下端の幅0.4mをはかる。切り合いがSB12、SB13と重複している。時間的な新旧関係はSD09より新しい。出土遺物は無い。

SD09（第50図）

SD09は調査区の南東P～Q-5グリッド、標高25.8m～25.2mに位置する。規模が延長11.6m上端の幅0.4m下端の幅0.2mである。等高線に対して斜めに横断する部分と平行する部分があり、屈曲しながらSD08と重複する。前後関係はSD08より古い。覆土が黒色土である。出土遺物は無い。



第45図　竪穴住居SB15平面・断面図

性格不明の遺構

SX03（第52図・第53図・第54図・第61図・第84図～第87図）

SX03はQ-3～4グリッドの低地に位置する。北側の微高地には大型の住居SB07を中心としてSB08、SB09、SB10、SB11の計5基の竪穴住居跡がある。盛土、杭列、木製品、石により構成される木組み遺構である。土師器を集積したSX04-Aの下層から検出した。

盛土は調査区の土層断面E-E′で二箇所確認した。地山と思われる第23層灰色粘土が中央で窪み、その東側には第15層灰色粘土から第19層灰色粘土、西側には第21層灰色粘土と第22層灰色粘土が積み重なっていた。盛土に挟まれた窪みでは、第12層より上層に木製品が含まれていた。二箇所の盛土は平面的な広がりを検出できなかった。

杭列は二列を確認した。東側の杭列は木組み遺構の東縁に沿うように打ち込まれていた。西側の杭列は西縁に沿うように打ち込まれていた。これらの杭列を延長すると盛土の位置にほぼ重なる。

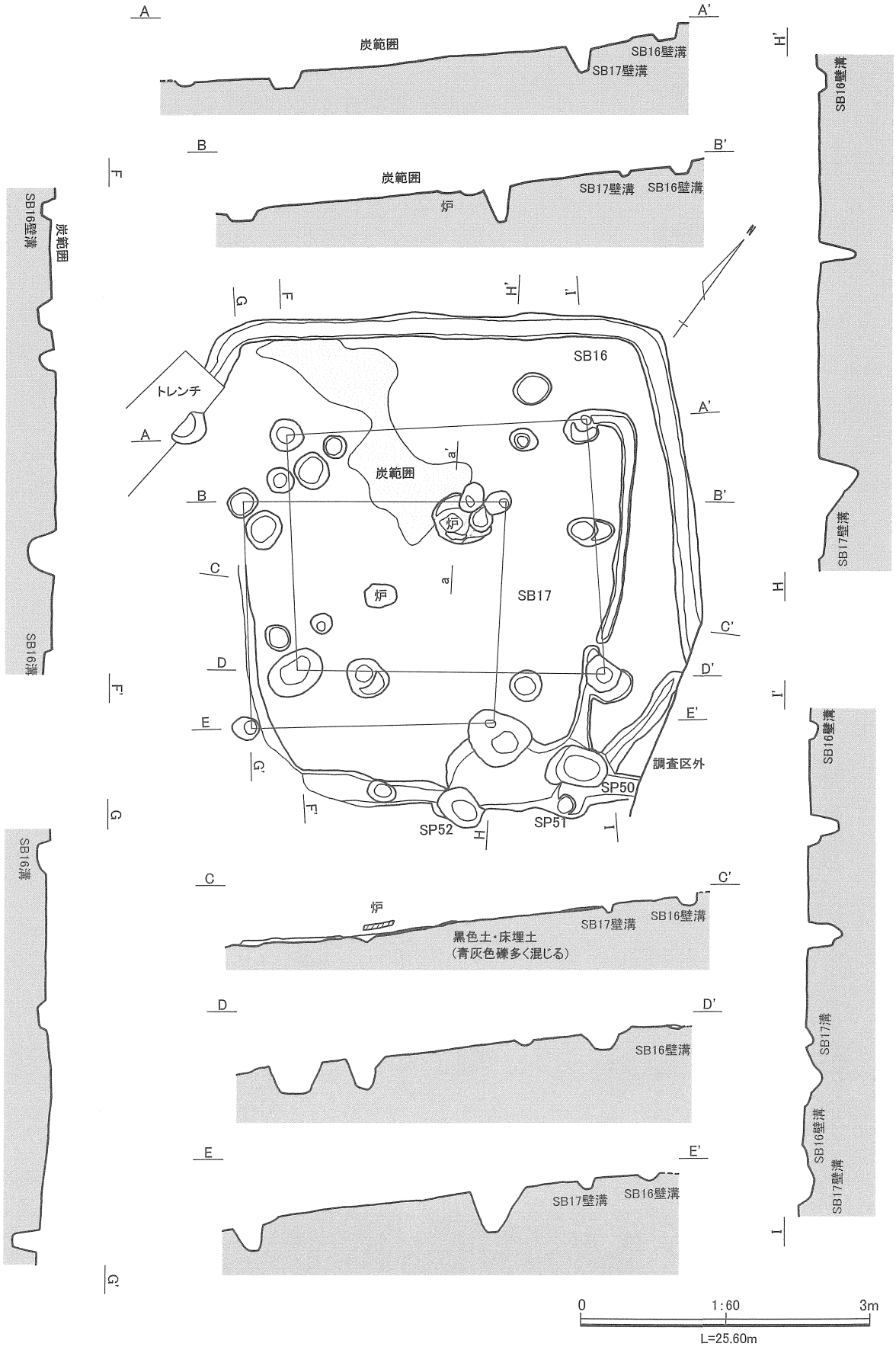
木組み遺構は二列の杭列に沿った東西3.0m南北3.5mの範囲に分布しており、加工痕のある板材や丸木が交わるように重なっていた。板材をコの字状に組み合わせている箇所も認められた。これらは、出土土器から古墳時代前期に機能していたと思われる。また、窪みに堆積する第13層灰色細砂から第1層黄灰色シルトは、古墳時代前期包含層形成から泥炭層形成までの間の期間に堆積したものと考えられる。

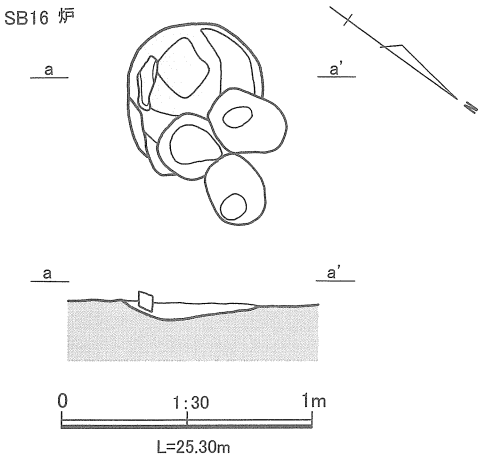
性格は木組みによって低地に土手状の通路を造ったもの、もしくは水流を調節するものと想定することが出来る。なお、この木組みには建築材が多く転用されていた。

出土遺物は土師器と木製品がある。

土師器は壷(51)と甕(52)が1点ずつ出土した。器種は二重口縁壷(51)と台付甕(52)である。

二重口縁壷は口縁屈曲部に粘土紐を貼付して表現するもの(51)がある。口縁部外面に粘土を貼り付け、


A
A'
炭範囲
SB16壁溝
SB17壁溝
B
B'
炭範囲
炉
SB17壁溝
SB16壁溝
SB16壁溝
炭範囲
SB16壁溝
SB17壁溝
SB16壁溝
SB17壁溝
SB16壁溝
SB17壁溝



第47図　竪穴住居SB16炉・平面・断面図

有段状に整える。口縁部が横ナデ、頸部から胴部にかけてハケが残る。口径が18.2cm、胎土が緻密で浅黄橙色を呈する。

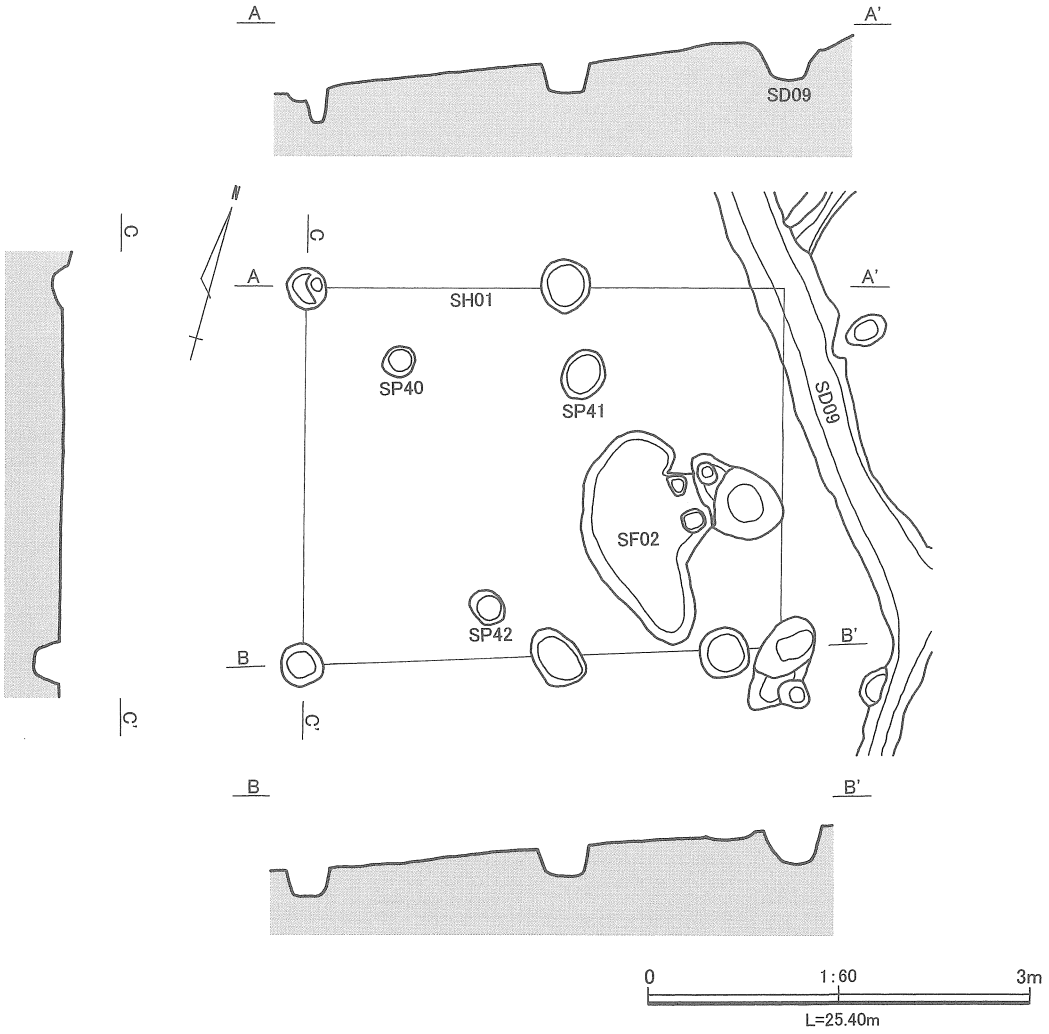
台付甕(52)は脚部で、底径が10.4cmである。

これらの土師器は壷と甕の特徴から古墳時代前期に属すると思われる。

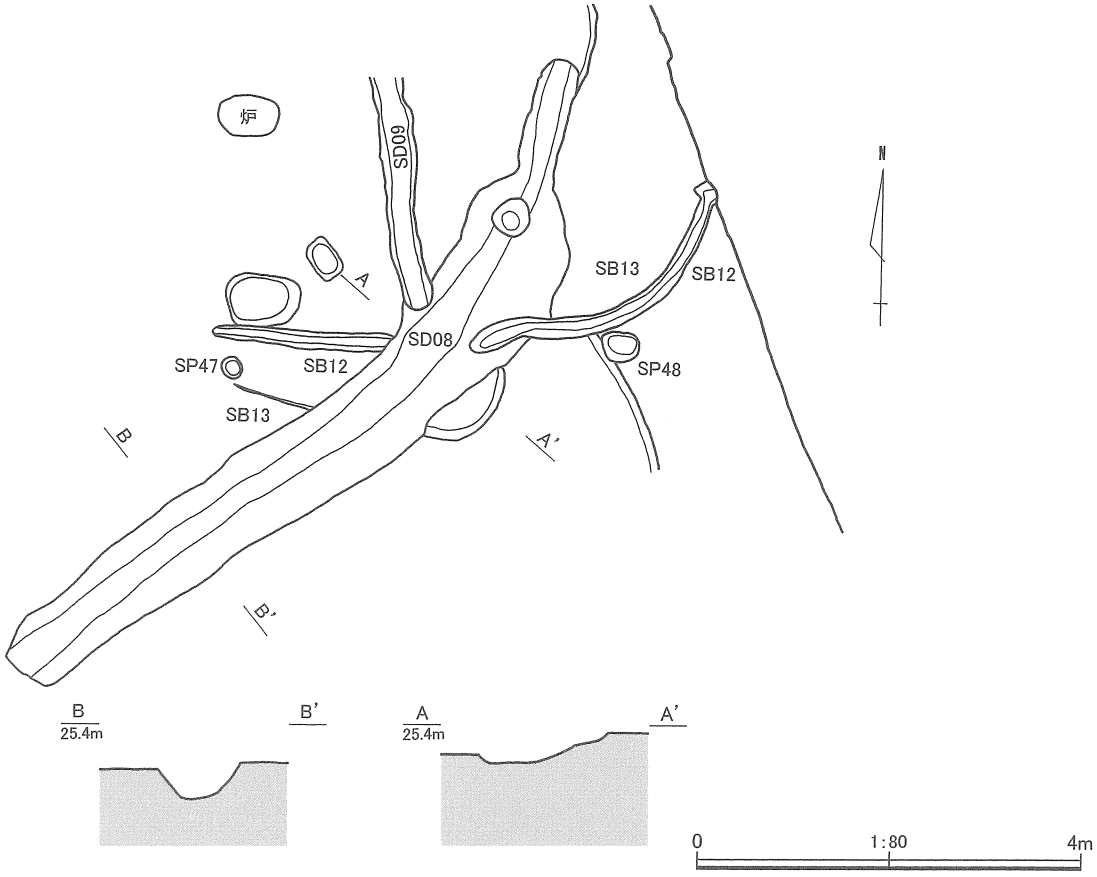
木製品は農耕具の鍬(305)、容器の刳物(307・308・309)、建築材の角栓(310)、梯子(311・312)、板材(313～317)、柱(318・319)が出土した。

鍬(305)は直柄鍬の未製品である。舟形隆起が未穿孔で最大幅6.4cmと身幅が狭い。最大厚が4.4cmで舟形隆起は後面より3.5cmほど隆起している。最大長が23.9cm、右側縁を欠損する。

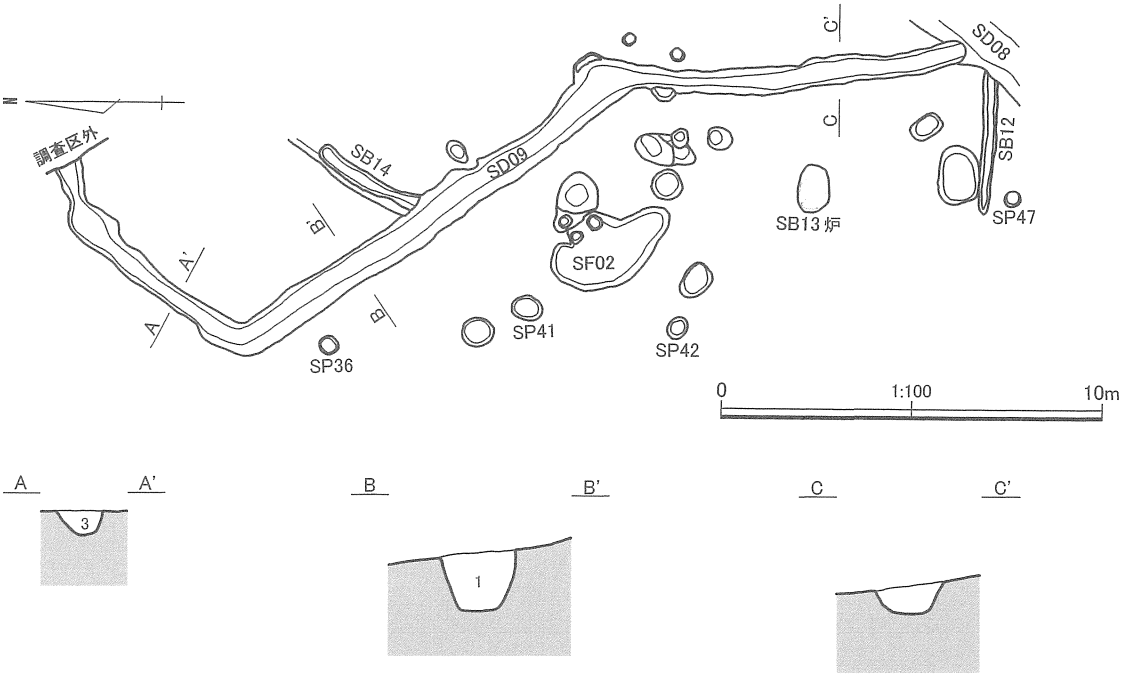
刳物は片口(307)、槽(308)、不明(309)がある。307は注ぎ口がすぼまり、外に向けて反ることから片口とおもわれる。木取りは板目で両側縁と下部を欠損する。表面と裏面に黒い塗りが残る。長さ36.5cm、幅14.3cm、厚さ12.3cmである。308は底面に二箇所、幅11.7cm、高さ6.6cmほどの脚を削り



第48図　掘立柱建物SH01平面・断面図



第 49 図　溝状遺構 SD08 付近平面・断面図

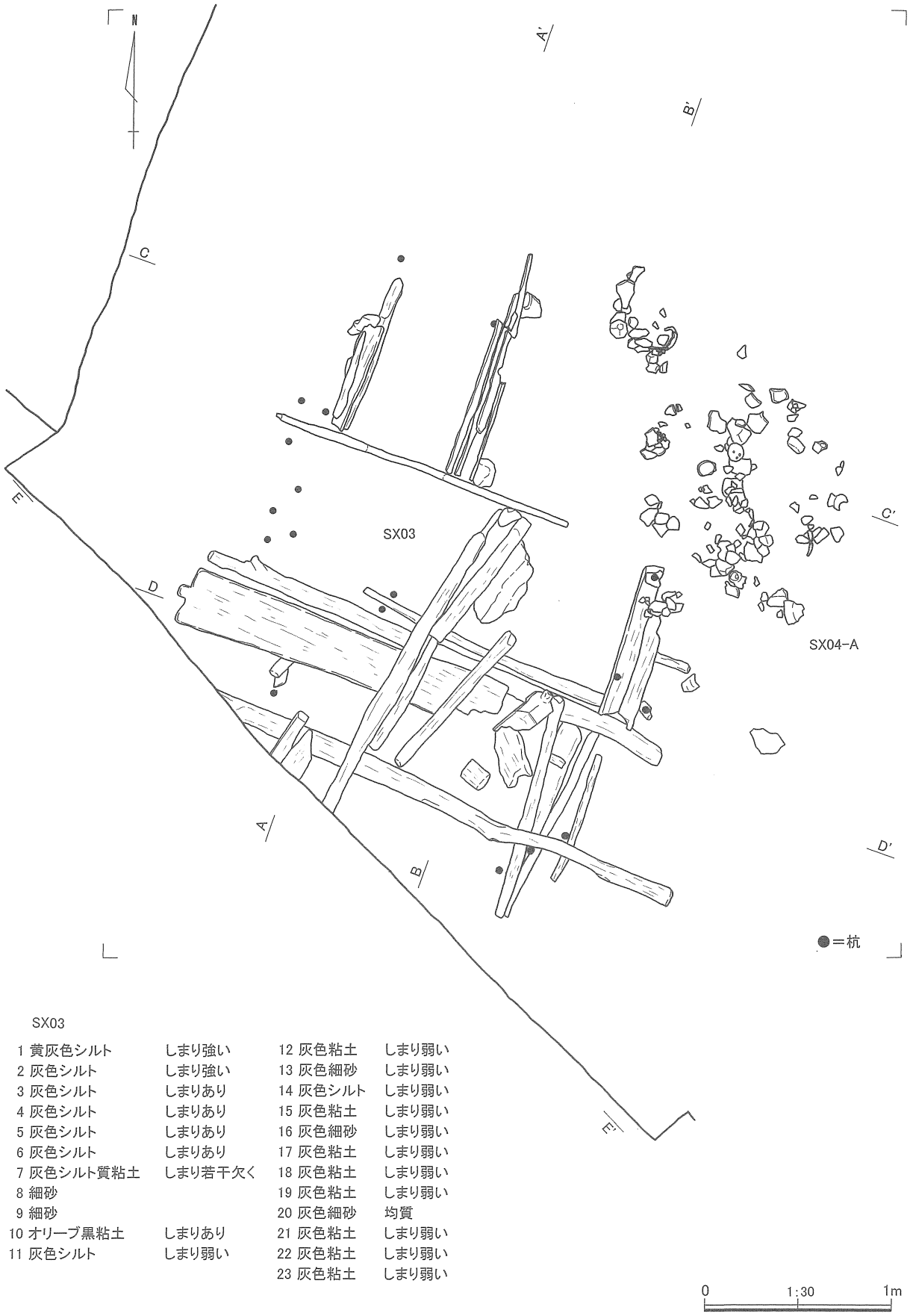


1 黒色土　　シルト1.7/1に青灰色礫10mm以下が、少量混じる
2 青灰色礫(地山)
3 黒色土　　シルト1.7/1にオリーブ色礫5/4、30mm以下が混じる

第 50 図　溝状遺構 SD09 付近平面・断面図

小穴の表記はSP○○としているが、本図中ではSPを省略している。

第51図　性格不明SX03・04付近全体図

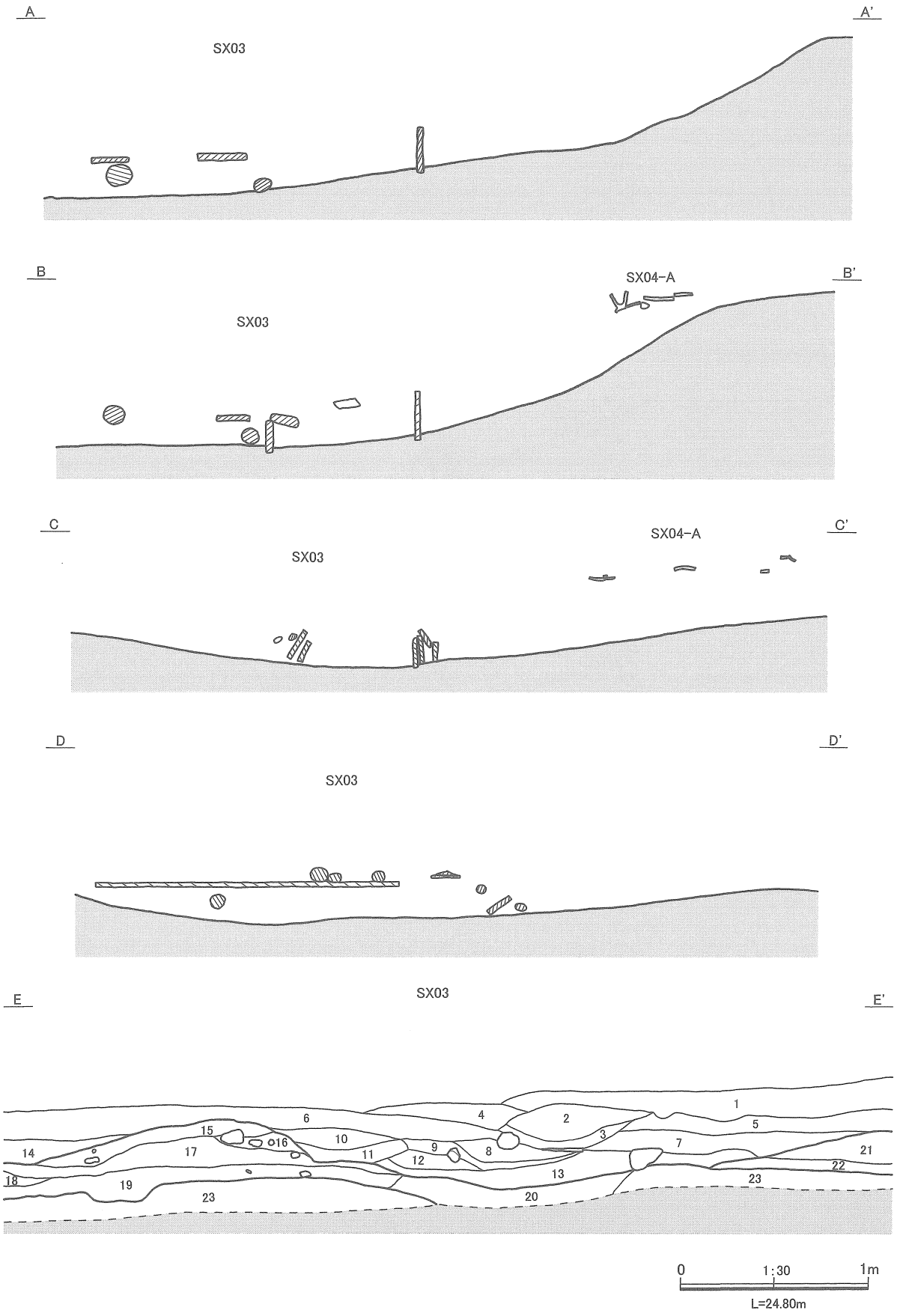


SX03

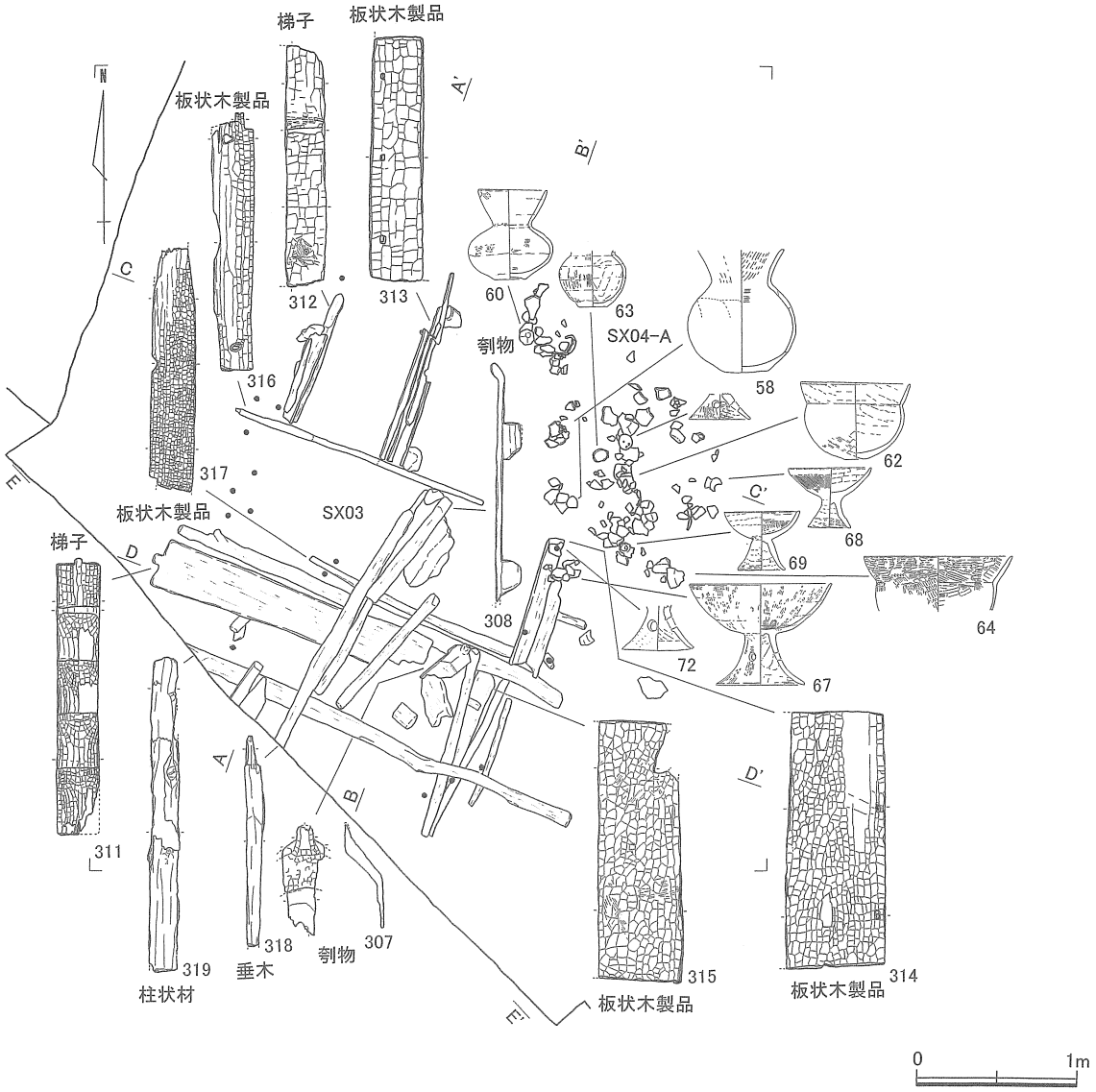
1 黄灰色シルト	しまり強い	12 灰色粘土	しまり弱い
2 灰色シルト	しまり強い	13 灰色細砂	しまり弱い
3 灰色シルト	しまりあり	14 灰色シルト	しまり弱い
4 灰色シルト	しまりあり	15 灰色粘土	しまり弱い
5 灰色シルト	しまりあり	16 灰色細砂	しまり弱い
6 灰色シルト	しまりあり	17 灰色粘土	しまり弱い
7 灰色シルト質粘土	しまり若干欠く	18 灰色粘土	しまり弱い
8 細砂		19 灰色粘土	しまり弱い
9 細砂		20 灰色細砂	均質
10 オリーブ黒粘土	しまりあり	21 灰色粘土	しまり弱い
11 灰色シルト	しまり弱い	22 灰色粘土	しまり弱い
		23 灰色粘土	しまり弱い

0　1:30　1m

第52図　性格不明SX03・04-A平面図



第 53 図　性格不明 SX03・04-A 断面図



第54図　性格不明SX03・04-A遺物出土状況

だしている。309は容器破片である。

栓(310)は上部が8cmほどの頭部をもち、軸部が一段厚みを落としている。

梯子(311)は四段の足掛け部分を半円形に削りだしている。

板状木製品(313～317)は木取りが板目のもの(314・316・317)、追い柾目のもの(313・315)がある。

柱(318)は芯持材で、頭頂部に長さ19.0cm、幅6.8cm、厚さ5.0cmの出枘を作る。

柱状材(319)は上下の端部を切断している。

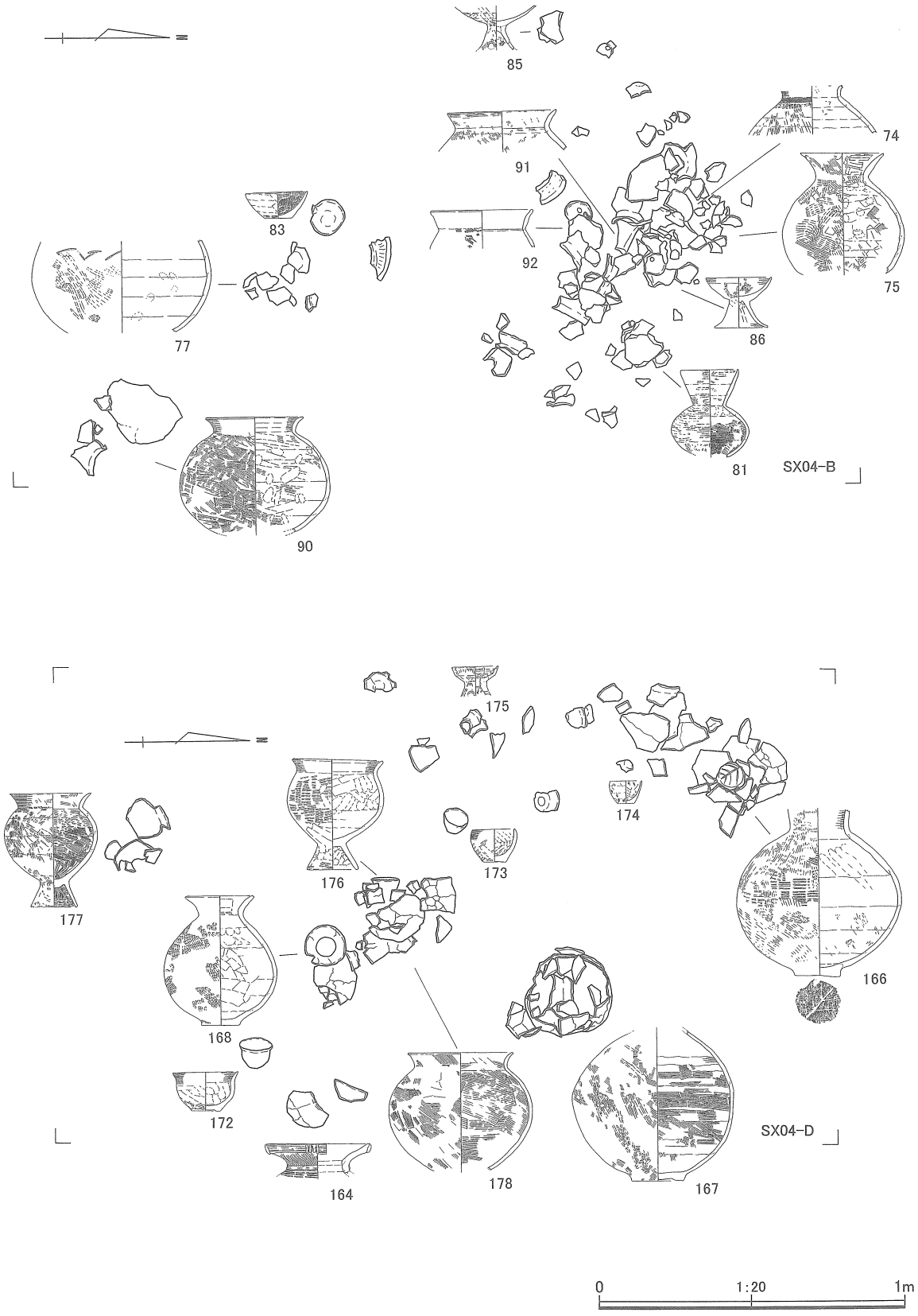
SX04-A（第54図・第61図～第63図）

SX04-AはQ-4グリッドに位置する。北側には大型竪穴住居跡SB07を中心にSB08、SB09、SB10、SB11計5基の竪穴住居跡がある。南西方向にはSX03がある。層位的にはSX03が埋没してからSX04の土師器が集積している。規模は東西1.3m、南北1.8mの範囲に広がっている。

土師器は壷(53～60)、鉢(61～66)、高坏(67～71)である。壷は広口壷(53・54・57)と口縁が直口で外反する小型の壷(58～60)がある。大型の広口壷は加飾性が低く、ミガキが観察できないものもある。

広口壷は口頸部が外反する長頸のもの(53)と口頸部が外反する短頸のもの(54)がある。

高坏は大型の椀形高坏(67)と小型の椀形高坏(68・69)がある。これ以外に杯部の形態が不明な脚部



第 55 図　性格不明 SX04-B・04-D 遺物出土状況

(70・71)がある。

大型の椀形高坏(67)は半球状の杯部をもつ。円錐状の外反脚をもち、杯部が大きく外傾する。器体をヘラミガキとナデで整える。胎土はにぶい橙色である。口径19.8cm、器高14.0cm、脚部径12.2cmをはかる。

小型椀形高坏(68・69)は15cm未満の半球状の杯部をもつ。器体をハケとナデで整える。68は口径10.4cm、器高8.3cm、脚径5.9cmをはかる。69は口径10.5cm、器高8.2cm、脚径6.3cmをはかる。

70～72は高坏の脚部である。脚部が円錐形でハケとナデで整える。70の胎土は密で浅黄橙色を呈する。底径11.3cmをはかる。71の胎土は密で浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。脚部径8.6cmをはかる。

これらの土師器は壷、鉢、高坏の特徴から古墳時代前期に属すると思われる。

SX04-B（第55図・第64図・第65図）

SX04-BはQ-4グリッドに位置する。北側には大型竪穴住居跡SB07を中心に計5基の竪穴住居跡がある。さらに、北西方向にはSX04-B、SX04-Cがある。層位的にはSX04-AやSX04-Cと同一面であり、時間的な前後関係は確認できなかった。規模が東西1.5m南北2.5mの範囲に広がっている。

出土した土師器は壷(74～82)、鉢(83)、高坏(84～88)、器台(89)、甕(90～93)である。

壷は広口壷(74～76)と小型壷(81)がある。

広口壷には口縁部外面に粘土紐を貼り付けて二重口縁壷を模倣するもの(76)、頸部がほぼ垂直に立ち上がるもの(74)、口頸部が外反する長頸のもの(75)がある。文様は、74の肩部に櫛描横線文と櫛描波状文、77の肩部にヘラ描きの文様が施文される。調整は主にハケとナデで整える(74～76)。77は胴部、78～80は底部である。79・80の底部はドーナツ状を呈する。74の胎土は密で灰白色を呈する。焼成は良好である。75の胎土は密で橙色を呈する。焼成は良好である。口径13.8cm、体部径20.4cmをはかる。76は淡橙色を呈する。77はナデの後、ヘラミガキで整える。色調が淡橙色を呈する。78は底径8.4cmをはかる。焼成は良好である。淡橙色を呈する。79は底径7.8cmをはかる。焼成は良好である。80は底径7.0cmをはかる。焼成は良好である。

小型壷は直口・外反する口縁をもつもの(81・82)がある。81は体部が球形を呈する。口径9.5cm、器高14.9cmをはかる。全体的にヘラミガキが施される。橙色を呈する。82は小型壷の口縁部である。外傾・直口する口縁部をもつ。口径10.3cm、胎土は密でにぶい橙色を呈する。ハケで整える。

鉢は小型の鉢(83)がある。83は小型の鉢で明瞭な口縁部を作らない、比較的直線的な口縁部をもつ。口径10.3cm、底径4.6cm、器高4.4cmをはかる。胎土は密。浅黄橙色。内外面にハケを施す。

高坏は杯部に段をもつ有段高坏(84)、半球状の杯部をもつ椀形高坏(86)がある。この他、高坏の一部(85)と脚部(87・88)がある。84は杯部に段をもつ有段高坏で杯部は大きく外傾する。口径23.4cm。胎土は密で橙色を呈する。内外面をヘラミガキで整える。焼成は良好である。85は高坏の一部である。全体的にハケとナデ調整を施す。色調は橙色である。86は半球状の杯部をもつ椀形高坏である。口径11.0cm、脚径9.0cm、器高8.5cmをはかる。杯部口縁は横ナデ、全体的にヘラミガキを施す。87は高坏脚部で円錐形を呈する。脚底径9.7cmをはかる。ハケとヘラミガキで整える。88は高坏脚部である。脚底径9.0cm。胎土は密。にぶい橙色。焼成は良好である。ヘラミガキで整える。

器台は小型器台(89)がある。89は口径11cm未満の小型器台である。口縁部が直線的で、外反する脚部をもつ。口径4.0cm、器高3.6cmをはかる。

甕は、く字状口縁台付甕(90～92)が主体で、口縁部が大きく外傾するもの(90)、外傾・外反するもの(91)、直線的なもの(92)がある。口縁部が横ナデ、器体の内外面にハケを施すものが多い。この他、整形にタタキが施された可能性がある台付甕の脚部(93)がある。90は、く字状口縁台付甕の口縁部から胴部である。口縁部は大きく外傾し、口縁端部に明瞭な面をもつ。口径16.2cm、器高19.5cmをはかる。

第 56 図　性格不明 SX04-C 遺物出土状況

これらの土師器は壷、鉢、高坏、器台、甕の特徴から古墳時代前期に属すると思われる。

SX04-C（第56図・第66図～第70図）

SX04-CはQ-4グリッドに位置する。北側には大型竪穴住居跡SB07を中心に計5基の竪穴住居跡がある。さらに、北西側にSX04-B、南東側にSX04-Dがある。層位的にはSX04-BやSX04-Dと同一面であり、時間的な前後関係は確認できなかった。規模が東西3.0m、南北2.9mの範囲に広がっている。

出土した土師器は壷(94～110)、鉢(111～118)、高坏(119～124)、器台(125・126)、甕(127～163)である。

壷は大型の複合口縁壷(94・95)、二重口縁壷(98・99)、広口壷(100～102・104)、短頸壷(105)、直口・外反する口縁をもつ小型壷(107)がある。

大型の複合口縁壷は、口縁部の4個所に2本ずつの棒状浮文を貼付するもの(94)と沈線・円形浮文で加飾するもの(95)がある。ともに口縁屈曲部は粘土紐を貼付して表現している。94は大廓式の大型壷に類似するが胎土に白色粒子を含まない。口径21.4cmをはかる。95は大廓式に類似するが胎土に白色粒子を含まない。

二重口縁壷(98・99)は、口縁屈曲部に粘土紐を貼付して表現し、下段口縁がほぼ垂直に立ち上がる。

広口壷は口縁部が外傾する長頸のもの(100～102)が多い。100は頸部がほぼ垂直に立ち上がる。

短頸壷(105)は口縁部である。胎土やや粗いが焼成は良好である。ハケの後、ナデて整える。

直口・外反する口縁をもつ小型壷(107)は胎土が密で焼成は良好である。橙色を呈する。

球胴の小型壷胴部(108)は底部中央がやや窪む。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。

小型の広口壷(109)は口縁部が外反する。ハケとナデで整える。

鉢は大型の鉢(111・112)と小型の鉢(114～118)がある。113は整形にタタキが施された可能性がある。

大型の鉢(111)は口径が体部径より小さいもので口縁部が外傾・外反する。

小型の鉢(114)は明瞭な口縁部を形作らないもので比較的直線的なものである。

115は口縁部が体部より大きいもので口縁部が比較的大きい。

高坏は、小型椀形高坏(119)と有稜高坏(120)がある。119はハケとナデで整え、橙色を呈する。口径9.3cm、脚部径5.8cm、器高6.1cmをはかる。120の稜は粘土紐を貼付して表している。

大型の器台(125)は北陸系器台である。杯部と脚部に透かし穴がある。

甕はS字状口縁台付甕(127～133)と、く字状口縁台付甕(138～150・154～156・158・159)がある。この内、154・155・157～162は整形にタタキが施された可能性がある。

S字状口縁台付甕は、口縁部の複雑な屈曲が外方へ大きく拡張するもの(127～133)である。これらは口縁部に横ナデ、外面に羽状のハケ、内面にナデ、肩部に横位のハケがめぐるものが多い。この他、頸部外面に屈曲部を強調する沈線がめぐる(129～131)ものがある。内面は板状工具で整えるもの(129～131)、ナデで整えるもの(132)がある。127～133は口縁部～胴部、134～136は脚部である。脚部はハケと横ナデで整えている。これらの内、128～131は赤塚次郎(1990)のS字状口縁台付甕C類と思われる。

く字状口縁台付甕は口縁端部には明瞭な面はもたず、丸く調整するもの(137～141・143・145～149・154～156・158・159)と口縁部端部には明瞭な面をもつもの(142・144・150)がある。口縁部は外傾・外反するもの(137～150・154～156・159)が多い。158はやや直立気味である。これらは口縁部を横ナデ、体部外面をハケとナデで整えるもの(137～151・156)が多い。137～150・154～159は口縁部～胴部、160～162は台脚部である。

これらの土師器は壷、鉢、高坏、器台、甕の特徴から古墳時代前期に属すると思われる。

SX04-D（第55図・第71図・第72図）

SX04-DはS・R-5グリッドに位置する。北西側には大型竪穴住居跡SB07を中心に計5基の竪穴住

居跡がある。さらに、北西方向には同一汀線上にSX04-Cがある。層位的にはSX04-Cと同一面であり、時間的な前後関係は確認できなかった。規模が東西1.5m、南北2.2mの範囲に広がっている。

出土した土師器の機種構成は壷(164～170)、鉢(172～174)、器台(175)、甕(171・176～178)である。この内、壷(166)、鉢（172・173)、甕（176）は整形にタタキが施された可能性がある。

壷には二重口縁(164)、広口壷(165・168)がある。166～168は壷の胴部～底部である。

二重口縁(164)は口縁内面が内彎し、端部が垂下する。口縁部に四連の棒状浮文を垂下させ、頸部に隆帯を一条巡らす。肩部に櫛描横線文を施す。口径16.9cmをはかる。胎土は密で浅黄橙色を呈する。

広口壷(165)は口頸部が外反し、長頸のものである。口径16.6cmをはかる。胎土は密で浅黄橙色を呈する。口縁部はハケと横ナデで整える。166は頸部が直立する。

直口・外反する口頸部をもつ小型壷(169・170)は口縁部である。169は口径12.45cmをはかる。胎土は密で淡橙色を呈する。ミガキで整える。170は口径13.3cmをはかる。胎土は密でにぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。

小型の鉢(172～174)は口径が体部径より大きいもの(172)と口径が体部径より小さいもの(173・174)がある。底部は中央が窪むもの(172・173)、平底(174)がある。172と173はタタキが施された可能性がある。172は口縁部が比較的大きい。

小型の器台(175)は口縁部が屈曲して内彎し、稜をもつ。口径7.7cmをはかる。胎土は密で浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。

く字状口縁台付甕(171・176～178)は口縁部が大きく外反する。口縁端部は明瞭な面をもたず、丸く調整するもの(177)と明瞭な面をもつもの(176～178)がある。171・177・178はハケとナデで整える。176は体部から台脚までタタキが施された可能性がある。

これらの土師器は壷、鉢、器台、甕の特徴から古墳時代前期に属すると思われる。

SX04-E（第57図・第73図・第74図）

SX04-EはS-5グリッドに位置する。北東側にはSD08がある。さらに、北西方向にはSX04-Dがある。層位的にはSX04-Dと同一面であり、時間的な前後関係は確認できなかった。規模が東西1.5m、南北2.2mの範囲に広がっている。

出土した土師器の機種構成は、壷(179)、鉢(180～185)、高坏(186～188)、甕(189～195)である。

二重口縁壷(179)は下段口縁が外側に開く。口縁屈曲部は粘土紐を貼付して表現している。口径18.5cm、体部径23.35cm、底部径8.4cmをはかる。口縁部は横位の板ナデの後、横ナデ、体部はハケとナデとミガキで整える。胎土は密で橙色を呈する。

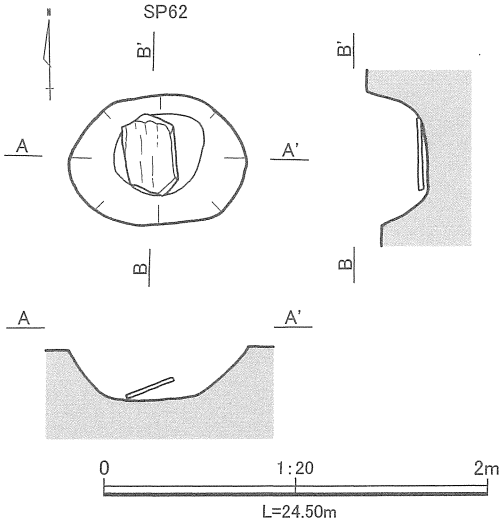
鉢は大型の鉢(180～182)と小型の鉢(183～185)がある。

大型の鉢(180～182)は口径と体部径がほぼ同じで口縁部が外傾する。口縁部は横位のハケとナデ。体部はハケとナデとミガキが観察できる。180は口径25.4cmをはかる。胎土は密である。181は口径27.0cmをはかる。一部にミガキが残る。182は口径24.0cmをはかる。口縁部は横位のナデ、体部をミガキで整える。胎土は密で浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。

小型の鉢(183・184)は明瞭な口縁部を形作らない比較的直線的なものである。183は口唇部を横ナデ、体部をハケで整える。口径11.5cm、底径4.3cm、器高5.9cmをはかる。焼成は良好である。胎土は密で橙色を呈する。184は口径9.7cm、底径4.0cm、器高4.6cmをはかる。胎土は密で焼成は良好である。灰色を呈する。185は底部である。底径3.6cmをはかる。内面に細かいハケが観察できる。

高坏は杯部に段をもつ有段高坏がある。186は杯部が大きく外傾する。斜位のハケとナデとミガキで整える。口径24.0cmをはかる。胎土は密で淡橙色を呈する。焼成は良好である。187と188は高坏脚部である。円錐形でヘラミガキが施される。187は底部径11.8cmをはかる。188は底部径13.9cmをは

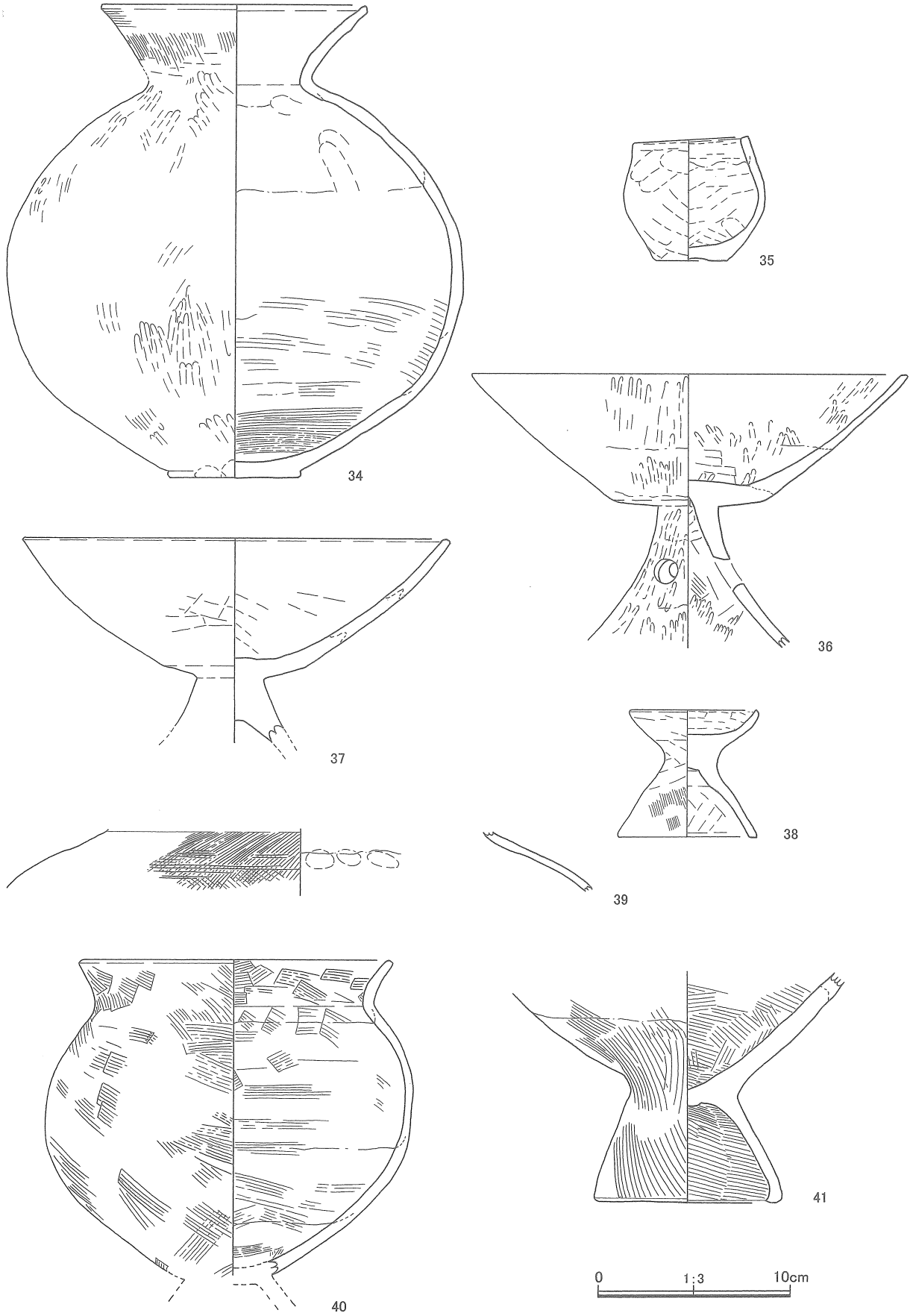
第57図　性格不明SX04-E遺物出土状況



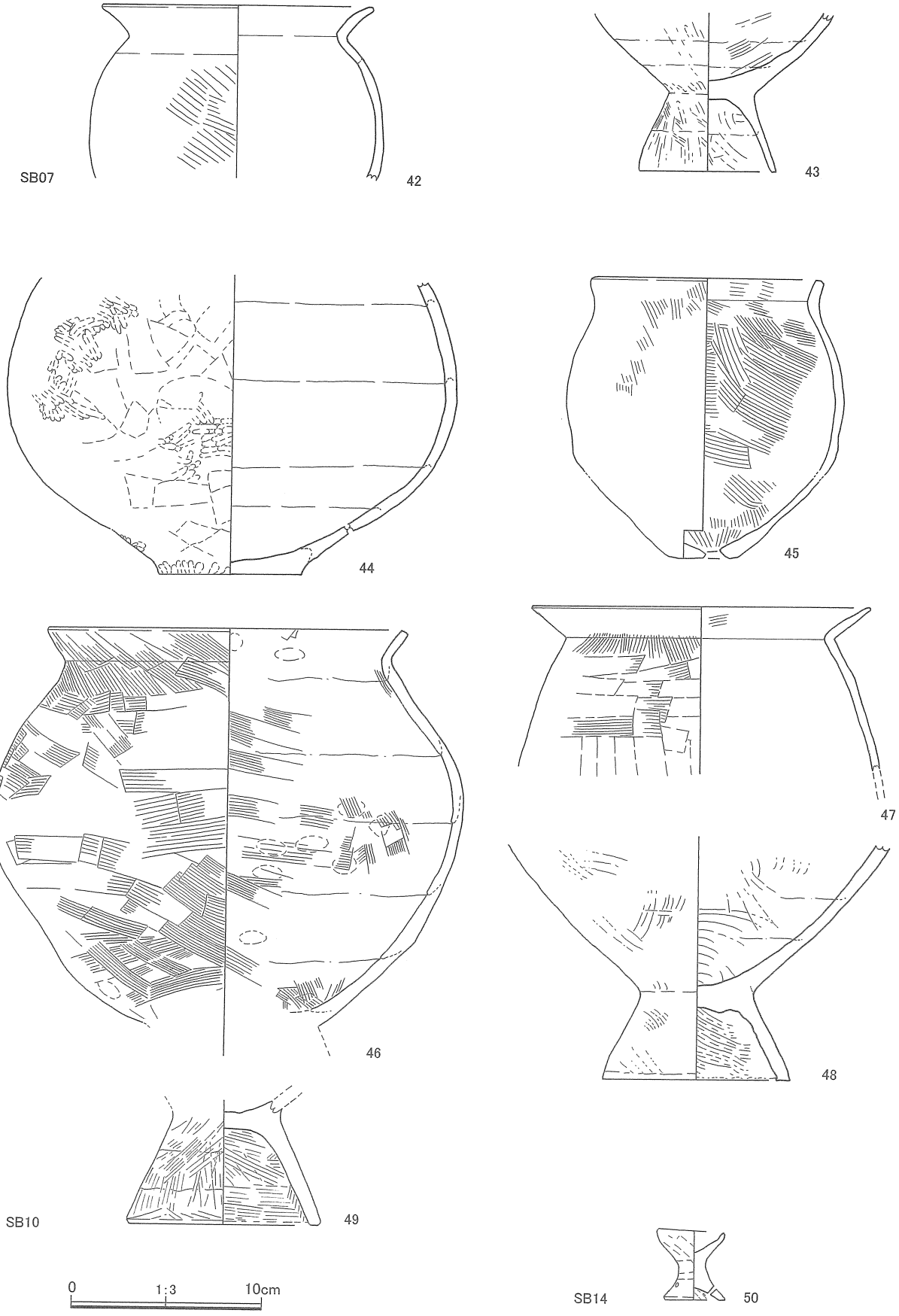
第58図　小穴SP62平面・断面図

かる。

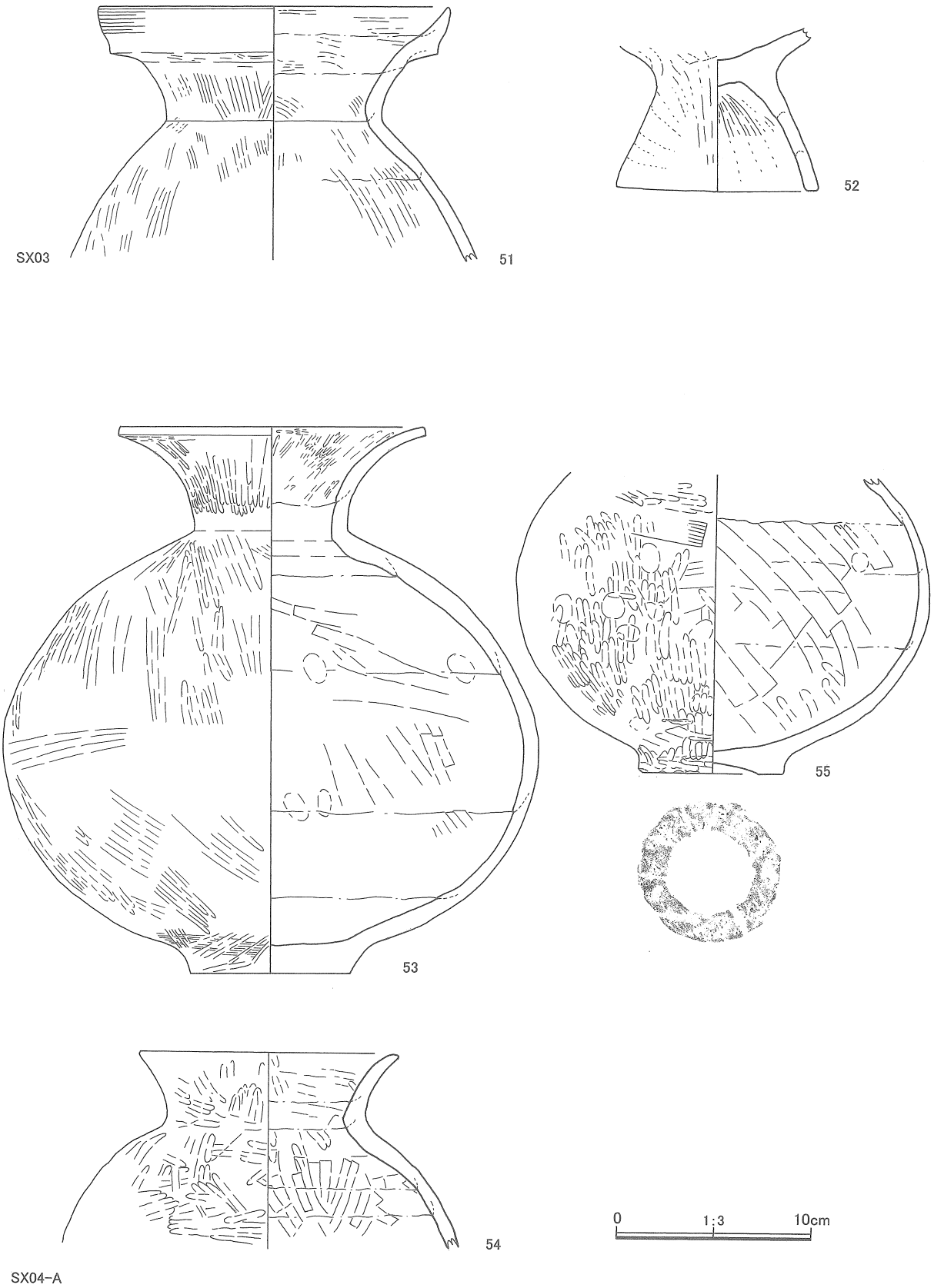
甕は、く字状口縁台付甕(189～192)がある。口縁部は大きく外反する。口縁端部には明瞭な面はもたず、丸く調整するもの(190・192)と口縁端部に明瞭な面をもつもの(189・191)がある。口縁部が横ナデ、体部をハケで整えるもの(189～192)が多い。195は整形にタタキが施された可能性がある。193～195は脚部である。189は口径19.5cm、体部径23.3cm、器高27.6cmをはかる。胎土は密でにぶい橙色を呈する。190は口径20.1cm、体部径21.1cmをはかる。胎土は密で灰色を呈する。焼成は良好である。191は口径16.5cm、体部径23.0cmをはかる。胎土は密で灰白色を呈する。焼成は良好である。192は口径19.8cm、体部径18.7cmをはかる。胎土は密で淡橙



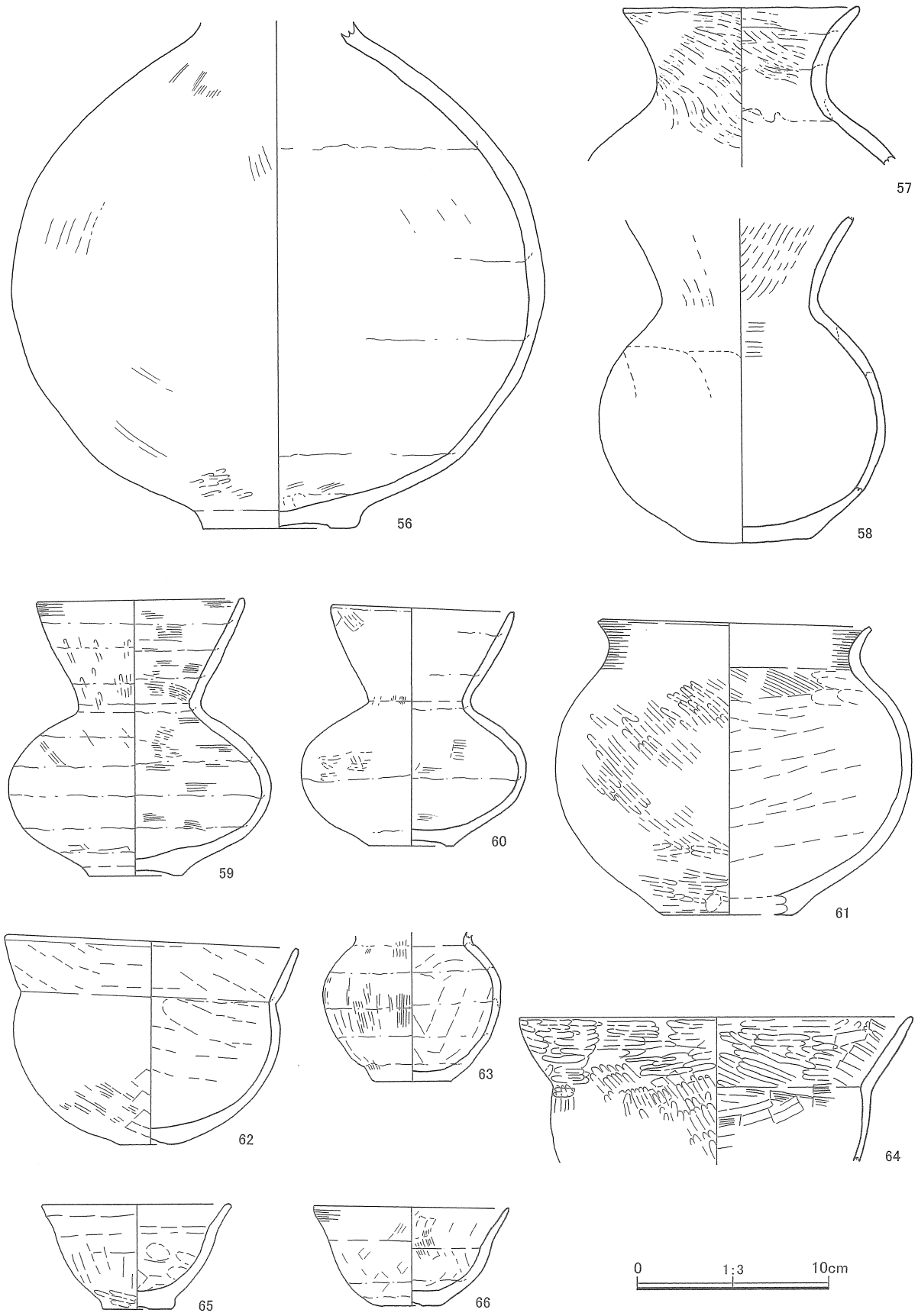
第 59 図　竪穴住居 SB07 出土遺物実測図



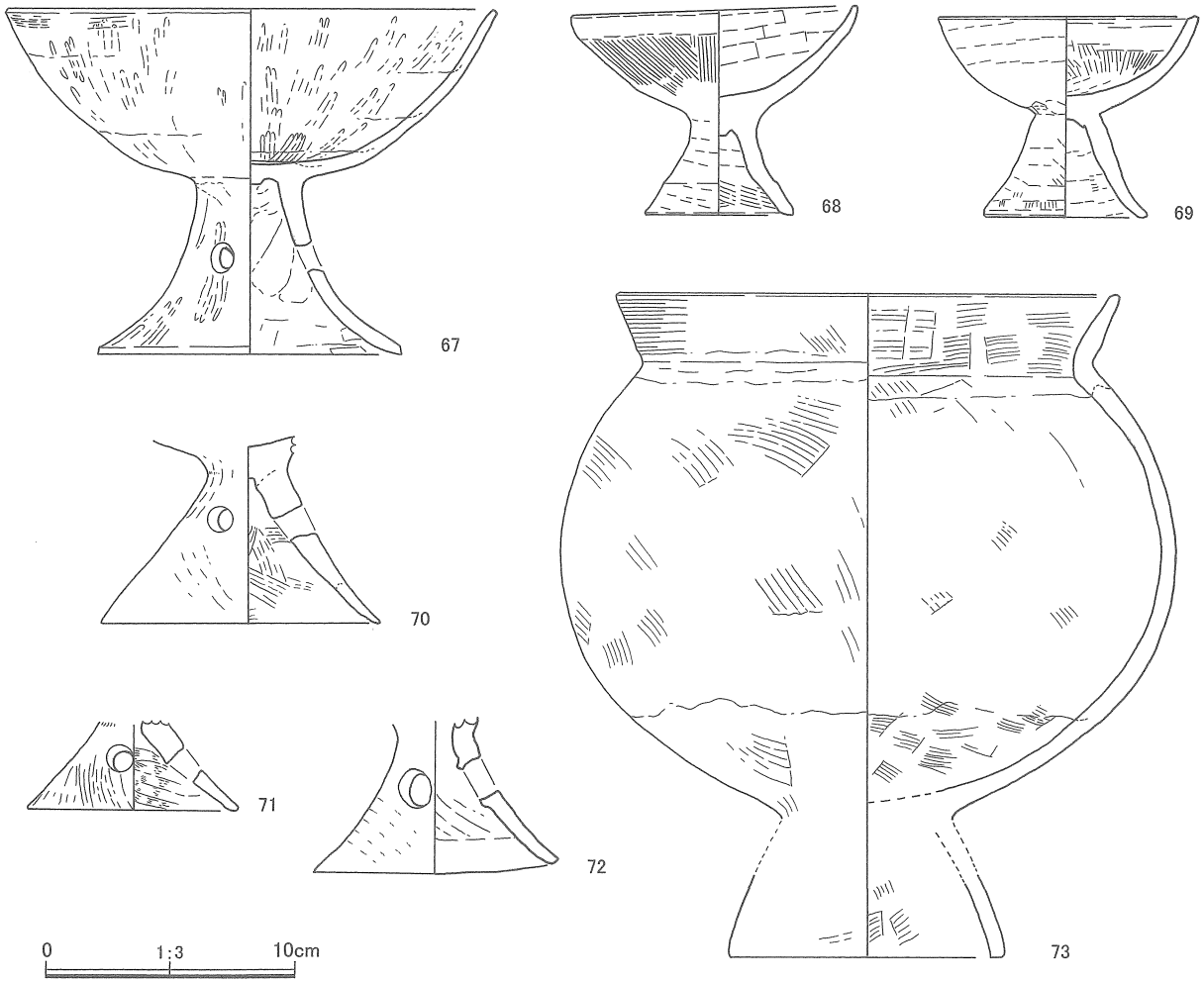
第60図　竪穴住居SB07・10・14出土遺物実測図



第61図　性格不明SX03・04-A出土遺物実測図



第 62 図　性格不明 SX04-A 出土遺物実測図 1



第63図　性格不明SX04-A出土遺物実測図2

色を呈する。焼成は良好である。193は底部径9.9cmをはかる。胎土は密でにぶい黄橙色を呈する。194は底部径9.9cmをはかる。胎土は密で灰白色を呈する。195は底部径10.95cmをはかる。胎土は密でにぶい黄橙色を呈する。

これらの土師器は壷、鉢、高坏、甕の特徴から古墳時代前期に属すると思われる。

遺構外遺物（第75図～第83図）

弥生時代

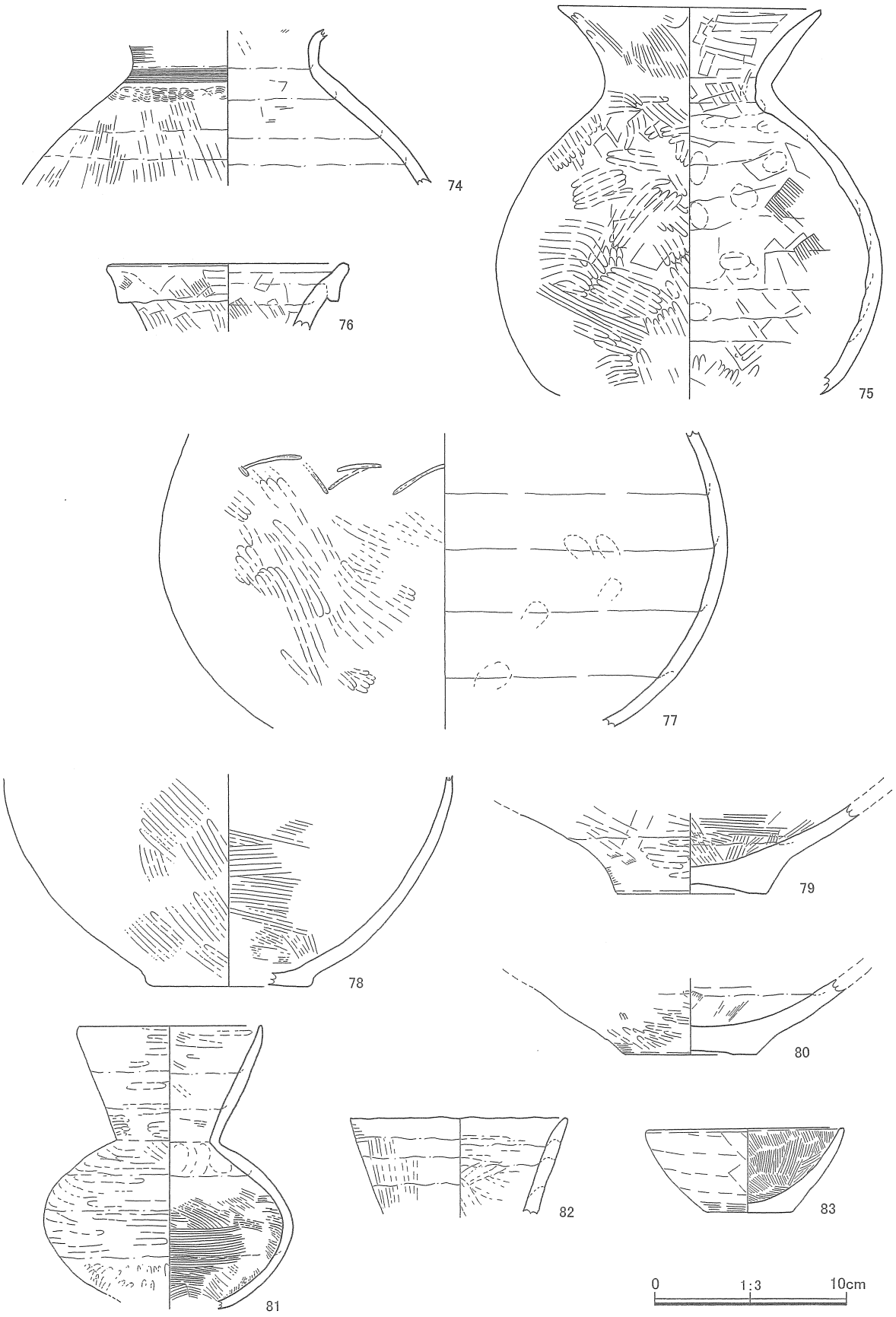
弥生時代の土器は2点出土した。196はQ-4グリッドで出土した。弥生時代の壷口縁部である。口径は19.0cmをはかる。口縁は折返口縁で内面に細かい縄文を施し、外面には棒状浮文を貼り付ける。弥生後期前半と思われる。197はQ-4グリッドで出土した。弥生時代の壷口縁部である。口径は16.6cm。口縁は折返口縁である。ナデとミガキが施される。弥生後期前半と思われる。

古墳時代

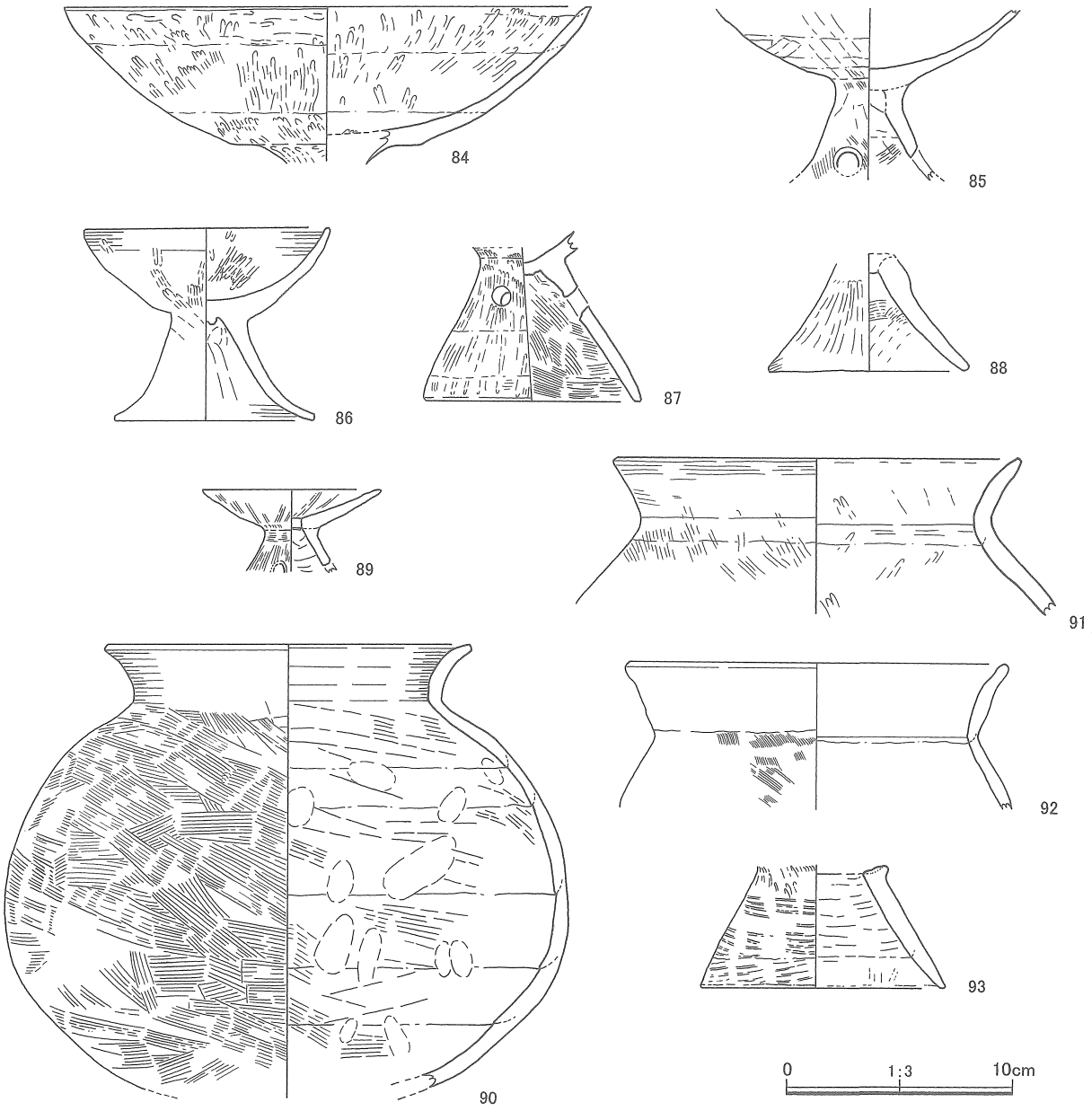
古墳時代の出土した土師器は壷(198～224)、鉢(225～242)、高坏(243～263)、器台(264～266)、甕(267～303)である。

壷は二重口縁壷(198～203)、広口壷(205～210・212～215・219・224)、直口・外反する口縁の小型壷(220・221)、短頸の瓢壷(222・223)がある。

二重口縁壷(198～203)は、下段口縁が垂直に立ち上がるもの(198～201)、下段口縁が外側に傾くもの



第 64 図　性格不明 SX04-B 出土遺物実測図 1



第65図　性格不明SX04-B出土遺物実測図2

(202・203)がある。口縁屈曲部は粘土紐を貼付して表現するもの(199～203)が大半を占める。施文は少なく、僅かに円形浮文を貼付するもの(198)と壷肩部に櫛描波状文を施すもの(204)がある。

広口壷は口縁部が外反し長頸のもの(205～213)、口頸部が緩やかに外反するもの(214・215)、内彎する口頸部をもつもの(219)がある。205と206の底部は中央が窪むドーナツ状の底部となっている。この他に口縁部胴部(207)、壷胴部(211・216～218)、小型な広口壷の口縁部(224)がある。

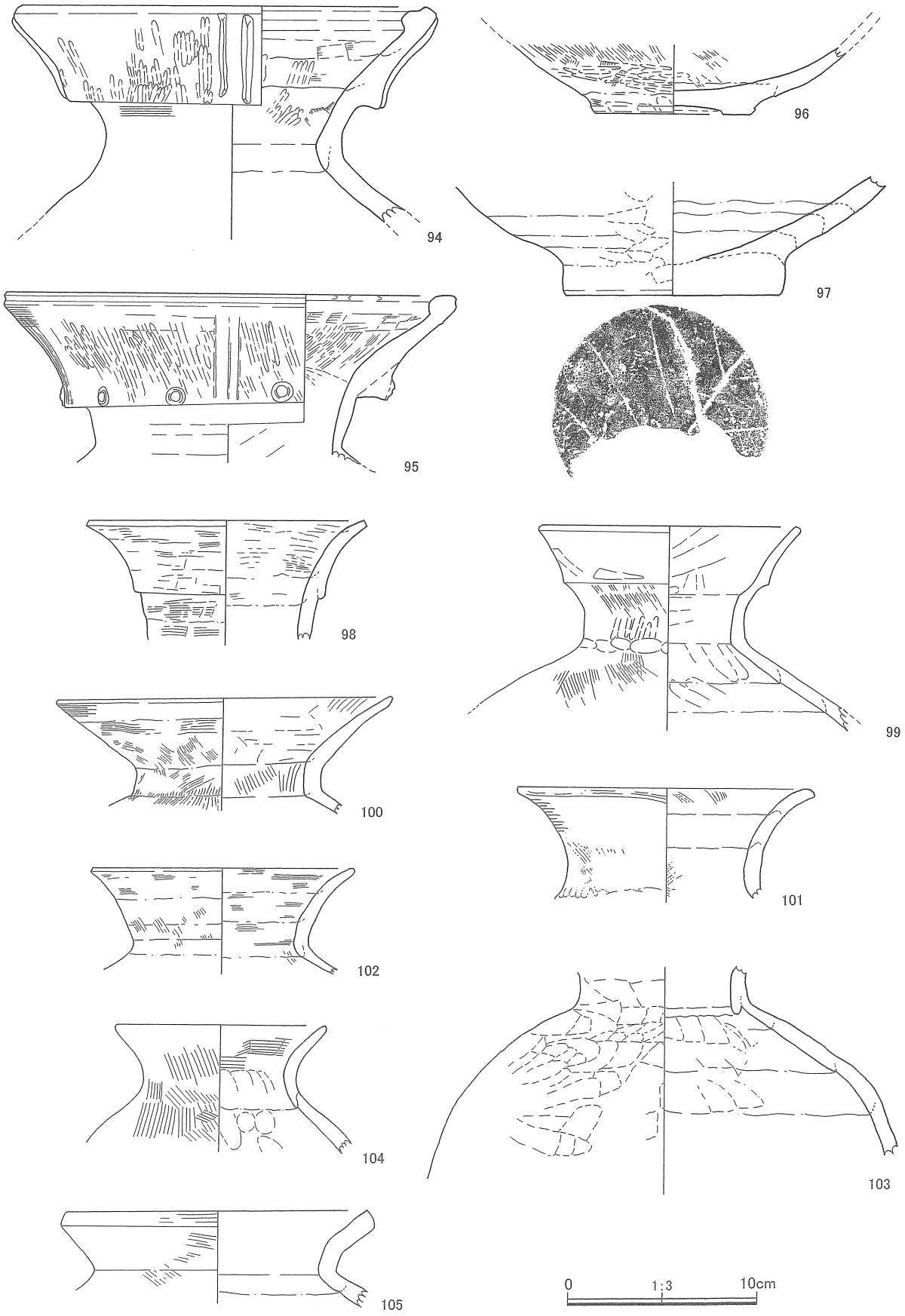
直口・外反する口縁の小型壷は221が口縁部、220は器形から推定したもので、瓢壷の可能性もある。

短頸の瓢壷223は、体部が口頸部に比べて大きい。223は瓢壷の体部である。

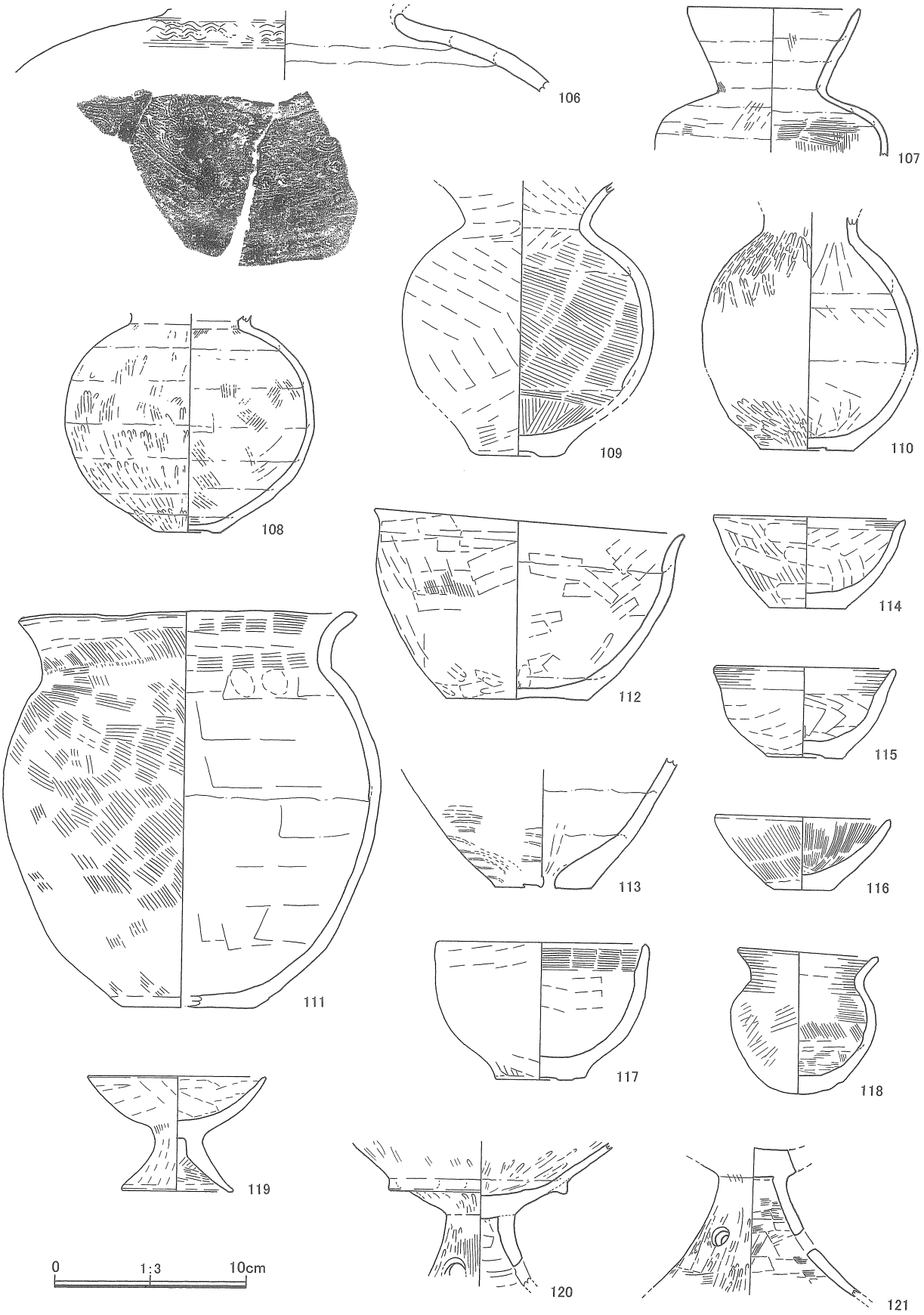
鉢は中型の鉢(225～227)、小型の鉢(228～241)、小型平底土器(242)がある。

中型の鉢は、口径より体部径が大きい(225～227)。225・227は明確な口縁部をもつ。226は中型の有孔鉢である。

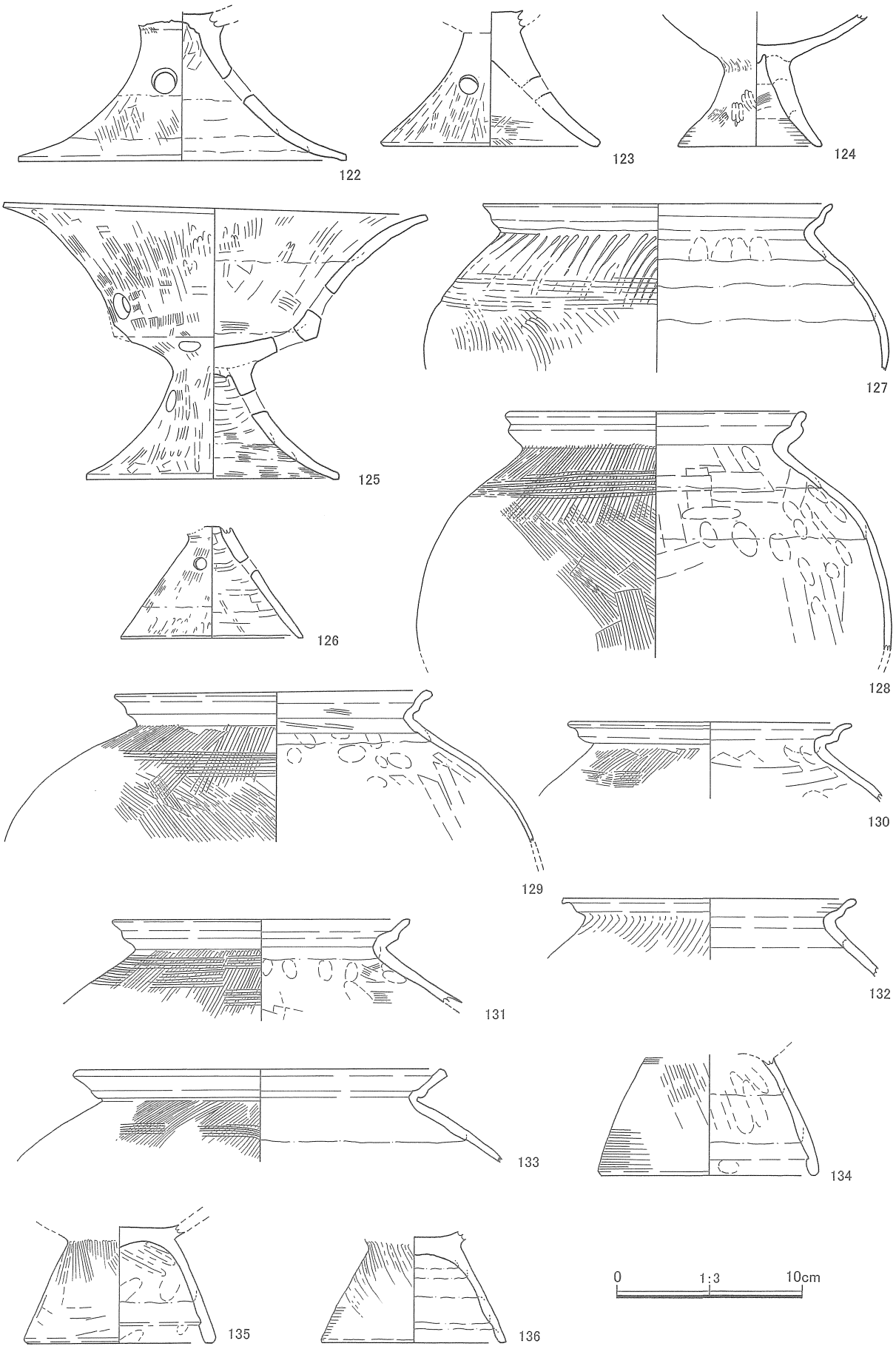
小型の鉢は、明確な口縁部を作るもの(229)もあるが、明確な口縁を作らないもの(228・230～236・



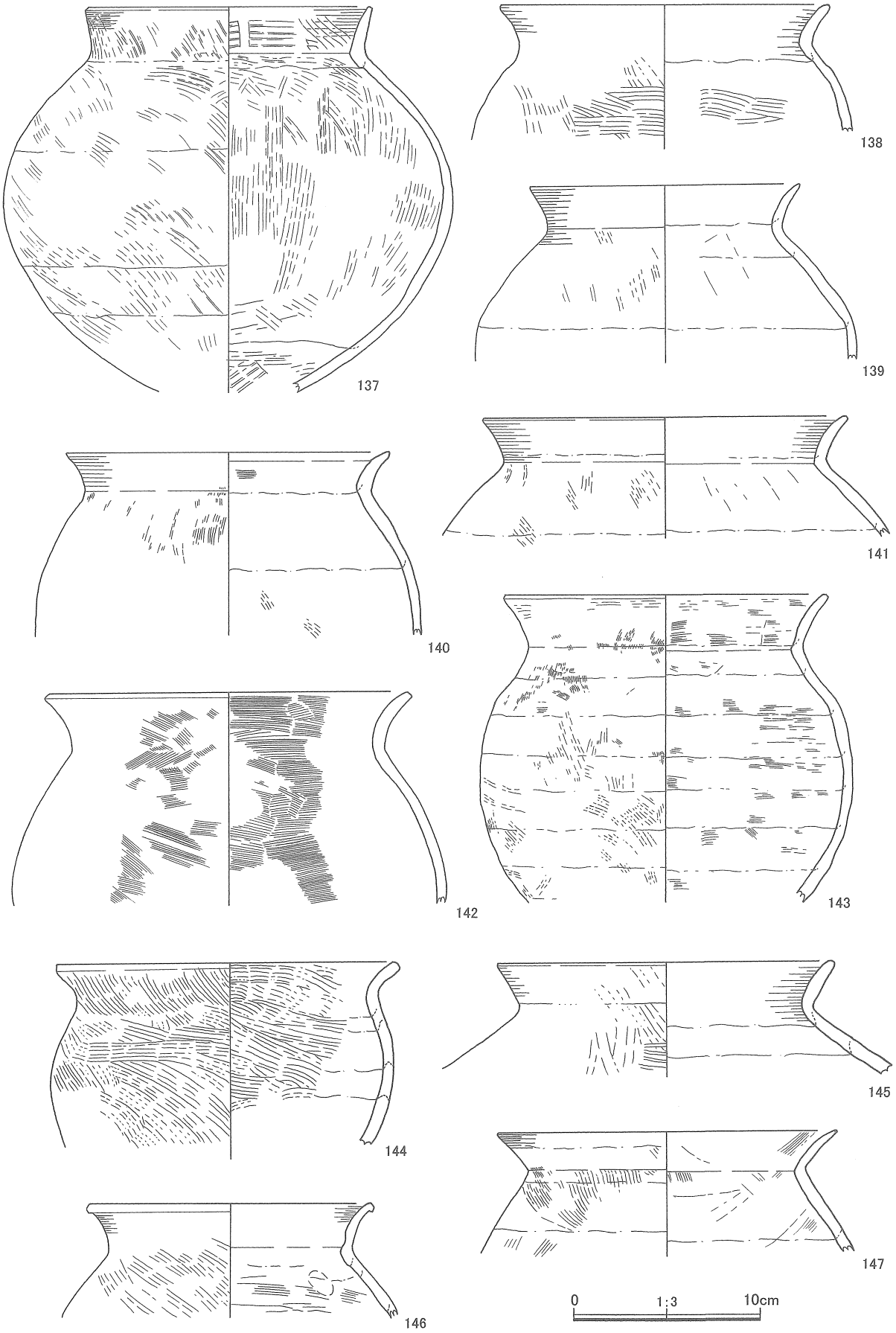
第 66 図　性格不明 SX04-C 出土遺物実測図 1



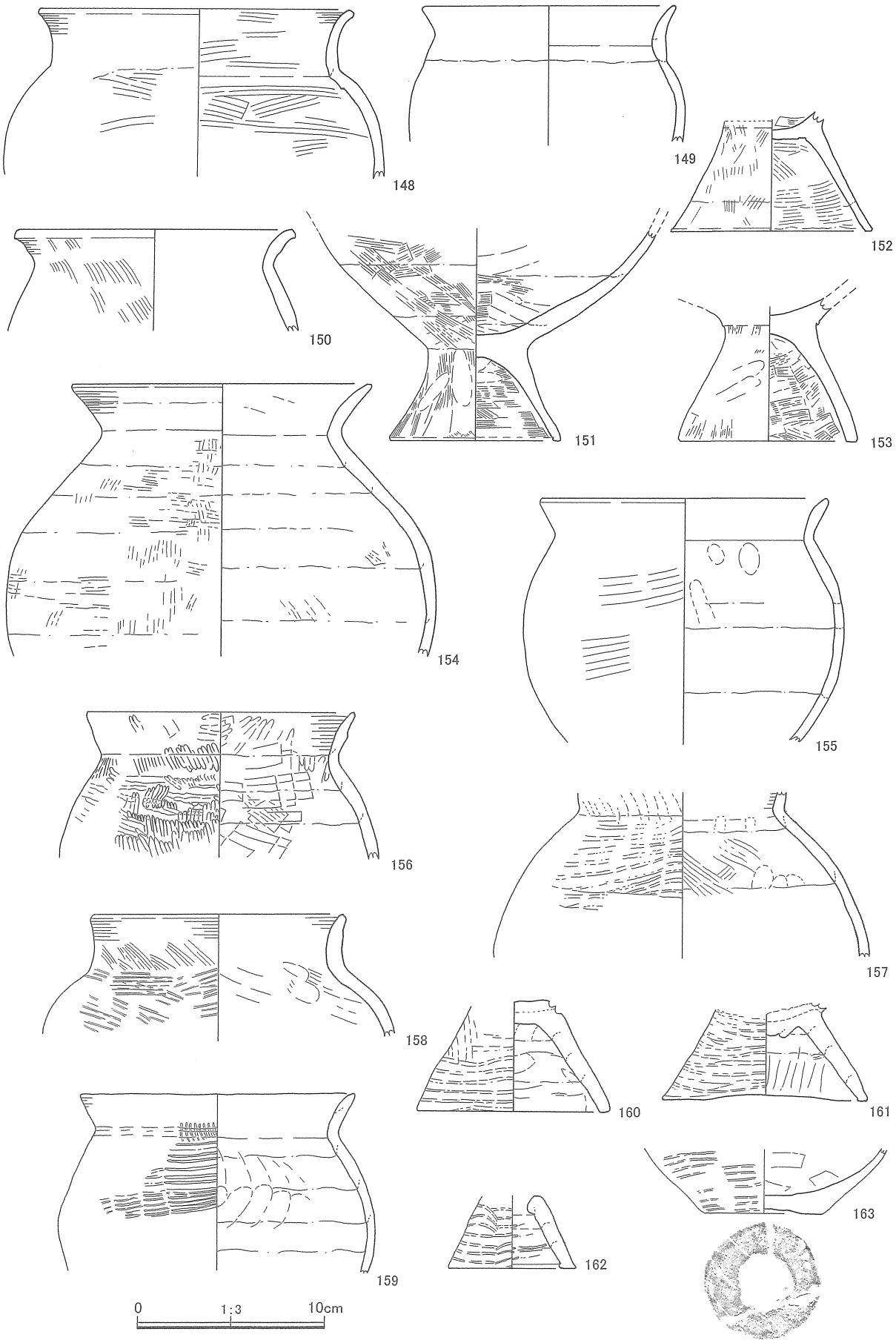
第67図　性格不明SX04-C出土遺物実測図2



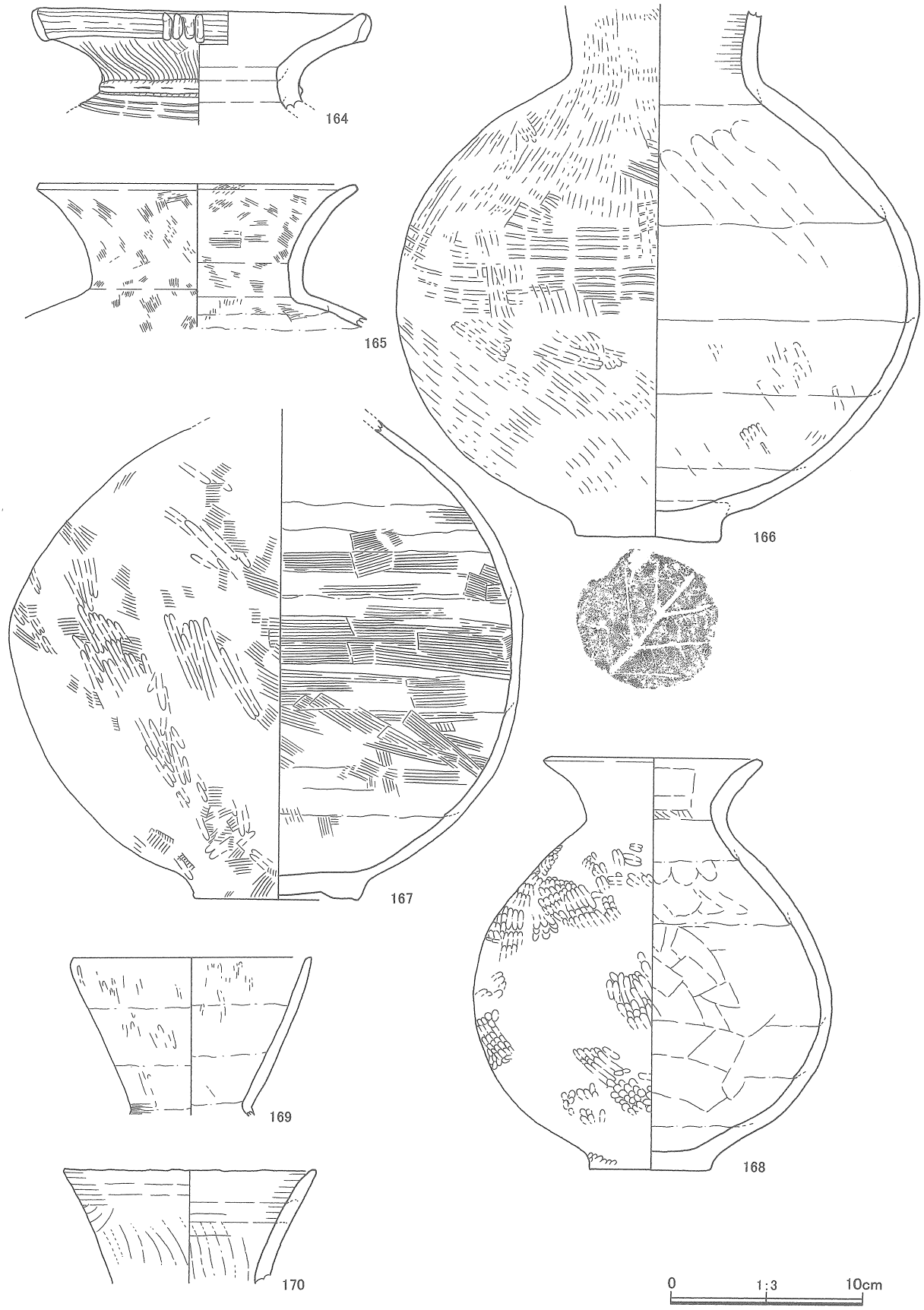
第 68 図　性格不明 SX04-C 出土遺物実測図 3



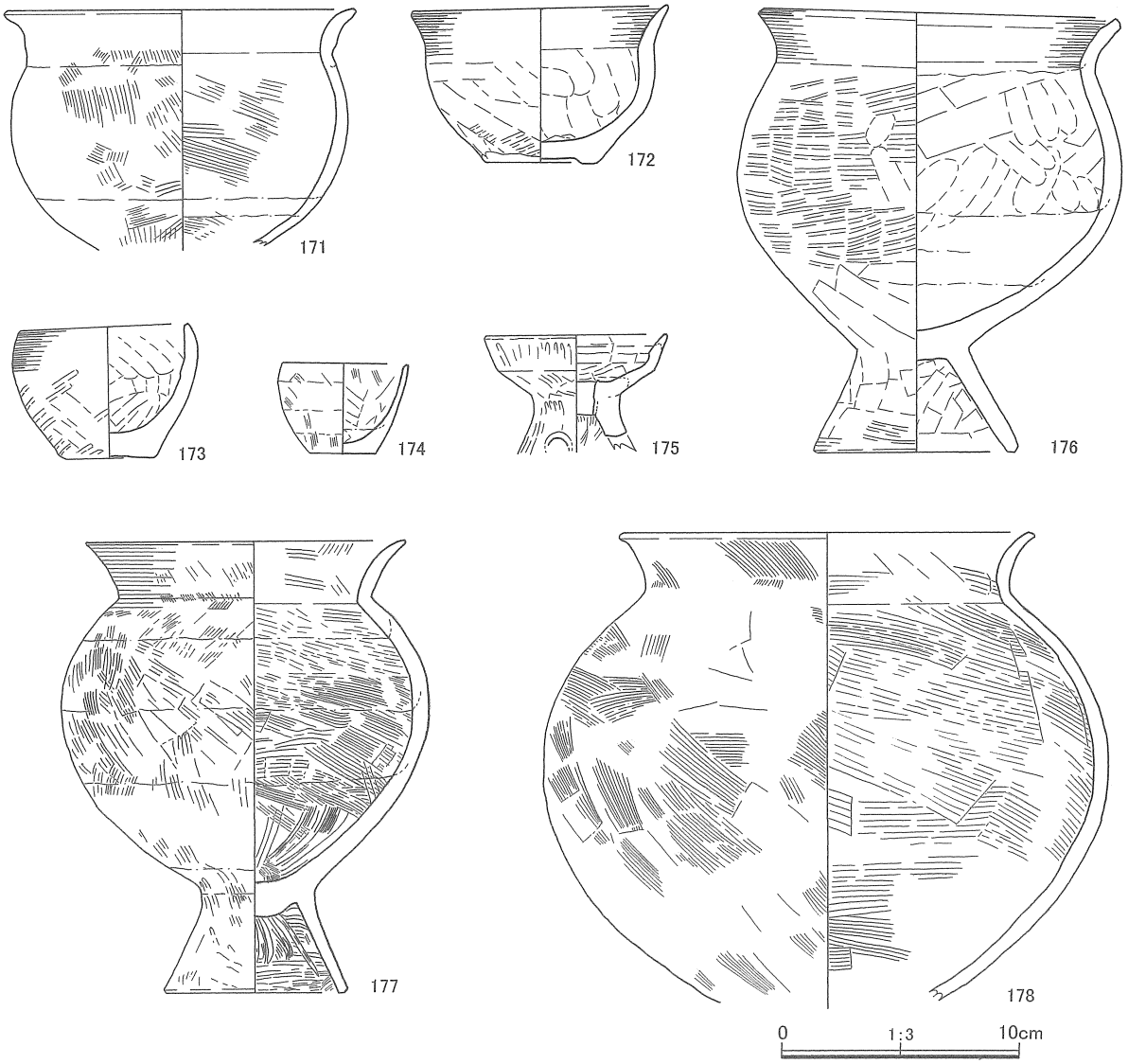
第69図　性格不明SX04-C出土遺物実測図4



第 70 図　性格不明 SX04-C 出土遺物実測図５



第 71 図　性格不明 SX04-D 出土遺物実測図 1



第72図　性格不明SX04-D出土遺物実測図2

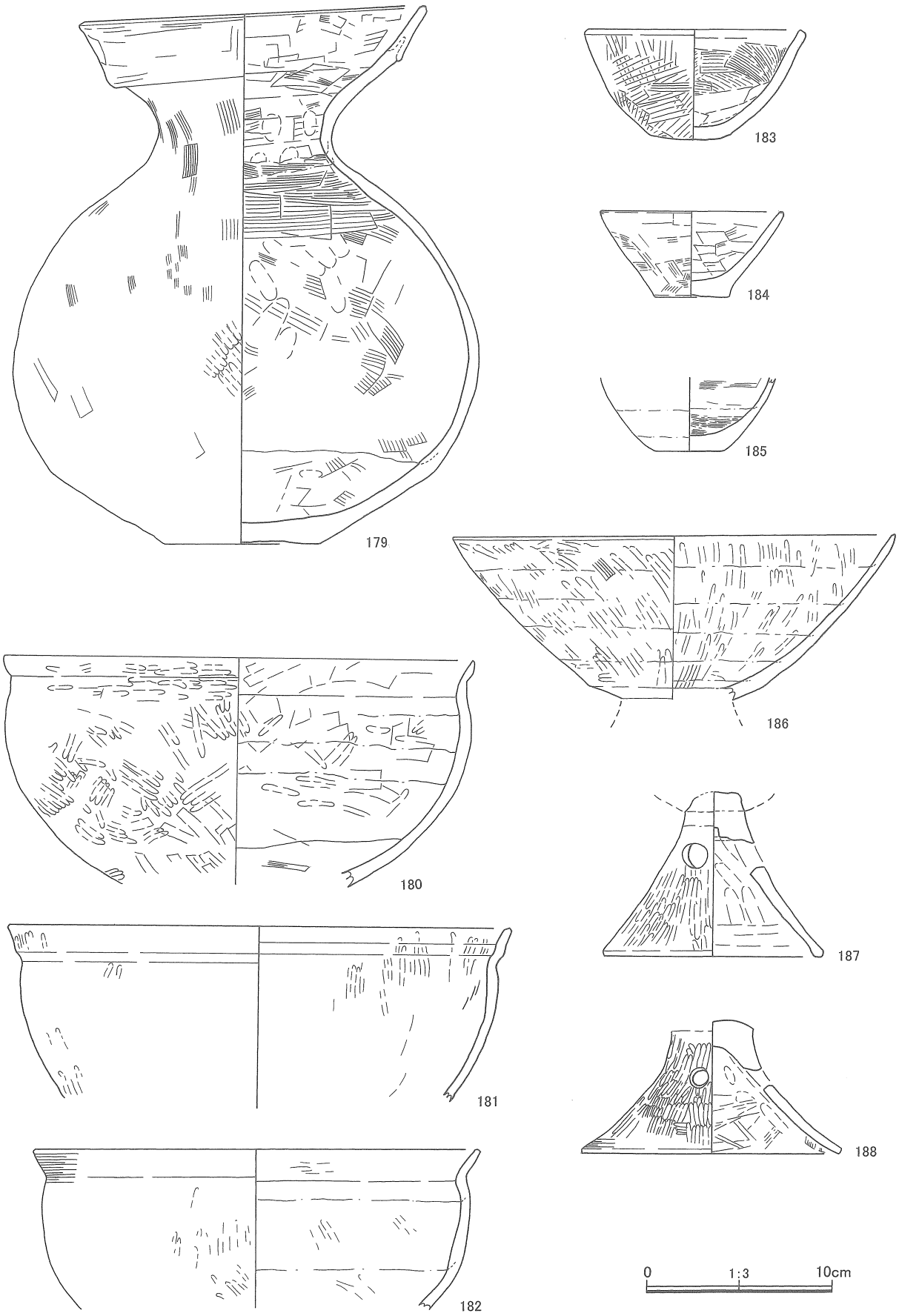
241)で比較的直線的なもの(231～235)が多い。口径は体部径より大きいもの(228～235)と口径が体部より小さいもの(236～239)がある。235は手捏ねで整形する。236は明確な口縁を形作らないで大きく内彎する。237～239は体部が内彎する。240・241は口縁がやや外彎する。242は小型平底土器。口縁は直線的に立ち上がる。

高坏は大型の高坏(243)と半球状の杯部をもつ椀形高坏(245・246)、小型椀形高坏(247～253)がある。243は杯部が大きく外傾する。244は内彎杯と内彎脚をもつ高坏である。接合部は半球状の杯部をもつ椀形杯に近い。半球状の杯部をもつ椀形高坏は脚部が大きく外反するもの(245)と脚部が円錐形のもの(246)がある。小型椀形高坏は15cm以下の小型のもの(249～253)が多い。

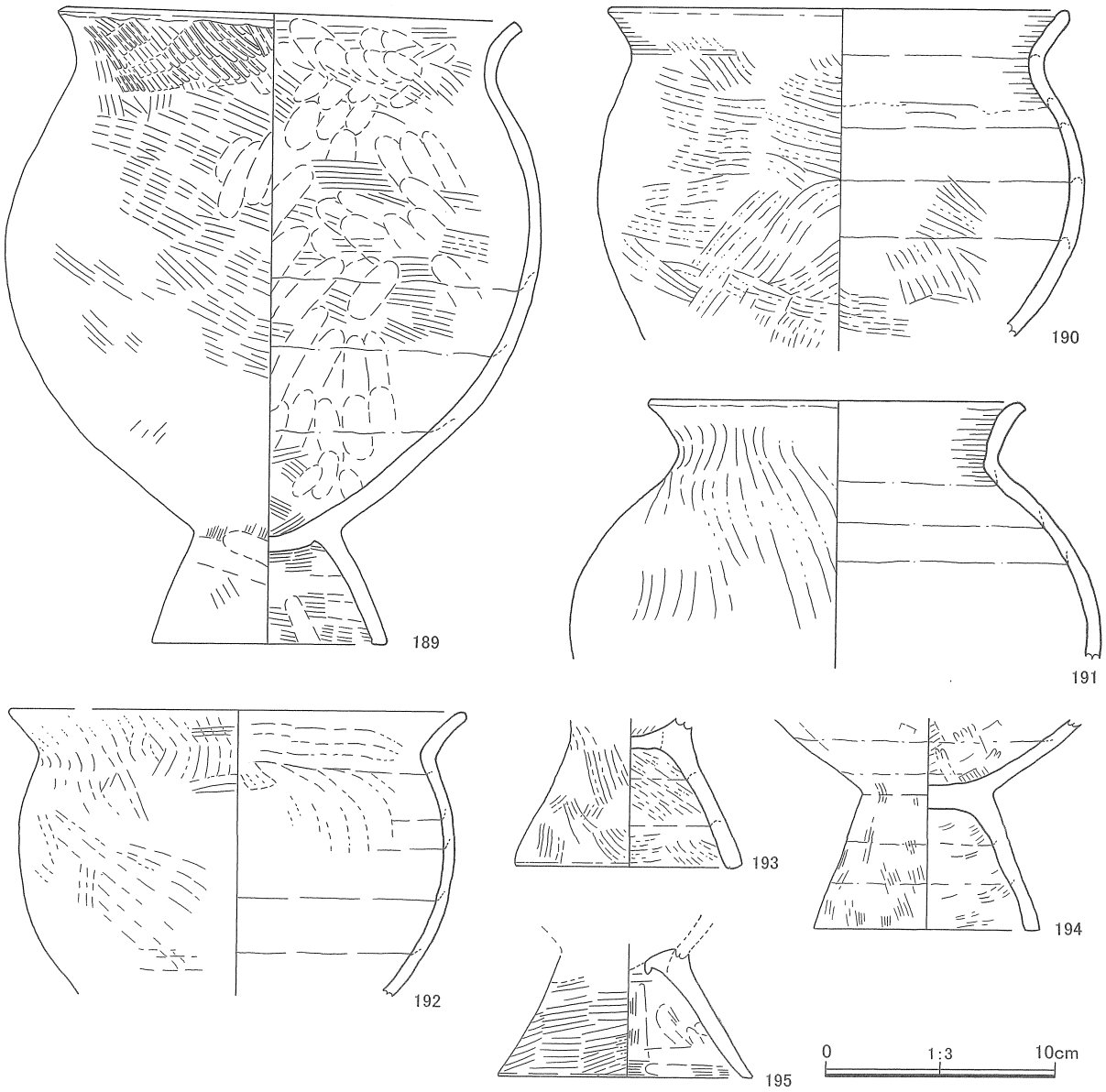
247は小型椀形高坏である。248は小型椀形高坏の脚部である。脚部は円錐形(254～259・261～263)が多い。260は高坏脚部である。

器台は口径11cm以上の中型のもの(264)と口径11cm未満の小型器台(265・266)がある。265は外反する有稜口縁をもつ。266は、内彎する口縁部をもつ。

甕はS字状口縁台付甕(267・268)と、く字状口縁台付甕(269～282)がある。



第 73 図　性格不明 SX04-E 出土遺物実測図 1



第74図　性格不明SX04-E出土遺物実測図2

S字状口縁台付甕は口縁部の複雑な屈曲が外方へ大きく拡張する(267・268)。

く字状口縁台付甕は、口縁部が外傾・外反し、口縁端部には明瞭な面はもたず、丸く調整するもの(269～273・276～280・282)と口縁部が大きく外反し、口縁端部に明瞭な面をもつもの(275・281)がある。283と284は端部を内側に折り曲げており、S字状口縁台付甕脚部と思われる。285～294は、く字状口縁台付甕の台脚部と思われる。295～297は小型のく字状口縁甕台付甕である。口縁部は外彎しながら外傾するもの(295・297)と直線的に外傾するもの(296)がある。298～303は台付甕脚部である。

これらの土師器は壷、鉢、高坏、器台、甕の特徴から古墳時代前期に属すると思われる。

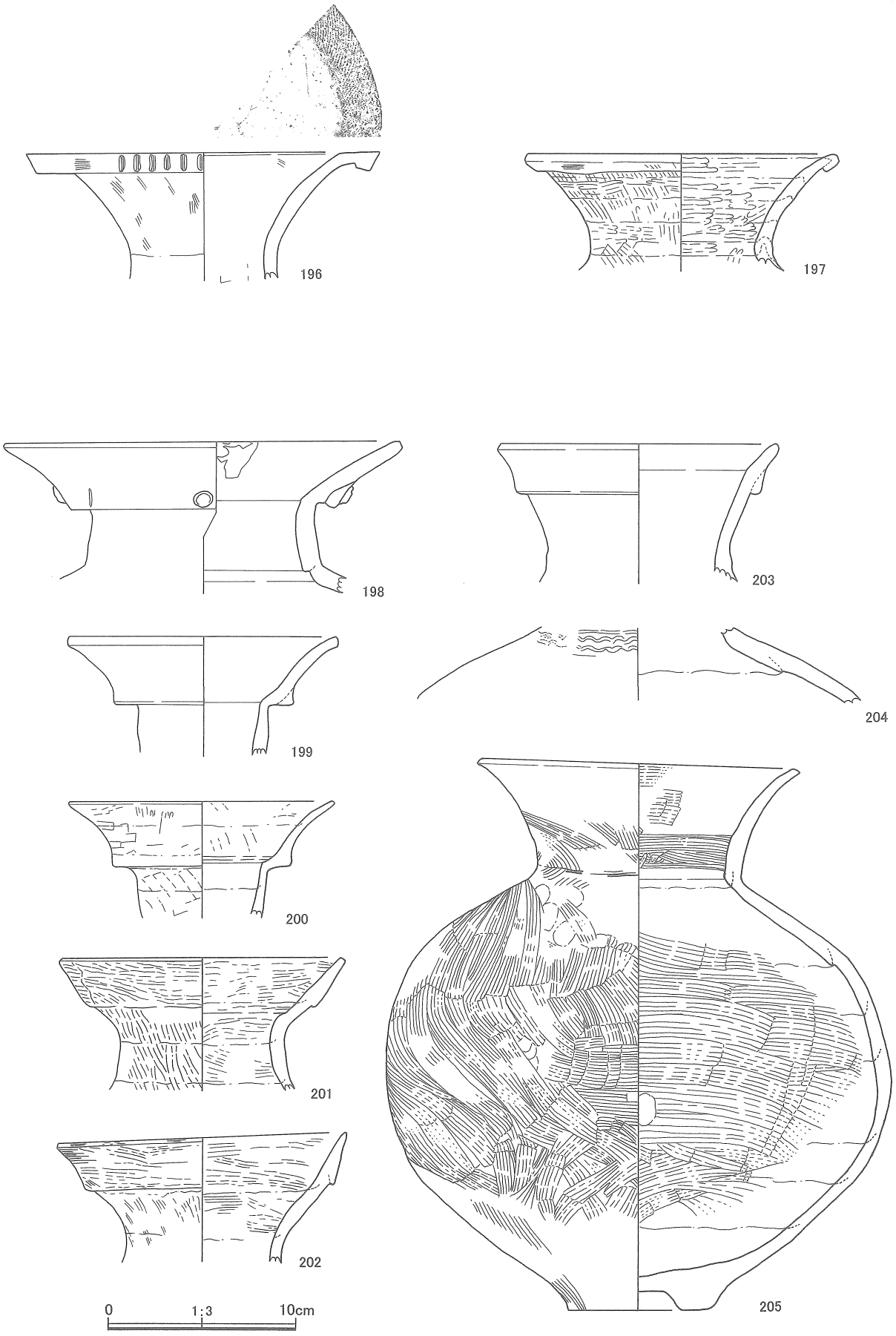
304は平底の内彎する杯である。古墳時代中期以降のものと思われる。

木製品（第84図～第87図）

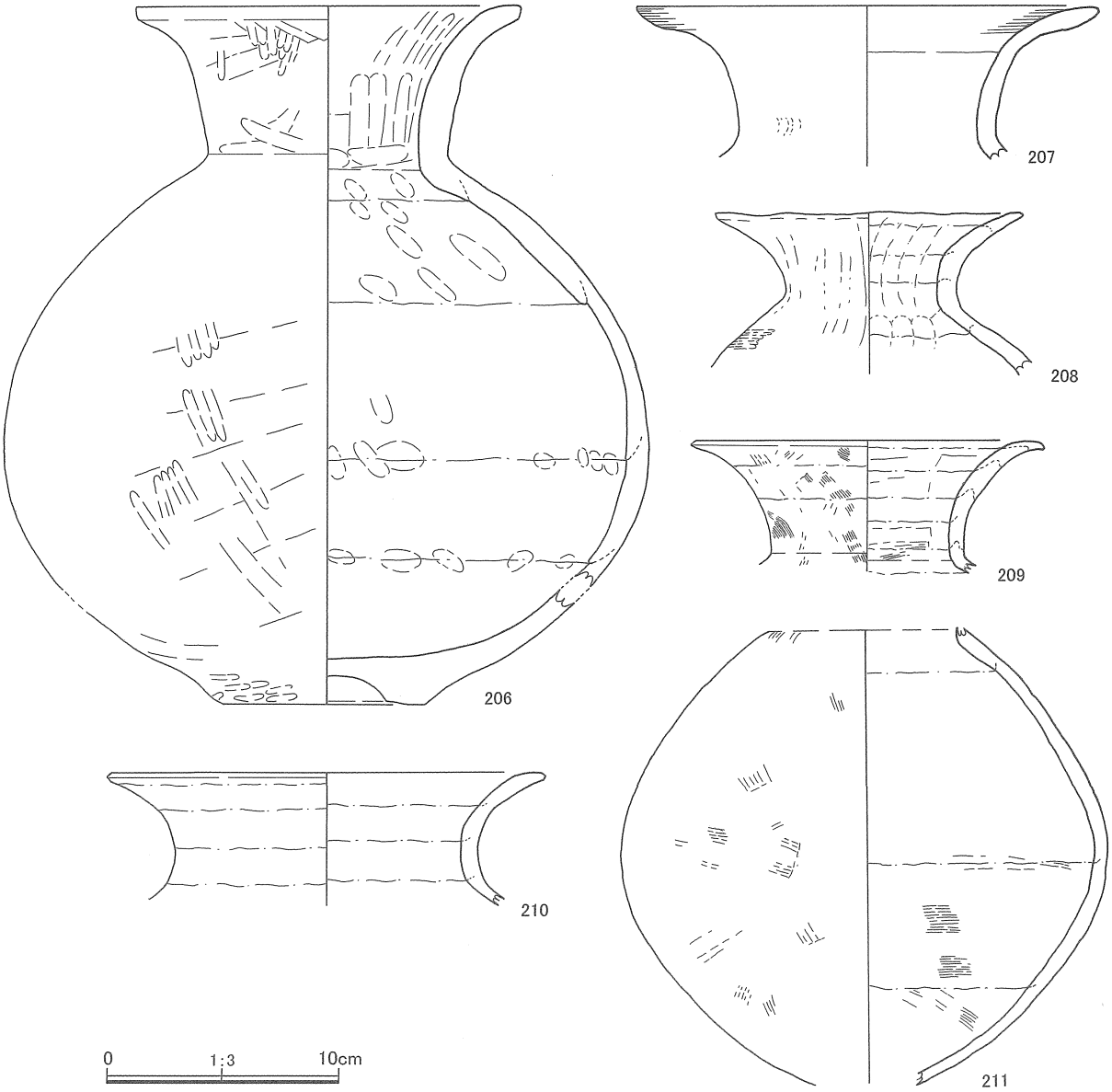
木製品は鋤(306)、礎板(321・322)がある。

鋤(306)は、柄の把手である。G-4グリッドで出土した。左側を欠損しているが、逆三角形の把手と思われる。角を面取りして丸く整えている。

礎板320はSB07の柱穴から出土した。長さ42.5cm、幅28.5cm、厚さ5.0cmをはかる。木取りは板



第 75 図　遺構外出土土器実測図 1



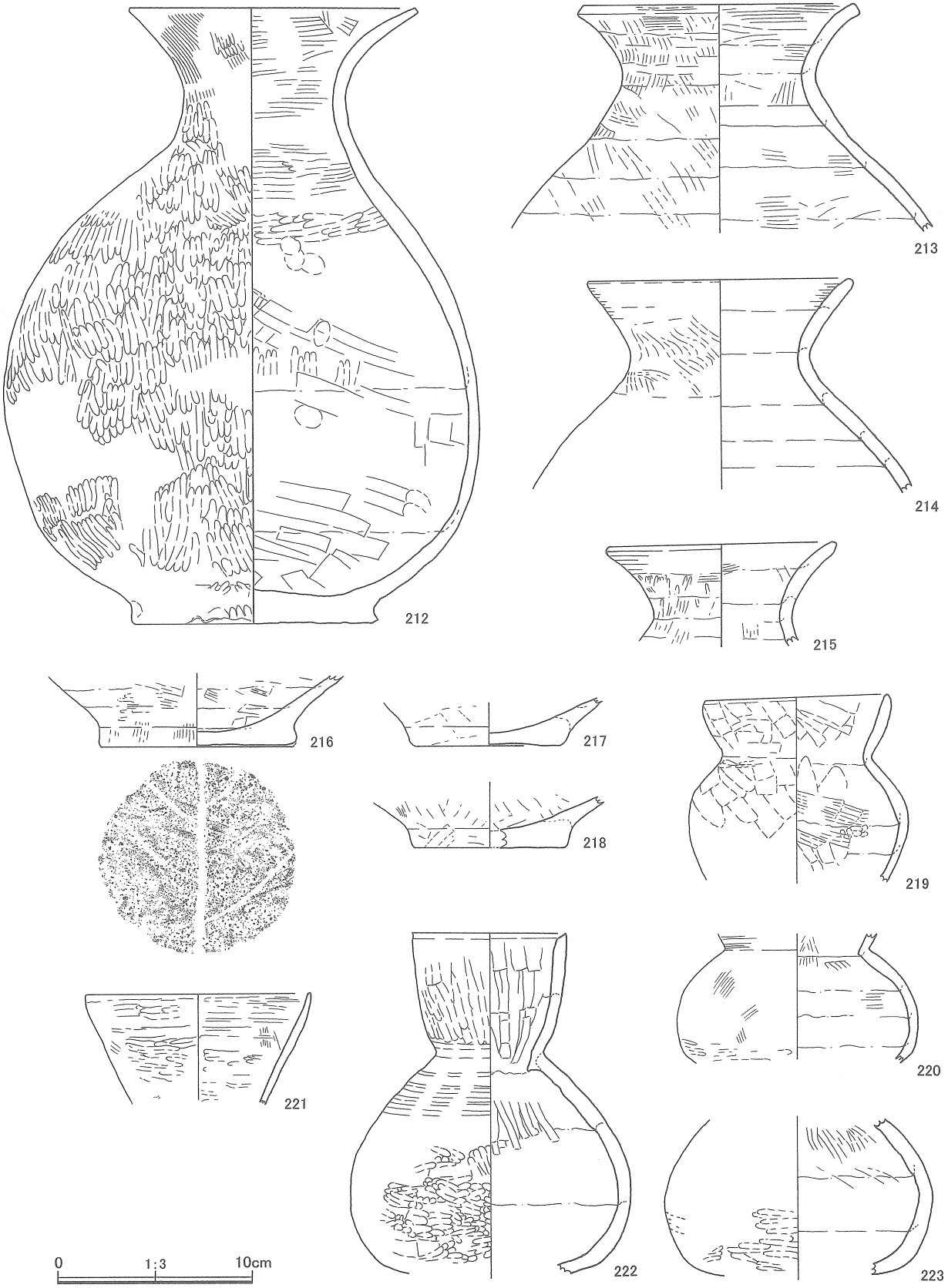
第76図　遺構外出土土器実測図2

目である。2つに割れて出土した。上端と下端は切断面で表面と裏面側から刃を入れて切断している。上端部はV字形、下端は直角に刃を入れる。両側面と裏面に加工痕が残る。表面の中央より上は削り取られている。

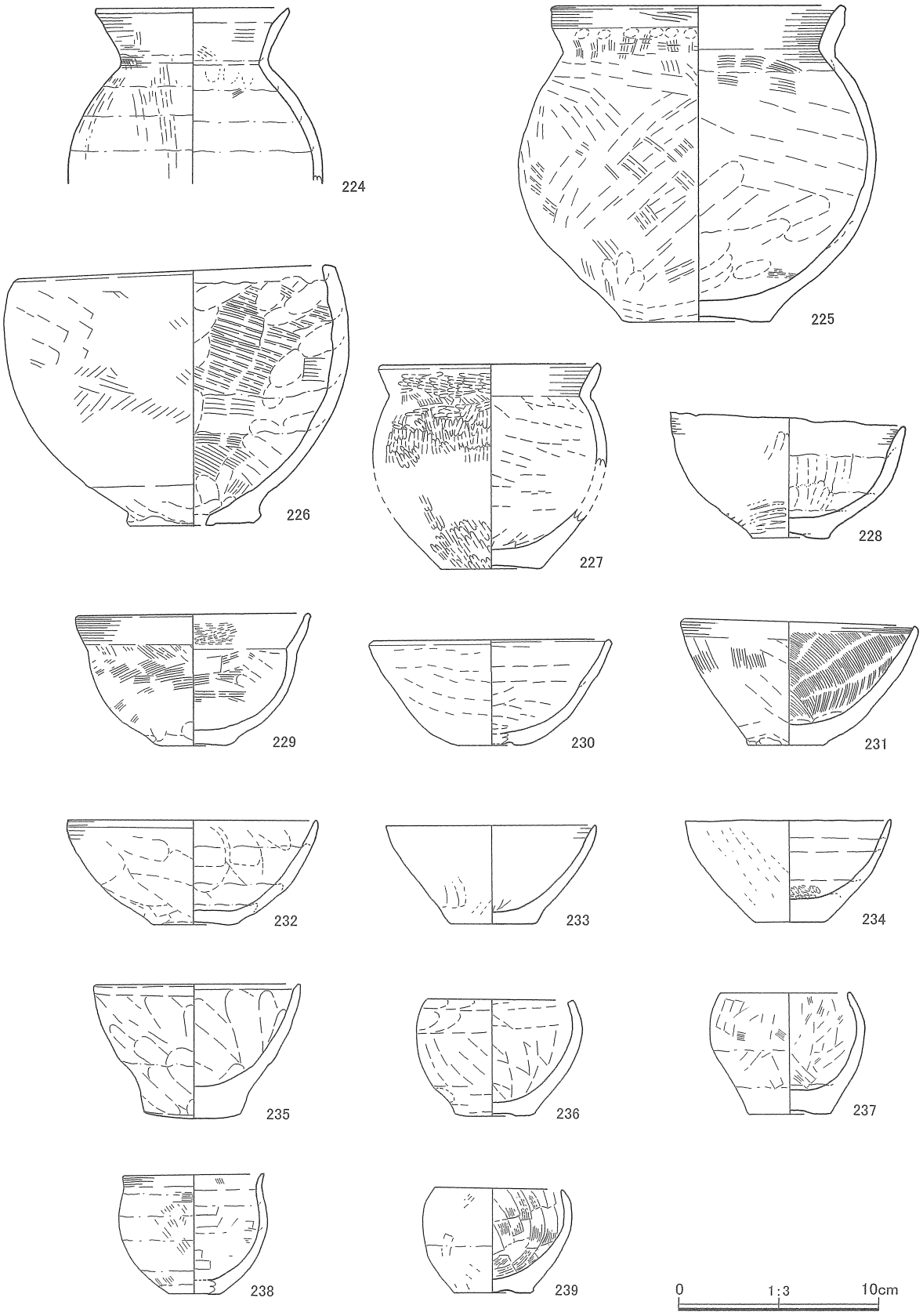
321は確認調査時にTP9で出土した。長さ18.1cm、幅16.1cm、厚さ3.9cmをはかる。木取りは板目で上下端部を切断している。中央に長さ10.1cm、幅11.8cm、深さ約0.4cmの圧痕が残る。322はC区のSP62から出土した。長さ20.7cm、幅14.6cm、厚さ3.2cmをはかる。木取りは板目である。上下端を切断している。左側縁・表面・裏面に加工痕が残る。中央に14.4cm、9.6cm、深さ約0.3cmの圧痕が観察できる。

その他の出土遺物（第88図）

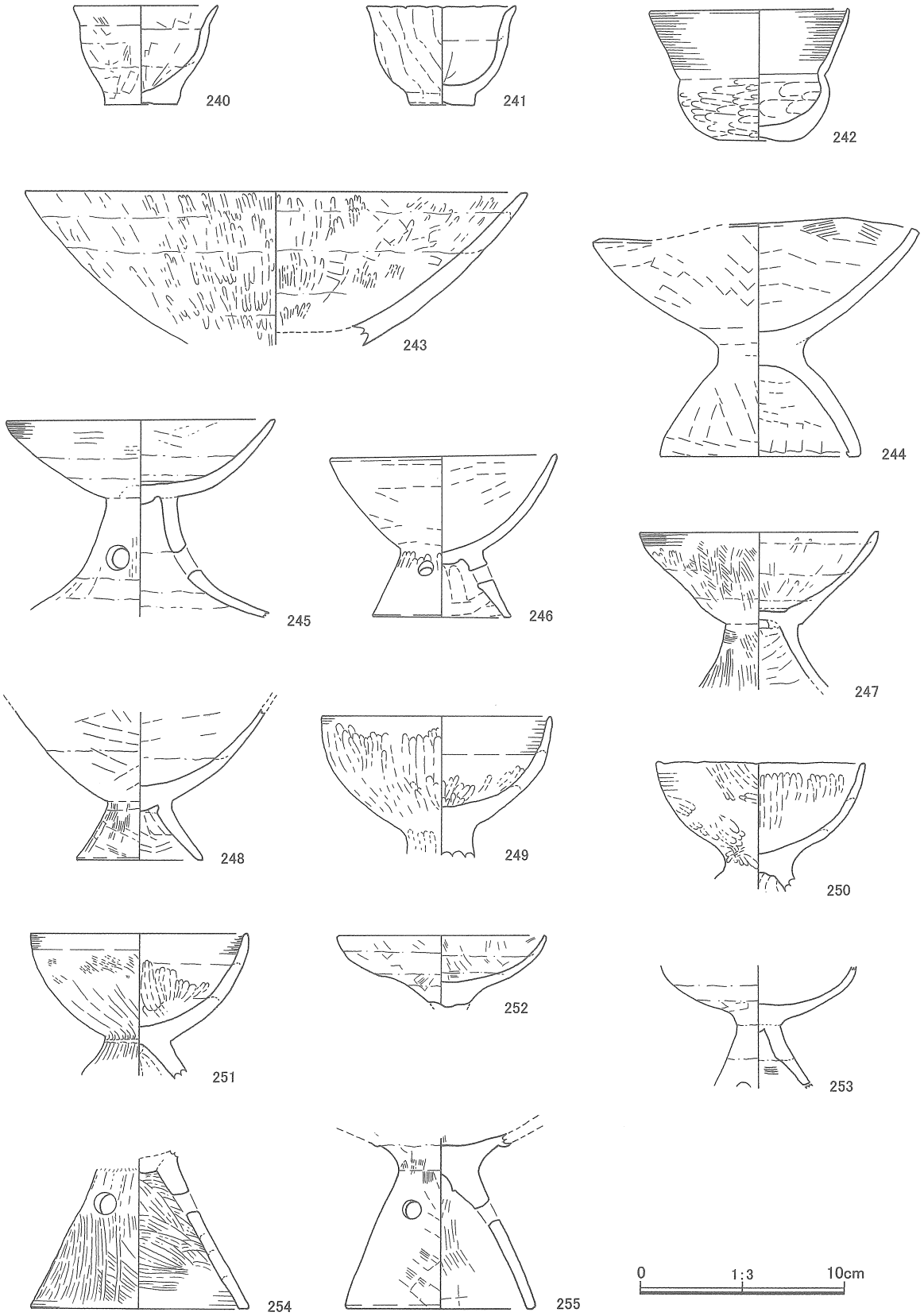
323は石鏃の特殊形で飛行機鏃と呼称され、縄文時代晩期に帰属するとされる。324は短冊形の打製石斧である。円礫の表皮付き剥片を素材とし、調整剥離を施して器体を整形している。325は小型の手持ち砥石である。表面と側面と裏面に擦痕が観察できる。断面形は長方形に近い。



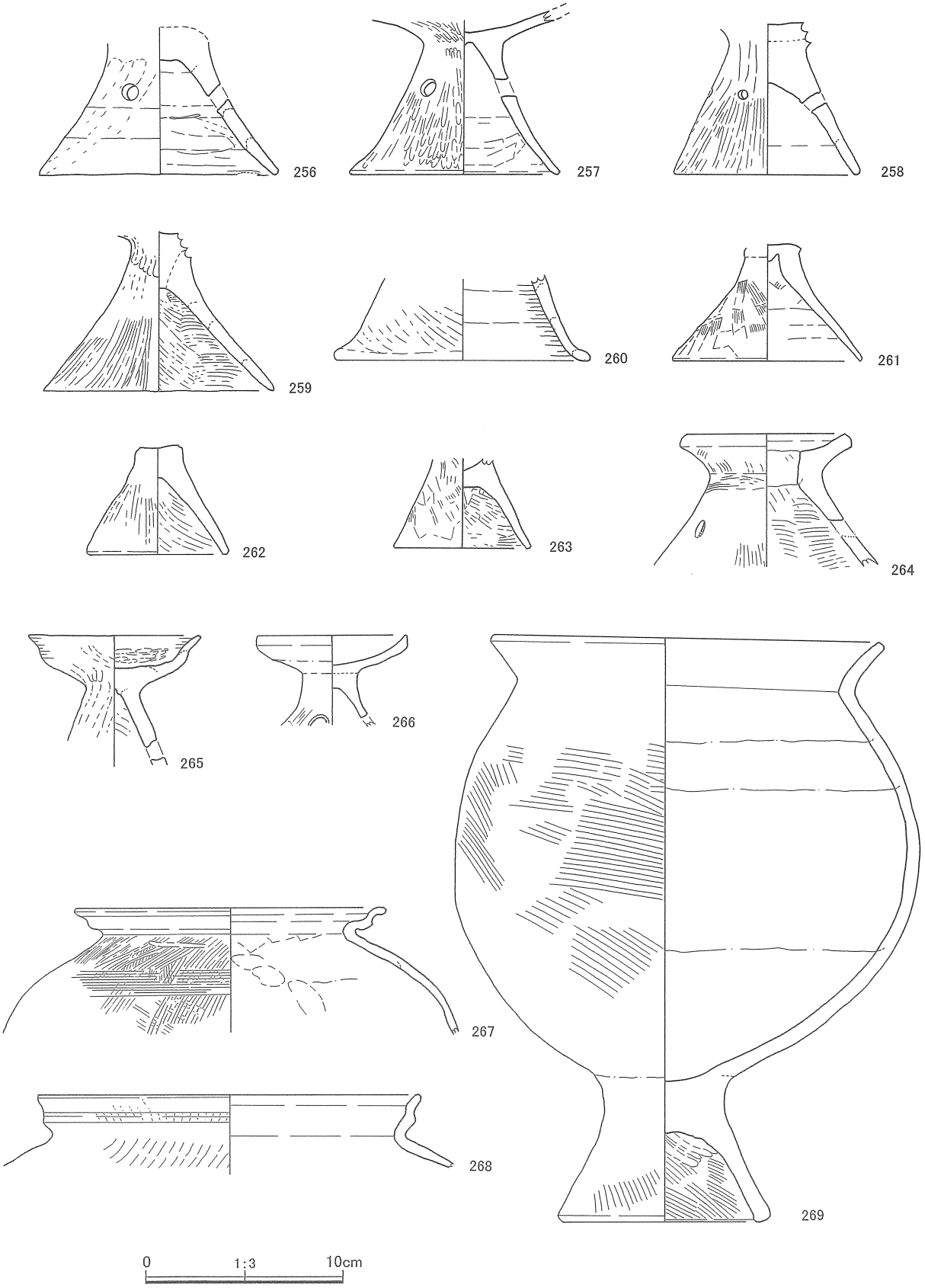
第77図　遺構外出土土器実測図3



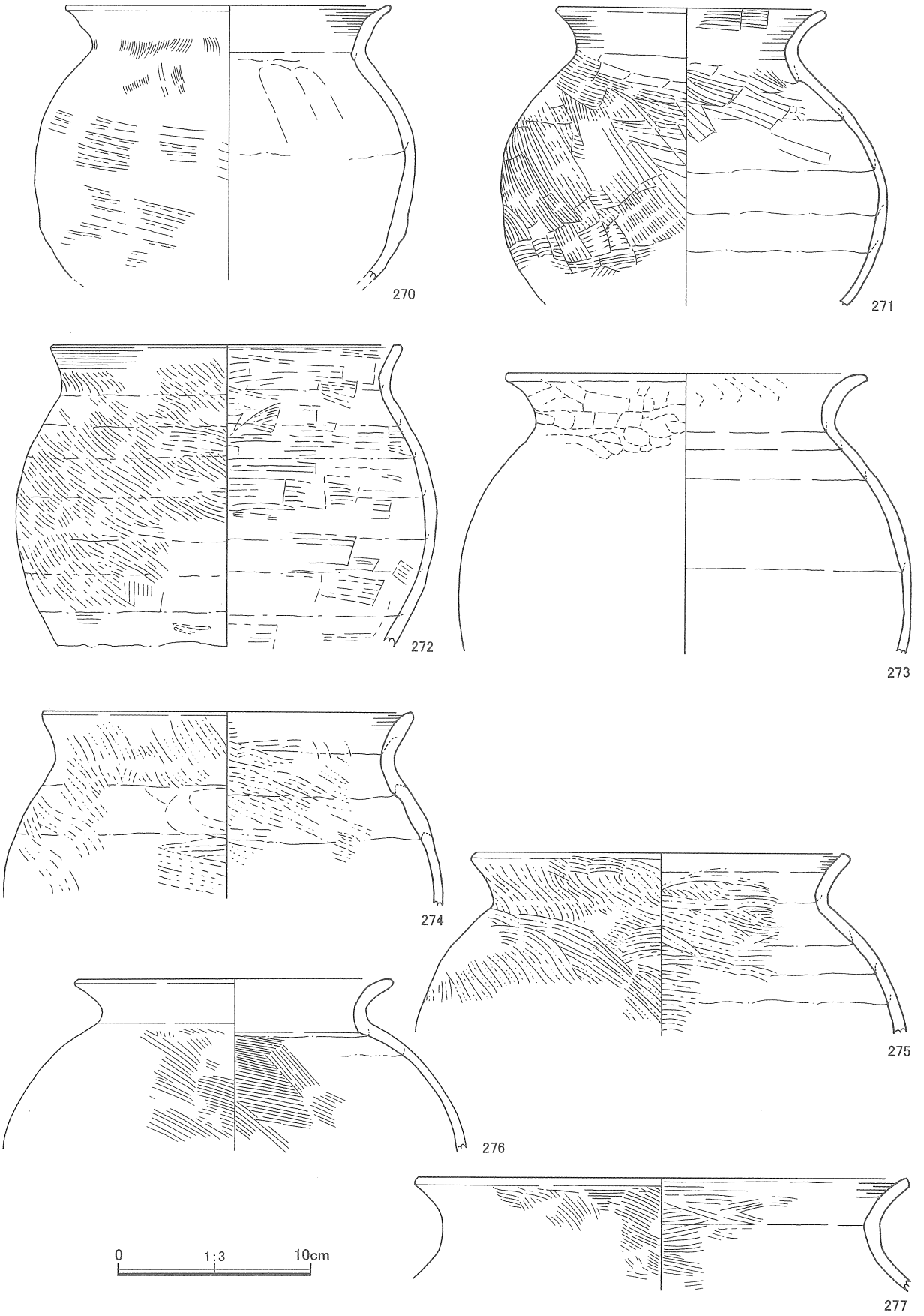
第 78 図　遺構外出土土器実測図４



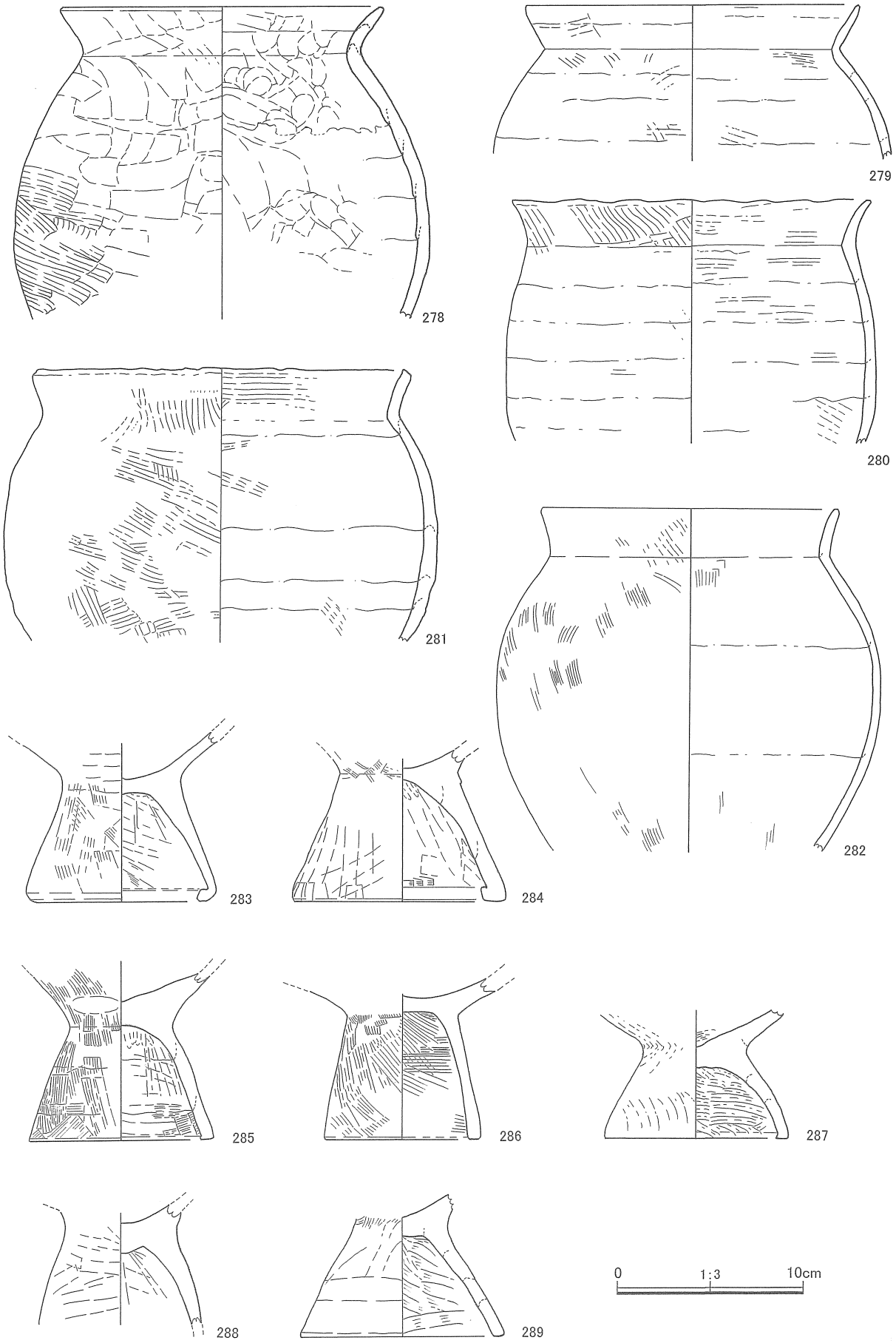
第79図　遺構外出土土器実測図5



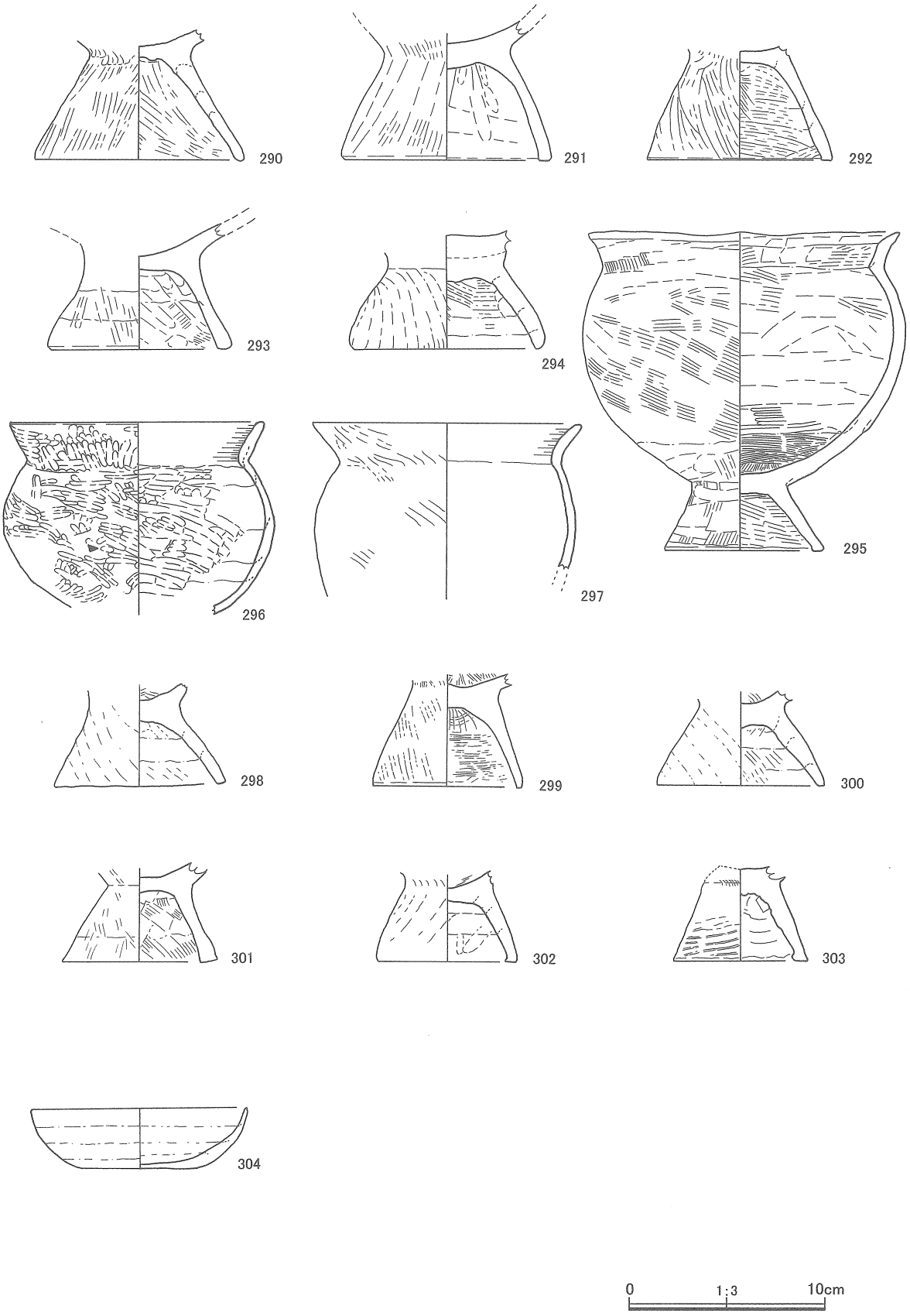
第 80 図　遺構外出土土器実測図 6



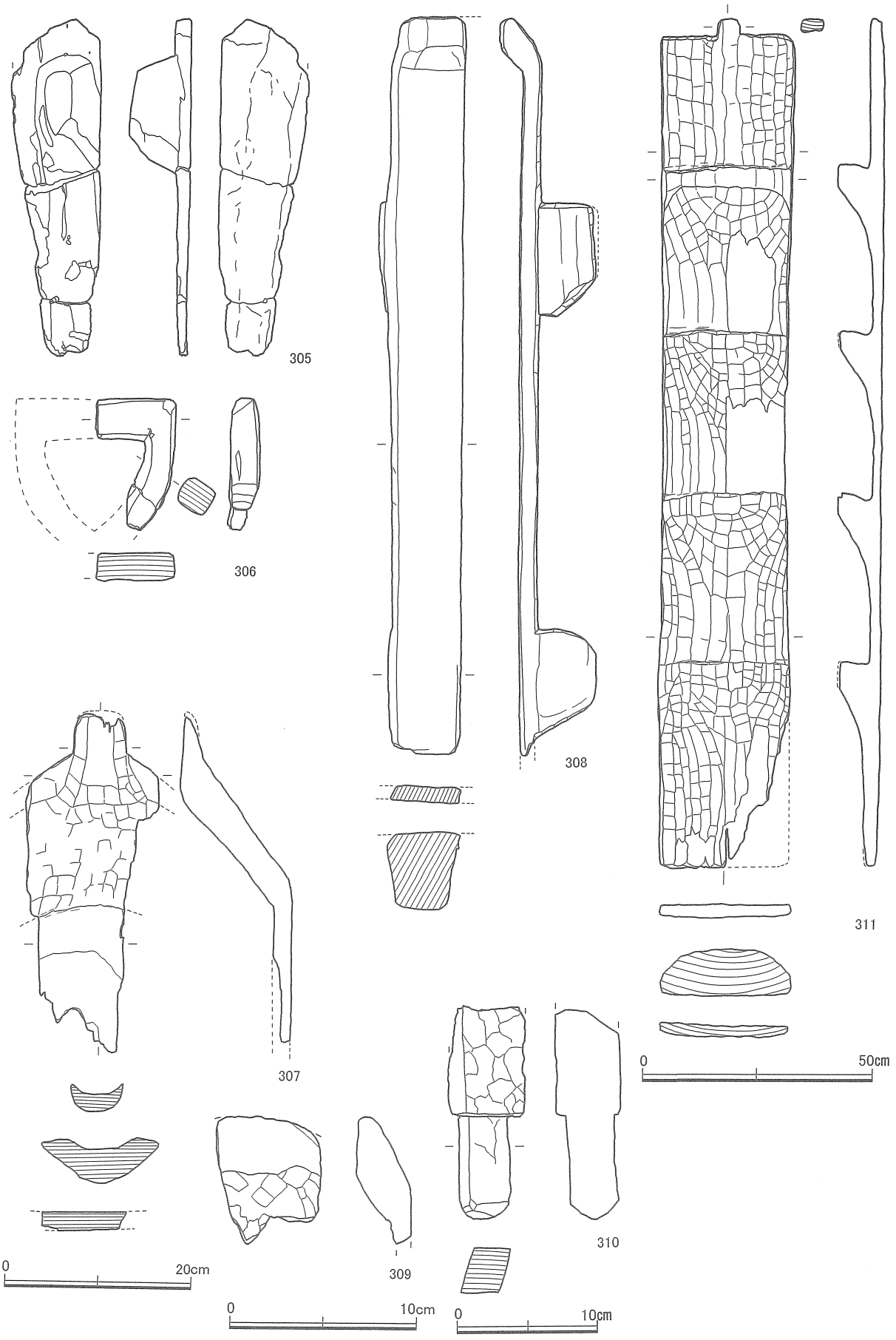
第81図　遺構外出土土器実測図7



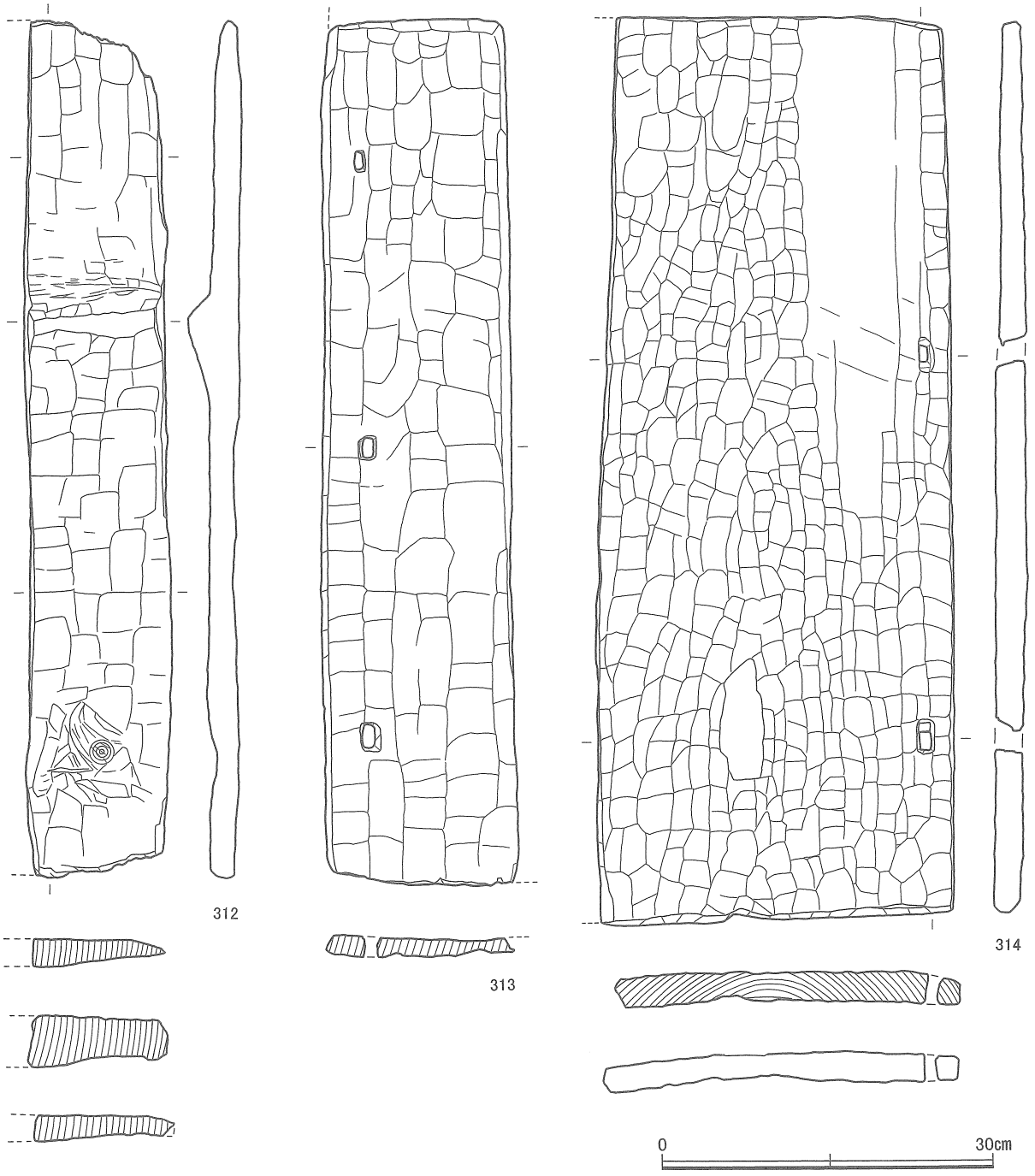
第82図　遺構外出土土器実測図8



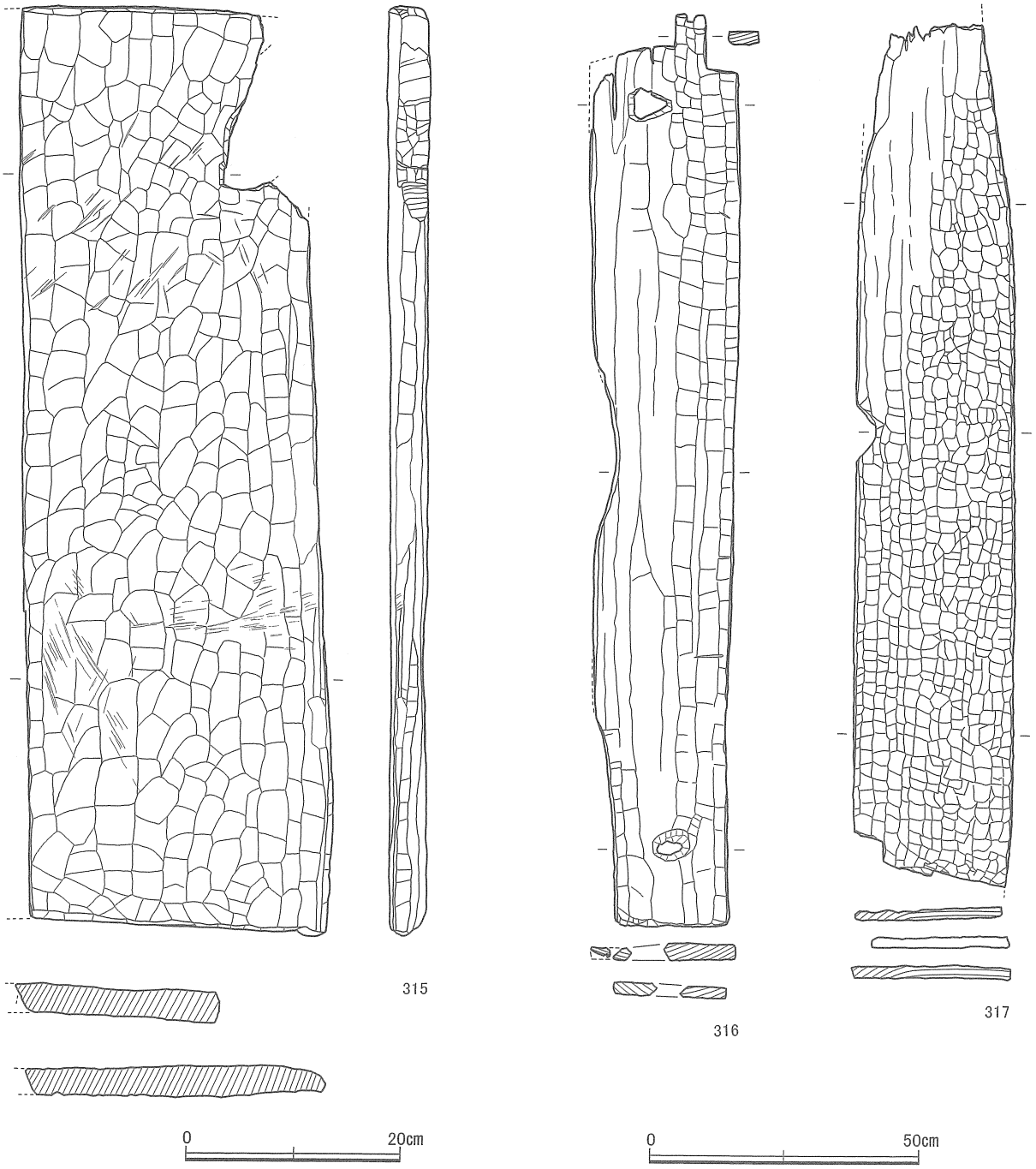
第83図　遺構外出土土器実測図9



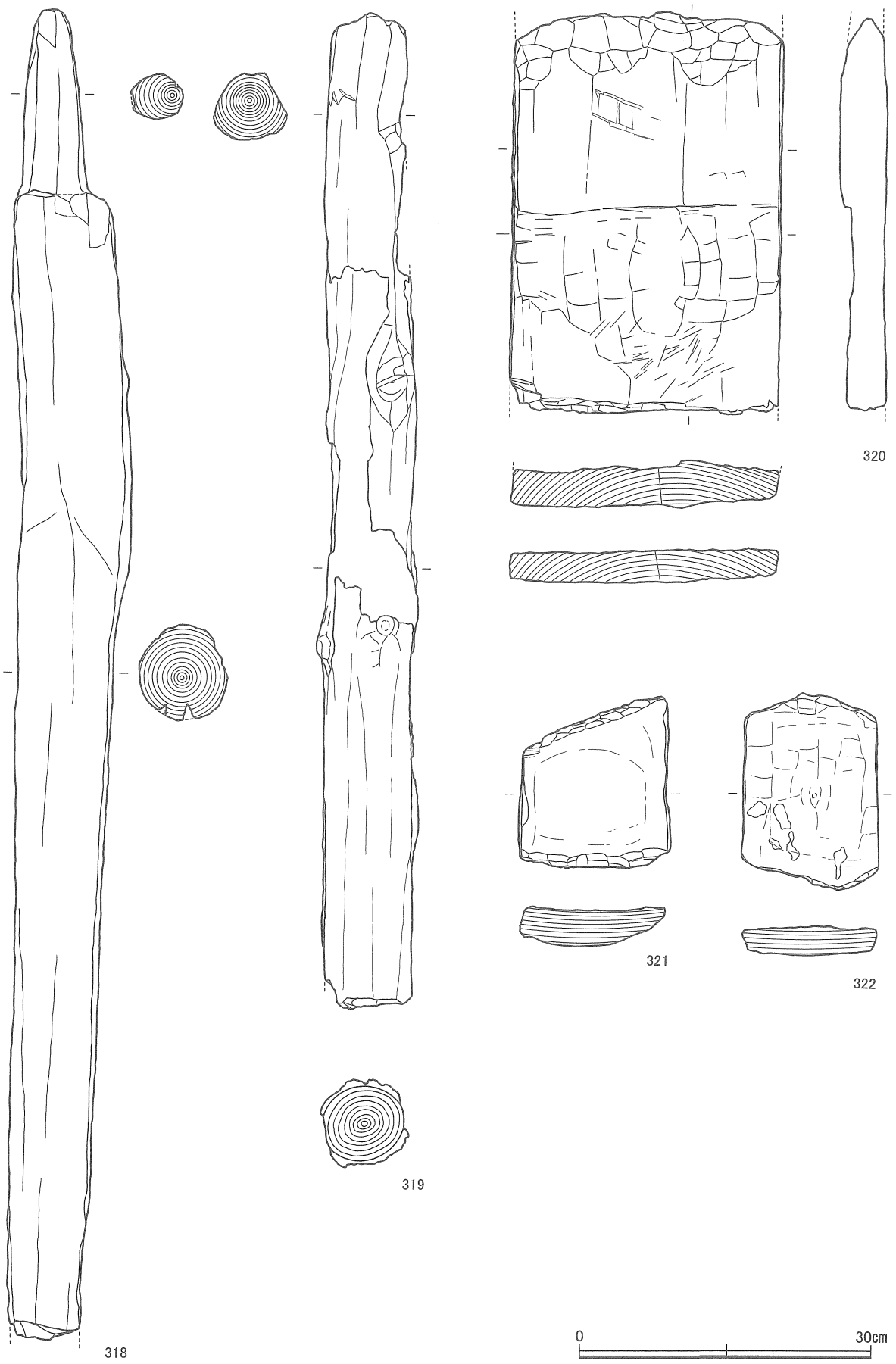
第 84 図　出土木製品実測図 1



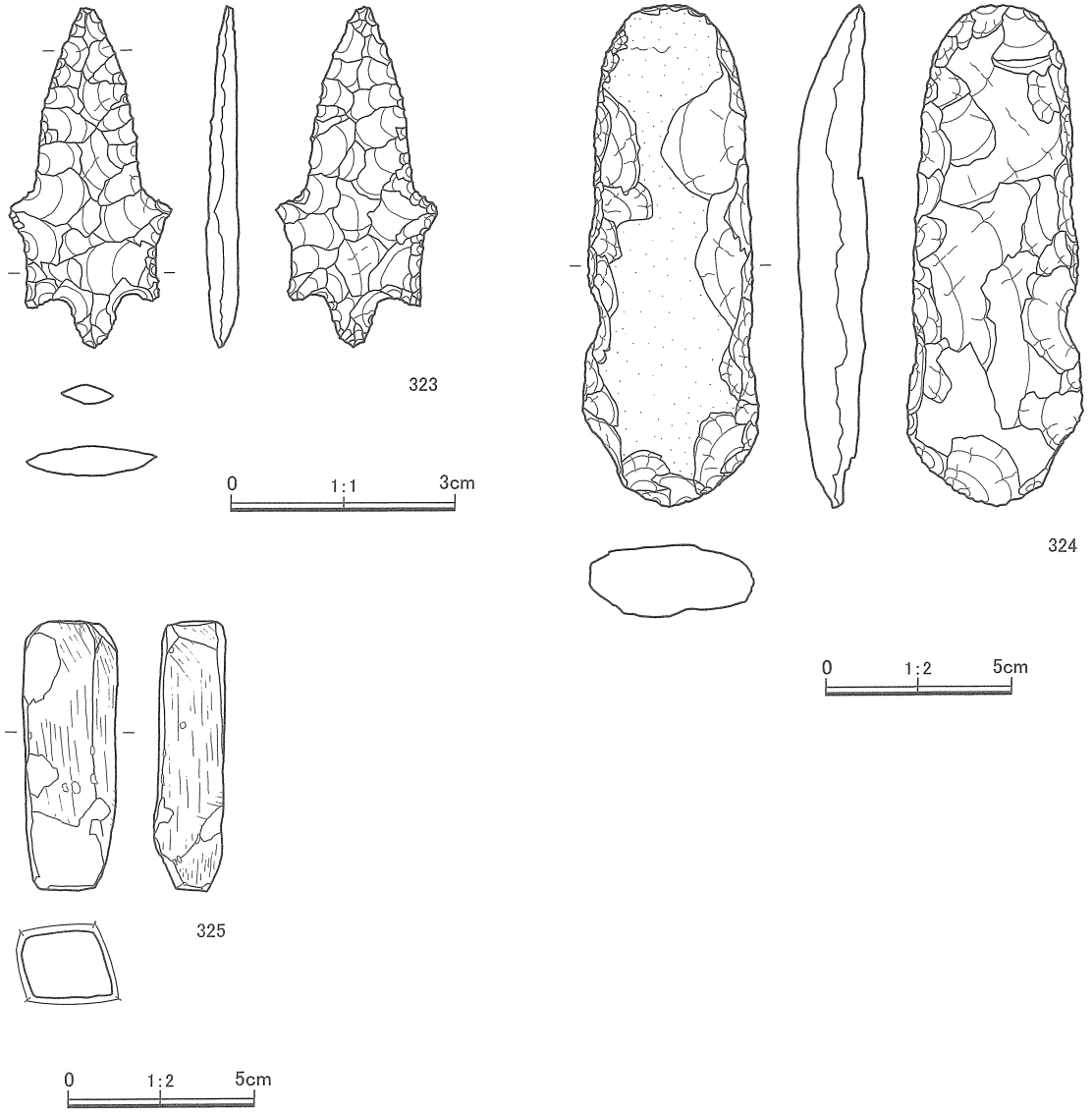
第85図　出土木製品実測図2



第86図　出土木製品実測図3



第87図　出土木製品実測図4



第88図　出土石器実測図1

4　D区の遺構と遺物

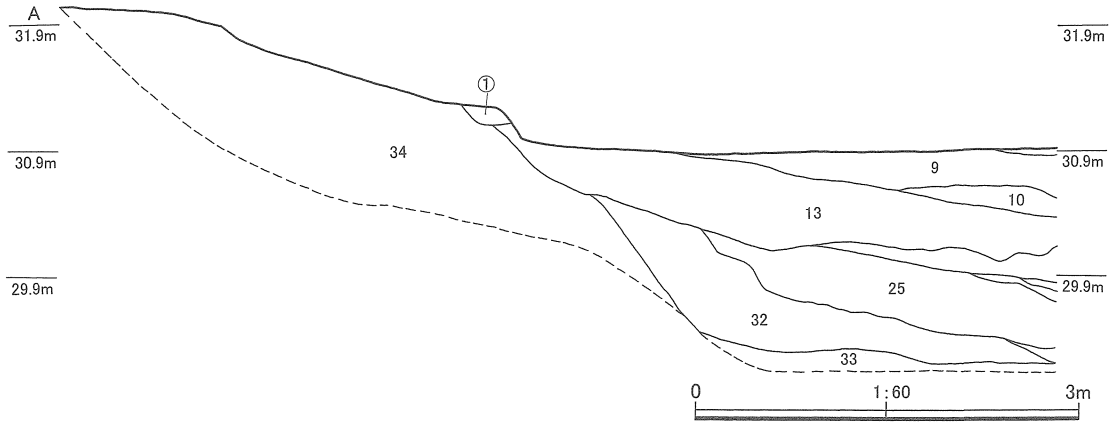
土層

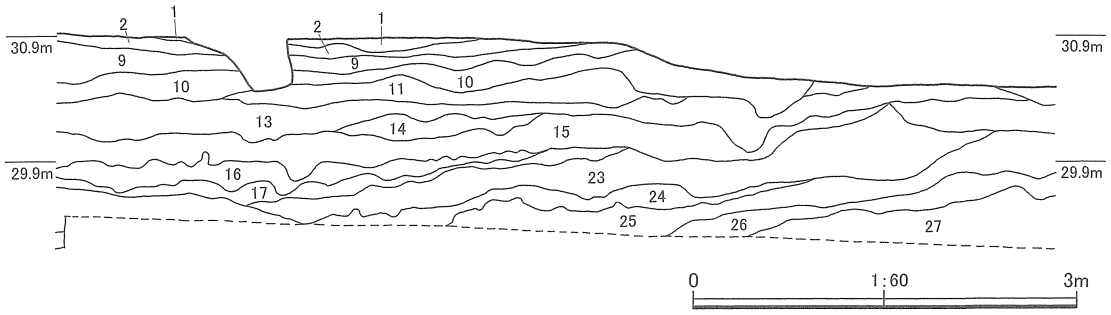
D区は丘陵裾部から微高地に位置する。丘陵裾部ではA-A′ラインに見られるように第34層明黄褐色～黄褐色礫層の上に灰色粘土層などが薄く堆積していた。石敷きの道路遺構は、この粘土層の上に構築している。

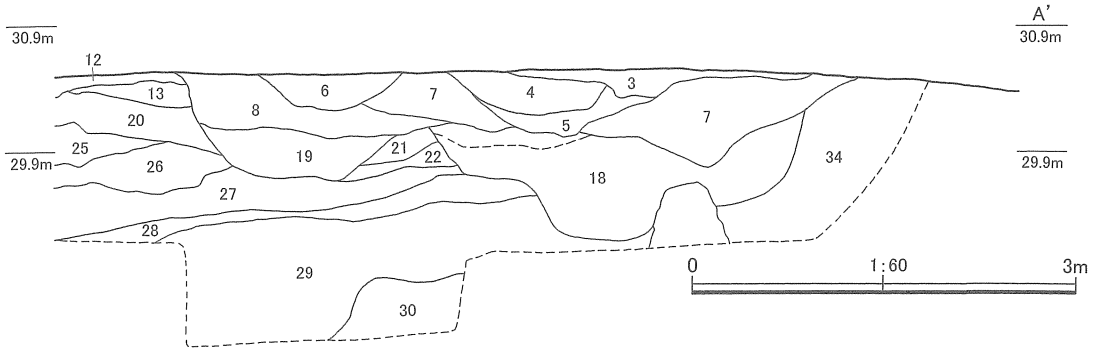
微高地の堆積状況は第34層明黄褐色～黄褐色礫層を基盤として、第33層褐灰色粘土から第1層黒褐

小穴の表記はSP○○としているが、本図中ではSPを省略している。

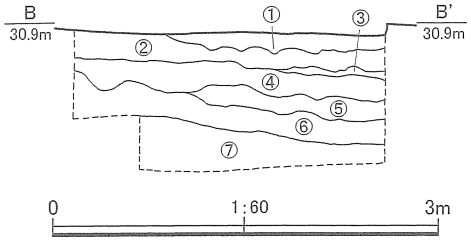
第89図　D区遺構全体図



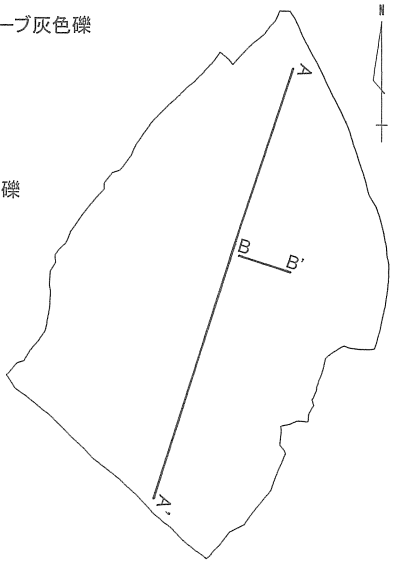




1 黒褐色シルト
2 明黄褐色砂礫
3 褐灰色シルト
4 褐灰色粘質砂
5 褐灰色砂
6 黄灰色シルト
7 明黄褐色砂礫
8 明黄褐色砂礫
9 黒褐色粘土
10 明黄褐色～灰黄色砂礫
11 褐灰色シルト
12 明黄褐色～灰黄色砂礫
13 暗青灰色粘土
14 褐灰色粘土
15 灰色粘土
16 明青灰色シルト
17 灰色シルト
18 青灰色砂礫
19 黒褐色粘土
20 青灰色シルト
21 青灰色シルト
22 青灰色シルト
23 青灰色粘質砂混じり、緑灰色・明黄褐色礫
24 黒褐色粘土
25 黒褐色粘土混じり、緑灰色・オリーブ灰色礫
26 オリーブ黒粘土
27 砂礫混じり、灰色粘土
28 褐灰色シルト
29 黒褐色粘土
30 黒褐色粘土
31 黒色粘土混じり、緑灰色・灰白色礫
32 黒色粘土
33 褐灰色粘土
34 明黄褐色～黄褐色礫・土



① 黒褐色シルト
② 黄褐色砂礫
③ 黒褐色シルト
④ 黒色粘土
⑤ 黒褐色シルト
⑥ 黒褐色粘土
⑦ 黒色粘土



第90図　D区土層図

色シルトなどが厚く堆積していた。小穴は第２層明黄褐色砂礫の上に掘り込まれていた。

遺構は微高地で柱穴と考えられる小穴を25基以上検出した。これらの小穴は山茶碗などを含む包含層を掘り込んで構築していた。丘陵では、石敷き状の道路遺構を検出したが、調査の結果近世以降のものと分かった。

遺物は須恵器と土師器と灰釉陶器などが出土した。これらは、小穴を検出した遺構確認面より下位の包含層から出土した。

道路遺構（第91図）

道路遺構はB～E-５～６グリッドで検出した延長18m、幅２mの遺構である。標準的な断面を観察すると丘陵地形の緩斜面を切り盛りして平坦面を造成した状況を観察できる。この地業は地山となる丘陵斜面を削平して生じた灰色粘土ブロックや灰黄色褐色土を斜面部分に積み重ねて平坦面を構築し路床としている。この上面には0.2cm～８cmの円礫を敷均している。

帰属する時期は、近世以降と推定している。

小穴（第89図）

調査区南西側の低地で遺構の検出を行ったところ円形のプランを多数検出した。これらは、平面プランを確認し、半裁して土層堆積状況を確かめ、明確な掘方をもつ小穴25基を調査した。平面形態は楕円形あるいは円形を呈しているが、配列には計画性が認められない状況にあった。また、構築時期は鎌倉時代の包含層を掘り込んでいることから、それ以降と推定している。

遺物

遺物は、第１層黒褐色シルトと第２層明黄褐色砂礫から灰釉陶器。第３層褐灰色シルトから７世紀後半以降の須恵器、第４層褐灰色粘質土から第６層黄灰色シルトにかけて６世紀末から７世紀初頭の須恵器、第18層青灰色砂礫では古墳時代前期の土師器などが出土した。

土器（第92図～第96図）

古墳時代の土師器は壷(326・327・328・329)と高坏(330・331)がある。326は二重口縁の壷である。口縁屈曲部は粘土紐を貼付して表現する。口径16.0cm。にぶい橙色。ナデ。327は壷底部。底径7.8cm。胎土は密。灰白色。328は壷底部。底径5.3cm。胎土は密。にぶい橙色。

329は小型の壷胴部。体部は球形。底径3.0cm。胎土は粗。橙色。ミガキとナデが観察できる。これらの土師器は二重口縁の壷の特徴から古墳時代前期のものと思われる。

須恵器（第93図）

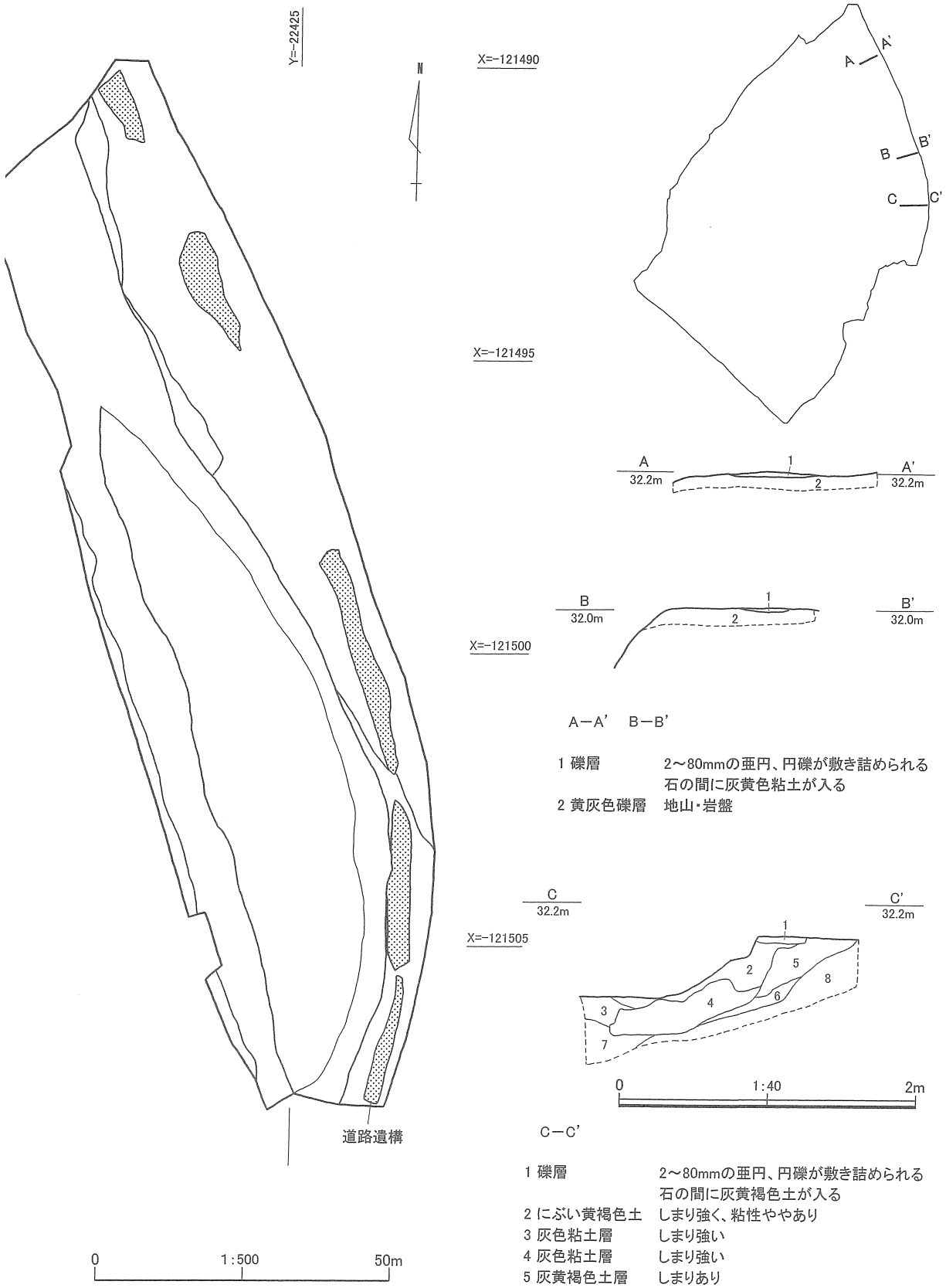
須恵器は杯蓋(332)、杯身(333)、有台杯(334～336・347～350)、摘蓋(337・338～346)、長頸壷(351・352)がある。332は杯蓋の口縁部。口縁部は内傾しながら立ち上がる。口径は約13.9cm。ナデ調整。後世の溝から出土した。６世紀末であろう。333は杯身の口縁部。最大径は約16.0cm。器壁が薄く、丁寧な造りであるが、にぶい橙色を呈する。７世紀末であろう。

334～336は有台杯の小片である。高台径は10.3cm～9.6cm。底部は高台より突出しないと思われる。時期は遠江Ⅴ期前半８世紀初頭であろう。337は摘蓋。大きな擬宝珠摘みを有し、天井部からハの字に開いた後、口縁部を垂直に垂下させる。口径18.5cm、器高4.2cmをはかる。遠江Ⅴ期前半と思われる。

338は大きな擬宝珠摘みを有し、天井部からハの字に開く。339・340は大きな擬宝珠を有する。341～346は口径が13.8cm～15.6cm。口縁部を垂直に垂下させる。347底部と口縁部との境に稜線を有し、そこから外上方へ立ち上がる。高台径11.8cm。遠江Ⅴ期前半で８世紀前半と思われる。

348～350の有台杯は高台径が8.9cm～10.0cmである。351・352は長頸壷の頸部であろう。353・354は細身の壷G底部と思われる。355は甕口縁である。

清郷型甕（第93図）



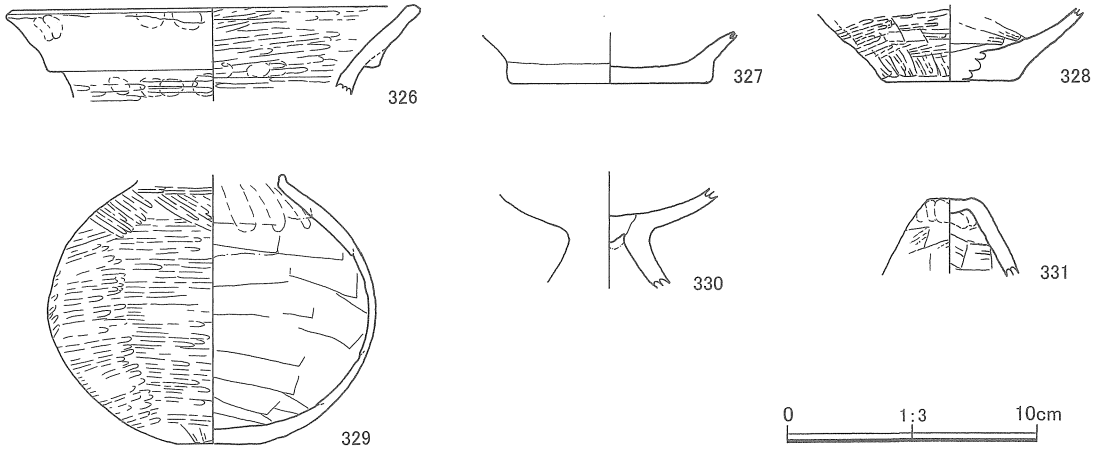
A－A'　B－B'

1 礫層　2～80mmの亜円、円礫が敷き詰められる石の間に灰黄色粘土が入る
2 黄灰色礫層　地山・岩盤

C－C'

1 礫層　2～80mmの亜円、円礫が敷き詰められる石の間に灰黄褐色土が入る
2 にぶい黄褐色土　しまり強く、粘性ややあり
3 灰色粘土層　しまり強い
4 灰色粘土層　しまり強い
5 灰黄褐色土層　しまりあり
6 灰黄褐色土層　しまり若干欠く
7 灰色粘土層　しまりやや欠く
8 黄灰色礫層　地山・岩盤

第91図　道路遺構平面・断面図



第92図　遺構外出土土器実測図1

356は「清郷型」甕と平行する甕の口縁。口径18.7cm。10～12世紀。357は「清郷型」甕の口縁。25.5cm。口縁部は頂部を尖らせているが、上からナデが強く頂部付近に凹みをもつもの。これらの「清郷型」甕は11世紀のものと思われる。

灰釉陶器（第94図）

灰釉陶器は碗(358～369・371)、小碗(370・372～374)、片口鉢(375)がある。体部の内外面はロクロによる回転ナデ調整で仕上げる(358～374)。ロクロの回転は右回り(358・359・365～368)が多い。高台高は碗が11～7㎜。小碗が8～5㎜である。高台の断面形はハの字状に張り出すもの(358～363・365・366)が多い。接合部及び底部は回転糸切りの後、ナデ調整を施す。

358は灰釉陶器の碗である。底径が7.0cm。高台高が9㎜でハの字状に張り出す。底部の糸切り痕をナデ消す。灰色を呈する。359は灰釉陶器の碗である。底径が6.6cm。高台高が9㎜でハの字状に張り出す。内面に重ね焼きの痕跡が残る。灰色を呈する。360は灰釉陶器の碗である。体部は内彎しながら立ち上がる。高台高は8㎜でハの字状に張り出す。灰白色。361は灰釉陶器の碗である。高台高は8㎜でハの字状に張り出す。灰色。362は灰釉陶器の碗である。高台高は7㎜でハの字状に張り出す。灰白色。363は灰釉陶器の碗である。高台高は8㎜でハの字状に張り出す。灰白色。364は灰釉陶器の碗である。高台高は9㎜で断面が三日月状である。灰色。内面に重ね焼きの痕跡が残る。365は灰釉陶器の碗である。高台高は10㎜でハの字状に張り出す。灰白色。366は灰釉陶器の碗である。高台高は11㎜でハの字状に張り出す。灰色。367は灰釉陶器の碗である。高台高は9㎜で断面が三角形、灰色。368は灰釉陶器の碗である。高台高は8㎜でハの字状に張り出す。灰色。369は灰釉陶器の碗である。高台高は8㎜で断面が逆台形を呈する。370は灰釉陶器の小碗である。高台高は8㎜でハの字状に張り出す。灰白色を呈する。371は灰釉陶器の碗である。高台高は5㎜。灰白色を呈する。372は灰釉陶器の小椀である。器高3cm。高台高は9㎜でハの字状に張り出す。底面に糸切り痕が残る。灰色を呈する。373・374は灰釉陶器の小碗で断面三角形の低い高台である。375は灰釉陶器の片口鉢と思われる。

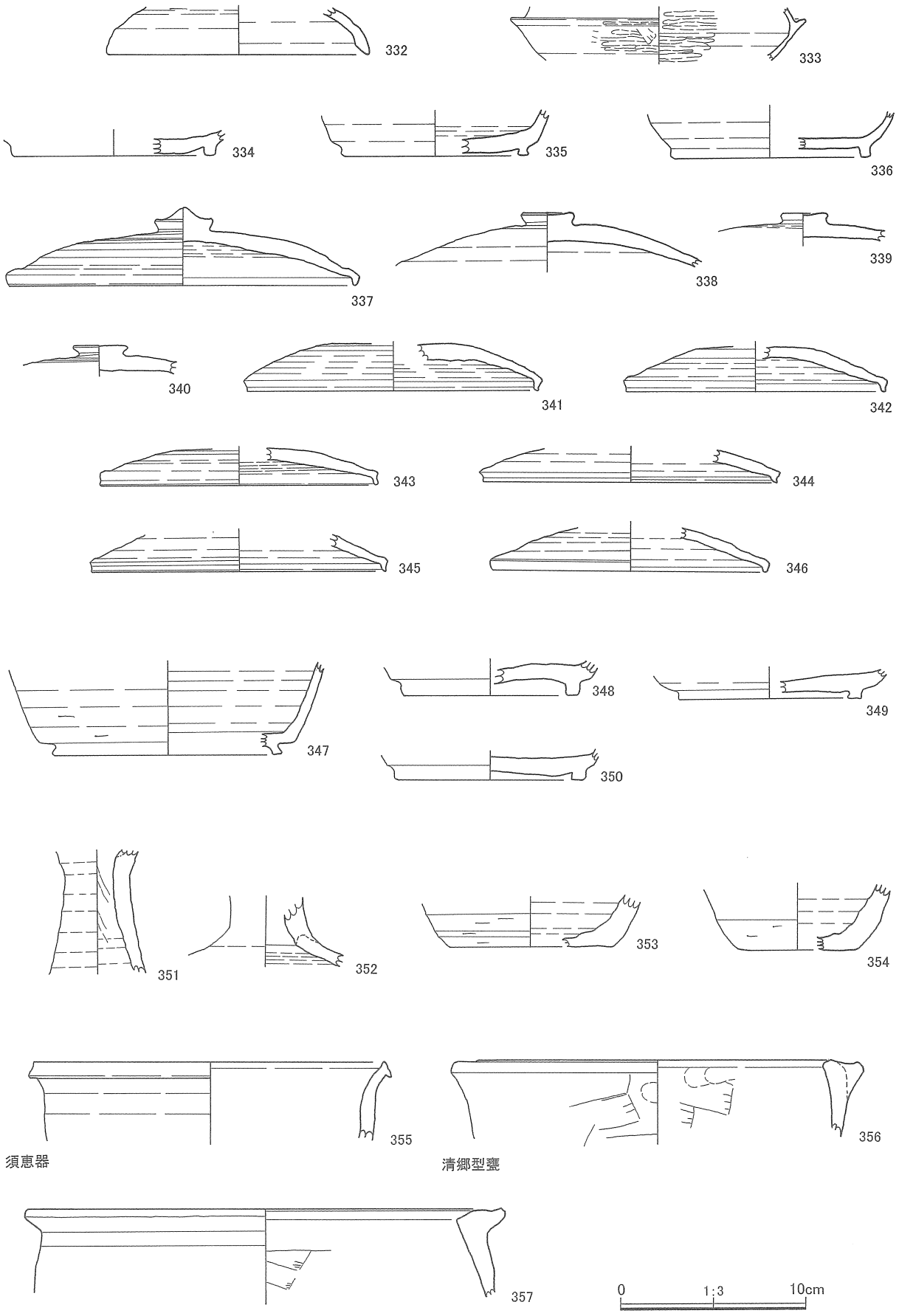
これらの灰釉陶器は旗指古窯22号窯に平行する11世紀のものと思われる。

山茶碗（第94図～第96図）

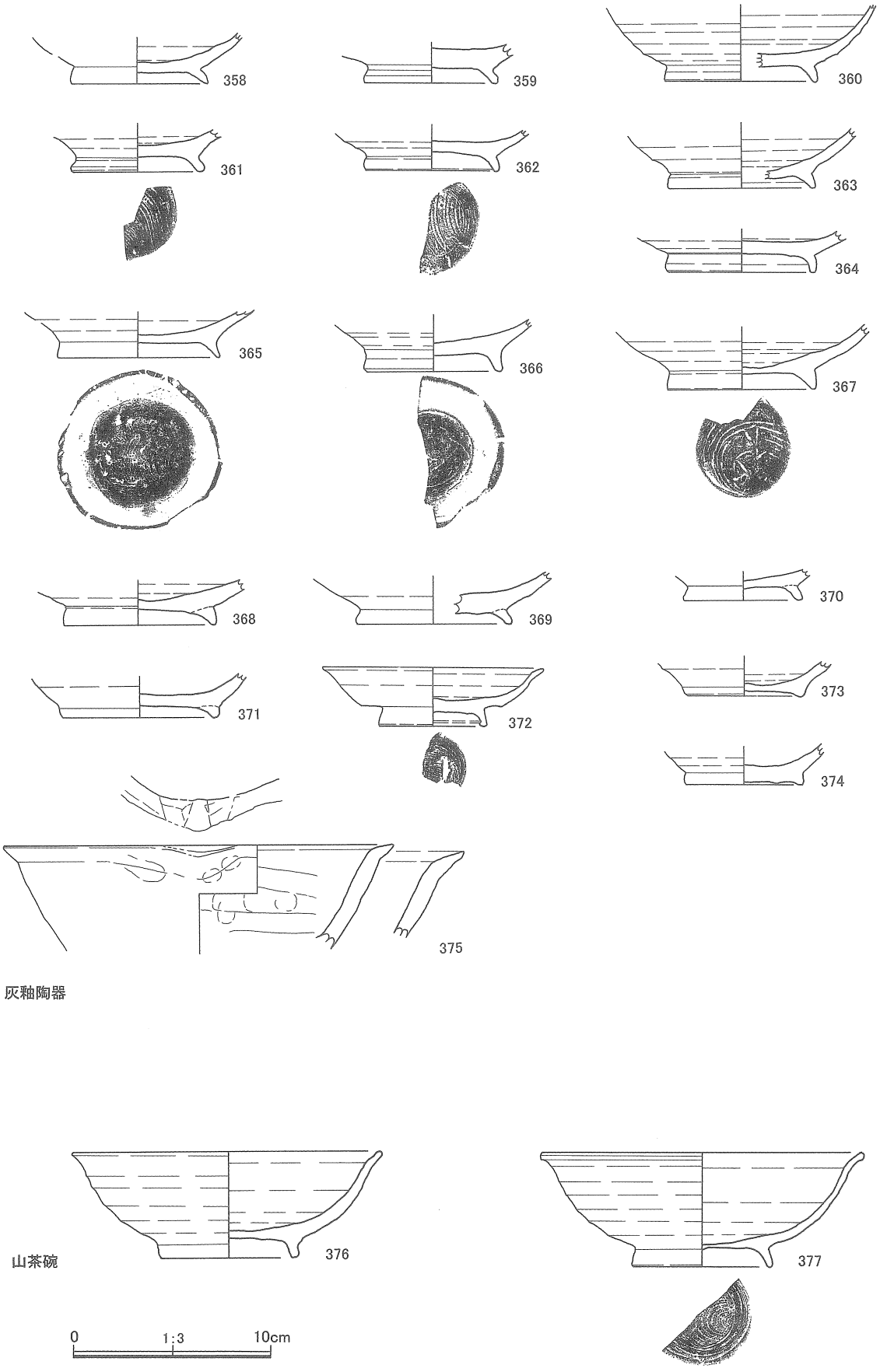
山茶碗は、河合2001に基づいて分類した。

Ⅰ期－Ⅰ類　高台碗　体部から口唇部にかけて柔らかく内彎するもの(376～388)

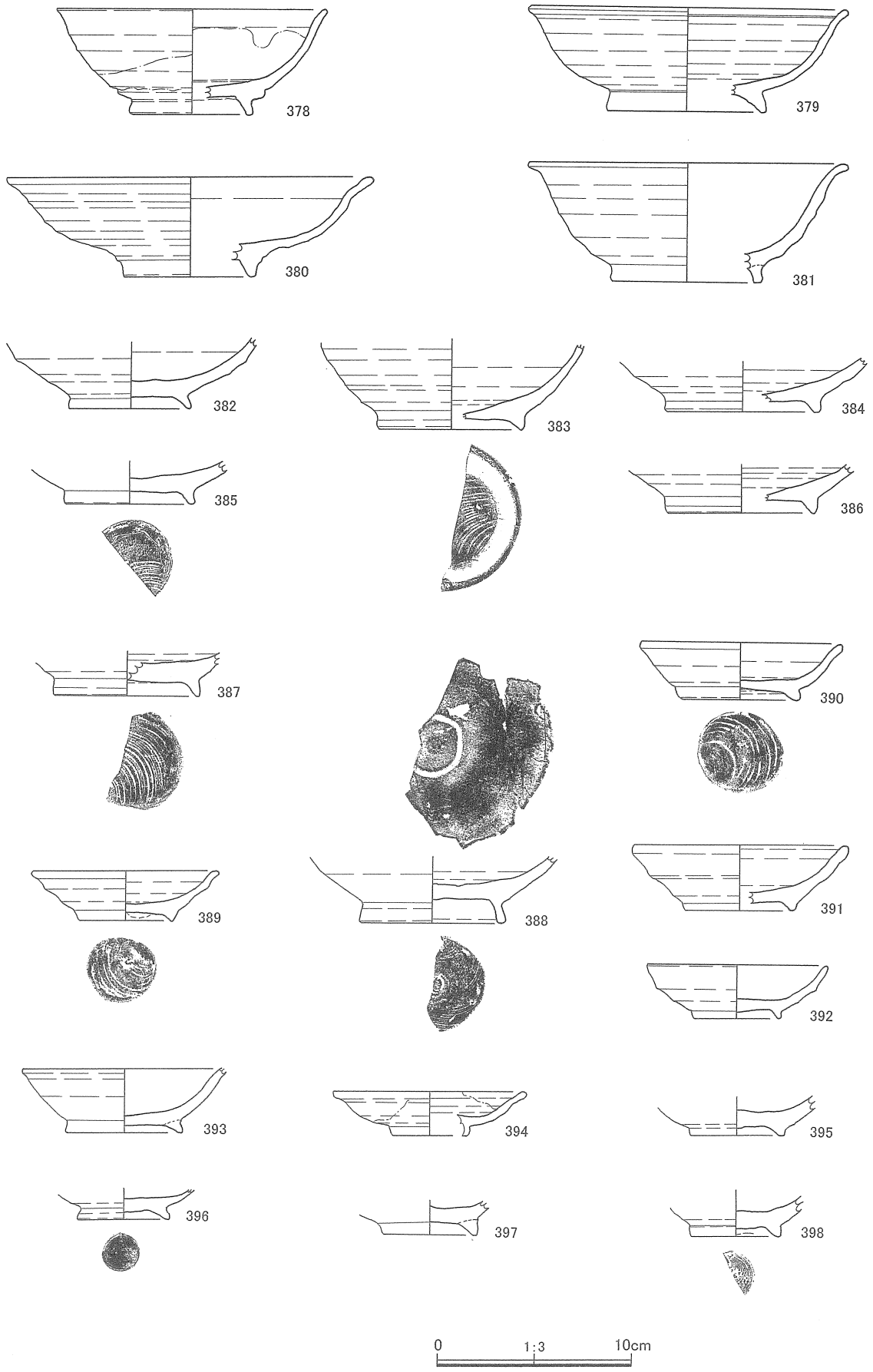
376は口径15.9cm、底径7.0cm、器高5.5cm、灰白色。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外



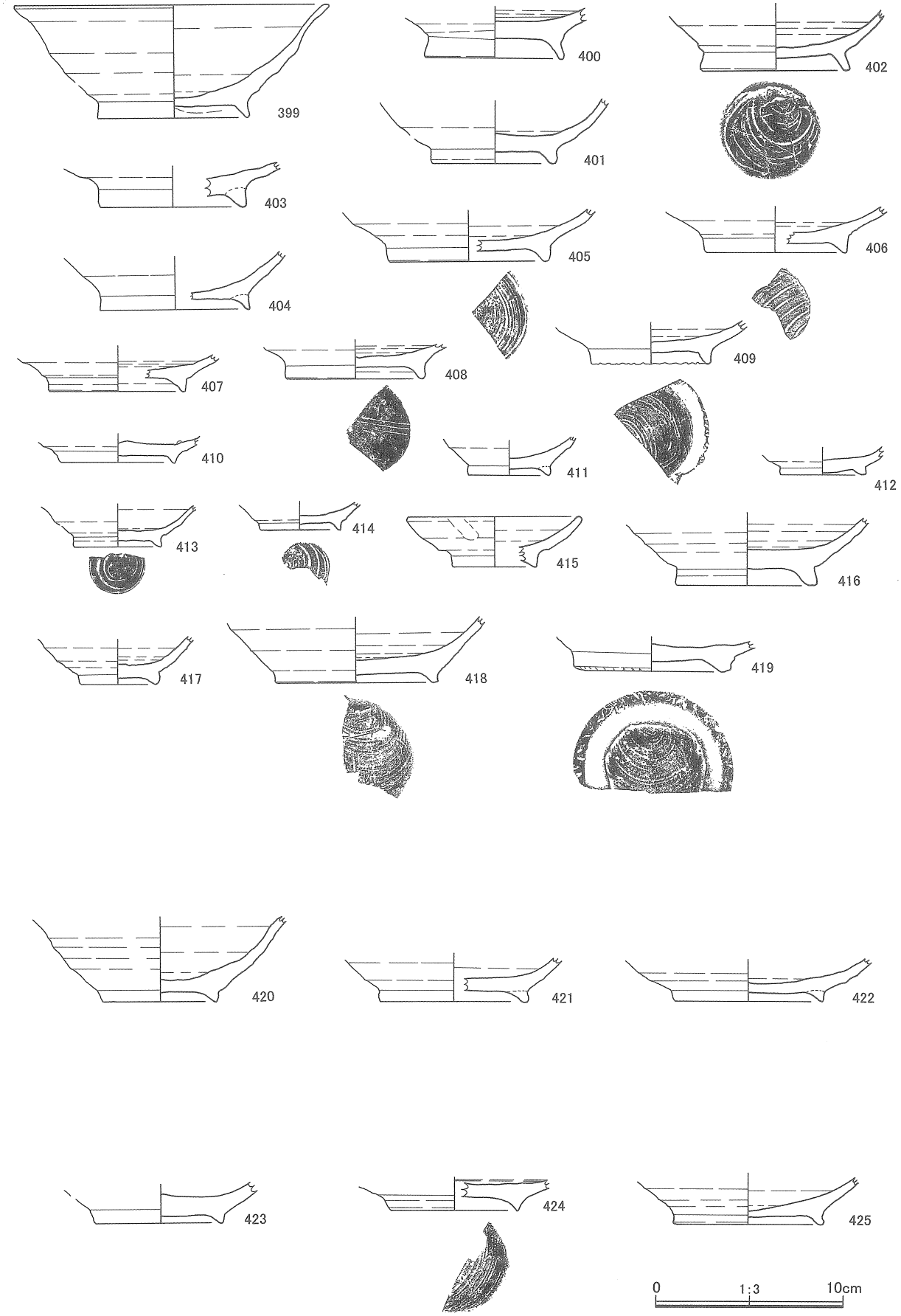
第93図　遺構外出土土器実測図2



第94図　遺構外出土土器実測図3



第 95 図　遺構外出土土器実測図４



第96図　遺構外出土土器実測図5

反する。端部は丸く整える。ロクロによる回転ナデ調整。高台はやや丸みを帯びた爪形状の貼り付け高台で、スノコ状圧痕がある。高台高は10㎜。接合部分は丁寧なナデ調整。底部に回転糸切り痕が残る。胎土は密で黒色粒子と白色粒子を含む。380は碗である。底径6.8㎝、器高5.2㎝。灰白色で自然釉がかかる。高台高8㎜。381は高台高8㎜。382～388は底部である。高台高は11㎜～5㎜。色調は灰色(383～387)、灰白色(382・388)がある。382は底径6.4㎝。388は内面にヘラで円を描く。

Ⅰ期－Ⅰ類　小碗　体部から口唇部にかけて柔らかく内彎するもの(389・391～394)

389は小碗でほぼ完形品。灰白色で口径9.7㎝、底径4.8㎝、器高2.6㎝。内面に黒色の付着物が認められる。390は器高3.0㎝、底径5.8㎝。灰色。

391は底部片である。糸切りをナデ消す。高台は断面二等辺三角形状。底径5.7㎝、高台高7㎜。392は口径9.4㎝、器高2.8㎝。393は口径10.6㎝、器高3.4㎝、底径6.0㎝、高台高6㎜、糸切りをナデ消す。高台は断面二等辺三角形状。394は口径10.0㎝、器高2.3㎝、高台高4㎜。高台は断面二等辺三角形状、底径3.8㎝。

Ⅱ期－Ⅰ類　高台碗　体部から口唇部にかけて比較的直線状に引き出すもの(401・403～405)

底径6.8㎝～8.5㎝。高台高8㎜～9㎜。高台が外側に踏ん張る高い二等辺三角形状で糸切りをナデ消す。

Ⅰ期－Ⅱ類　小碗　体部から口唇部にかけて比較的直線状に引き出すもの(410～412・414・415)

底部は糸切りをナデ消している。高台は断面二等辺三角形状。底径は4.3㎝～6.2㎝。高台高は4㎜が多い。

Ⅱ期－Ⅰ類　高台碗　体部から口唇部にかけて柔らかく内彎するもの(421)

421は底径8.0㎝、灰色。高台は外側に面をもつ直角三角形状、高台高は6㎜。接合部分は丁寧なナデ調整。糸切り痕をナデ消す。胎土は密で白色粒子を含む。

Ⅱ期－Ⅱ類　高台碗　体部から口唇部にかけて比較的直線状に引き出すもの(420・422)

底径6.1㎝～7.6㎝、灰白色～灰色。高台は外側に面をもつ直角三角形状。高台高は6㎜。接合部分は粗いナデ調整。糸切り痕をナデ消す。胎土は密で白色粒子を含む。接合部分は粗いナデ調整を施す。

Ⅲ期－Ⅰ類　高台碗　体部から口唇部にかけて柔らかく内彎するもの(371・418・424)

底径6.8㎝～8.4㎝、灰白色～灰色。高台は潰れた矩形、高台高は4㎜～6㎜。接合部分は粗いナデ調整。糸切り痕をナデ消す。胎土は密で白色粒子を含む。418は底径8.4㎝。灰白色。高台は潰れた矩形、高台高は8㎜。接合部分はナデ調整。糸切り痕をナデ消す。知多産の山茶碗と思われる。

371は底径8.0㎝。灰白色。高台は潰れた矩形、高台高は4㎜。接合部分はナデ調整。糸切り痕をナデ消す。胎土は密。

Ⅲ期－1　小碗(417)

417は底径4.0㎝、高台は潰れた矩形、高台高は5㎜。接合部はナデ調整。糸切り痕をナデ消す。胎土は密。灰白色。渥美産の山茶碗と思われる。

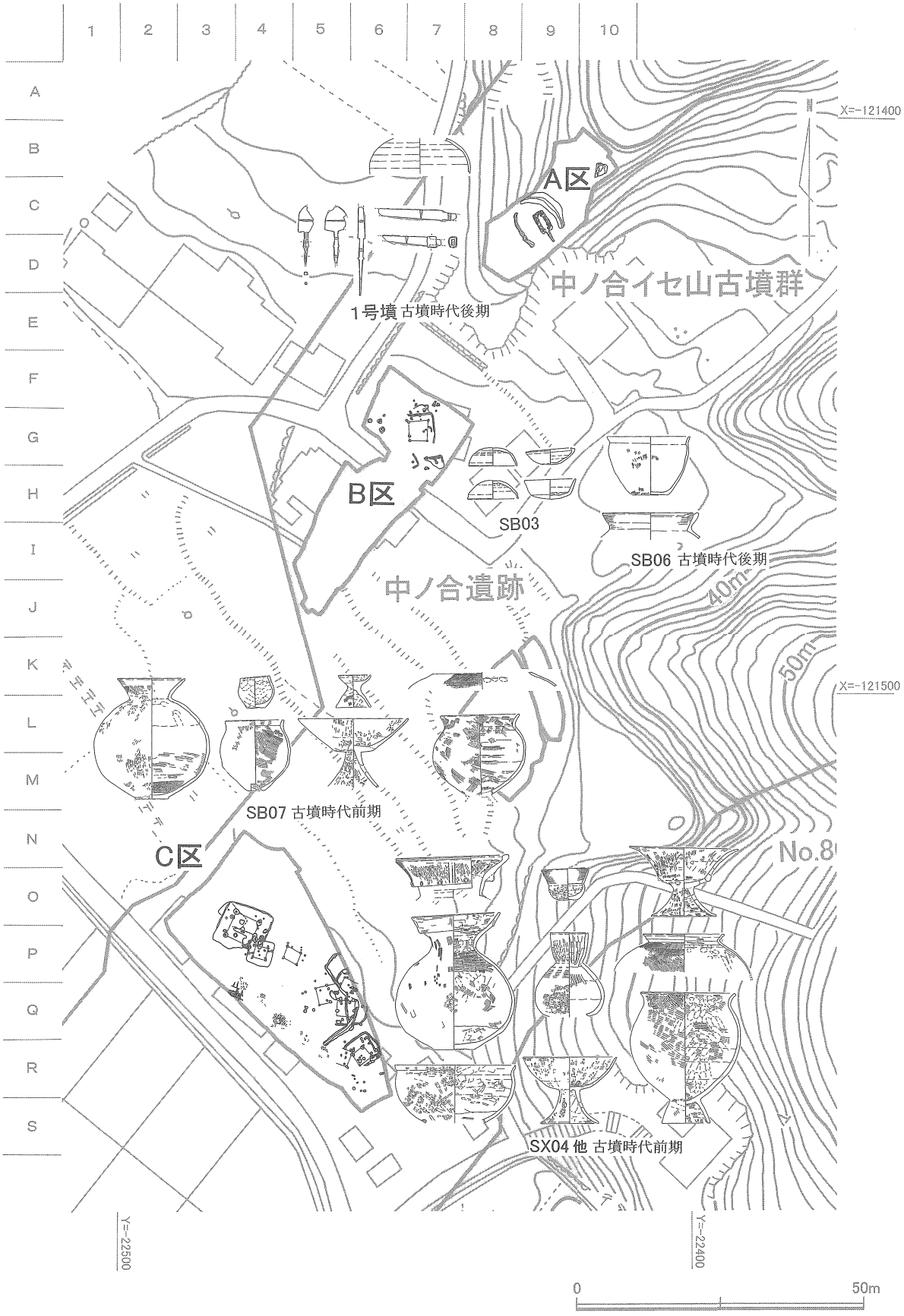
これらの山茶碗は、12世紀を中心として13世紀のものを含むと思われる。

第5節　まとめ

今回の調査で検出した遺構と遺物は、時期別に概観すると古墳時代前期と古墳時代後期に中心がある。

古墳時代前期

遺構は微高地と低地に分かれている。微高地の遺構は、C区のSB11基・SH1基・SD2基・SX6基とB区のSX1基がある。ここでは、C区のSB11基・SH1基・SD2基中心に遺構と遺物を概観する。



第97図　遺構と遺物の変遷

遺構の分布

C区のSB・SH・SDは視覚的に3群に分かれており、これらを西側からA群、B群、C群ととした。A群はSB07と重複するSB08、SB09、SB10とやや離れたSB11である。B群はSB12、SB13、SB14、SH01である。C群はSB15、SB16、SB17である。

主軸方位と遺構分布

SBの主軸方位は、入口、炉、貯蔵穴などの施設を考慮して設定するべきであるが、検出状況から困難であった。そこで、壁溝や柱穴の向きから主軸方位を想定できるものを分類した。A群のSB07と類する主軸方位をとるものを1類とした。1類はA群SB07、SB11、B群SB14、C群SB15の4基である。次に、A群のSB10と類する主軸方位をとるものを2類とした。2類はA群SB10、B群SB12の2基である。次に、A群のSB09と類する主軸方位をとるものを3類とした。3類はA群SB09、B群SD08、C群SB16の3基である。

主軸方位における新旧関係

これらの新旧関係は、3類SB09が1類SB07を切っており、3類SD08が2類SB12を切っていることから、3類が最も新しいと思われる。2類SB10が1類SB07を切っており、3類SD08に切られているので、2類が1類より新しく、3類より古いと考えられる。1類が2類と3類に切られることから最も古いと考えられる。以上のことから、1類SB07、SB11、SB15がより古い段階の集落で2類SB10、SB12の段階を経て、3類SB09、SD08、SB16へ変遷したものと推定している。

	A群	B群	C群
1類	SB07、SB11、	SB14	SB15
2類	SB10	SB12	
3類	SB09	SD08	SB16

遺物は微高地のSBと低地のSXから土師器が出土した。1類SB07からS字状口縁台付甕(39)、有段高坏(36)、広口壷(34)、小型鉢(35)、小型器台(38)。2類SB10から有孔鉢(45)が出土している。1類SB14から小型器台(50)が出土している。これらは、古墳時代前期後半の土器と考えられるが、時間的な前後関係を示す器種組成の差異や特徴的な形式を特定するに至らなかった。

低地の遺構SX03からは、安定した一括資料ではないが、口縁部外面に粘土帯を貼り付けた二重口縁壷(51)が出土している。頸部の屈曲が弱くSX04-Eから出土した二重口縁壷(179)との時間差は少ないと思われる。

SX04-A～Eのうち、S字状口縁台付甕と高坏の組み合わせはSX04-Cで認められた。ここでは、S字状口縁台付甕C類(127～133)に有段高坏(120)と小型椀形高坏(119)が組成される。その他、複合口縁壷(94・95)、平底甕？(111)、北陸系器台(125)がある。これ以外のSX04からはS字状口縁台付甕が認められなかった。なお、遺構外遺物としてグリッドで取り上げた遺物の中にS字状口縁台付甕C類と椀形高坏があり、小型平底土器が出土している。これらの性格は、微高地の集落に伴う水辺の祭祀や土器の廃棄場所の可能性が高い。

遺構名	S字甕	高坏	小型丸底	小型平底	その他
SB07	C類	有段高坏			広口壷、小型鉢、小型器台、く字甕
SB10					有孔鉢、く字甕
SB14					小型器台
SX03					二重口縁壷、
SX04-A		椀形高坏、小型椀形高坏			広口壷、直口壷、鉢、小型鉢、く字甕
SX04-B		有段高坏、小型椀形高坏			加飾壷、直口壷、小型鉢、く字甕、小型器台、タタキ
SX04-C	C類	有段高坏、小型椀形高坏			複合口縁壷、広口壷、直口壷、平底甕 北陸系器台、く字甕、タタキ
SX04-D					パレス壷、広口壷、直口壷、鉢、小型鉢、く字甕、タタキ
SX04-E		有段高杯			二重口縁壷、鉢、小型鉢、く字状口縁台付甕、タタキ
遺構外	C類	椀形高坏		小型平底	二重口縁壷、広口壷、瓢壷、鉢、有孔鉢、小型鉢、小型器台、く字甕、タタキ

古墳時代後期

B区のSB 6基と中ノ合イセ山古墳群の古墳2基がある。竪穴住居跡の内、SB03とSB06は、方形で北壁にカマドをもち主軸が北を向いている。出土遺物はSB03から須恵器の杯(16～19)が出土しており、7世紀代のものと思われる。SB06から土師器の鉢(20)と甕(21)が出土しており、古墳時代後期のものと推定している。

中ノ合イセ山古墳群では横穴式石室を埋葬施設とする古墳2基を検出した。これらは、出土遺物が少なく、時期が特定しにくいものであるが、横穴式石室の形態や構造から古墳時代後期のものと推定している。

B区では、古墳時代後期に集落が営まれ、ほぼ平行して中ノ合イセ山古墳群を造営したものと思われる。

文末であるが、現地調査並びに資料整理・報告書の作成に当たっては、下記の方々、機関に多大な御協力と御助言を賜った。記して感謝の意を示す。(五十音順、敬称略)

岩木智絵、岩本貴、植松章八、河合修、篠ヶ谷路人、篠原和大、柴田　稔、澁谷昌彦、鈴木一有、鈴木敏則、鈴木敏中、中川律子、平野吾郎、八木勝行、渡井英誉、

参考・引用文献

杉山雄一・下川浩一・坂本亨・秦光男　1982　地質調査総合センター　5万分の1地質図幅「静岡」及び説明書

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996　『角江遺跡Ⅱ』　遺物編2（木製品）

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004　『大屋敷C古墳群　大屋敷1号窯』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004　『瀬名川遺跡Ⅱ』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2007　『入野東古墳群』　入野高岸古窯

藤枝市史編纂委員会　2007　『藤枝市史』　資料編1　考古

静岡県教育委員会　1989　『遺跡地名表―焼津以西編―』

静岡県　1990　『静岡県史』　資料編1　考古一

静岡県　1990　『静岡県史』　資料編2　考古二

静岡県　1992　『静岡県史』　資料編2　考古三

静岡県　1994　『静岡県史』　通史編1　原始・古代

静岡県　1997　『静岡県史』　通史編2　中世

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2007　『小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡』

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2007　『入野東古墳群・入野高岸古窯』

(財)浜松市文化協会　2002　『恒武西宮遺跡』

池田将男　1985　「中部地域の古式土師器」『古墳時代の土師器』静岡県考古学会シンポジューム6　静岡県考古学会

赤塚次郎　1990　『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

佐野五十三　1990　「清郷型甕の研究」『研究紀要Ⅲ』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

渡井英誉　1996　「東駿河における布留式平行期の様相（前）」『静岡県考古学研究』No.28　静岡県考古学会

河合　修　2001　「青灰色のうつわ」『研究紀要』第8号　静岡県埋蔵文化財調査研究所

第8表　須恵器観察表

図版番号	挿図番号	調査区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ器高(cm)	体部径器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	備考
15	1	A区	遺構外	須恵器	長頸壺	胴部	5%	(7.7)	(24.0)			1mm大の礫	2.5Y6/2 灰黄	
15	2	A区	遺構外	須恵器	大甕	胴部	5%	(19.1)				0.1mm以下の礫	10YR5/3 にぶい黄褐	

第9表　鉄製品観察表

図版番号	挿図番号	古墳名	出土位置	材質	種類	内容	備考
19	3	1号墳	石室	鉄	鉄鏃	平根三角形式　残存長8.05cm　鏃身長3.7cm　鏃身幅2.1cm　頸部長2.1cm　頸部幅0.5cm　関幅0.7cm　茎長2.2cm　茎部幅0.4cm　重さ5.1g	
19	4	1号墳	石室	鉄	鉄鏃	平根三角形式　残存長8.0cm　鏃身長3.4cm　鏃身幅2.9cm　頸部長2.2cm　頸部幅0.5cm　棘関　関幅0.9cm　茎長2.3cm　茎部幅0.5cm　重さ5.1g	
19	5	1号墳	石室	鉄	鉄鏃	平根三角形式？　残存長3.0cm　鏃身幅3.8cm　重さ3.0g	
19	6	1号墳	石室	鉄	鉄鏃	平根三角式？　残存長2.3cm　鏃身長2.3cm　鏃身幅2.15cm　重さ0.8g	
19	6	1号墳	石室	鉄	鉄鏃	平根三角式？　残存長2.9cm　鏃身長2.3cm　鏃身幅2.5cm　重さ1.6g	
19	7	1号墳	石室	鉄	鉄鏃	残存長5.1cm　頸部長2.1cm　関幅0.6cm　茎部長2.9cm　重さ1.5g	
19	8	1号墳	石室	鉄	鉄鏃？	尖根長三角形式？　残存長12.35cm　鏃身長4.5cm　鏃身幅1.0cm　両丸造り　頸部長2.5cm　頸部幅0.5cm　棘関　茎部長5.0cm　茎部幅0.4cm　重さ6.2g	
19	9	1号墳	石室	鉄	鉄鏃？	残存長5.9cm　頸部長2.2cm　棘関　茎部長3.3cm　幅0.6cm　重さ1.6g	
19	10	1号墳	石室	鉄	刀子	残存長11.0cm　刃部長9.0cm　幅1.4cm　棟厚さ0.4cm　両角関　茎断面長台形　茎長1.9cm　関側幅1.0cm　茎棟側厚さ0.5cm　茎刃部側厚さ0.4cm　重さ13.1g	
19	11	1号墳	石室	鉄	刀子	残存長8.35cm　刃部長6.7cm　幅1.2cm　棟厚さ0.7cm　錏残存　両角関？茎断面長方形　茎長1.6cm　関側幅1.2cm　茎厚さ0.4cm　重さ12.7g	
19	12	1号墳	石室	鉄	刀子	刃部片　刃部残存1.6cm　3.3cm　刃幅1.0cm　棟厚さ0.2cm　重量0.9g　1.5g	
23	13	2号墳	石室	鉄	鉄鏃？	茎部　残存長1.8cm　幅0.7cm　重さ1.0g	
23	14	2号墳	石室	鉄	刀子	刃部片　刃部残存1.7cm　刃幅1.1cm　棟厚さ0.3cm　重量0.9g	
23	15	2号墳	石室	鉄	刀子	刃部片　刃部残存長4.7cm　刃幅1.4cm　棟厚さ0.3cm　重量3.9g	

第10表　土器・陶磁器観察表(1)

図版番号	挿図番号	調査区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ器高(cm)	体部径器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	備考
34	16	B区	SB03	須恵器	坏蓋	蓋	50%	3.9		10.0		密白(色砂粒含む)	N7/0 灰白	
34	17	B区	SB03	須恵器	坏蓋	蓋	45%	3.95		(10.5)		密(白色砂粒含む)	7.5Y7/1 灰白	
34	18	B区	SB03	須恵器	坏身	口縁部胴部底部	98%	3.2		8.8		密(白色砂粒含む)	N7/0 灰白	
34	19	B区	SB03	須恵器	坏身	口縁部胴部底部	95%	4.1		10.6		密(白色砂粒含む)	N7/0 灰白	
34	20	B区	SB06	土師器	鉢	口縁胴部底部	70%	12.3	16.8	17.3	7.2	1～6mm大の礫多い	7.5YR6/6 橙	
34	21	B区	SB06	土師器	甕	口縁部	10%	(5.2)		20.0		1～3mm大の礫	7.5YR7/4 にぶい橙	
34	22	B区	SX02	土師器	広口壺	口縁部	5%	(5.7)		(13.6)		1～4mm大の礫多い	10YR8/4 浅黄橙	
34	23	B区	SX02	土師器	壺	底部	20%	(7.6)			7.6	1～3mm大の礫多い	5YR7/4 にぶい橙	
34	24	B区	SX02	土師器	鉢	底部	10%	(3.8)			5.6	1～5mm大の礫多い	5YR7/4 にぶい橙	
34	25	B区	SX02	土師器	鉢	口縁部胴部底部	90%	4.6		11.7	4.7	1～5mm大の礫	7.5YR8/6 浅黄橙	
34	26	B区	SX02	土師器	台付甕	脚部	15%	(6.7)			10.2	1～3mm大の礫多い	2.5YR7/4 淡赤橙	
34	27	B区	SR03	山茶碗	大碗	底部	30%	(2.9)			(7.4)	密(白色砂粒含む)	10YR7/2 にぶい黄橙	
34	28	B区	—	土師器	壺	底部	10%	(6.1)			(9.0)	1～8mm大の礫多い	7.5YR8/3 浅黄橙	
34	29	B区	H-6	清郷	甕	口縁部胴部	5%	(7.4)		(22.0)		0.9mm以下の礫	10YR6/4 にぶい黄橙	
34	30	B区	TP-3	陶器	鉄釉水注	口縁部胴部底部	99%	6.0	8.2	3.4	2.6	1mm以下の礫	7.5YR4/2 灰褐	
34	31	B区	M-8・9	陶器	徳利	胴部	5%	(5.1)	(11.2)			0.1mm以下の礫	5YR4/4 にぶい赤褐	

第10表　土器・陶磁器観察表(2)

図版番号	挿図番号	調査区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ器高(cm)	体部径器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	備考
34	32	B区	M-8・9	陶器	片口	底部	5%	(2.8)			(10.1)	1mm大の礫	7.5Y8/2 灰白	
59	34	C区	SB07	土師器	広口壷	口縁部胴部底部	60%	25.5	(24.4)	14.0	(7.2)	3mm以下の礫	5YR8/4 淡橙	
59	35	C区	SB07	土師器	鉢	口縁部胴部底部	80%	6.5	(7.6)	6.1	3.9	0.5～2mm大の礫多い	7.5YR7/3 にぶい橙	
59	36	C区	SB07	土師器	高坏	口縁部胴部	30%	(14.7)		(23.4)		1～5mm大の礫	7.5YR7/6 橙	
59	37	C区	SB07	土師器	高坏	口縁部胴部	90%	(11.0)		22.8		0.1～0.3mm大の礫多い	7.5YR7/4 にぶい橙	
59	38	C区	SB07	土師器	器台	口縁部胴部脚部	98%	6.8		6.6	7.3	1～2mm大の礫多い	7.5YR7/8 黄橙	
59	39	C区	SB07	土師器	S字甕	胴部	1%	(3.2)				白色砂粒や雲母	10YR7/3 にぶい黄橙	
59	40	C区	SB07	土師器	く字甕	口縁部胴部	80%	(17.0)	(19.5)	26.4		1～5mmの礫多い	2.5YR6/1 赤灰	
59	41	C区	SB07	土師器	台付甕	底部	30%	(12.4)			10.0	やや粗	10YR7/2 にぶい黄橙	
60	42	C区	SB07	土師器	く字甕	口縁部胴部	40%	(9.3)	(15.5)	(14.2)		やや粗	5YR7/4 にぶい橙	
60	43	C区	SB07	土師器	甕	脚部	15%	(8.5)			7.3	1～5mm大の礫	7.5YR6/1 褐灰	
60	44	C区	SB10	土師器	壷	胴部底部	60%	(15.7)	23.8		7.5	0.5～2.5mmの黒色粒子多い	7.5YR8/3 浅黄橙	
60	45	C区	SB10	土師器	鉢	口縁部底部	50%	(15.0)		(11.7)	3.6	やや粗	7.5YR8/3 浅黄橙	
60	46	C区	SB10	土師器	く字甕	口縁部胴部	90%	(21.2)	24.8	18.65		1～7mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
60	47	C区	SB10	土師器	く字甕	口縁部	10%	(8.5)		(18.0)		1～2mm大の礫	5YR8/3 淡橙	
60	48	C区	SB10	土師器	台付甕	脚部	30%	(12.5)			10.0	2～5mm大の礫	5YR6/1 褐灰	
60	49	C区	SB10	土師器	台付甕	脚部	5%	(6.7)			10.2	1～4mm礫多い	5YR8/3 淡橙	
60	50	C区	SB14	土師器	器台	口縁部胴部底部	75%	3.8		(3.5)	3.2	1～2mm大の礫	5YR6/6 橙	
61	51	C区	SX03	土師器	二重口縁壷	口縁部	20%	(13.1)		(18.2)		1～7mm大の礫	10YR8/3 浅黄橙	
61	52	C区	SX03	土師器	台付甕	脚部	5%	(6.2)			10.4	1～3mm大の礫多い	10YR8/1 灰白	
61	53	C区	SX04-A	土師器	広口壷	口縁部胴部底部	50%	28.6	28.0	(15.8)	(8.4)	1～3mm大の礫	10YR8/2 灰白	
61	54	C区	SX04-A	土師器	広口壷	口縁部	20%	(10.2)		13.5		1～4mm大の礫	10YR8/3 浅黄橙	
61	55	C区	SX04-A	土師器	壷	胴部底部	55%	(15.6)	21.35		7.2	1～8mm大の礫多い	7.5YR7/3 にぶい橙	
62	56	C区	SX04-A	土師器	壷	胴部底部	65%	(26.7)	(27.8)		8.0	1～7mm大の礫	10YR8/3 浅黄橙	
62	57	C区	SX04-A	土師器	広口壷	口縁部	5%	(8.0)		(12.4)		0.5～3mm大の礫	2.5YR7/6 橙	
62	58	C区	SX04-A	土師器	壷	口縁部胴部底部	50%	(17.1)	(15.0)	(11.9)	(6.0)	0.5～3mm大の礫	2.5YR7/4 淡赤橙	
62	59	C区	SX04-A	土師器	壷	口縁部胴部底部	90%	14.5	13.75	10.7	4.8	1～5mm大の礫	2.5YR7/6 橙	
62	60	C区	SX04-A	土師器	壷	口縁部胴部底部	80%	12.65	11.75	9.5	4.4	1～4mm大の礫	7.5YR8/6 浅黄橙	
62	61	C区	SX04-A	土師器	鉢	口縁部胴部底部	70%	15.5	18.7	13.9	6.9	0.5～1mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
62	62	C区	SX04-A	土師器	鉢	口縁部胴部底部	50%	(10.6)	(13.8)	(15.0)	2.6	0.5～2mm大の礫	5YR7/6 橙	
62	63	C区	SX04-A	土師器	鉢	胴部底部	45%	(7.65)	9.3		4.0	1～3mm大の礫	7.5YR6/4 にぶい橙	
62	64	C区	SX04-A	土師器	鉢	口縁部	15%	(7.6)	(16.8)	20.6		1～4mm大の礫	5YR8/3 淡橙	
62	65	C区	SX04-A	土師器	鉢	口縁部胴部底部	80%	5.5		9.8	3.6	1～4mm大の礫	10YR5/1 褐灰	
62	66	C区	SX04-A	土師器	鉢	口縁部胴部底部	75%	5.3		10.1	3.5	1～3mm大の礫	10YR8/3 浅黄橙	
63	67	C区	SX04-A	土師器	高坏	口縁部胴部底部	80%	14.0		19.8	(12.2)	1～5mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
63	68	C区	SX04-A	土師器	高坏	口縁部胴部脚部	80%	8.3		10.4	5.9	0.5～1mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
63	69	C区	SX04-A	土師器	高坏	口縁部胴部脚部	70%	8.2		(10.5)	6.3	0.5mm大の礫	5YR6/6 橙	

第 10 表　土器・陶磁器観察表(3)

図版番号	挿図番号	調査区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ器高(cm)	体部径器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	備考
63	70	C 区	SX04-A	土師器	高坏	脚部	15%	(6.5)			(11.3)	1～4mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
63	71	C 区	SX04-A	土師器	高坏	脚部	30%	(3.5)			(8.6)	0.5～1.5mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
63	72	C 区	SX04-A	土師器	器台	脚部	25%	(6.0)			(9.8)	0.5～2.5mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
63	73	C 区	SX04-A	土師器	甕	口縁部胴部底部	45%	(27.0)	(24.8)	(20.0)	(10.9)	1～5mm大の礫	10YR7/3 にぶい黄橙	
64	74	C 区	SX04-B	土師器	広口壷	胴部	35%	(8.1)	(21.3)			1～5mm大の礫	10YR8/2 灰白	
64	75	C 区	SX04-B	土師器	広口壷	口縁部胴部	40%	(20.6)	(20.4)	(13.8)		1～6mm大の礫多い	5YR7/6 橙	
64	76	C 区	SX04-B	土師器	広口壷	口縁部	5%	(3.5)		(12.2)		1～4mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
64	77	C 区	SX04-B	土師器	壷	胴部	20%	(15.5)	(29.8)			0.5～5mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
64	78	C 区	SX04-B	土師器	壷	胴部底部	30%	(11.1)	(23.5)		8.4	やや粗	5YR8/4 淡橙	
64	79	C 区	SX04-B	土師器	壷	底部	15%	(4.1)			7.8	1～4mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
64	80	C 区	SX04-B	土師器	壷	底部	10%	(4.0)			7.0	0.1～0.3mm大の礫多い	5YR8/2 灰白	
64	81	C 区	SX04-B	土師器	直口・外反　壷	口縁部胴部	80%	(14.9)	13.0	9.5		1～4mm大の礫	2.5YR6/6 橙	
64	82	C 区	SX04-B	土師器	直口・外反　壷	口縁部	5%	(5.0)		(10.3)		0.5～2mm大の礫	10YR7/3 にぶい黄橙	
64	83	C 区	SX04-B	土師器	鉢	口縁部胴部底部	90%	4.4		10.3	4.6	1～3mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
65	84	C 区	SX04-B	土師器	高坏	口縁部胴部	20%	(6.8)		(23.4)		1～4mm大の礫	7.5YR7/6 橙	
65	85	C 区	SX04-B	土師器	高坏	脚部	35%	(7.2)				1～6mm大の礫	5YR7/8 橙	
65	86	C 区	SX04-B	土師器	高坏	口縁部胴部脚部	70%	8.5		(11.0)	(9.0)	1～2mm大の礫	7.5YR8/6 浅黄橙	
65	87	C 区	SX04-B	土師器	高坏	脚部	15%	(6.35)			(9.7)	1～4mm大の礫	5YR8/3 淡橙	
65	88	C 区	SX04-B	土師器	高坏	脚部	60%	(4.9)			9.0	0.5～2mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
65	89	C 区	SX04-B	土師器	器台	口縁部胴部	50%	(3.6)		(4.0)		1～3mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
65	90	C 区	SX04-B	土師器	く字甕	口縁部胴部	30%	(19.5)	(25.4)	(16.2)		1～3mm大の礫	7.5YR8/2 灰白	
65	91	C 区	SX04-B	土師器	く字甕	口縁部	5%	(6.5)		(18.0)		1～4mm大の礫	10YR8/6 黄橙	
65	92	C 区	SX04-B	土師器	く字甕	口縁部	30%	(6.5)		(16.8)		0.6mm以下の小礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
65	93	C 区	SX04-B	土師器	台付甕	脚部	10%	(5.3)			10.8	1～5mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
66	94	C 区	SX04-C	土師器	複合口縁壷	口縁部	30%	(11.2)		21.4		1～4mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
66	95	C 区	SX04-C	土師器	複合口縁壷	口縁部	20%	(9.0)		23.8		0.1～5mm大の礫	5YR8/3 淡橙	
66	96	C 区	SX04-C	土師器	壷	底部	10%	(3.6)			8.2	0.1～0.3mm大の礫多い	2.5YR7/4 淡赤橙	
66	97	C 区	SX04-C	土師器	壷	底部	10%	(5.7)			11.4	2～4mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
66	98	C 区	SX04-C	土師器	二重口縁壷	口縁部	10%	(6.3)		(14.6)		1～5mm大の礫	7.5YR8/6 浅黄橙	
66	99	C 区	SX04-C	土師器	二重口縁壷	口縁部	70%	(10.0)		(14.0)		1～3mm大の礫	7.5YR8/2 灰白	
66	100	C 区	SX04-C	土師器	広口壷	口縁部	20%	(5.6)		17.75		1～7mm大の礫	7.5YR7/2 明褐灰	
66	101	C 区	SX04-C	土師器	広口壷	口縁部	10%	(5.9)		(15.8)		0.5～2mm大の礫	2.5YR7/4 淡赤橙	
66	102	C 区	SX04-C	土師器	広口壷	口縁部	5%	(5.6)		13.8		1～4mm大の礫	5YR7/6 橙	
66	103	C 区	SX04-C	土師器	壷	胴部	15%	(11.0)	(24.4)			0.5～2mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
66	104	C 区	SX04-C	土師器	広口壷	口縁部	20%	(6.2)		(10.1)		白色・灰色・橙色の砂粒	10YR7/3 にぶい黄橙	
66	105	C 区	SX04-C	土師器	壷	口縁部	30%	(5.1)		15.8		灰色・橙色の礫	5YR8/4 淡橙	
67	106	C 区	SX04-C	土師器	壷	胴部	10%	(4.5)				0.5～2mm大の礫	5YR8/4 淡橙	

第 10 表　土器・陶磁器観察表(4)

図版番号	挿図番号	調査区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ 器高 (cm)	体部径 器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	備考
67	107	C 区	SX04-C	土師器	小型壷	口縁部	40%	(7.7)		(9.1)		1～3mm大の礫	5YR7/6 橙	
67	108	C 区	SX04-C	土師器	小型壷	胴部底部	70%	(11.5)	(13.2)		3.2	1～4mm大の礫	7.5YR5/4 にぶい褐	
67	109	C 区	SX04-C	土師器	広口壷	胴部底部	70%	(14.6)	13.2	(8.7)	4.5	0.5～2mm大の礫	2.5YR6/4 橙	
67	110	C 区	SX04-C	土師器	小型壷	胴部底部	80%	(12.5)	11.3		4.8	1～2mm大の礫	7.5YR8/2 灰白	
67	111	C 区	SX04-C	土師器	鉢	口縁部胴部底部	50%	21.0	(19.9)	17.4	(6.9)	0.5～1mm大の礫	5YR7/6 橙	
67	112	C 区	SX04-C	土師器	鉢	口縁部胴部底部	60%	10.0	15.4	16.3	7.5	1～3mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
67	113	C 区	SX04-C	土師器	鉢	胴部底部	15%	(6.2)			5.1	1～2mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
67	114	C 区	SX04-C	土師器	鉢	口縁部胴部底部	60%	4.9		10.1	4.1	0.5～1mmの礫	5YR7/6 橙	
67	115	C 区	SX04-C	土師器	鉢	口縁部胴部底部	60%	4.8		9.4	4.0	0.5～1mm大の礫	10YR8/3 浅黄橙	
67	116	C 区	SX04-C	土師器	鉢	口縁部胴部底部	95%	3.9		9.1	3.1	1～3mm大の礫	5YR7/6 橙	
67	117	C 区	SX04-C	土師器	鉢	口縁部胴部底部	40%	7.3		(10.8)	4.8	1mm以下の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
67	118	C 区	SX04-C	土師器	鉢	口縁部胴部底部	80%	7.7	7.7	(7.3)		0.5～3mm大の礫	10YR8/4 浅黄橙	
67	119	C 区	SX04-C	土師器	高坏	口縁部胴部脚部	95%	6.1		9.3	5.8	1～2mm大の礫	2.5YR6/6 橙	
67	120	C 区	SX04-C	土師器	高坏	脚部	40%	(7.0)				1～5mm大の礫	2.5YR7/8 橙	
67	121	C 区	SX04-C	土師器	高坏	脚部	20%	(7.9)				1～3mm大の礫	5YR8/3 淡橙	
68	122	C 区	SX04-C	土師器	高坏	脚部	40%	(7.3)			17.7	1～4mm大の礫	7.5YR7/4 にぶい橙	
68	123	C 区	SX04-C	土師器	高坏	脚部	20%	(7.3)			11.6	0.1～2mm大の礫	10YR5/1 褐灰	
68	124	C 区	SX04-C	土師器	高坏	胴部脚部	40%	(7.1)			7.7	0.5～2mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
68	125	C 区	SX04-C	土師器	器台	口縁部胴部底部	50%	14.3		(22.8)	(13.6)	1～5mm以下の礫	5YR7/6 橙	
68	126	C 区	SX04-C	土師器	高坏	脚部	15%	(6.0)			9.8	1～4mm大の礫	7.5YR7/4 にぶい橙	
68	127	C 区	SX04-C	土師器	S 字甕	口縁部	15%	(9.0)		(19.0)		0.5～1.5mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
68	128	C 区	SX04-C	土師器	S 字甕	口縁部胴部	35%	(13.0)	(25.9)	16.0		1～2mm大の礫	7.5YR8/1 灰白	
68	129	C 区	SX04-C	土師器	S 字甕	口縁部	25%	(8.1)		16.3		1～2mm大の礫	5YR8/1 灰白	
68	130	C 区	SX04-C	土師器	S 字甕	口縁部	20%	(4.0)		15.4		2mm大の礫	2.5Y8/1 灰白	
68	131	C 区	SX04-C	土師器	S 字甕	口縁部	5%	(4.5)		(16.0)		1～2mm大の礫	7.5YR6/2 灰褐	
68	132	C 区	SX04-C	土師器	S 字甕	口縁部	10%	(3.3)		(16.0)		石英・雲母を含む	10YR7/1 灰白	
68	133	C 区	SX04-C	土師器	S 字甕	口縁部	10%	(5.1)		(19.5)		白色砂粒や雲母	10YR7/2 にぶい黄橙	
68	134	C 区	SX04-C	土師器	S 字甕	脚部	5%	(6.3)			(11.6)	1～2mm大の礫	7.5YR7/2 明褐灰	
68	135	C 区	SX04-C	土師器	S 字甕	脚部	5%	(6.3)			10.4	1～2mm大の礫	10YR7/3 にぶい黄橙	
68	136	C 区	SX04-C	土師器	S 字甕	脚部	5%	(5.5)			(10.0)	0.5～2mm大の礫	10YR7/2 にぶい黄橙	
69	137	C 区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部胴部	25%	(20.7)	(24.2)	(15.0)		1～4mm大の礫	10YR8/2 灰白	
69	138	C 区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	20%	(7.2)		17.9		2～3mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
69	139	C 区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	5%	(9.4)		(14.6)		1～5mm大の礫	10YR8/4 浅黄橙	
69	140	C 区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	15%	(9.9)		(17.3)		1～5mm大の礫多い	7.5YR7/3 にぶい橙	
69	141	C 区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	5%	(6.3)		(19.4)		1～4mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
69	142	C 区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	20%	(11.4)		(19.3)		灰色などの砂粒	10YR8/3 浅黄橙	
69	143	C 区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部胴部	20%	(16.6)	(20.0)	(17.3)		1～5mm大の礫	5YR7/6 橙	

第10表　土器・陶磁器観察表(5)

図版番号	挿図番号	調査区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ器高(cm)	体部径器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	備考
69	144	C区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部胴部	10%	(9.8)	(18.2)	(18.5)		2～3mm大の礫	N3/0 暗灰	
69	145	C区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	5%	(5.7)		(18.0)		1～2mm大の礫多い	7.5YR8/3 浅黄橙	
69	146	C区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	10%	(6.1)		(15.2)		1～3mm大の礫	2.5YR7/3 淡赤橙	
69	147	C区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	5%	(6.5)		(18.2)		1～3mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
70	148	C区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	10%	(9.0)		(16.6)		3mm以下の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
70	149	C区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	40%	(7.3)		13.5		やや粗	5YR7/4 にぶい橙	
70	150	C区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	10%	(5.5)		(14.6)		1～3mm大の礫	5YR8/3 淡橙	
70	151	C区	SX04-C	土師器	台付甕	脚部	25%	(11.2)			9.4	1～3mm大の礫	7.5YR8/2 灰白	
70	152	C区	SX04-C	土師器	台付甕	脚部	15%	(6.0)			10.9	1～9mm大の礫	5YR7/1 明褐灰	
70	153	C区	SX04-C	土師器	台付甕	脚部	5%	(7.7)			(9.7)	1～4mm大の礫	5YR6/1 褐灰	
70	154	C区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部胴部	15%	(14.7)	(23.2)	(16.0)		1～5mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
70	155	C区	SX04-C	土師器	台付甕	口縁部胴部	40%	(13.2)		(15.4)		やや粗	7.5YR8/3 浅黄橙	
70	156	C区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	10%	(7.9)		(14.4)		1～4mm大の礫	7.5YR7/4 にぶい橙	
70	157	C区	SX04-C	土師器	甕	胴部	10%	(8.8)	(20.3)			0.5～2mm大の礫	2.5YR5/1 黄灰	
70	158	C区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部	10%	(6.5)		(13.4)		2mm以下の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
70	159	C区	SX04-C	土師器	く字甕	口縁部胴部	15%	(9.6)	(13.0)	(14.8)		0.5～2mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
70	160	C区	SX04-C	土師器	台付甕	脚部	10%	(5.7)			(10.5)	1～3mm大の礫	2.5YR7/4 淡赤橙	
70	161	C区	SX04-C	土師器	台付甕	脚部	10%	(5.0)			11.1	1～8mm大の礫多い	5YR7/2 明褐灰	
70	162	C区	SX04-C	土師器	台付甕	脚部	30%	(3.9)			(12.0)	2～3mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
70	163	C区	SX04-C	土師器	壷	底部	10%	(3.5)			6.2	1～5mm大の礫	10YR8/3 浅黄橙	
71	164	C区	SX04-D	土師器	壷	口縁部	5%	(5.0)		(16.9)		1.5～5mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
71	165	C区	SX04-D	土師器	広口壷	口縁部	10%	(7.2)		(16.6)		1～5mm大の礫	10YR8/4 浅黄橙	
71	166	C区	SX04-D	土師器	壷	胴部底部	60%	(28.2)	27.4		7.6	0.5～3mm大の礫多い	7.5YR8/4 浅黄橙	
71	167	C区	SX04-D	土師器	壷	底部胴部	70%	(25.4)	27.0		8.5	1～3mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
71	168	C区	SX04-D	土師器	広口壷	口縁部胴部底部	80%	21.8	18.7	(11.5)	6.3	1～2mm大の礫	10YR8/4 浅黄橙	
71	169	C区	SX04-D	土師器	直口・外反　壷	口縁部	10%	(8.4)		12.45		1～3mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
71	170	C区	SX04-D	土師器	直口・外反　壷	口縁部	10%	(6.0)		(13.3)		1～4mm大の礫	10YR7/2 にぶい黄橙	
72	171	C区	SX04-D	土師器	く字甕	口縁部胴部	60%	(10.1)	14.1	14.6		白色・橙色の砂粒	7.5YR8/4 浅黄橙	
72	172	C区	SX04-D	土師器	鉢	口縁部胴部底部	90%	6.7	9.7	10.08	4.7	1～2mm大の礫	10YR8/3 浅黄橙	
72	173	C区	SX04-D	土師器	鉢	口縁部胴部底部	100%	5.7	7.7	7.0	3.7	1～2mm大の礫	10YR8/4 浅黄橙	
72	174	C区	SX04-D	土師器	鉢	口縁部胴部底部	70%	3.8		(5.25)	2.8	1～3mm大の礫	2.5Y7/2 灰黄	
72	175	C区	SX04-D	土師器	器台	口縁部胴部	30%	(5.0)		(7.7)		1～4mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
72	176	C区	SX04-D	土師器	く字甕	口縁部胴部底部	95%	18.9	16.2	14.9	8.4	1～2mm大の礫	5YR7/6 橙	
72	177	C区	SX04-D	土師器	く字甕	口縁部胴部底部	15%	19.15	(15.55)	(13.5)	7.6	1～5mm大の礫	7.5YR7/2 明褐灰	
72	178	C区	SX04-D	土師器	く字甕	口縁部胴部	70%	(19.8)	(24.0)	(17.6)		2mm以下の礫	7.5YR8/2 灰白	
73	179	C区	SX04-E	土師器	二重口縁壷	口縁部胴部底部	80%	28.95	23.35	18.5	8.4	1～6mm大の礫多い	5YR7/6 橙	
73	180	C区	SX04-E	土師器	鉢	口縁部胴部	35%	(12.3)		(25.4)		1～5mmの礫	7.5YR8/4 浅黄橙	

第 10 表　土器・陶磁器観察表(6)

図版番号	挿図番号	調査区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ 器高 (cm)	体部径 器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	備考
73	181	C 区	SX04-E	土師器	鉢	口縁部胴部	10%	(9.4)	(25.8)	(27.0)		1～5mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
73	182	C 区	SX04-E	土師器	鉢	口縁部胴部	5%	(8.6)	(23.1)	(24.0)		1～5mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
73	183	C 区	SX04-E	土師器	鉢	口縁部胴部底部	90%	5.9		11.5	4.3	2mm以下の礫	5YR6/8 橙	
73	184	C 区	SX04-E	土師器	鉢	口縁部胴部底部	80%	4.6		9.7	4.0	0.1～0.5mm大の礫多い	5YR4/1 灰	
73	185	C 区	SX04-E	土師器	鉢	胴部底部	45%	(4.0)			3.6	1～4mm大の礫	5YR7/6 橙	
73	186	C 区	SX04-E	土師器	高坏	口縁部胴部	70%	(9.0)		24.0		1～6mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
73	187	C 区	SX04-E	土師器	高坏	脚部	30%	(8.9)			11.8	1～3mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
73	188	C 区	SX04-E	土師器	高坏	脚部	15%	(7.1)			(13.9)	1～3mm大の礫	5YR8/2 灰白	
74	189	C 区	SX04-E	土師器	く字甕	口縁部胴部脚部	70%	27.6	23.3	19.5	10.1	1～3mm大の礫	7.5YR6/4 にぶい橙	
74	190	C 区	SX04-E	土師器	く字甕	口縁部胴部	40%	(14.5)	(21.1)	(20.1)		2～3mm大の礫多い	N6/ 灰	
74	191	C 区	SX04-E	土師器	く字甕	口縁部胴部	20%	(11.4)	(23.0)	16.5		1～2.5mm大の礫多い	7.5YR8/2 灰白	
74	192	C 区	SX04-E	土師器	く字甕	口縁部胴部	30%	(12.4)	(18.7)	(19.8)		1～3mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
74	193	C 区	SX04-E	土師器	台付甕	脚部	5%	(5.8)			(9.9)	1～5mm大の礫多い	10YR7/2 にぶい黄橙	
74	194	C 区	SX04-E	土師器	台付甕	脚部	5%	(9.15)			(9.9)	1～5mm大の礫多い	7.5YR8/1 灰白	
74	195	C 区	SX04-E	土師器	台付甕	脚部	30%	(5.6)			10.95	1～5mm大の礫多い	10YR7/3 にぶい黄橙	
75	196	C 区	Q-4	弥生	壷	口縁部	5%	(6.8)		(19.0)		1～3mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
75	197	C 区	Q-4	弥生	壷	口縁部	5%	(6.3)		(16.6)		1～3mm大の礫	7.5YR8/1 灰白	
75	198	C 区	Q-4	土師器	二重口縁壷	口縁部	20%	(8.2)		(21.0)		灰色・橙色の砂粒	5YR8/4 淡橙	
75	199	C 区	P-3	土師器	二重口縁壷	口縁部	10%	(6.5)		(14.4)		砂粒含む	2.5YR7/8 橙	
75	200	C 区	TP-12	土師器	二重口縁壷	口縁部	5%	(7.3)		(14.1)		1～5mm大の礫	5YR6/8 橙	
75	201	C 区	R-5	土師器	壷	口縁部	5%	(7.1)		(15.0)		1～4mm大の礫	7.5YR8/1 灰白	
75	202	C 区	Q-3	土師器	壷	口縁部	10%	(6.5)		15.5		1～5mm大の礫	2.5Y7/1 灰白	
75	203	C 区	Q-4	土師器	壷	口縁部	10%	(7.5)		(14.7)		7mm以下の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
75	204	C 区	P-3	土師器	壷	胴部	10%	(3.8)				0.5～2.5mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
75	205	C 区	Q-4	土師器	広口壷	口縁部胴部底部	40%	29.9	(27.0)	(19.2)	7.7	2mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
76	206	C 区	R-4	土師器	広口壷	口縁部胴部底部	60%	30.5	28.0	16.8	8.6	1～3mm大の礫	7.5YR8/6 浅黄橙	
76	207	C 区	—	土師器	広口壷	口縁部	10%	(6.5)		(20.0)		0.5～2.5mm大の礫	7.5YR7/4 にぶい橙	
76	208	C 区	Q-5	土師器	広口壷	口縁部胴部	10%	(6.7)		13.4		1～3mm大の礫	5YR7/6 橙	
76	209	C 区	—	土師器	広口壷	口縁部	5%	(5.4)		(15.4)		1～3mm大の礫	7.5YR7/4 にぶい橙	
76	210	C 区	—	土師器	広口壷	口縁部	5%	(5.5)		(18.6)		1～6mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
76	211	C 区	Q-4	土師器	壷	胴部	45%	(19.8)	21.0			1～7mm大の礫多い	7.5YR8/3 浅黄橙	
77	212	C 区	Q-4	土師器	広口壷	口縁部胴部底部	40%	32.3	24.45	(14.8)	12.4	1～6mm大の礫	2.5Y8/4 淡黄	
77	213	C 区	R-5	土師器	広口壷	口縁部	20%	(11.6)		(14.0)		1～5mm大の礫	2.5Y7/1 灰白	
77	214	C 区	Q-4	土師器	広口壷	口縁部胴部	15%	10.8		(13.9)		2～3mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
77	215	C 区	—	土師器	広口壷	口縁部	10%	(5.2)		12.0		1～3mm大の礫	7.5YR7/6 橙	
77	216	C 区	—	土師器	壷	底部	10%	(3.7)			10.0	1～6mm大の礫	2.5YR7/6 橙	
77	217	C 区	—	土師器	壷	底部	5%	(2.3)			7.4	1～4mm大の礫	7.5YR7/6 橙	

第10表　土器・陶磁器観察表(7)

図版番号	挿図番号	C区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ 器高(cm)	体部径 器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	備考
77	218	C区	—	土師器	壷	底部	5%	(2.4)			7.8	1～4mm大の礫	7.5YR7/1 明褐灰	
77	219	C区	P-3	土師器	小型壷	口縁部胴部	30%	(9.6)	(11.2)	(9.4)		1～3mm大の礫	2.5YR7/6 橙	
77	220	C区	Q-4	土師器	小型壷	胴部	20%	(6.5)	(12.4)			1～6mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
77	221	C区	Q-4	土師器	小型壷	口縁部	10%	(5.7)		11.6		1～4mm大の礫	5YR6/4 にぶい橙	
77	222	C区	Q-4	土師器	瓢壷	口縁部胴部	40%	(17.8)	(14.5)	(8.0)		1～2mm大の礫	2.5YR7/4 淡赤橙	
77	223	C区	Q-4	土師器	壷	胴部	20%	(8.0)	(13.7)			0.5mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
78	224	C区	Q-4	土師器	小型壷	口縁部	50%	(9.0)		9.8		1～6mm大の礫	5YR7/6 橙	
78	225	C区	Q-4	土師器	鉢	口縁部胴部底部	75%	16.3	(13.9)	(14.5)	7.4	0.5～1mmの礫	10R5/4 赤褐	
78	226	C区	Q-4	土師器	鉢	口縁部胴部底部	80%	13.1	17.5	16.1	6.2	1～3mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
78	227	C区	Q-4	土師器	鉢	口縁部胴部底部	60%	10.5	11.9	10.9	5.0	0.5～1mm大の礫	N2/0 黒	
78	228	C区	Q-5	土師器	鉢	口縁部胴部底部	95%	6.4		12.0	3.5	1～2mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
78	229	C区	Q-4	土師器	鉢	口縁部胴部底部	40%	6.7		(11.6)	3.2	0.5mm大の礫	10YR8/4 浅黄橙	
78	230	C区	Q-4	土師器	鉢	口縁部胴部底部	40%	(5.4)		(12.1)	(3.0)	1mm大の礫	7.5YR7/6 橙	
78	231	C区	Q-4	土師器	鉢	口縁部胴部底部	100%	6.5		11.8	3.7	1～3mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
78	232	C区	Q-5	土師器	鉢	口縁部胴部底部	95%	5.4		12.6	4.4	0.5～3mm大の礫	10YR8/3 浅黄橙	
78	233	C区	Q-5	土師器	鉢	口縁部胴部底部	50%	5.0		10.7	4.3	0.5～2mm大の礫	10YR8/3 浅黄橙	
78	234	C区	P-3	土師器	鉢	口縁部胴部底部	80%	5.2		10.6	3.5	0.5～2.5mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
78	235	C区	Q-4	土師器	鉢	口縁部胴部底部	60%	6.8		(10.3)	4.8	2～3mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
78	236	C区	Q-5	土師器	鉢	口縁部胴部底部	70%	6.0	8.4	7.4	3.9	0.5mm大の礫	2.5Y7/2 灰黄	
78	237	C区	R-5	土師器	鉢	口縁部胴部底部	80%	6.2		(6.5)	4.0	1～4mm大の礫	10YR8/1 灰白	
78	238	C区	TP-11	土師器	鉢	口縁部胴部底部	90%	6.1		7.0	2.6	1～4mm大の礫	5YR7/6 橙	
78	239	C区	R-5	土師器	鉢	口縁部胴部底部	95%	5.4		6.4	3.9	1～3mm大の礫	10YR8/1 灰白	
79	240	C区	Q-5	土師器	鉢	口縁部胴部底部	45%	(5.0)		(7.2)	3.7	1～2.5mm大の礫	10YR8/1 灰白	
79	241	C区	—	土師器	鉢	口縁部胴部底部	50%	5.0		(7.5)	3.3	0.5～2.5mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
79	242	C区	P-3	土師器	小型平底土器	口縁部胴部底部	80%	6.6	7.5	9.8	3.4	0.5～1mm大の礫	2.5YR6/4 にぶい橙	
79	243	C区	Q-4	土師器	高坏	口縁部胴部	20%	(7.7)		(25.2)		1～7mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
79	244	C区	Q-4	土師器	高坏	口縁部胴部脚部	70%	11.8		15.6	10.05	2～3mm大の礫	10R6/8 赤橙	
79	245	C区	P-3	土師器	高坏	口縁部胴部	80%	(10.0)		13.5		1～3mm大の礫多い	2.5YR6/4 にぶい橙	
79	246	C区	Q-4	土師器	高坏	口縁部胴部脚部	80%	8.1		11.3	(6.9)	1mm大の礫	5YR7/6 橙	
79	247	C区	TP-8	土師器	高坏	口縁部胴部	90%	(7.9)		12.0		1～5mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
79	248	C区	TP-5	土師器	高坏	脚部	25%	(7.5)			6.2	1～4mm大の礫	2.5Y6/1 黄灰	
79	249	C区	Q-4	土師器	高坏	口縁部胴部	70%	(7.0)		11.6		0.5～5mm大の礫	7.5YR8/2 灰白	
79	250	C区	Q-4	土師器	高坏	口縁部胴部	50%	(5.9)		10.6		0.5～7mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
79	251	C区	Q-4	土師器	高坏	口縁部胴部	50%	(7.1)		(10.0)		1～2mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
79	252	C区	—	土師器	高坏	口縁部胴部	50%	(3.6)		10.4		1～3mm大の礫	5YR7/6 橙	
79	253	C区	—	土師器	高坏	胴部	65%	(6.2)				1～5mm大の礫	7.5YR8/3 浅黄橙	
79	254	C区	—	土師器	高坏	脚部	45%	(7.4)			(11.0)	0.5～2mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	

第10表　土器・陶磁器観察表(8)

図版番号	挿図番号	C区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ 器高(cm)	体部径 器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	備考
79	255	C区	P-3	土師器	高坏	脚部	10%	(8.8)			9.4	1～3mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
80	256	C区	—	土師器	高坏	脚部	40%	(7.0)			12.5	0.5～2mm大の礫	5YR7/6 橙	
80	257	C区	—	土師器	高坏	脚部	40%	(8.5)			10.7	0.1～0.5mm大の礫多い	7.5YR8/1 灰白	
80	258	C区	—	土師器	高坏	脚部	30%	(7.7)			(9.8)	0.5～5mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
80	259	C区	Q-4	土師器	高坏	脚部	30%	(8.2)			(12.0)	0.5～3mm大の礫	5YR8/4 淡橙	
80	260	C区	TP-8	土師器	高坏	脚部	10%	(4.5)			(13.4)	1～2.5mm大の礫	7.5YR7/6 橙	
80	261	C区	—	土師器	高坏	脚部	40%	(5.9)			(9.8)	1～2mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
80	262	C区	Q-4	土師器	高坏	脚部	50%	(5.7)			7.2	1～5mm大の礫	2.5YR7/6 橙	
80	263	C区	Q-4	土師器	高坏	脚部	40%	(4.6)			(7.0)	1～2mm大の礫	5YR8/3 淡橙	
80	264	C区	Q-5	土師器	器台	口縁部胴部脚部	25%	(6.9)				1～5mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
80	265	C区	Q-4	土師器	器台	口縁部胴部脚部	80%	(5.5)		(9.0)		0.5～4mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
80	266	C区	TP-5	土師器	器台	口縁部胴部	85%	(4.7)		7.8		1～4mm大の礫	5YR7/6 橙	
80	267	C区	Q-4	土師器	S字甕	口縁部	20%	(6.5)		16.3		0.1mm以下の礫	10YR7/3 にぶい黄橙	
80	268	C区	Q-5	土師器	S字甕	口縁部	5%	(3.6)		(20.0)		0.1mm以下の礫	5YR4/1 褐灰	
80	269	C区	Q-3	土師器	く字甕	口縁部胴部底部	95%	30.8	24.4	20.1	10.0	やや粗	7.5YR6/2 灰褐	
81	270	C区	Q-4	土師器	く字甕	口縁部胴部	50%	(14.7)	(20.4)	17.2		1～3mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
81	271	C区	TP-8	土師器	く字甕	口縁部胴部	50%	(16.0)	(20.5)	14.2		1～3mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
81	272	C区	Q-5	土師器	く字甕	口縁部	30%	(16.2)	(22.4)	(18.6)		1～7mm大の礫	2.5YR7/6 橙	
81	273	C区	—	土師器	く字甕	口縁部胴部	15%	(14.9)	(23.9)	(19.3)		1～4mm大の礫	2.5Y6/1 黄灰	
81	274	C区	—	土師器	く字甕	口縁部胴部	10%	(10.3)	(23.4)	(19.8)		2～4mm大の礫	N5/0 灰	
81	275	C区	Q-4	土師器	く字甕	口縁部胴部	10%	(9.6)	(25.8)	(20.1)		1～2mm大の礫	10YR7/2 にぶい黄橙	
81	276	C区	—	土師器	く字甕	口縁部	30%	(9.1)		(16.6)		0.5mm以下の礫	5YR7/4 にぶい橙	
81	277	C区	Q-4	土師器	く字甕	口縁部	5%	(5.4)		(26.0)		1～6mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
82	278	C区	TP-8	土師器	く字甕	口縁部胴部	30%	(16.7)	(22.4)	17.4		0.5～3mm大の礫	7.5YR7/4 にぶい橙	
82	279	C区	P-4	土師器	く字甕	口縁部	5%	(8.1)		(19.0)		1～6mm大の礫	2.5YR5/4 にぶい赤褐	
82	280	C区	—	土師器	く字甕	口縁部胴部	15%	(13.0)	(20.0)	(19.4)		1～6mm大の礫	7.5YR7/2 明褐灰	
82	281	C区	Q-4	土師器	く字甕	口縁部胴部	15%	(14.6)	(23.3)	(20.4)		1～3mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
82	282	C区	R-5	土師器	く字甕	口縁部胴部	20%	(18.5)	(14.25)	(16.0)		1～6mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
82	283	C区	—	土師器	甕	脚部	5%	(8.7)			(9.2)	1～6mm大の礫	5YR8/3 淡橙	
82	284	C区	Q-4	土師器	甕	脚部	10%	(8.2)			11.5	1～3mm大の礫	5YR8/1 灰白	
82	285	C区	Q-4	土師器	甕	脚部	10%	(9.5)			10.0	1～3mm大の礫	2.5Y7/1 灰白	
82	286	C区	—	土師器	甕	脚部	5%	(8.0)			(8.4)	1～5mm大の礫	5YR8/1 灰白	
82	287	C区	Q-4	土師器	甕	脚部	10%	(6.5)			9.9	0.5～3mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
82	288	C区	—	土師器	甕	脚部	10%	(6.8)				1～5mm大の礫	7.5YR8/1 灰白	
82	289	C区	—	土師器	甕	脚部	15%	(6.0)			11.0	0.5～2mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
83	290	C区	TP-10	土師器	甕	脚部	15%	(6.2)			10.65	1～3mm大の礫	2.5YR6/4 にぶい橙	
83	291	C区	Q-4	土師器	甕	脚部	10%	(7.2)			(10.6)	1～4mm大の礫	7.5YR8/1 灰白	

第10表　土器・陶磁器観察表(9)

図版番号	挿図番号	調査区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ器高(cm)	体部径器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	備考
83	292	C区	P-2	土師器	甕	脚部	20%	(5.4)			9.6	0.5～1.5mm大の礫	10YR7/2 にぶい黄橙	
83	293	C区	—	土師器	甕	脚部	10%	(6.5)			9.4	1～4mm大の礫	5YR8/2 灰白	
83	294	C区	Q-4	土師器	甕	脚部	5%	(5.0)			(10.0)	2～3mm大の礫	5YR7/2 明褐灰	
83	295	C区	Q-4	土師器	く字甕	口縁部胴部脚部	40%	16.5	(16.7)	(16.1)	8.1	1～3mm大の礫	5YR7/6 橙	
83	296	C区	R-5	土師器	く字甕	口縁部胴部	30%	(9.9)	(13.9)	(13.0)		0.5～2mm大の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
83	297	C区	P-3	土師器	く字甕	口縁部胴部	30%	(7.5～9.0)	(13.4)	(13.9)		0.5～1mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
83	298	C区	Q-3	土師器	甕	脚部	10%	(4.2)			(8.8)	3～5mm大の礫	5YR7/4 にぶい橙	
83	299	C区	TP-8	土師器	甕	脚部	5%	(5.9)			(7.6)	1～3mm大の礫	10YR7/2 にぶい黄橙	
83	300	C区	Q-4	土師器	甕	脚部	10%	(4.5)			(8.6)	2～4mm大の礫	2.5YR7/1 灰白	
83	301	C区	Q-4	土師器	甕	脚部	15%	(4.6)			8.0	1～4mm大の礫	5YR8/3 淡橙	
83	302	C区	Q-4	土師器	甕	脚部	10%	(4.0)			7.3	0.5～7mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
83	303	C区	Q-4	土師器	甕	脚部	20%	(4.1)			6.9	1～4mm大の礫	7.5YR8/4 浅黄橙	
83	304	C区	TP-12	土師器	杯	口縁部胴部底部	50%	3.1		(11.1)	(6.0)	1mm大の礫	2.5YR7/6 橙	
92	326	D区	M-8	土師器	二重口縁壺	口縁部	5%	(3.5)		(16.0)		0.5mm大の礫	7.5YR7/4 にぶい橙	
92	327	D区	—	土師器	壺	底部	5%	(2.0)			(7.8)	1～3mm大の礫	7.5YR8/2 灰白	
92	328	D区	M-8・9	土師器	壺	底部	10%	(3.0)			(5.3)	0.3mm以下の礫	7.5YR7/3 にぶい橙	
92	329	D区	M-8	土師器	小型壺	胴部底部	80%	(10.2)	(13.1)		(3.0)	0.1mm以下の礫	5YR6/6 橙	
92	330	D区	M-8	土師器	高坏	頸部	10%	(4.0)				0.5mm以下の礫	7.5YR7/4 にぶい橙	
92	331	D区	L-9	土師器	高坏	脚部	5%	(3.1)				0.5mm以下の礫	5YR7/6 橙	
93	332	D区	M-9	須恵器	杯蓋	口縁部	10%	(2.6)		(13.9)		0.5～1mm大の礫	N5/0 灰	
93	333	D区	K-8	須恵器	杯身	口縁部	10%	(2.9)		(16.1)		0.1mm以下の礫	7.5YR7/4 にぶい橙	
93	334	D区	M-8	須恵器	杯身	底部	15%	(0.9)			(10.3)	0.5mm大の礫	7.5Y8/1 灰白	
93	335	D区	M-8	須恵器	杯身	底部	20%	(2.2)			(9.6)	0.5mm大の礫	5Y7/1 灰白	
93	336	D区	M-8	須恵器	杯身	底部	15%	(2.5)			(10.1)	1mm大の礫	5Y8/1 灰白	
93	337	D区	M-8	須恵器	摘蓋	蓋	30%	(4.2)		(18.5)		0.1mm以下の礫	5Y7/1 灰白	
93	338	D区	M-8	須恵器	摘蓋	蓋	40%	(2.9)				0.1mm以下の礫	5Y7/2 灰白	
93	339	D区	M-8	須恵器	摘蓋	蓋	15%	(1.5)				0.1mm以下の礫	7.5Y7/1 灰白	
93	340	D区	M-8	須恵器	摘蓋	蓋	10%	(1.65)				0.1mm以下の礫	N7/0 灰白	
93	341	D区	M-8	須恵器	摘蓋	蓋	20%	(2.6)		(15.6)		0.1mm以下の礫	5Y7/1 灰白	
93	342	D区	M-8	須恵器	摘蓋	蓋	10%	(2.4)		(13.8)		0.1mm以下の礫	7.5YR7/1 灰白	
93	343	D区	M-8	須恵器	摘蓋	蓋	15%	(2.0)		(14.8)		0.1mm以下の礫	7.5Y7/1 灰白	
93	344	D区	M-8	須恵器	摘蓋	蓋	10%	(1.8)		(15.6)		0.1mm以下の礫	5Y7/1 灰白	
93	345	D区	M-8	須恵器	摘蓋	蓋	10%	(2.9)		(15.9)		0.1mm以下の礫	N5/ 灰	
93	346	D区	M-8	須恵器	摘蓋	蓋	10%	(2.35)		(14.7)		0.1mm以下の礫	5Y7/2 灰白	
93	347	D区	M-8	須恵器	杯身	底部	15%	(4.6)			(11.8)	1mm大の礫	N6/0 灰	
93	348	D区	M-8	須恵器	杯身	底部	15%	(1.5)			(8.9)	2～4mm大の礫	N5/0 灰	
93	349	D区	Aトレンチ	須恵器	杯身	底部	20%	(1.3)			(10.0)	1mm以下の礫	10YR8/1 灰白	

第 10 表　土器・陶磁器観察表(10)

図版番号	挿図番号	D 区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ 器高 (cm)	体部径 器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	備考
93	350	D 区	M-8	須恵器	杯身	底部	20%	(1.3)			(9.5)	1mm大の礫	N6/0 灰	
93	351	D 区	M-8	須恵器	長頸壷	脚部	10%	(6.6)				0.1mm以下の礫	5Y6/1 灰	
93	352	D 区	M-8	須恵器	長頸壷	脚部	5%	(3.7)				0.1mm以下の礫	N6/0 灰	
93	353	D 区	M-8	須恵器	壷	胴部	15%	(2.4)			(8.8)	0.5mm大の礫	N7/0 灰白	
93	354	D 区	M-8	須恵器	壷	胴部底部	15%	(3.2)			(6.4)	1mm大の礫	7.5Y7/1 灰白	
93	355	D 区	—	須恵器	甕	口縁部胴部	5%	(4.3)		(19.3)		1～5mm大の礫	2.5Y8/1 灰白	
93	356	D 区	L-8	清郷	甕	口縁部	2%	(4.3)		(18.7)		0.1mm以下の礫	10YR7/4 にぶい黄橙	
93	357	D 区	L-8	清郷	甕	口縁部	3%	(4.6)		(25.5)		0.3mm以下の礫	7.5YR5/4 にぶい褐	
94	358	D 区	—	灰釉	碗	底部	40%	(2.4)			7.0	0.5～2mmの礫	N7/1 灰	
94	359	D 区	M-9	灰釉	碗	底部	40%	(1.4)			6.6	0.5mm大の礫	N7/1 灰	
94	360	D 区	L-8	灰釉	碗	胴部底部	30%	(3.9)			(7.7)	0.2mm以上の礫	7.5Y8/1 灰白	
94	361	D 区	K-9	灰釉	碗	底部	20%	(2.15)			(6.5)	0.1mm以下の礫	5Y6/1 灰	
94	362	D 区	L-8	灰釉	碗	底部	20%	(2.2)			(6.15)	0.1mm以下の礫	7.5Y7/1 灰白	
94	363	D 区	M-8	灰釉	碗	底部	30%	(3.1)			(7.35)	0.1mm以下の礫	7.5Y7/1 灰白	
94	364	D 区	SP-131	灰釉	碗	底部	20%	(2.15)			(7.4)	0.1mm以上の礫	5Y5/1 灰	
94	365	D 区	M-8	灰釉	碗	底部	50%	(2.4)			8.3	1～2mm大の礫	N7/0 灰白	
94	366	D 区	L-8	灰釉	碗	底部	25%	(2.75)			(6.9)	0.1～6mm大の礫	7.5Y6/1 灰	
94	367	D 区	L-8	灰釉	碗	底部	20%	(3.0)			(7.5)	0.5mm以下の礫	7.5Y6/1 灰	
94	368	D 区	B トレンチ	灰釉	碗	底部	40%	(1.7)			7.6	0.1mm大の礫	5Y6/1 灰	
94	369	D 区	L-9	灰釉	碗	底部	20%	(2.4)			(8.0)	0.5mm以下の礫	10Y7/1 灰白	
94	370	D 区	B トレンチ	灰釉	碗	底部	15%	(1.3)			(6.0)	0.1mm大の礫	5Y8/1 灰白	
94	371	D 区	B トレンチ	灰釉	碗	底部	15%	(2.1)			(8.0)	0.5～2mm大の礫	2.5Y8/1 灰白	
94	372	D 区	—	灰釉	碗	口縁部胴部底部	30%	3.0		(11.2)	(5.4)	0.5mm以下の礫	5Y6/1 灰	
94	373	D 区	L-8	灰釉	碗	底部	20%	(1.8)			(5.8)	0.1mm以下の礫	N7/0 灰白	
94	374	D 区	L-9	灰釉	碗	胴部底部	15%	(1.7)			(6.1)	1～2mm大の礫	10YR7/1 灰白	
94	375	D 区	SP-203	灰釉	片口	口縁部胴部	20%	(5.3)		(20.0)		2～4mm大の礫	7.5Y8/1 灰白	
94	376	D 区	B トレンチ	山茶碗	高台碗	口縁部胴部底部	70%	5.5		15.9	7.0	0.5mm大の礫	2.5Y7/1 灰白	
94	377	D 区	M-8	山茶碗	高台碗	口縁部胴部底部	50%	(5.9)		(16.2)	(6.9)	0.3mm以下の礫	10Y7/1 灰白	
95	378	D 区	SP-132	山茶碗	高台碗	口縁部胴部底部	30%	(5.5)		(14.0)	(6.1)	2～5mmの礫	N5/0 灰	
95	379	D 区	L-8	山茶碗	高台碗	口縁部胴部底部	25%	(5.4)		(16.4)	(8.0)	0.2mm以下の礫	7.5Y7/1 灰白	
95	380	D 区	B トレンチ	山茶碗	高台碗	口縁部胴部底部	25%	(5.2)		(19.0)	(6.8)	0.5mm大の礫	7.5Y7/1 灰	
95	381	D 区	M-9	山茶碗	高台碗	口縁部胴部底部	30%	(6.2)		(16.6)	(3.9)	0.5～7mm大の礫	N7/1 灰	
95	382	D 区	M-8	山茶碗	高台碗	胴部底部	60%	(3.4)			6.4	3mm大の礫	N7/0 灰白	
95	383	D 区	L-8	山茶碗	高台碗	胴部底部	30%	(4.5)			(7.4)	0.1mm以下の礫	N5/0 灰	
95	384	D 区	L-8	山茶碗	高台碗	底部	10%	(2.9)			(7.8)	0.1mm以下の礫	N6/0 灰	
95	385	D 区	L-8	山茶碗	高台碗	底部	30%	(1.8)			(6.6)	1mm以下の礫	N6/0 灰	
95	386	D 区	M-8	山茶碗	高台碗	底部	30%	(2.6)			(7.55)	0.1mm以下の礫	5Y6/1 灰	

第10表　土器・陶磁器観察表(11)

図版番号	挿図番号	D区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ器高(cm)	体部径器径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調	備考
95	387	D区	L-7	山茶碗	高台碗	底部	20%	(2.85)			(7.4)	0.1mm以下の礫	N6/0 灰	
95	388	D区	L-8	山茶碗	高台碗	底部	25%	(3.4)			(7.4)	1mm以下の礫	7.5Y7/1 灰白	
95	389	D区	L-8	山茶碗	高台碗	口縁部胴部底部	95%	2.6		9.7	4.8	5mm大の礫	N8/ 灰白	
95	390	D区	SP-23	山茶碗	高台碗	口縁部胴部底部	70%	3.0		(10.3)	5.8	1mm以下の礫	10Y6/1 灰	
95	391	D区	L-9	山茶碗	小碗	口縁部胴部底部	30%	3.45		(10.9)	(5.7)	0.5mm以下の礫	10Y6/1 灰	
95	392	D区	L-9	山茶碗	小碗	口縁部胴部底部	25%	2.8		(9.4)	(4.5)	1mm以下の礫	10Y5/1 灰	
95	393	D区	Cトレンチ	山茶碗	小碗	口縁部胴部底部	20%	(3.4)		(10.6)	(6.0)	0.5mm大の礫	N5/0 灰	
95	394	D区	排土	山茶碗	小碗	口縁部胴部底部	15%	2.3		(10.0)	(3.8)	1mm大の礫	7.5Y8/1 灰白	
95	395	D区	L-8	山茶碗	小碗	胴部底部	40%	(1.5)			(4.9)	1mm以下の礫	10Y6/1 灰	
95	396	D区	L-8	山茶碗	小碗	底部	20%	(1.4)			(4.7)	0.5mm以下の礫	10Y6/1 灰	
95	397	D区	Aトレンチ	山茶碗	小碗	底部	20%	(1.0)			(4.9)	0.5mm大の礫	N7/1 灰	
95	398	D区	L-9	山茶碗	小碗	底部	20%	(1.5)			(4.6)	0.5～1mm以下の礫	N7/0 灰白	
96	399	D区	M-8	山茶碗	高台碗	口縁部胴部底部	40%	6.2		(17.2)	(8.2)	1～2mmの礫	N6/0 灰	
96	400	D区	L-7	山茶碗	高台碗	底部	30%	(2.75)			(7.3)	0.5mm大の礫	7.5Y7/1 灰白	
96	401	D区	L-9	山茶碗	高台碗	底部	20%	(3.3)			6.8	1mmの礫	N6/0 灰	
96	402	D区	L-7	山茶碗	高台碗	底部	30%	(2.3)			(7.7)	0.5mm以下の礫	5Y7/1 灰白	
96	403	D区	L-9	山茶碗	高台碗	底部	20%	(2.2)			(7.9)	0.5mm大の礫	N6/0 灰	
96	404	D区	L-9	山茶碗	高台碗	胴部底部	25%	(2.9)			(8.0)	0.5mm大の礫	N7/1 灰白	
96	405	D区	L-8	山茶碗	高台碗	底部	30%	(2.9)			(8.5)	0.1mm以下の礫	7.5Y7/1 灰白	
96	406	D区	L-9	山茶碗	高台碗	底部	20%	(2.1)			(7.5)	1mm以下の礫	N5/0 灰	
96	407	D区	L-9	山茶碗	高台碗	底部	40%	(2.0)			(7.3)	0.1mm以下の礫	5Y6/1 灰	
96	408	D区	L-8	山茶碗	高台碗	底部	20%	(2.85)			(7.3)	0.1mm以下の礫	N6/0 灰	
96	409	D区	L-8	山茶碗	高台碗	底部	20%	(2.0)			(6.4)	0.5mm以下の礫	10Y6/1 灰	
96	410	D区	排土	山茶碗	小碗	胴部底部	25%	(1.1)			6.2	0.5mm以下の礫	5Y7/1 灰	
96	411	D区	排土	山茶碗	小碗	底部	25%	(1.9)			4.4	0.5mm以下の礫	10YR7/1 灰白	
96	412	D区	K-9	山茶碗	小碗	胴部底部	20%	(1.1)			(4.5)	0.5mm以下の礫	N5/0 灰	
96	413	D区	排土	山茶碗	小碗	底部	30%	(2.2)			(4.7)	0.5mm以下の礫	7.5Y6/1 灰	
96	414	D区	L-9	山茶碗	小碗	底部	10%	(1.4)			(4.3)	0.2mm以下の礫	N6/0 灰	
96	415	D区	L-8	山茶碗	小碗	口縁部胴部底部	10%	(2.75)		(9.2)	(4.5)	0.5mm以下の礫	7.5Y6/1 灰	
96	416	D区	L-8	山茶碗	高台碗	底部	50%	(3.7)			(3.7)	0.1mm以下の礫	5Y7/1 灰白	
96	417	D区	M-9	山茶碗	小碗	底部	20%	(2.6)			(4.0)	0.1mm以下の礫	N7/0 灰白	
96	418	D区	L-9	山茶碗	高台碗	底部	20%	(4.1)			(8.4)	0.1mm以下の礫	7.5Y7/2 灰白	
96	419	D区	SP-184	山茶碗	高台碗	底部	30%	(1.7)			(7.6)	1mm以下の礫	10Y7/1 灰白	
96	420	D区	M-8	山茶碗	高台碗	胴部底部	25%	(4.5)			6.1	4～6mm大の礫	7.5Y7/1 灰白	
96	421	D区	Bトレンチ	山茶碗	高台碗	底部	20%	(2.3)			(8.0)	0.5mm大の礫	5Y6/1 灰	
96	422	D区	Bトレンチ	山茶碗	高台碗	胴部底部	20%	(2.2)			(7.6)	0.5mm大の礫	N6/0 灰	
96	423	D区	L-8	山茶碗	高台碗	底部	70%	(1.8)			6.8	1～3mm大の礫	7.5Y6/1 灰	

第 10 表　土器・陶磁器観察表(12)

図版番号	挿図番号	D 区	出土位置	種別	器種	部位	残存率	高さ 器高 (cm)	体部径 器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	備考
96	424	D 区	L-9	山茶碗	高台碗	底部	15%	(1.65)			(6.8)	0.1mm以上の礫	7.5Y6/1 灰	
96	425	D 区	SP-210	山茶碗	高台碗	底部	20%	(2.6)			(7.9)	1mm以下の礫	10Y7/1 灰白	

第 11 表　木製品観察表

図版番号	挿図番号	器種	時期	樹種	木取り	区	グリッド	遺構・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
84	305	鍬	古墳時代前期	-	柾目	C 区	Q-3・4	SX03	(23.9)	(6.4)	4.4	
84	306	鋤の把手	古墳時代前期	-	板目	C 区	Q-4	-	(9.4)	(5.75)	2.3	
84	307	刳物	古墳時代前期	スギ	板目	C 区	Q-3・4	SX03	(36.5)	(14.3)		高さ 12.3cm
84	308	刳物	古墳時代前期	スギ	柾目	C 区	Q-3・4	SX03	(79.8)	(9.2)	8.2	器厚 1.7cm
84	309	刳物	古墳時代前期	-	板目	C 区	Q-3・4	SX03	(9.4)	(5.75)	2.3	
84	310	角栓	古墳時代前期	-	板目	C 区	Q-3・4	SX03	(15.1)	(5.5)	4.7	
84	311	梯子	古墳時代前期	スギ	板目	C 区	Q-3・4	SX03	183.9	29	3.0	
85	312	梯子	古墳時代前期	スギ	柾目	C 区	Q-3・4	SX03	80.8	(13.8)	5.0	
85	313	板材	古墳時代前期	スギ	柾目	C 区	Q-3・4	SX03	(81.5)	18.3	2.1	
85	314	板材	古墳時代前期	スギ	柾目	C 区	Q-3・4	SX03	85.4	32.8	3.0	
86	315	板材	古墳時代前期	スギ	柾目	C 区	Q-3・4	SX03	87.4	28.2	2.9	
86	316	板材	古墳時代前期	スギ	板目	C 区	Q-3・4	SX03	(171.7)	27	3.3	
86	317	板材	古墳時代前期	スギ	板目	C 区	Q-3・4	SX03	(162.4)	29.8	2.2	
87	318	柱	古墳時代前期	クリ	芯持ち材	C 区	Q-3・4	SX03	(140.4)	11.8	9.2	
87	319	柱状材	古墳時代前期	コナラ	芯持ち材	C 区	Q-3・4	SX03	105.3	11.1	9.4	
87	320	礎板	古墳時代前期	スギ	板目	C 区	Q・P-3・4	SB07	42.5	28.5	5.0	
87	321	礎板	古墳時代前期	クリ	板目	C 区	TP9	-	18.1	16.1	3.9	
87	322	礎板	古墳時代前期	クリ	板目	C 区	R-6	SP62	20.7	14.6	3.2	

第 12 表　石器・石製品観察表

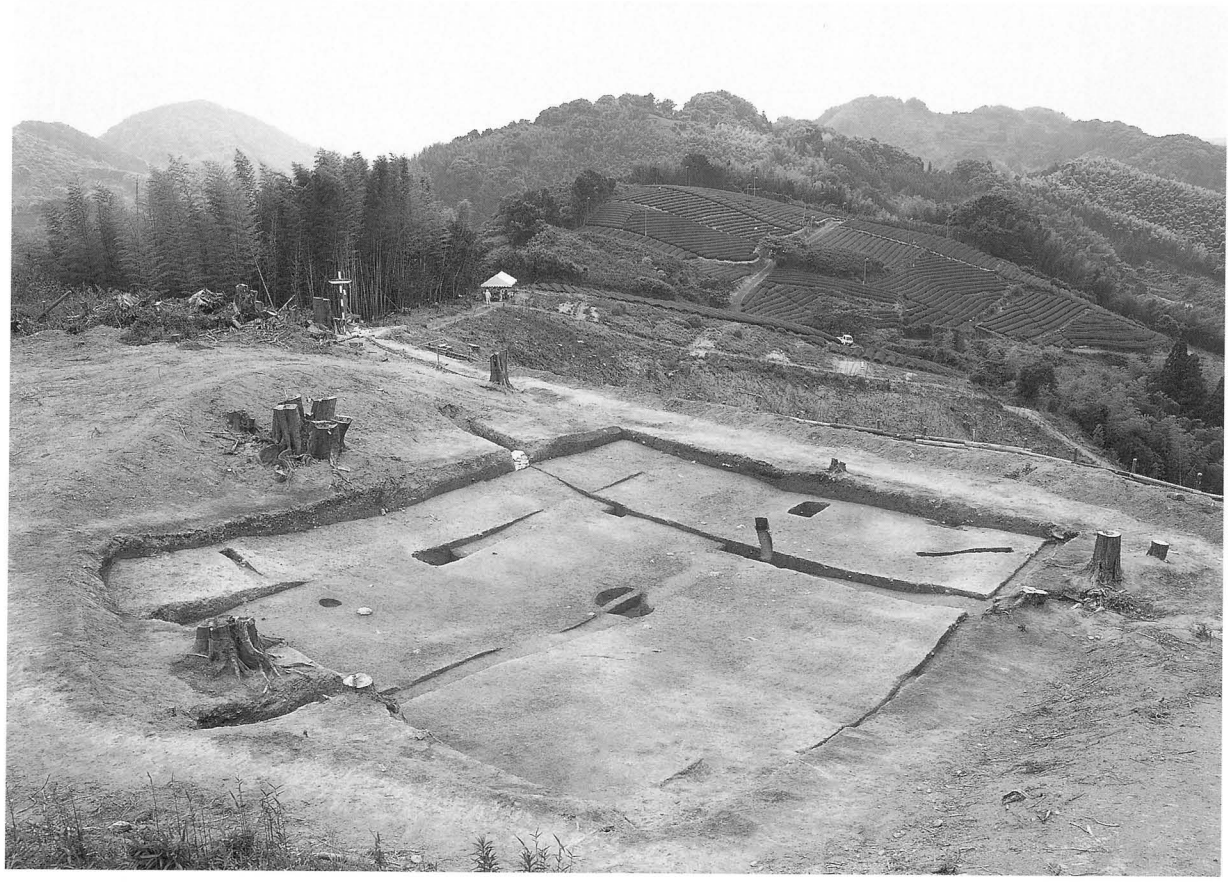
図版番号	挿図番号	器種	材質	区	層位・遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
88	323	石鏃	珪質頁岩	-	表採	4.6	2.2	0.45	3.2	確認調査その 4
88	324	打製石斧	砂岩	B	北西谷部	13.5	4.7	2.0	164.4	
88	325	砥石	砂岩	A	表採	7.25	2.55	1.8	49.5	

第13表　種子観察表

番号	種子同定	区	グリッド	層位・遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	残存率	備考
1	モモ核	C	南側	包含層	2.2	2.35	(0.97)	45%	
2	モモ核	C	Q-3	包含層	(2.27)	2.14	1.84	90%	
3	モモ核	C	Q-3	包含層	(1.9)	1.99	1.72	80%	
4	モモ核	C	Q-3	包含層	2.3	2.35	1.8	95%	
5	モモ核	C	Q-3	包含層	2.4	2.11	1.94	98%	
6	モモ核	C	Q-3	包含層	(3.17)	(2.34)	(1.6)	40%	
7	モモ核	C	Q-3	包含層	(1.96)	(1.22)	(1.71)	45%	
8	モモ核	C	Q-3	包含層	(1.98)	(1.59)	(0.80)	50%	
9	オニグルミ核	C	S-6	包含層	(2.17)	(1.99)	(1.89)	45%	
10	モモ核	C	S-6	包含層	(2.37)	(2.51)	(2.29)	80%	
11	モモ核	C	S-6	包含層	1.94	1.81	1.63	100%	
12	モモ核	C	S-6	包含層	1.93	1.85	1.6	95%	
13	モモ核	C	S-6	包含層	2.13	1.80	(0.85)	45%	
14	モモ核	C	S-6	包含層	2.19	(1.7)	(0.89)	50%	
15	モモ核	C	Q-4	包含層	2.10	(1.52)	(1.6)	35%	
16	モモ核	C	Q-4	包含層	2.16	(1.85)	1.67	90%	
17	モモ核	C	Q-4	包含層	1.82	1.57	1.42	95%	
18	モモ核	C	Q-4	包含層	2.25	2.13	1.83	90%	
19	モモ核	C	Q-4	包含層	2.47	2.25	1.78	100%	
20	モモ核	C	Q-4	包含層	2.48	2.25	1.83	100%	
21	モモ核	C	Q-4	包含層	2.39	2.18	1.81	95%	
22	モモ核	C	Q-4	包含層	2.38	2.11	1.80	100%	
23	モモ核	C	Q-4	包含層	2.30	1.86	1.72	95%	
24	モモ核	C	Q-4	包含層	2.46	2.22	1.78	100%	
25	モモ核	C	Q-4	包含層	2.22	2.15	1.74	100%	
26	モモ核	C	Q-4	包含層	2.40	2.25	1.81	95%	
27	モモ核	C	Q-4	包含層	2.33	2.08	1.69	100%	
28	モモ核	C	Q-4	包含層	2.33	2.11	1.84	100%	
29	モモ核	C	Q-4	包含層	2.12	2.05	1.72	100%	
30	モモ核	C	Q-4	包含層	2.20	2.11	1.64	100%	
31	モモ核	C	Q-4	包含層	2.22	2.14	1.72	100%	
32	モモ核	C	Q-4	包含層	2.34	2.14	1.77	100%	
33	モモ核	C	Q-4	包含層	2.19	19.1	1.73	100%	
34	モモ核	C	Q-4	包含層	2.22	2.06	(1.66)	90%	
35	モモ核	C	Q-4	包含層	2.22	2.11	1.75	100%	
36	モモ核	C	Q-4	包含層	2.25	2.04	1.75	100%	
37	モモ核	C	Q-4	包含層	2.16	2.04	1.63	100%	
38	モモ核	C	Q-4	包含層	(2.01)	1.96	1.67	80%	
39	モモ核	C	Q-4	包含層	(2.03)	(2.03)	(1.69)	70%	
40	モモ核	C	Q-4	包含層	2.08	1.88	(1.67)	90%	
41	モモ核	C	Q-4	包含層	2.04	1.93	1.67	100%	
42	モモ核	C	Q-4	包含層	2.12	2.00	1.75	100%	
43	モモ核	C	Q-4	包含層	(1.99)	1.72	1.44	100%	
44	モモ核	C	Q-4	包含層	2.05	1.83	1.58	100%	
45	モモ核	C	Q-4	包含層	(2.05)	(1.59)	(1.92)	70%	
46	モモ核	C	Q-4	包含層	(1.99)	(1.68)	(0.74)	40%	
47	モモ核	C	Q-4	包含層	(1.87)	(1.51)	(1.08)	70%	
48	モモ核	C	Q-4	包含層	2.28	2.23	1.79	100%	
49	モモ核	C	Q-4	包含層	(2.13)	(1.86)	1.79	70%	
50	モモ核	C	Q-4	包含層	(2.36)	2.25	(0.91)	50%	
51	モモ核	C	SX-03	包含層	2.01	1.77	1.52	90%	
52	モモ核	C	SX-03	包含層	2.35	2.11	0.93	50%	

写　真　図　版

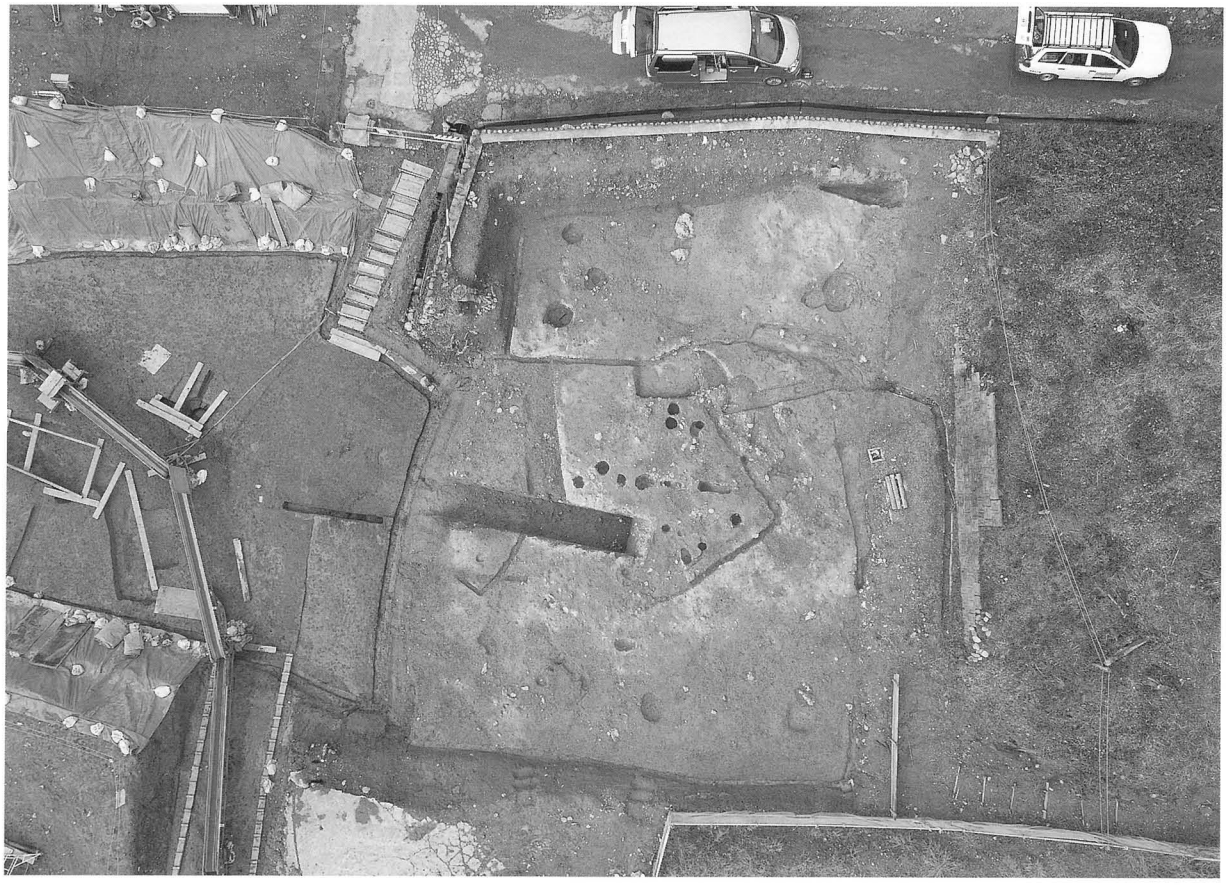
中ノ合イセ山古墳群遠景(南より)



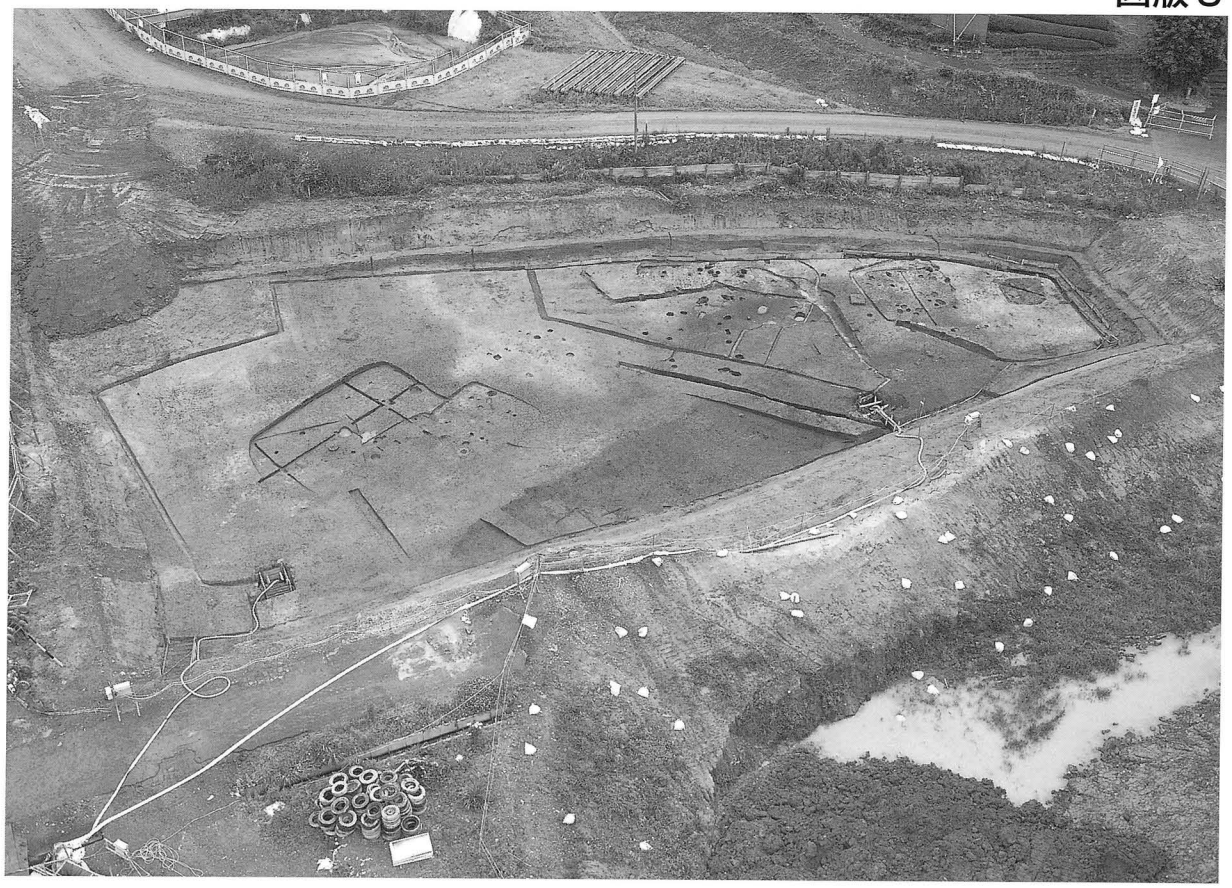
中ノ合イセ山遺跡全景(北より)

図版２

中ノ合イセ山古墳群（南より）



中ノ合遺跡Ｂ区（南より）



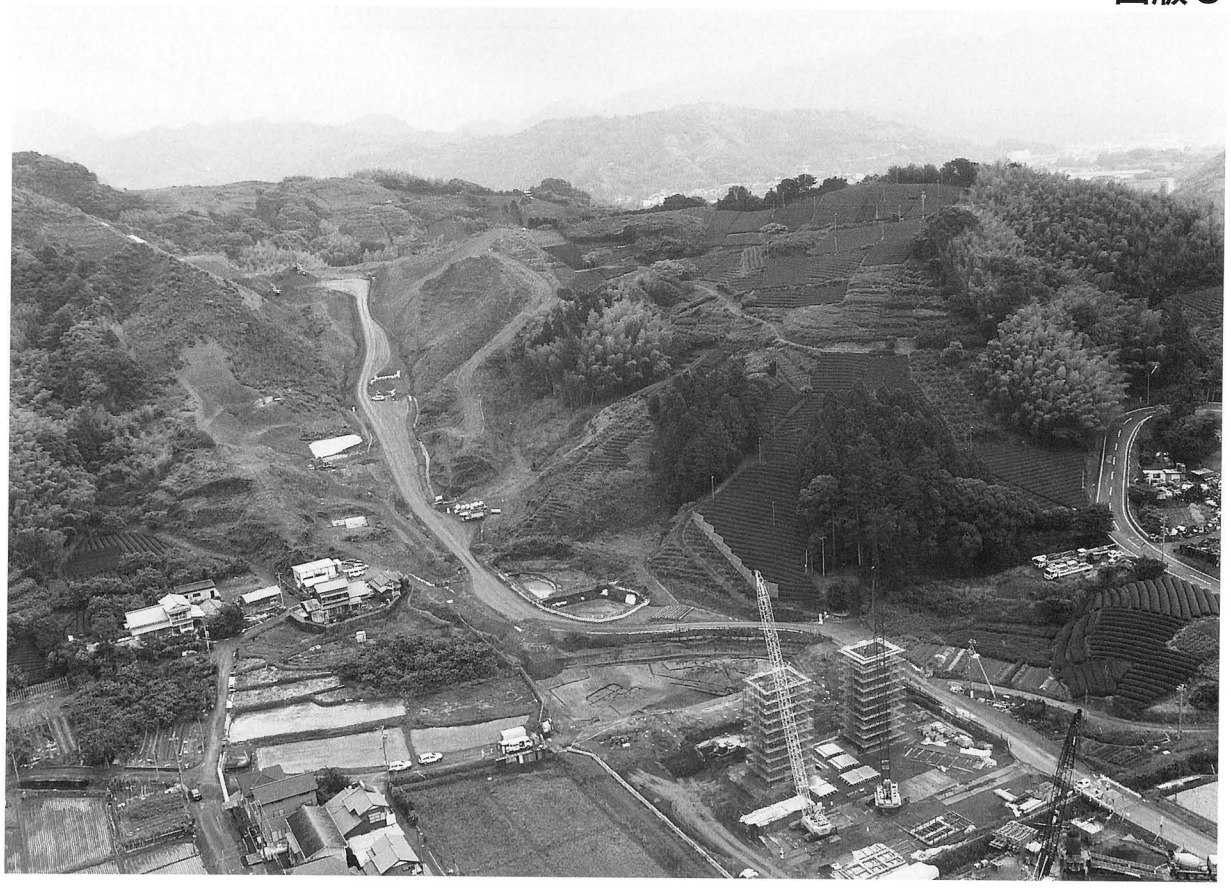
中ノ合遺跡Ｃ区(南より)

中ノ合遺跡Ｄ区(西より)

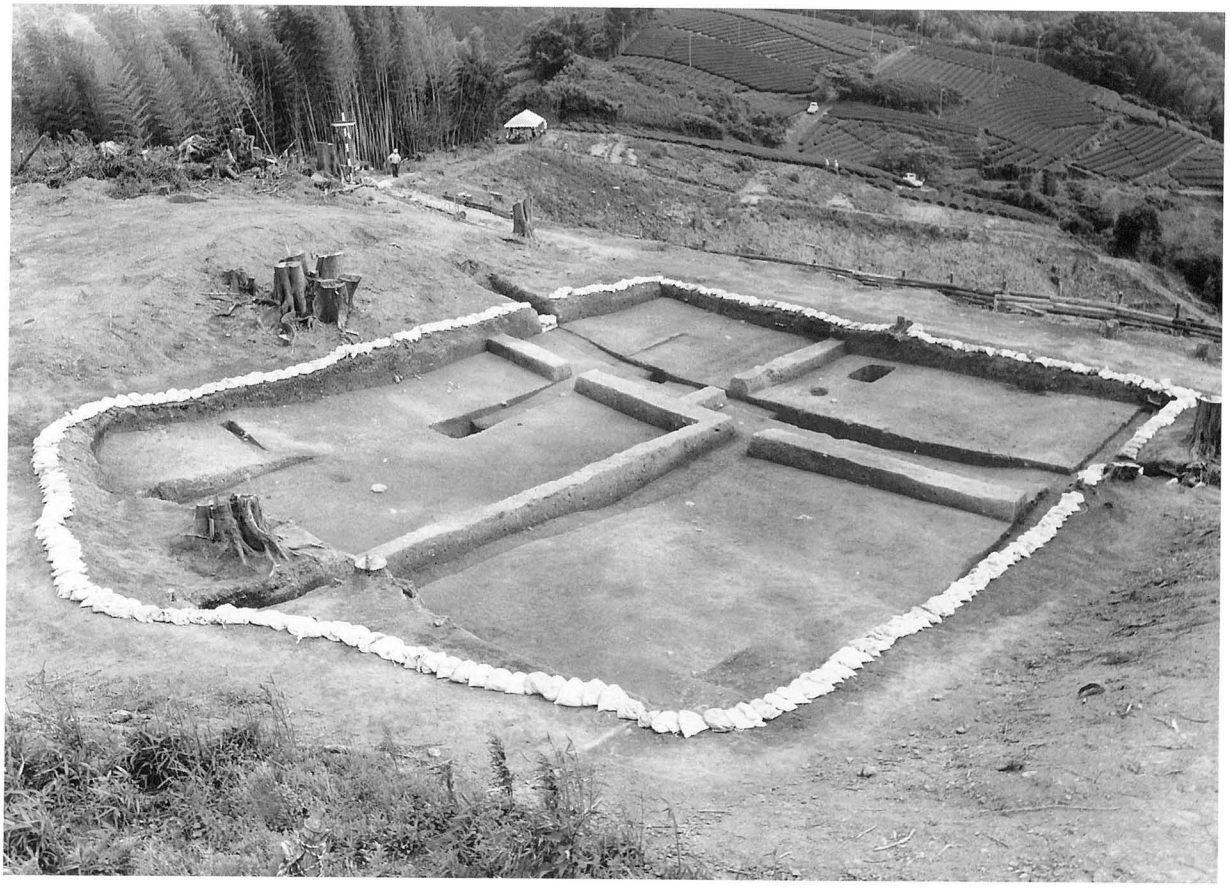
図版４

SX03（北より）

SX04-C 出土遺物

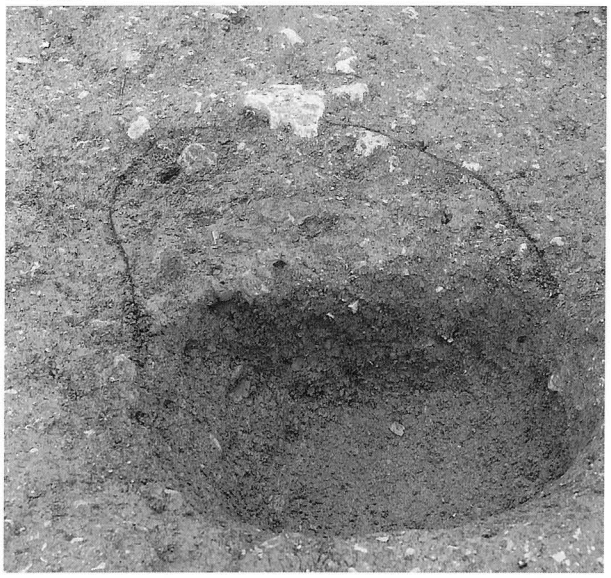


中ノ合遺跡遠景（南より）



中ノ合イセ山遺跡土層堆積状況（北より）

図版６



土坑状遺構半截状況（南より）

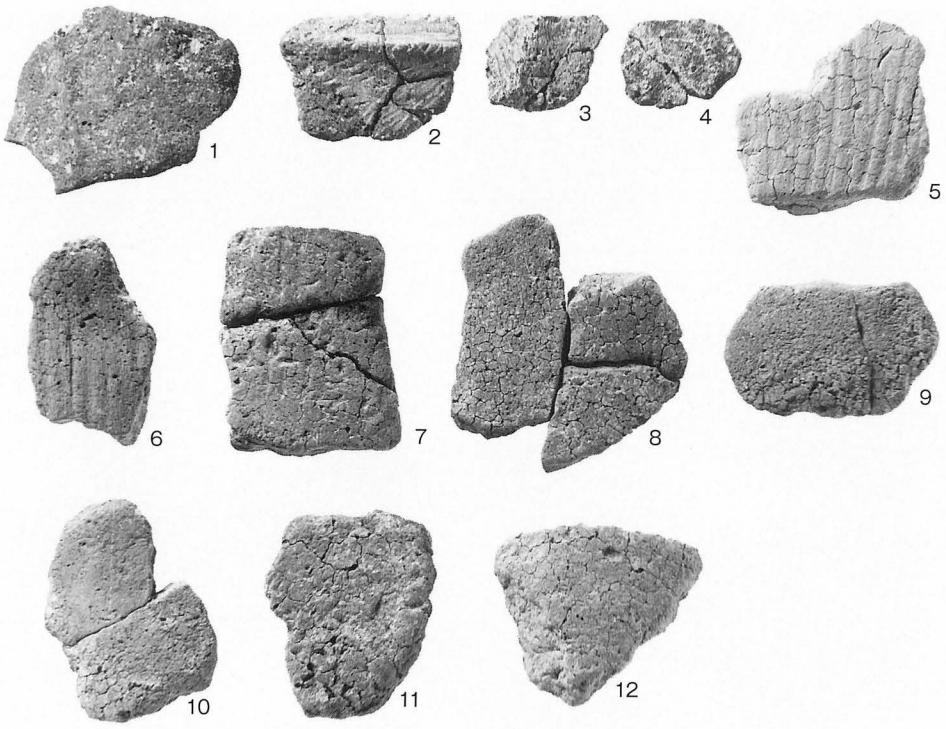
倒木痕半截状況（北より）

遺物出土状況（土器）

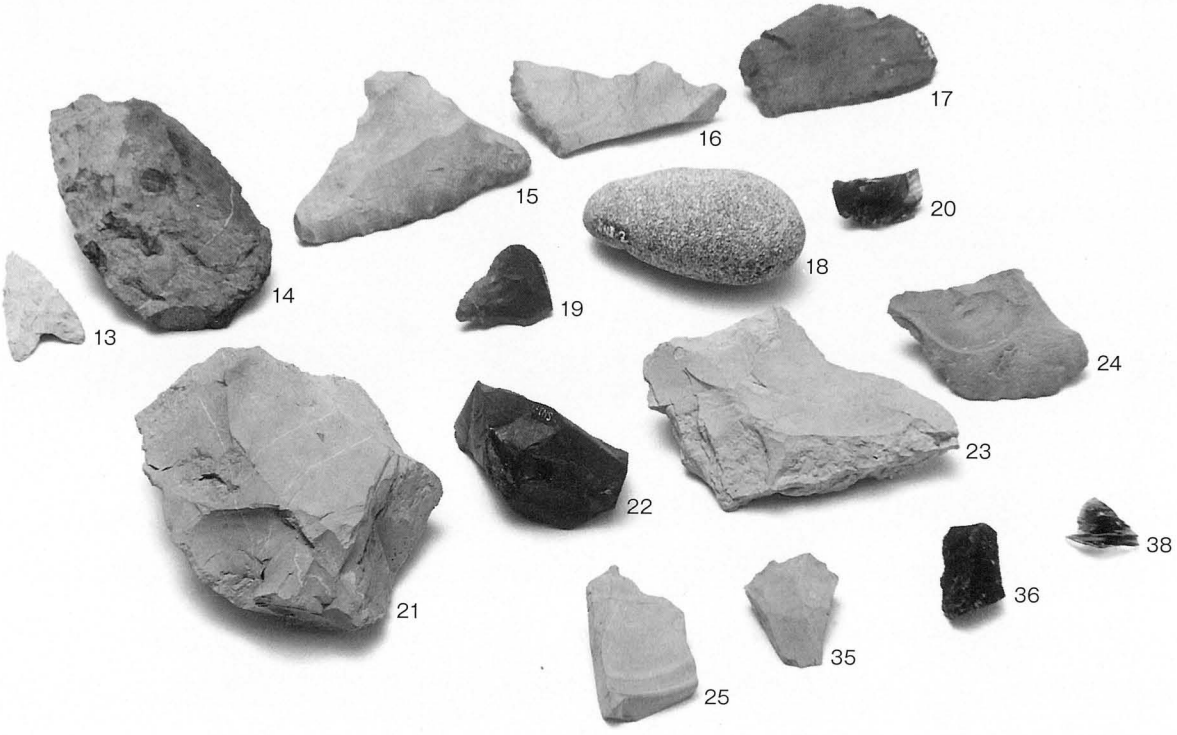
遺物出土状況（土器）

遺物出土状況（石器）

遺物出土状況（石器）

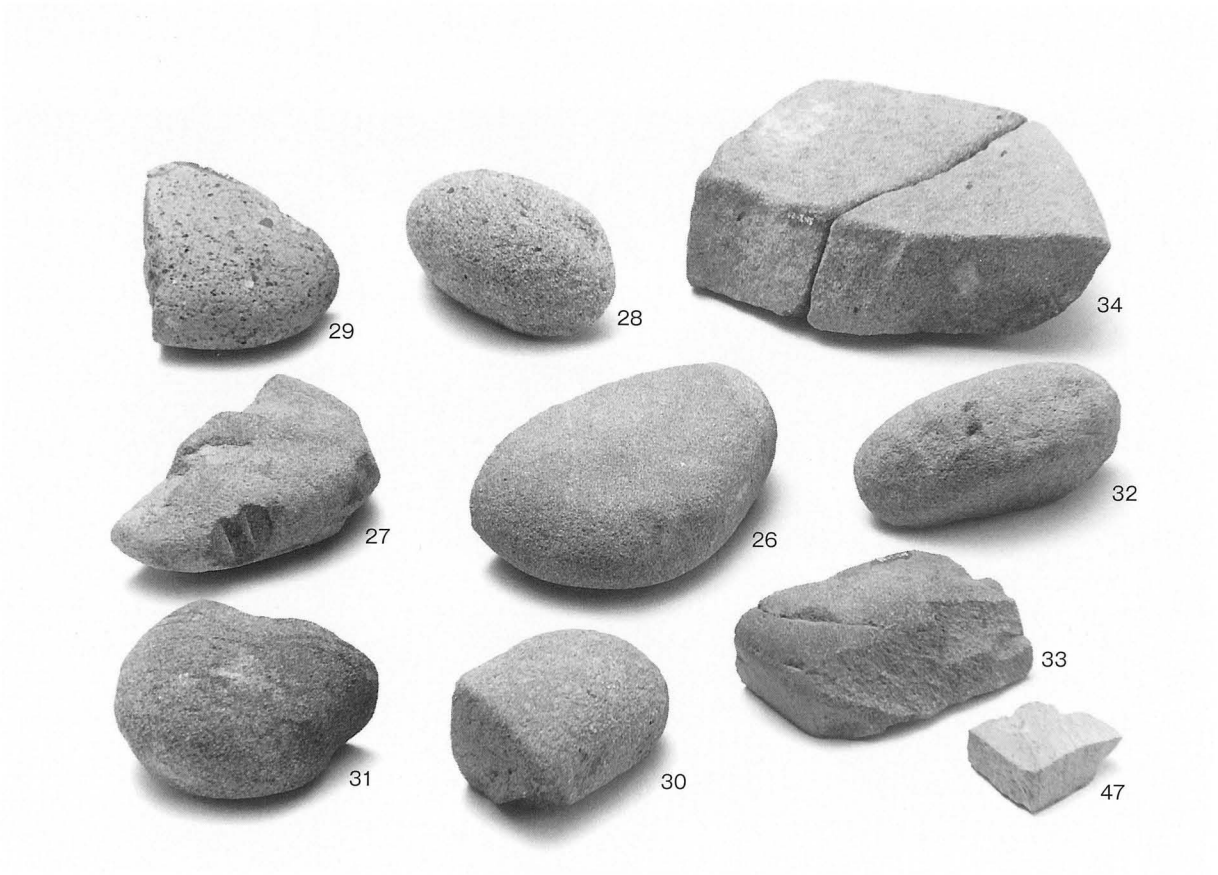


出土遺物１（土器）



出土遺物２（石器）

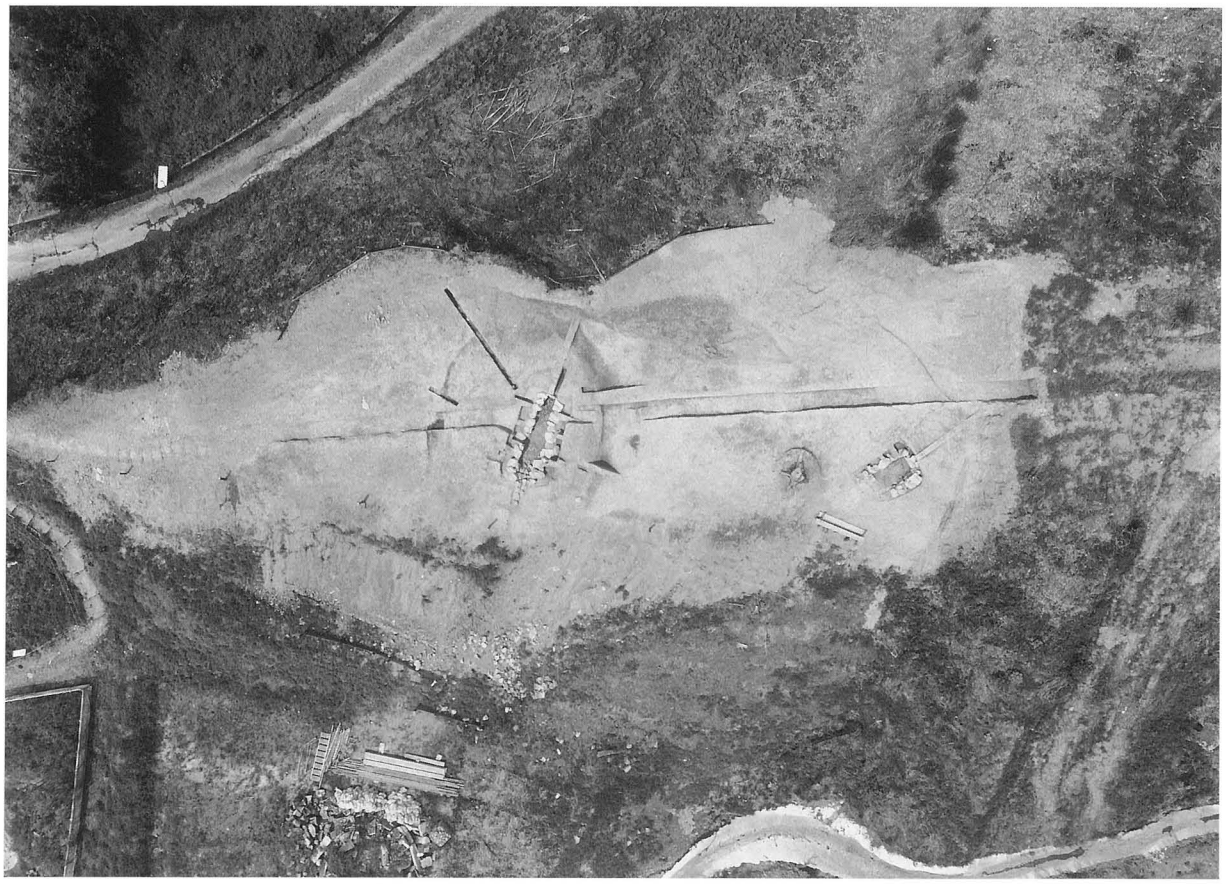
図版８



出土遺物３（石器）

出土遺物４（須恵器・灰釉陶器・山茶碗）

中ノ合イセ山古墳群遠景（南より）

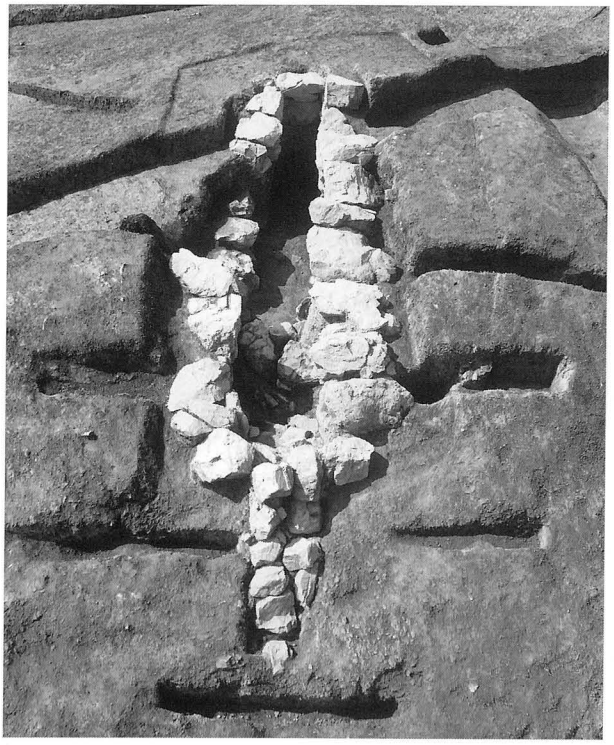


中ノ合イセ山古墳群全景

図版 10

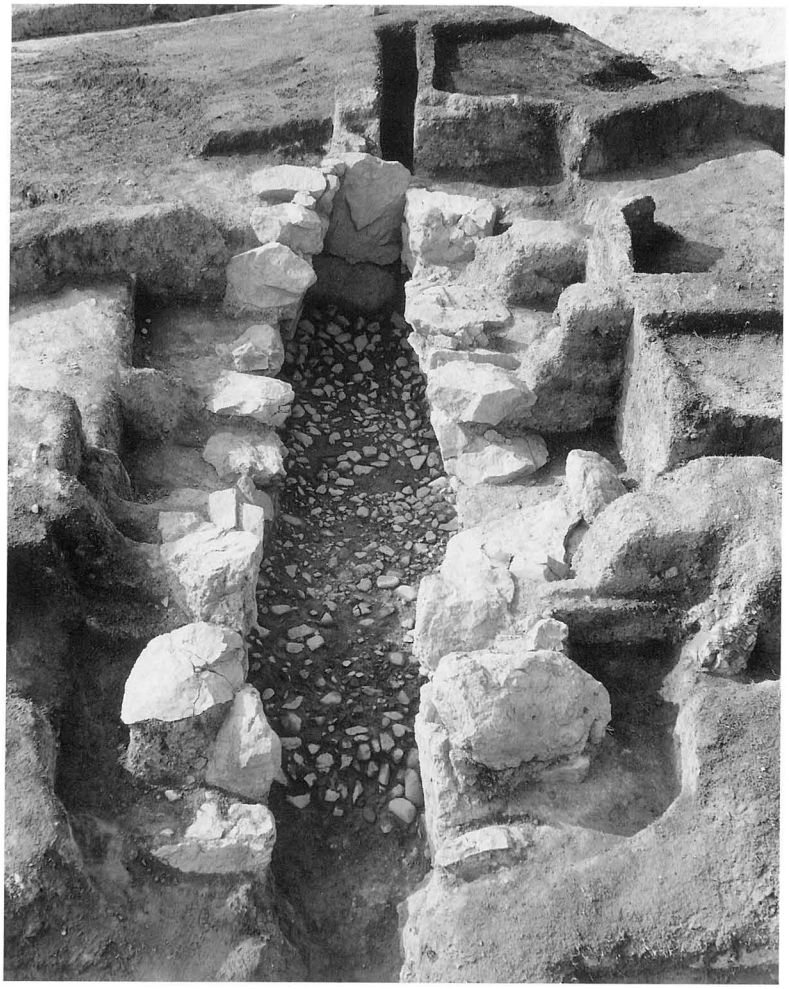
中ノ合イセ山古墳群近景（南より）

1号墳全景（西より）



1号墳石室検出状況(南より)

1号墳閉塞石検出状況(南より)



1号墳石室完掘状況(南より)

図版 12

1号墳奥壁検出状況(南より)

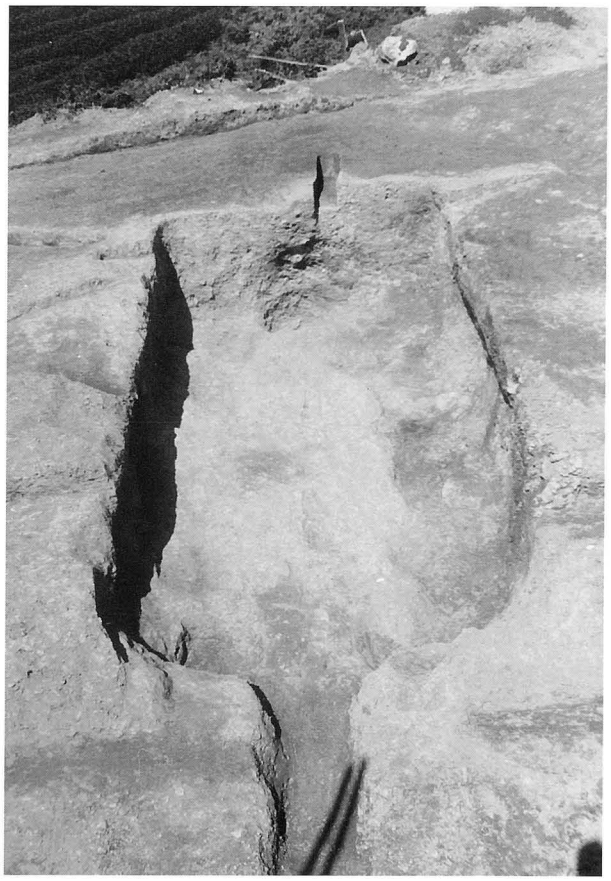
1号墳石室右側壁(東より)

1号墳石室右側壁・墓道(東より)

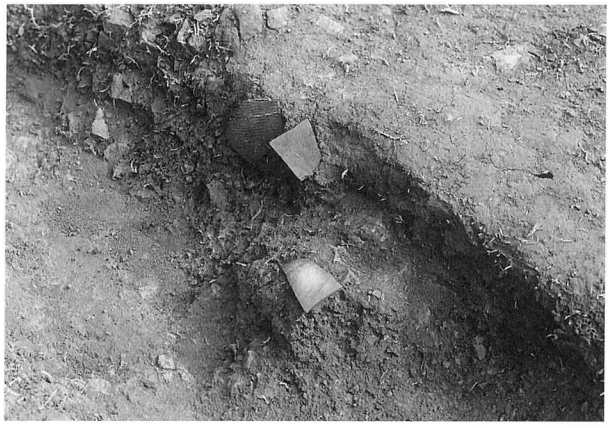
1号墳石室左側壁・墓道(西より)

図版 14

1号墳石室基底石(南より)



1号墳墓壙(南より)

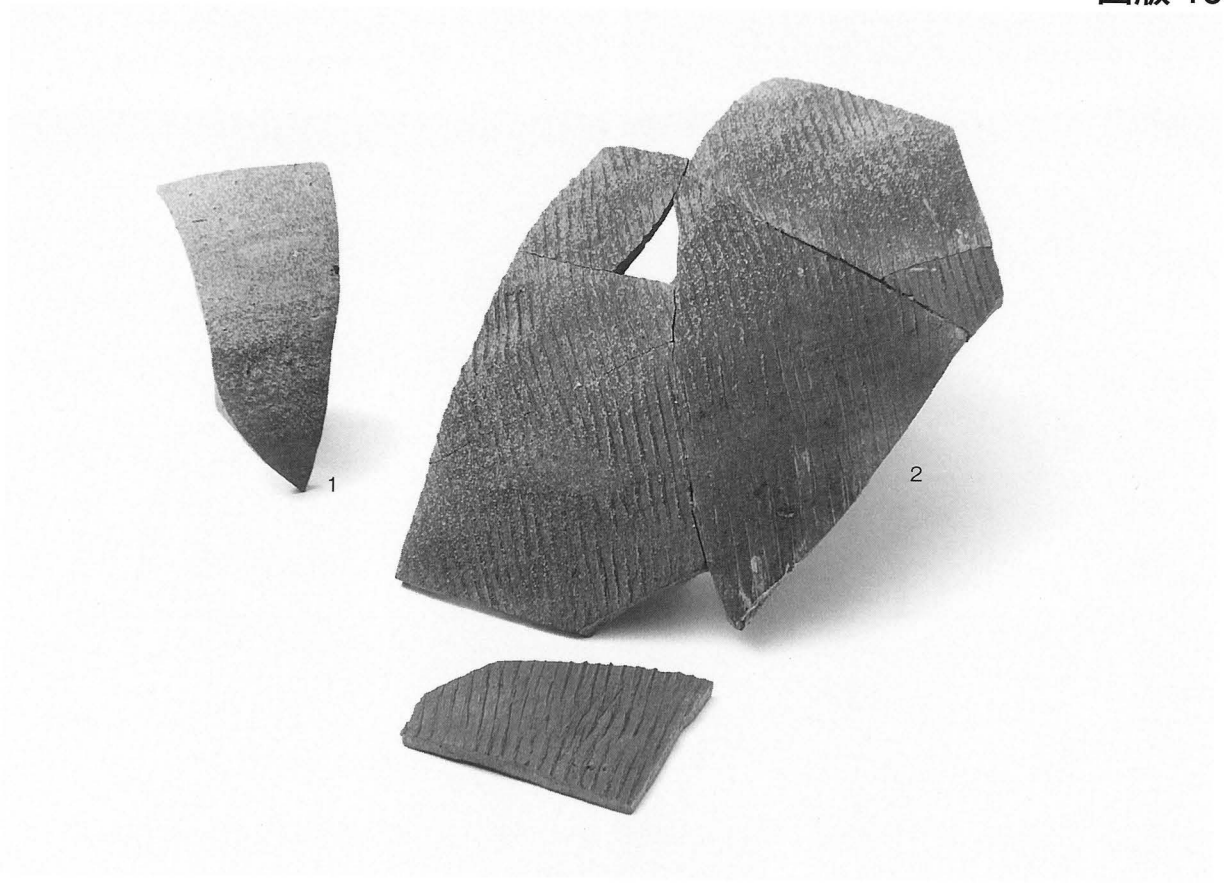


1号墳周溝内須恵器出土状況(南より)

1号墳石室内刀子出土状況(南より)

1号墳石室内刀子出土状況(南より)

1号墳石室内鉄鏃出土状況(南より)



1号墳周溝内出土須恵器

1号墳石室内出土鉄鏃・刀子

図版 16

２号墳石室基底石（南より）

２号墳墓壙（南より）

13

15

２号墳石室内出土刀子

中ノ合遺跡 B 区全景(北より)

中ノ合遺跡 B 区第 1 面全景(東より)

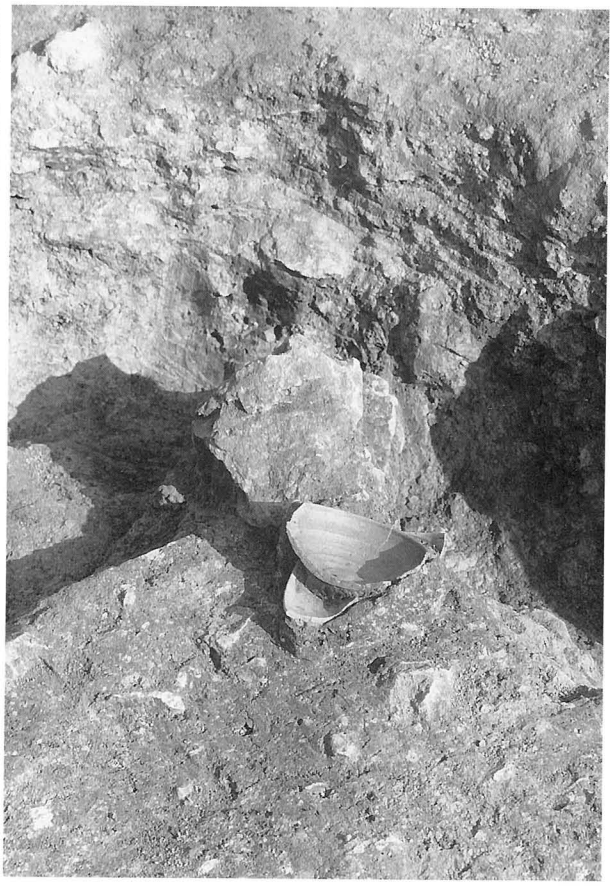
図版 18

SB01・02・03 検出状況(南より)

SB03 カマド検出状況(東より)

SB03 遺物出土状況(南より)

SB03 遺物出土状況(西より)



SB03 遺物出土状況(南より)

図版 20

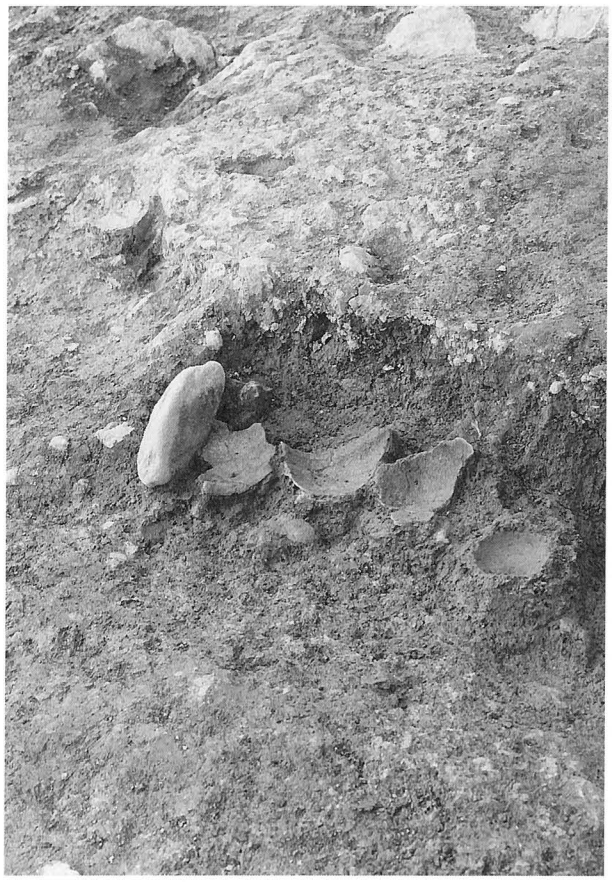
SB05 検出状況（南より）

SB05 遺物出土状況（南より）

SB06 遺物出土状況(南より)

SB06 カマド検出状況(南より)

図版 22

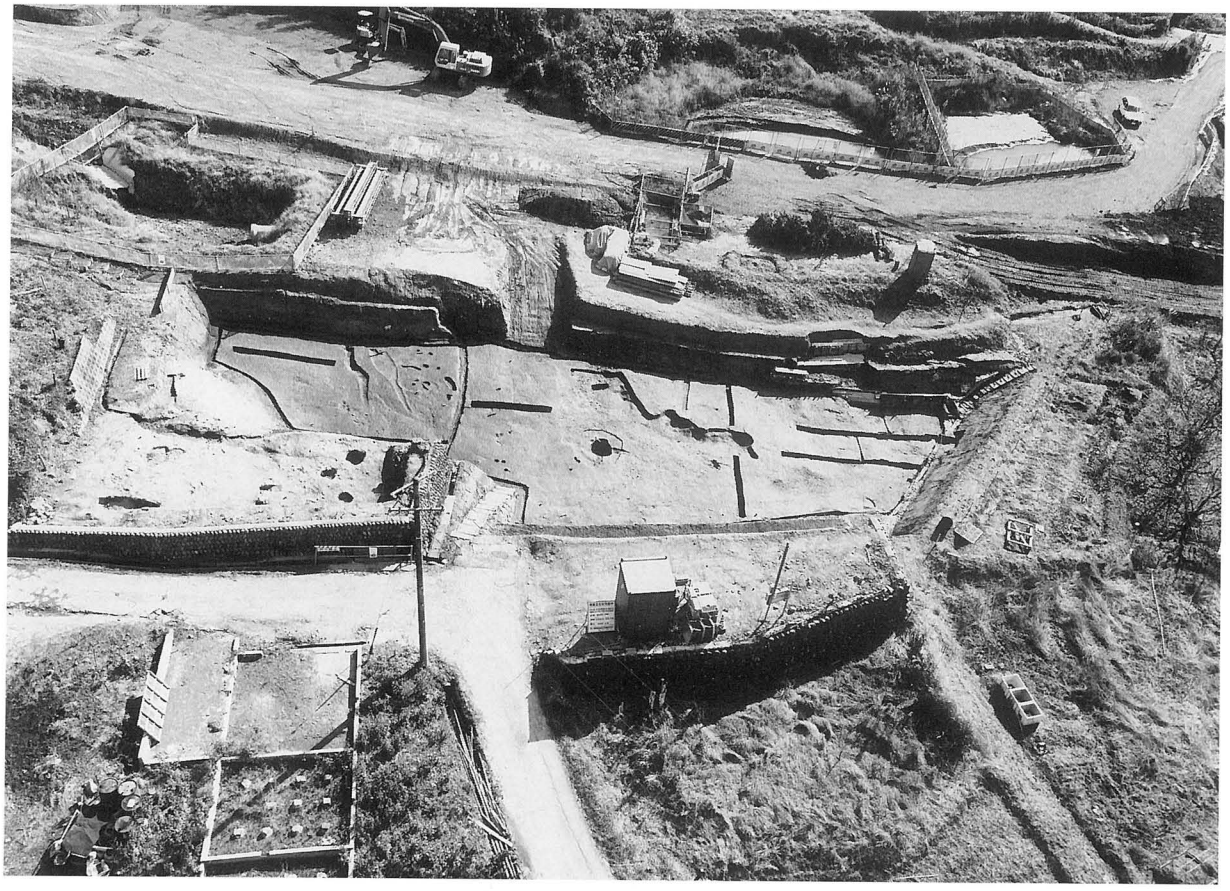


SB06 遺物出土状況(南より)

SB06 遺物出土状況(南より)

SB06 完掘状況(南より)

SP06・07・08 完掘状況(西より)



中ノ合遺跡 B 区第2面全景(東より)

図版 24

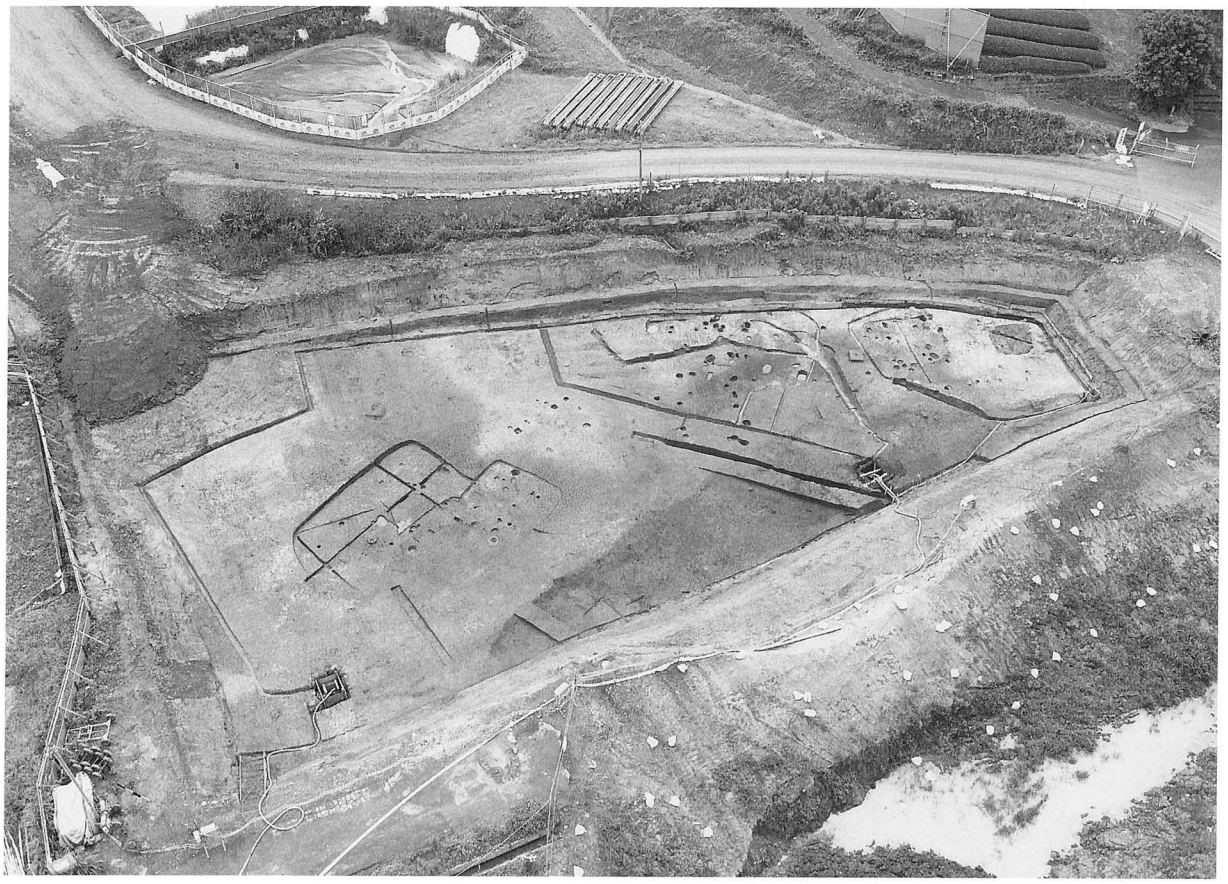
SE01 検出状況(西より)

SX01 検出状況(西より)

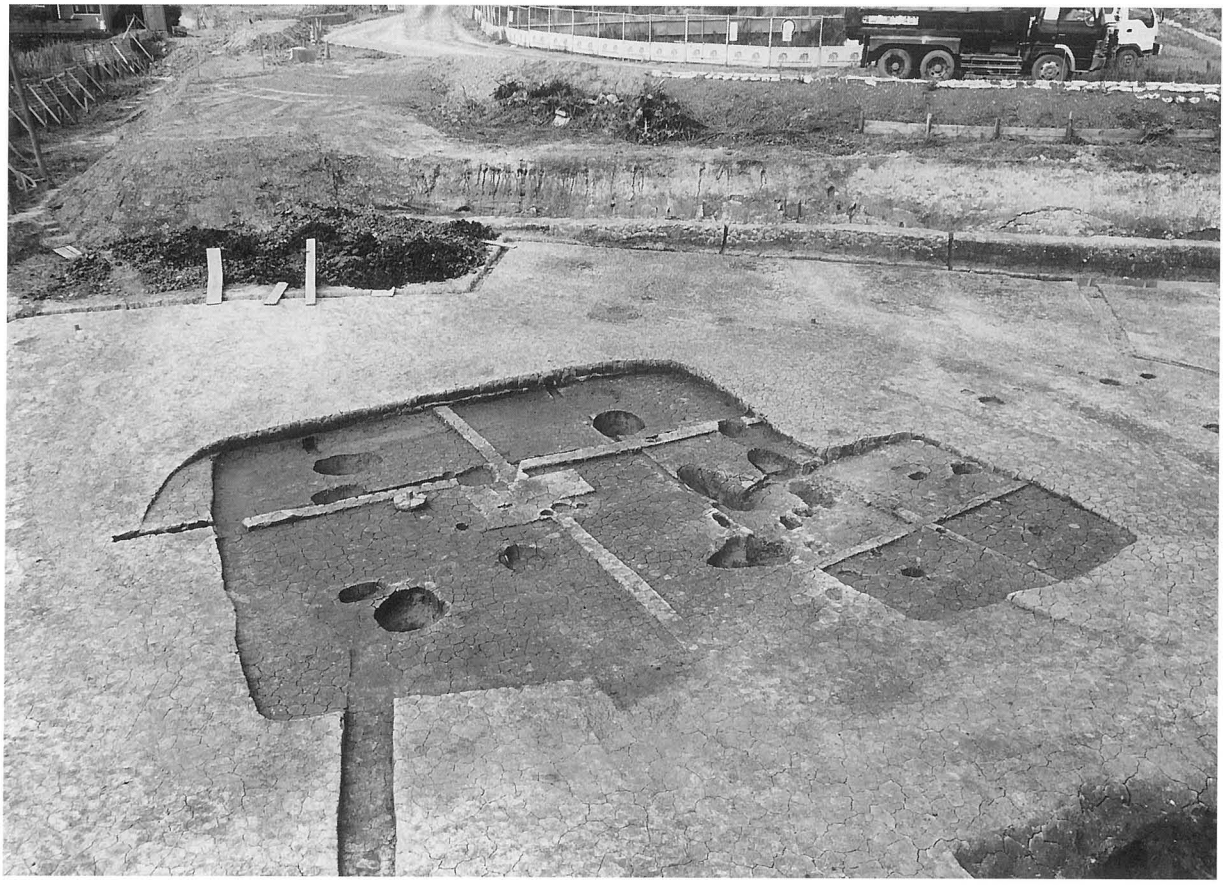
SX02 検出状況(北より)

SX02 遺物出土状況(北より)

図版 26



中ノ合遺跡 C 区全景(南より)



SB07・08・09 検出状況(南より)

SB07 炉断面(東より)

SB07 柱穴礎板(南より)

SB07 柱穴(南より)

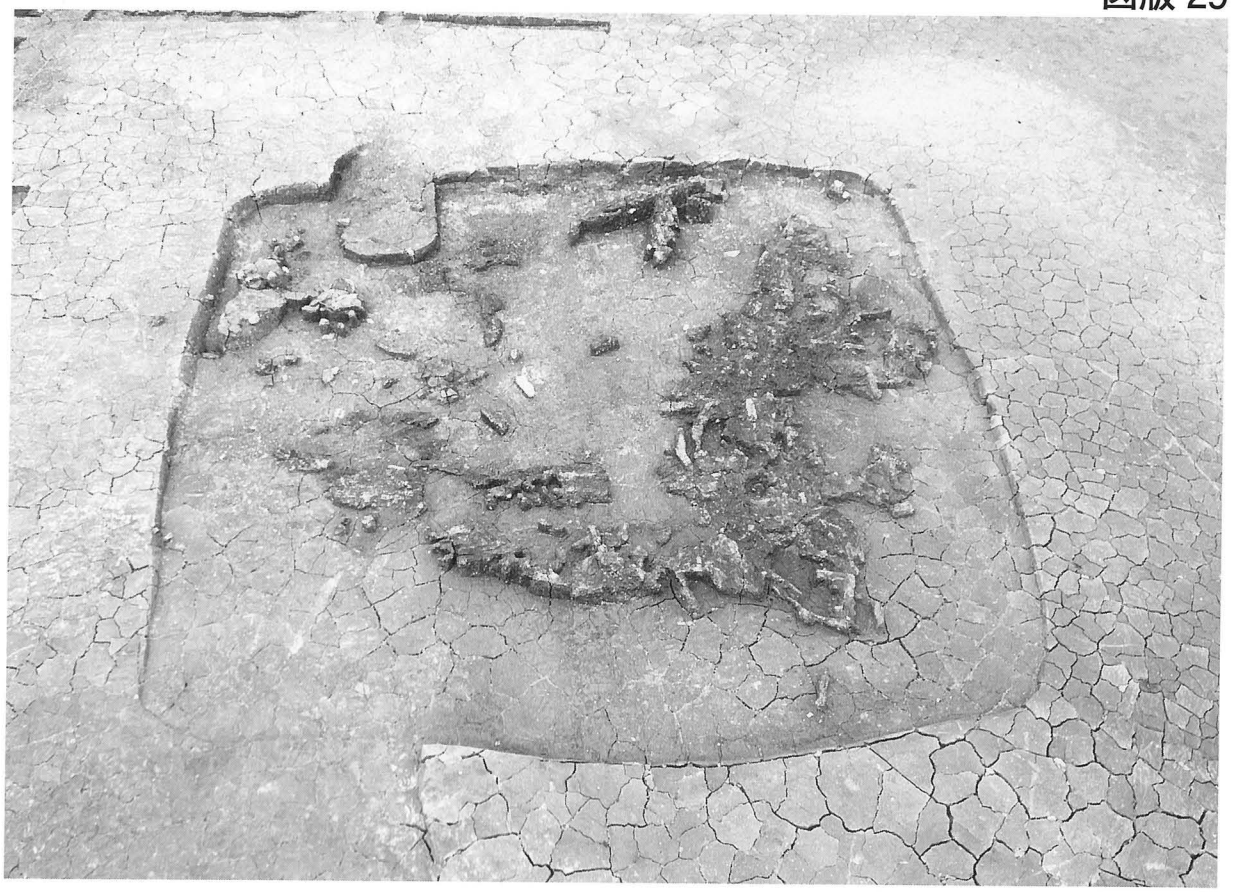
SB07 土坑(西より)

SB07 土坑(南より)

図版 28

SB07 遺物出土状況(南より)

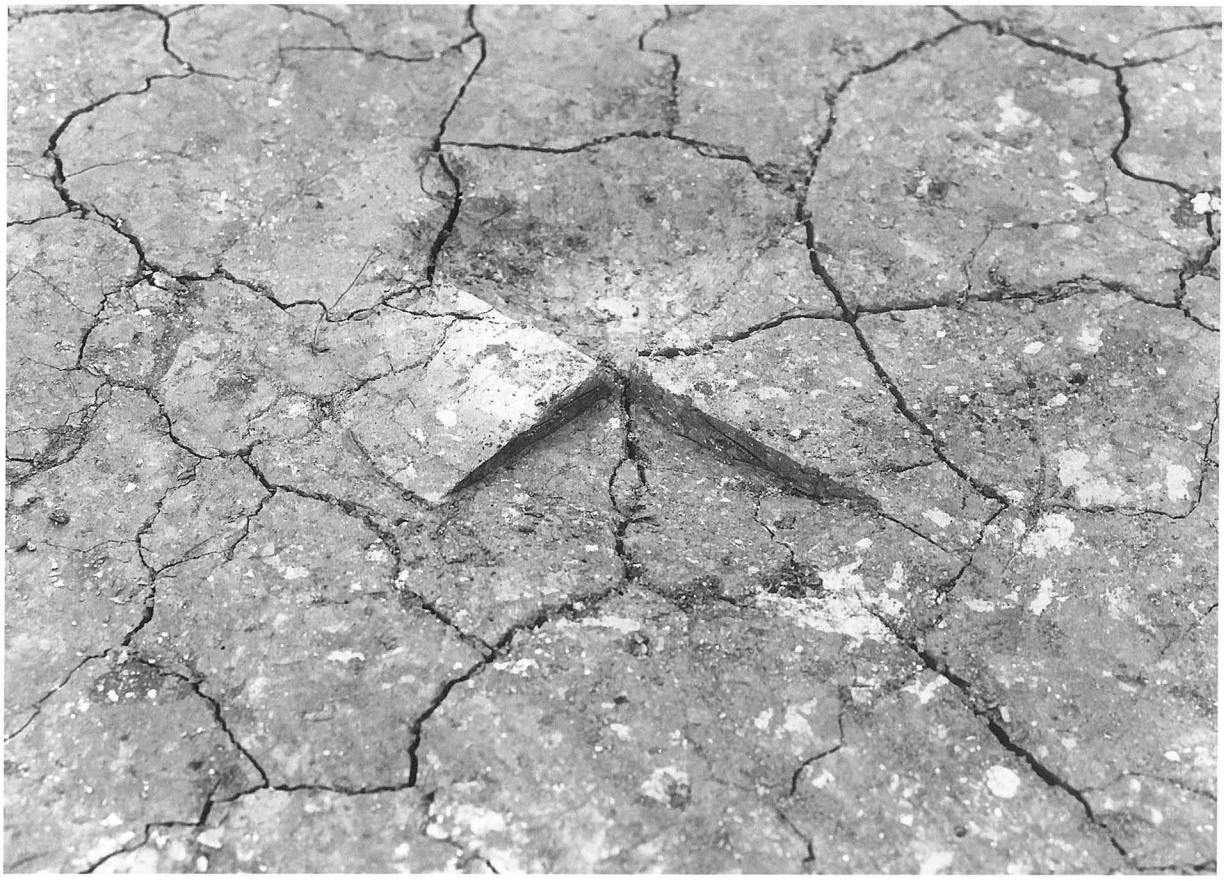
SB09 炉断面(南より)



SB10 検出状況(南より)

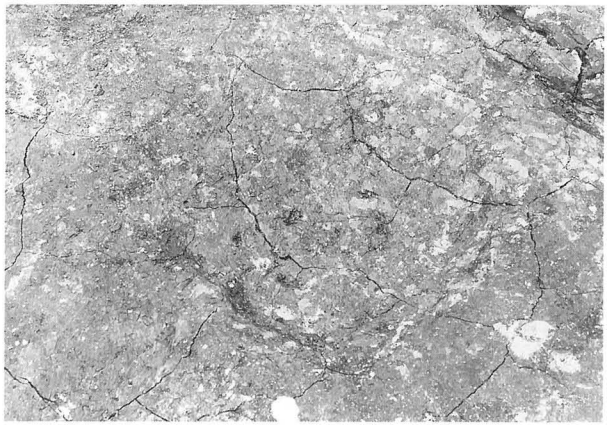
SB10 完掘状況(南より)

図版 30



SB10 炉断面(南より)

SB10 土坑(東より)



SB10 土坑(南より)

SB10 遺物出土状況(南より)

SB10 遺物出土状況(南より)

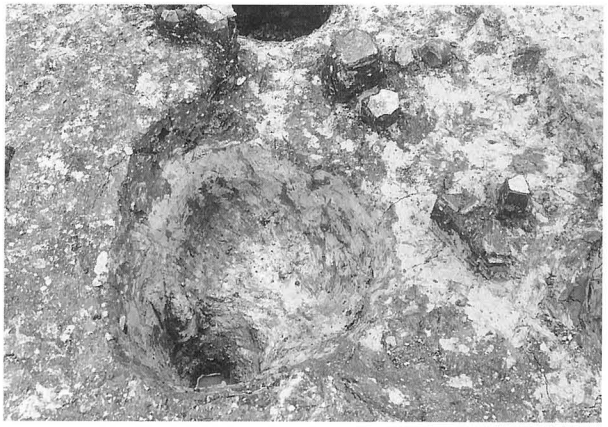
SB12・13・14 検出状況(南より)

SB14 炉断面(南より)

図版 32

SB16・17 検出状況(南より)

SB17 炉検出状況(東より)



SB17 遺物出土状況(南より)

SB16 炉検出状況(南より)

SX03 検出状況(北より)

SX03 検出状況(南より)

図版 34

SX04-A 遺物出土状況(西より)

SX04-B 遺物出土状況(西より)

SX04-C 遺物出土状況(東より)

SX04-D 遺物出土状況(北より)

図版 36

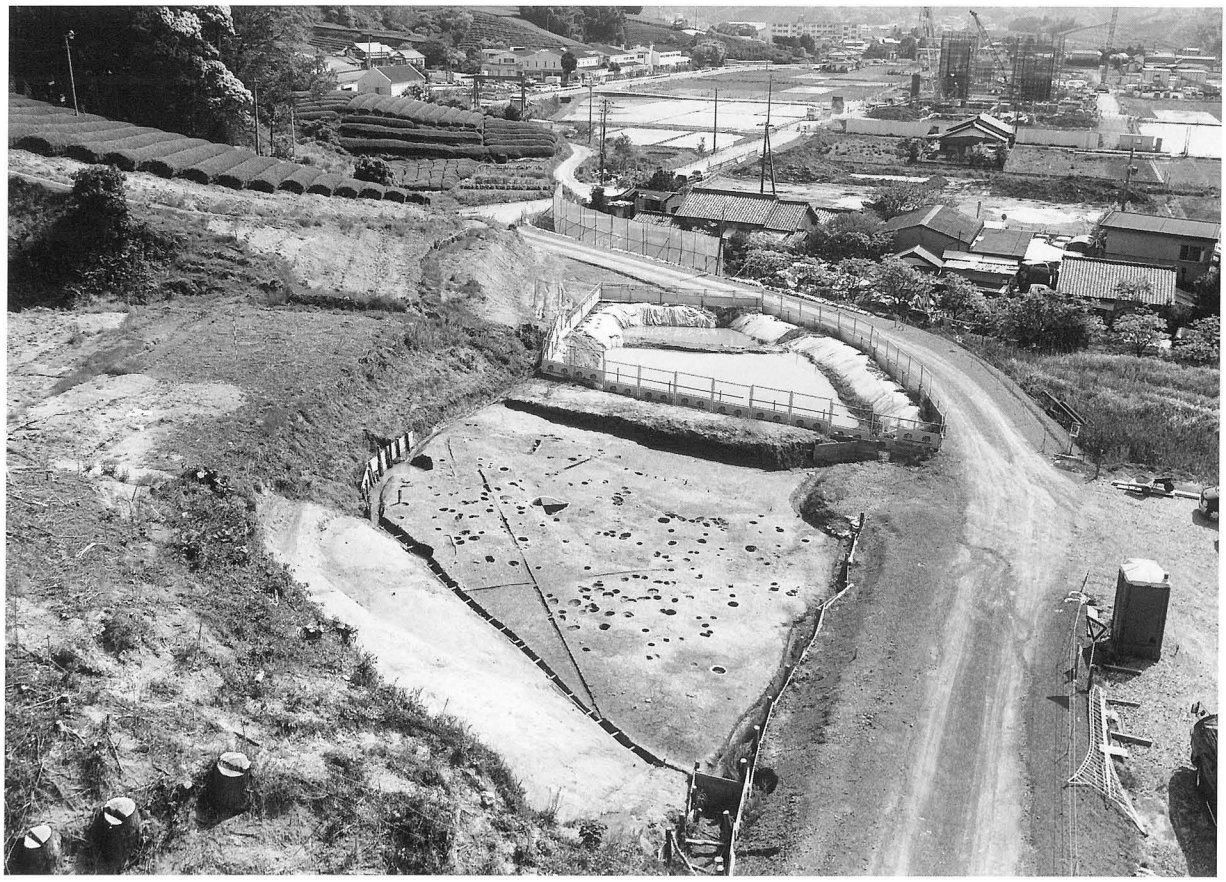
SX04-E 遺物出土状況(西より)

SF01 検出状況(西より)

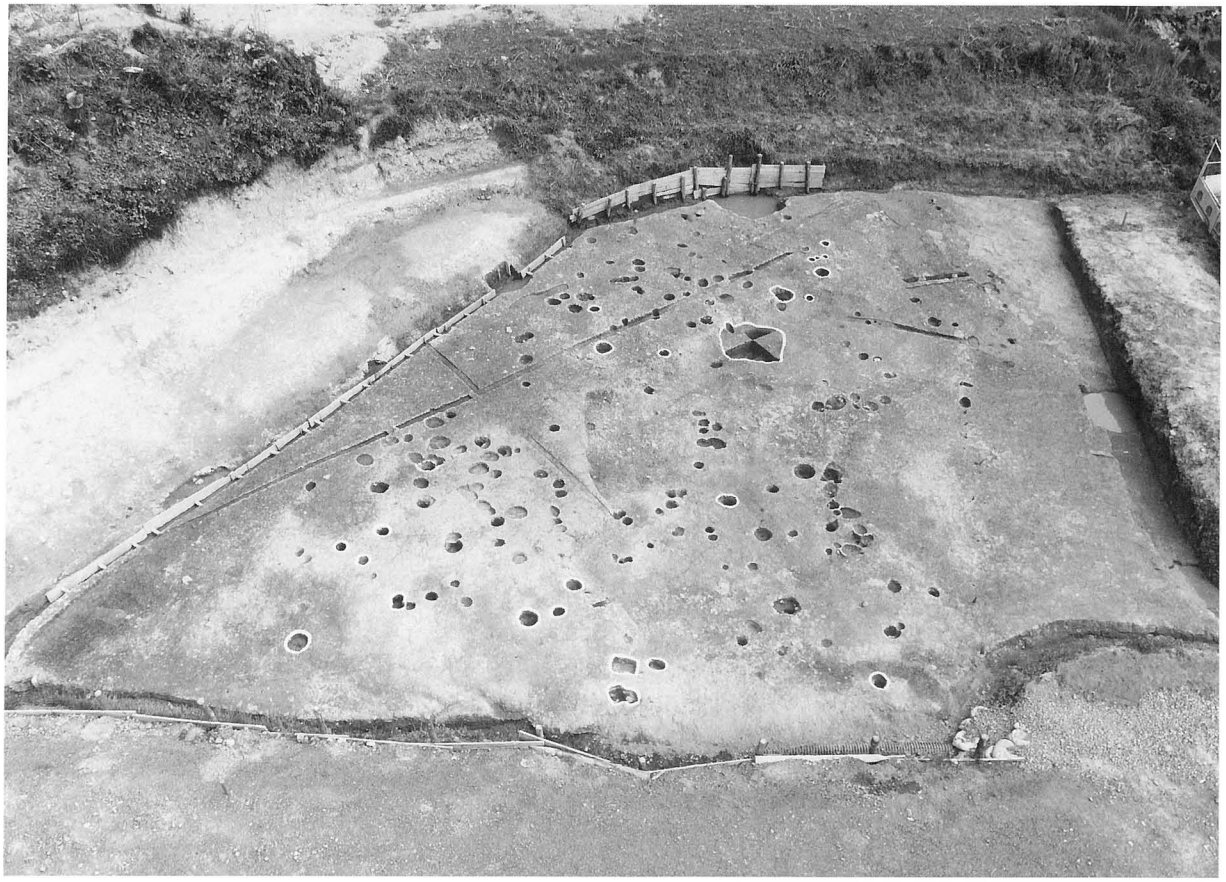
SF02 検出状況(南より)

SP62 礎板検出状況(南より)

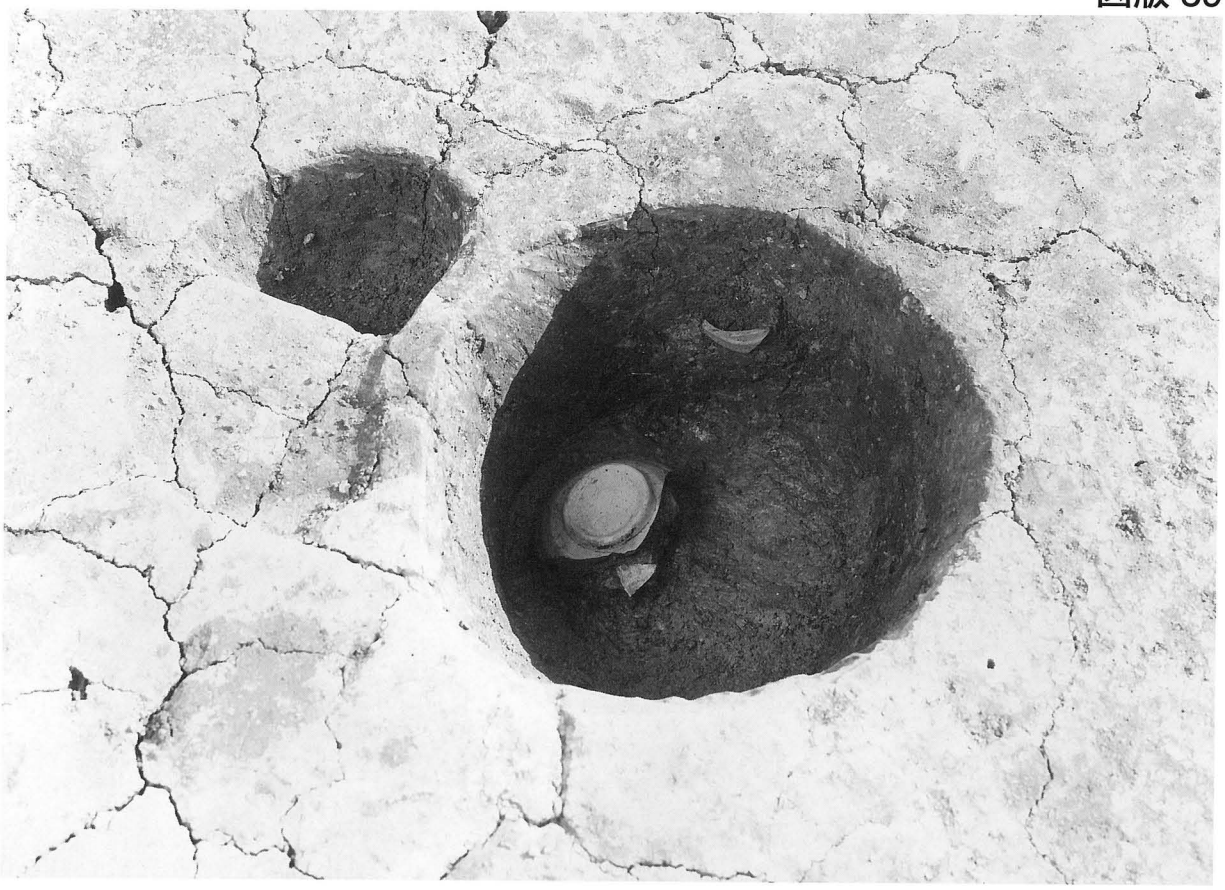
図版 38



D 区調査区近景(北より)



D 区調査区全景(北より)



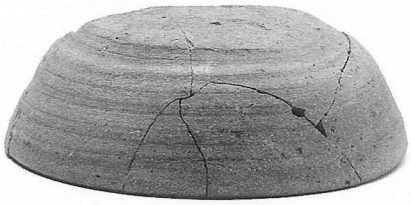
SP18 遺物出土状況

SP103・104 遺物出土状況

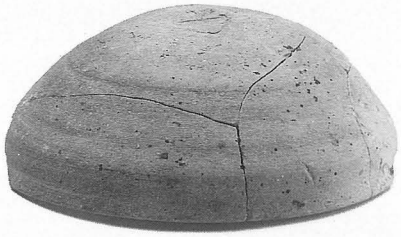
図版 40

SP141・142 半截状況

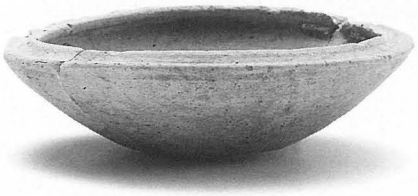
SP167 半截状況



16



17



18

19

SB03 出土遺物

20

21

SB06 出土遺物

30

33

出土遺物 1

図版 42

出土遺物2

出土遺物3

34

40

出土遺物４

36

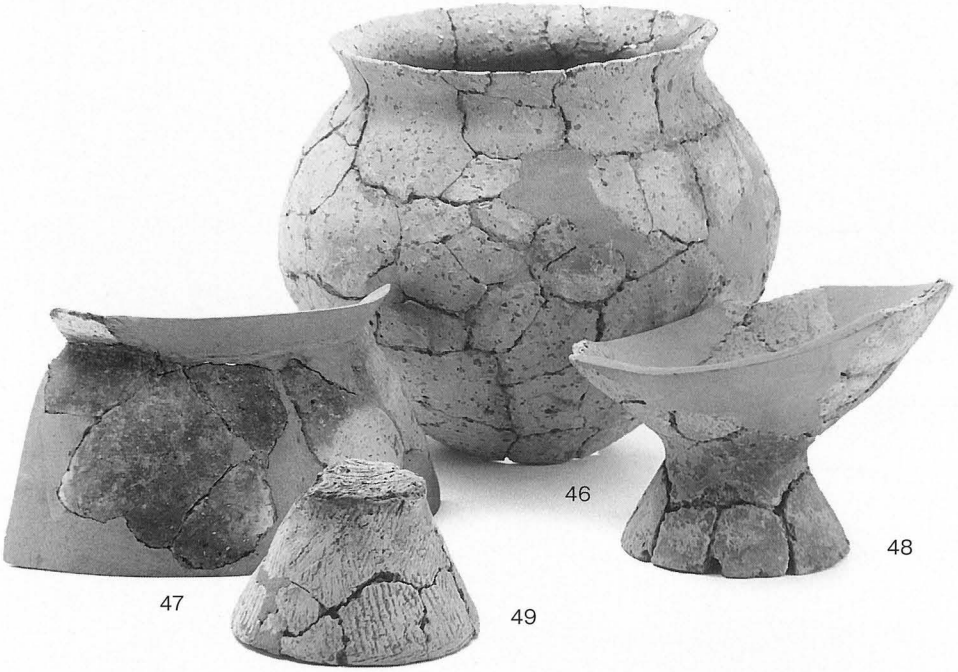
41

37

38

SB14 出土遺物

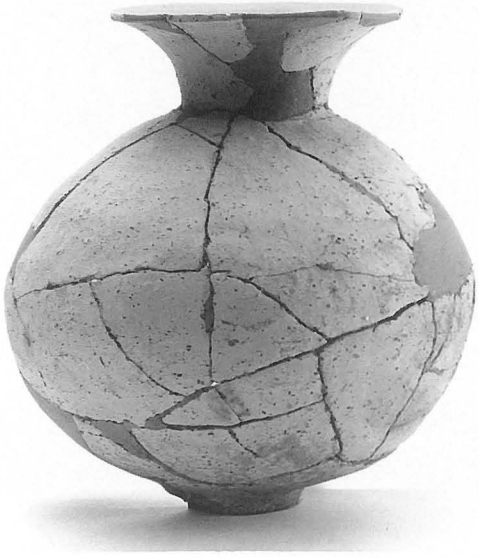
図版 44



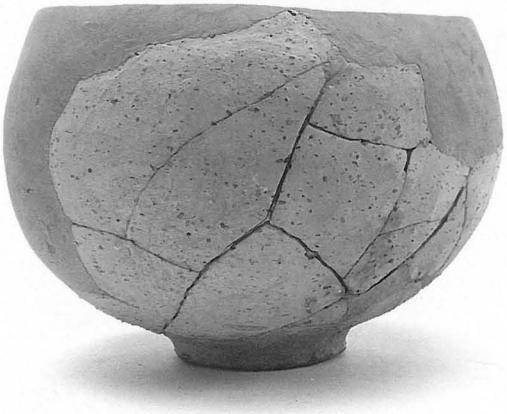
SB01 出土遺物

SB14 出土遺物

SX03 出土遺物



53



55

SX04-A 出土遺物

図版 46

58

59

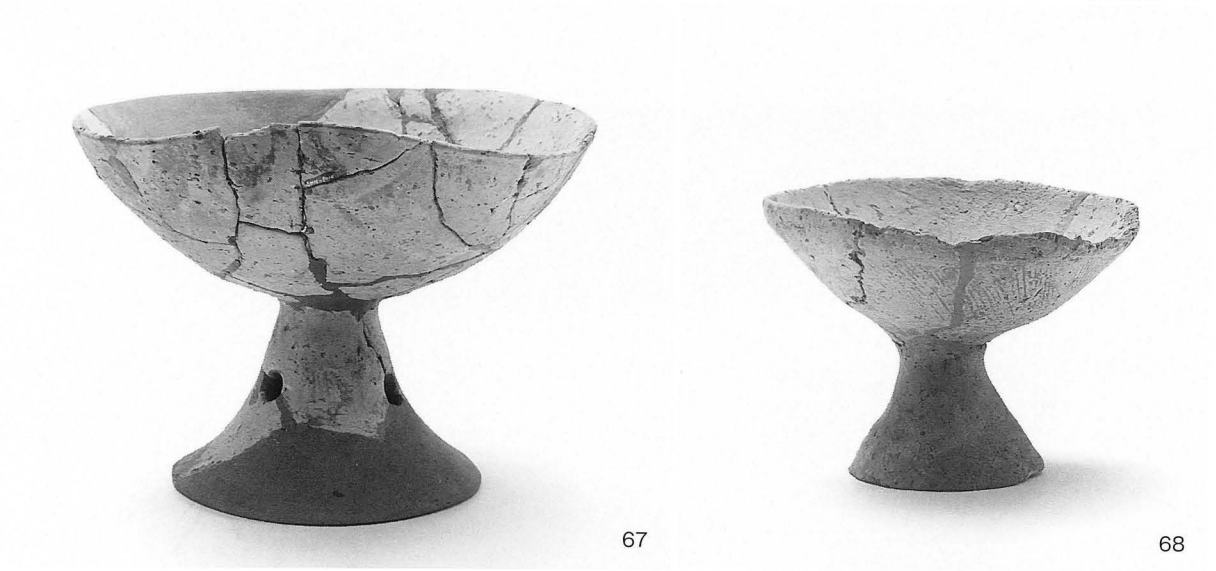
60

61

62

64

SX04-A 出土遺物



SX04-A 出土遺物

SX04-B 出土遺物

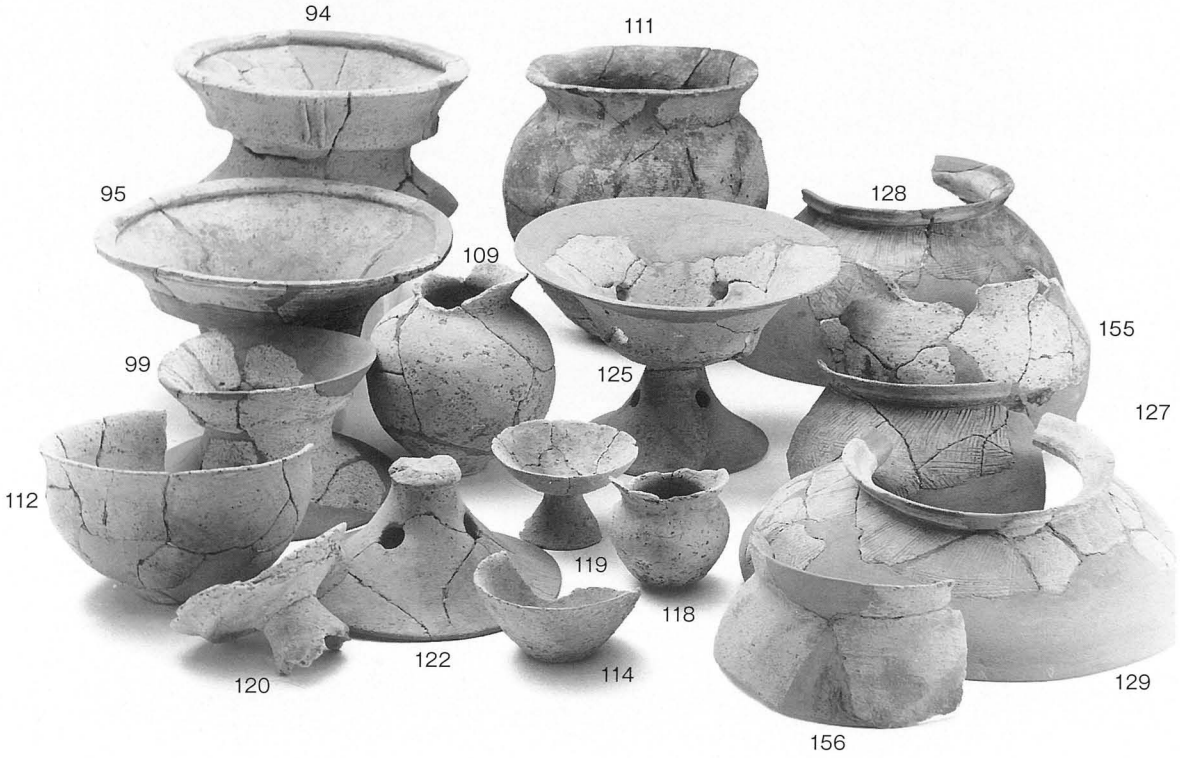
図版 48

84

81

86

SX04-B 出土遺物



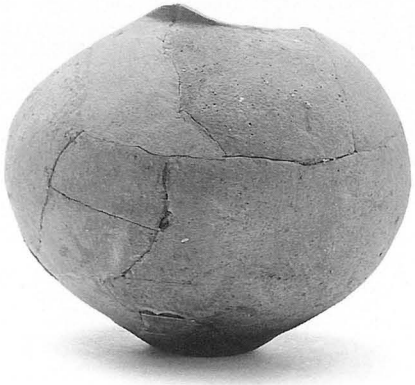
SX04-C 出土遺物

94

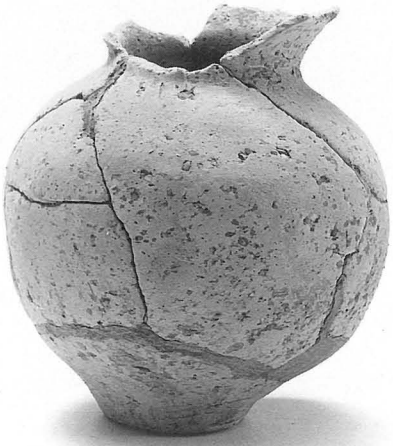
95

99

107



108



109

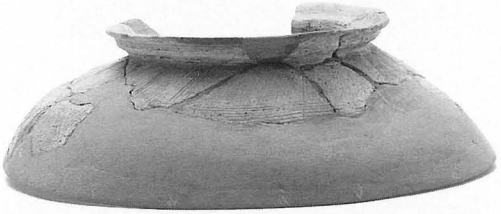
SX04-C 出土遺物

図版 50

111

112

119

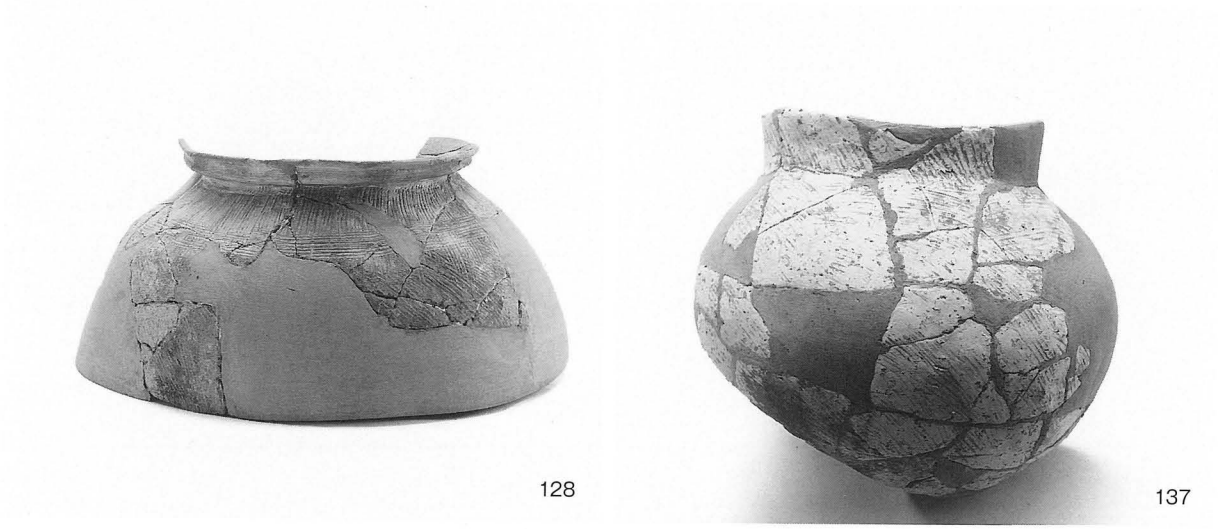


129

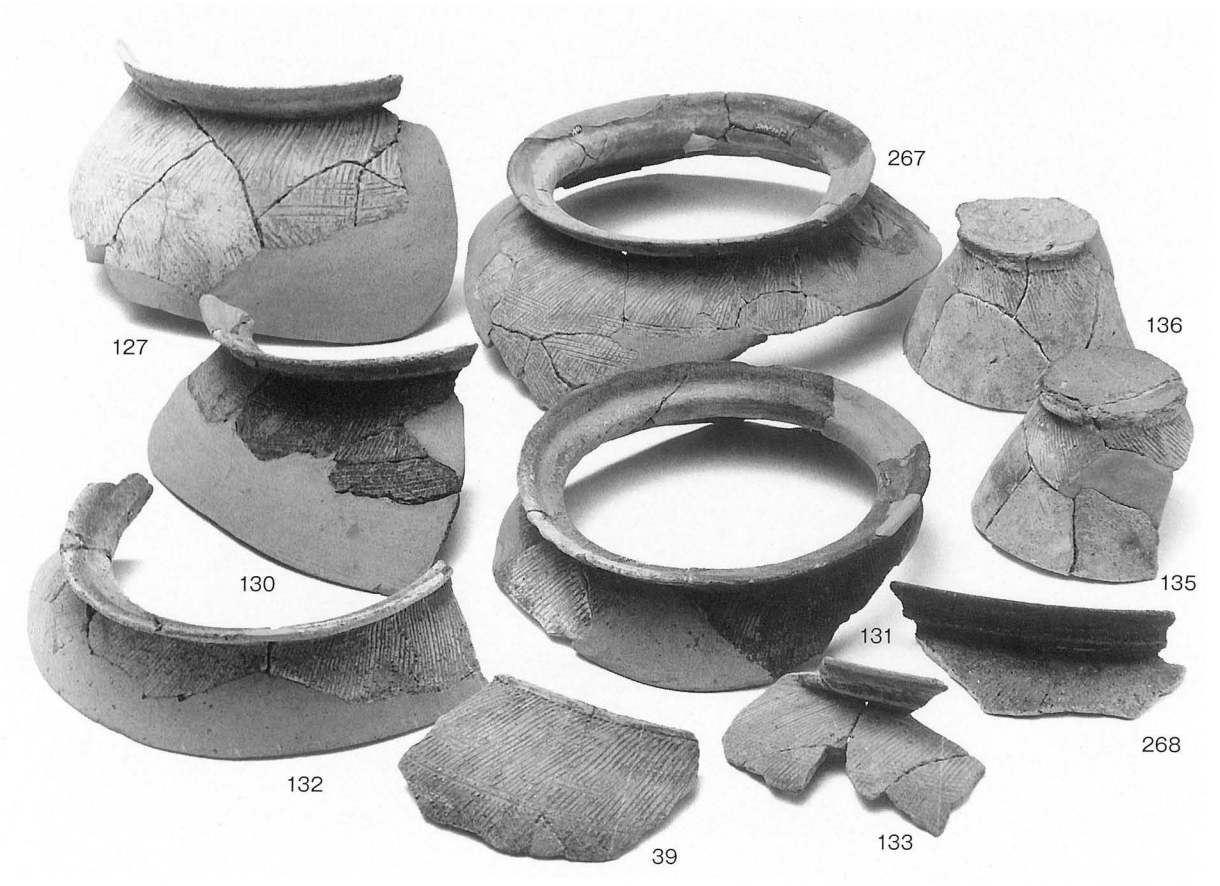
125

125

SX04-C 出土遺物



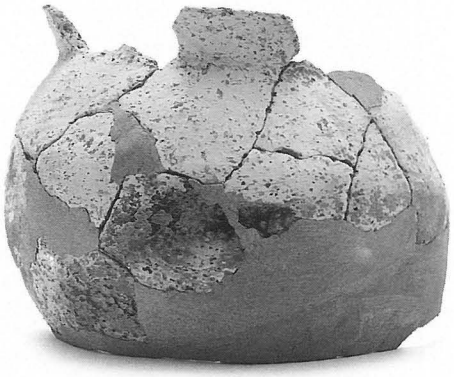
SX04-C 出土遺物



出土遺物 1

図版 52

138



155

SX04-C 出土遺物

SX04-D 出土遺物

164

166

167

168

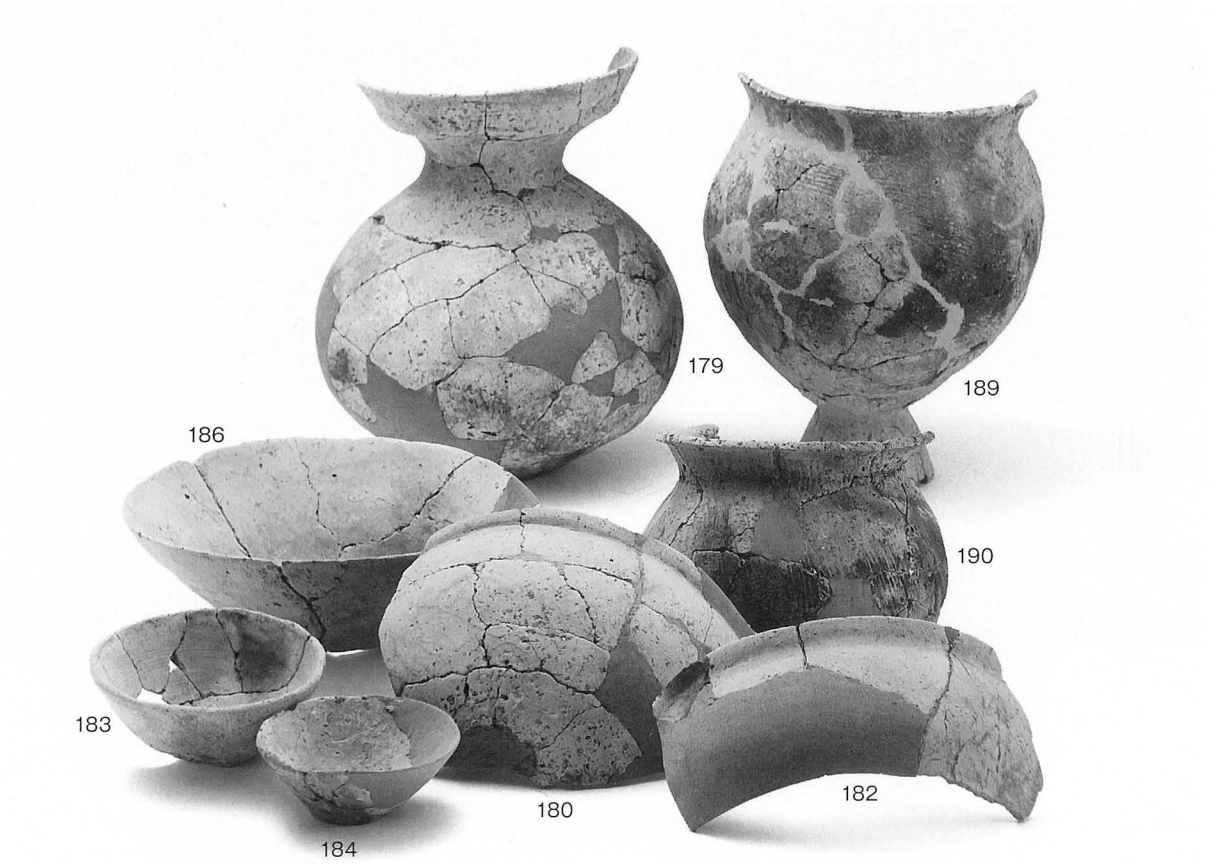
176

178

SX04-D 出土遺物

図版 54

SX04-D 出土遺物

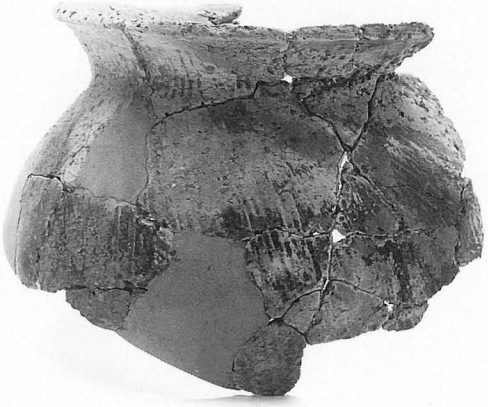


SX04-E 出土遺物

179

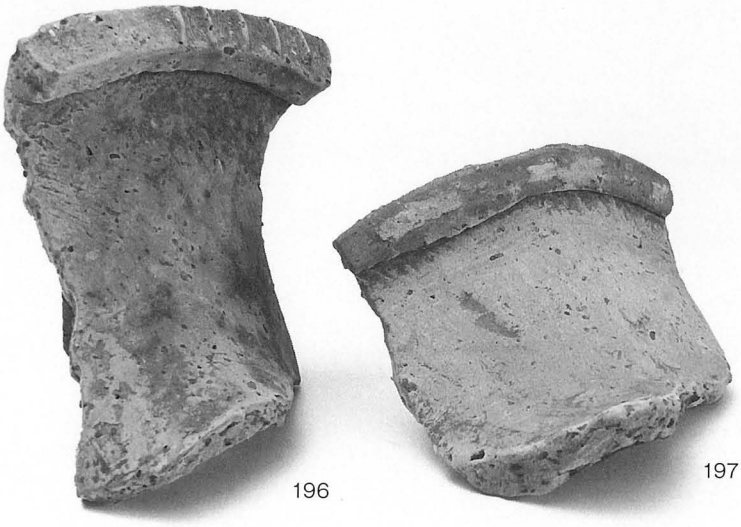
186

189



191

SX04-E 出土遺物

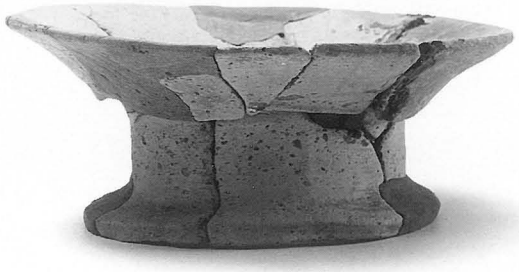


196

197

出土遺物2

図版 56



198

202

出土遺物３

205

206

211

212

219

222

出土遺物４

図版 58

224

225

226

226

227

242

出土遺物５

244

245

246

248

265

266

出土遺物６

図版 60

269

270

271

295

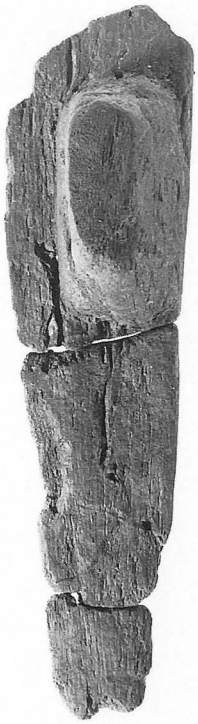
304

324

323

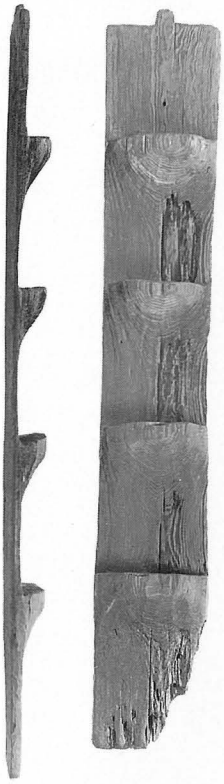
325

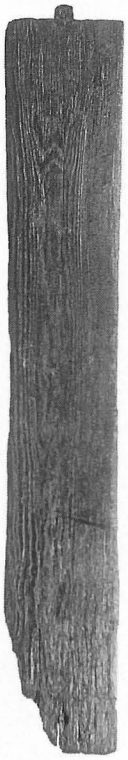
出土遺物７



305

308





311

306

Q-4 グリッド出土遺物

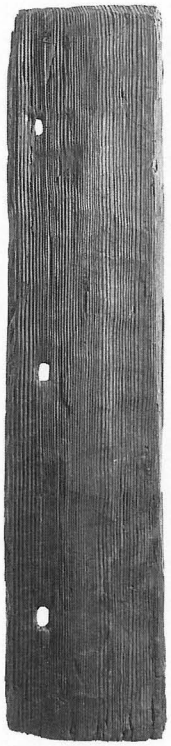
307

310

SX03 出土遺物

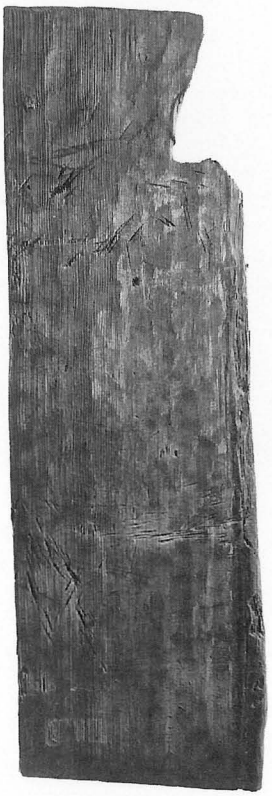
図版 62

312



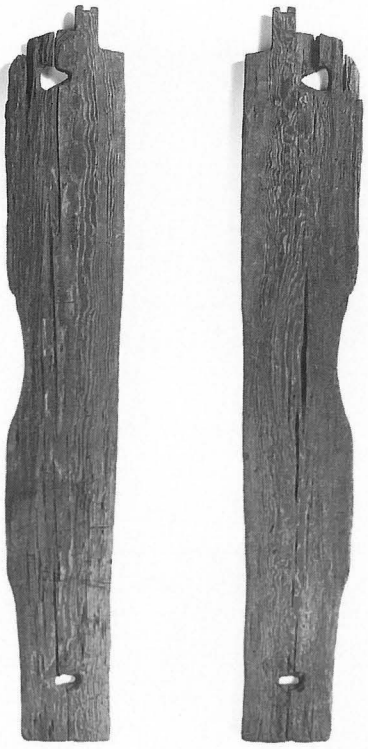
313

314

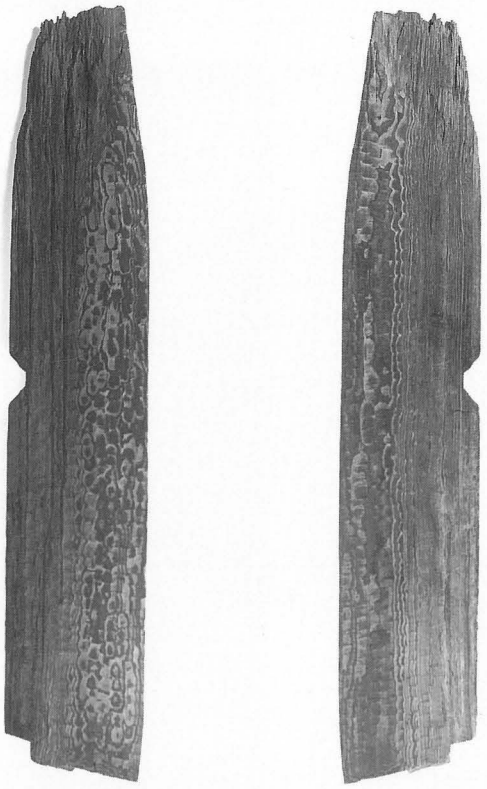


315

SX03 出土遺物



316



317

318

319

SX03 出土遺物

320

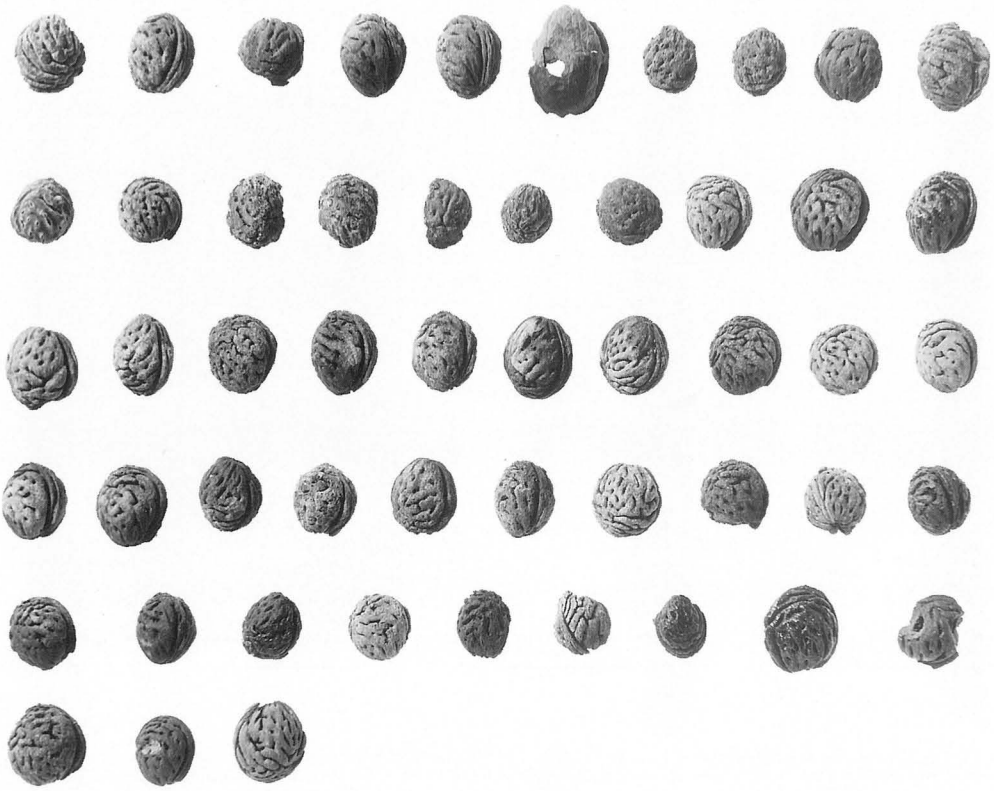
SB07 柱穴礎板

図版 64

321

322

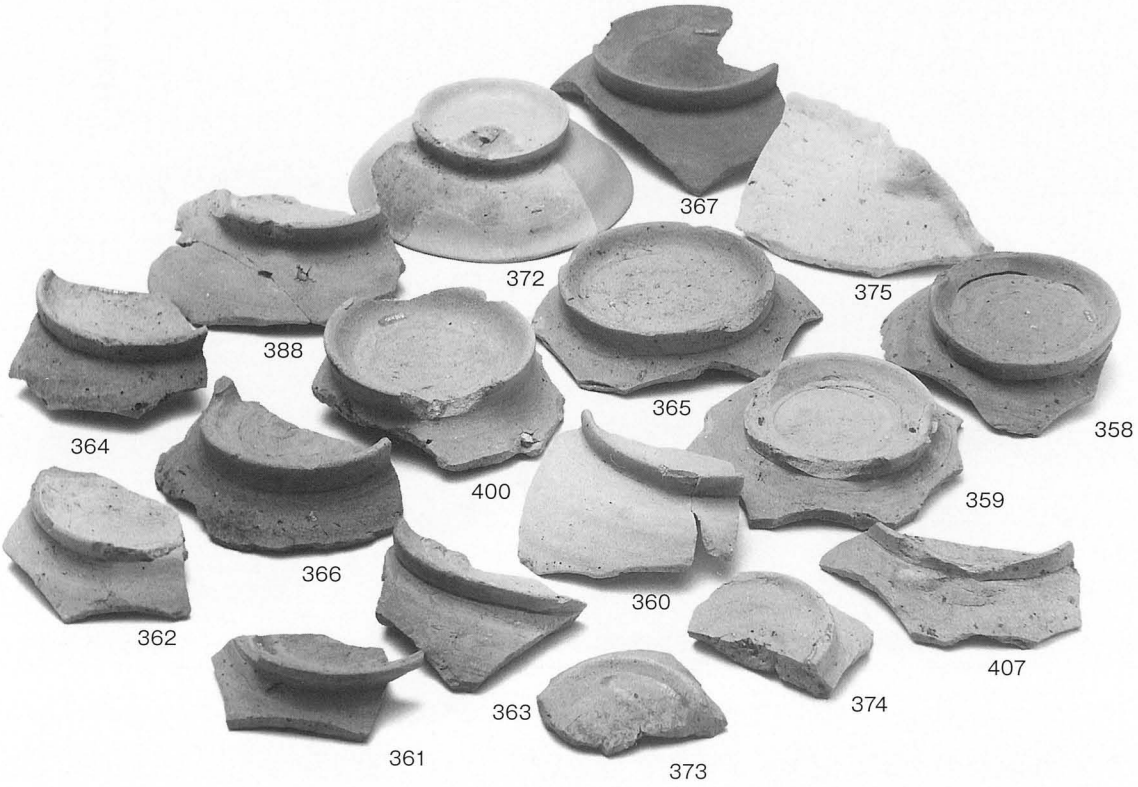
SP62・TP09・SX03 出土遺物



E-3 グリッド出土種子

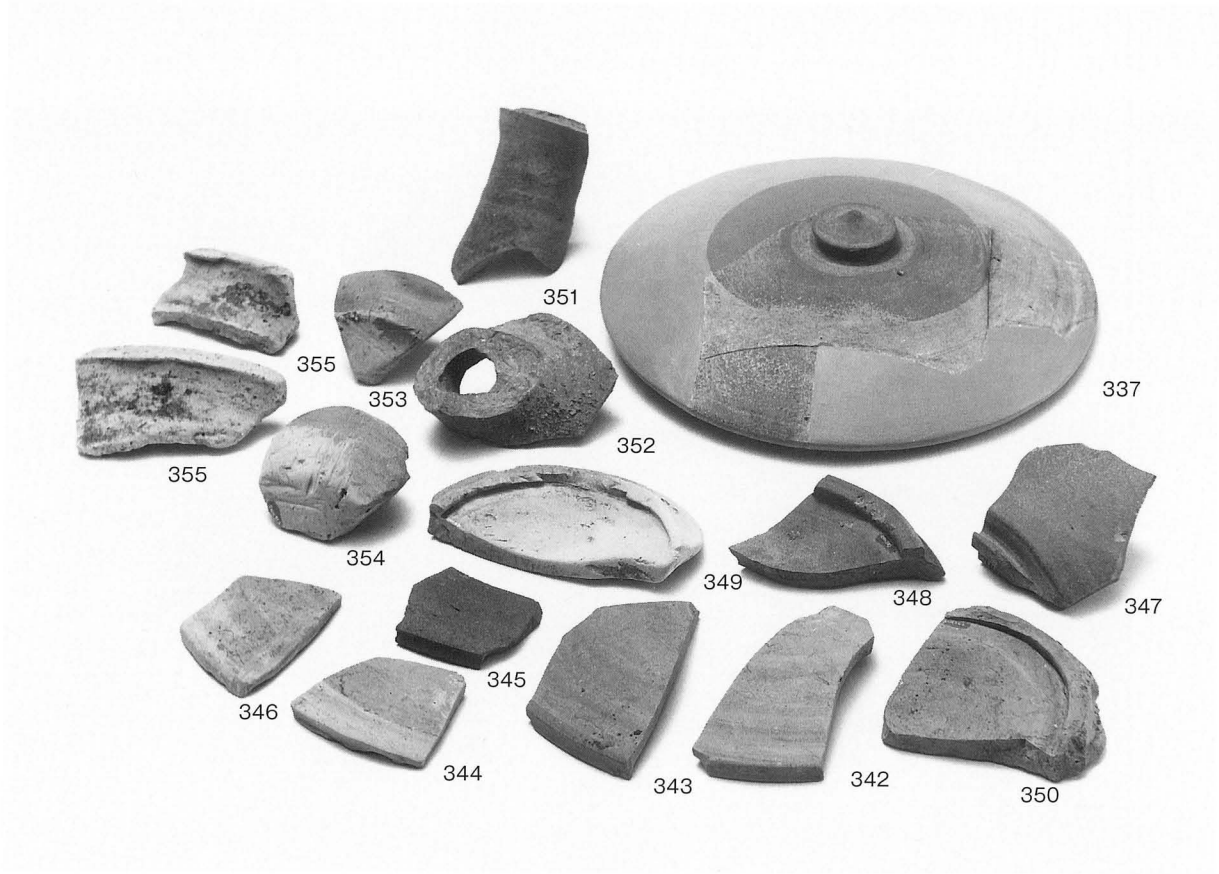
329
326
327
330
327
331

出土遺物８

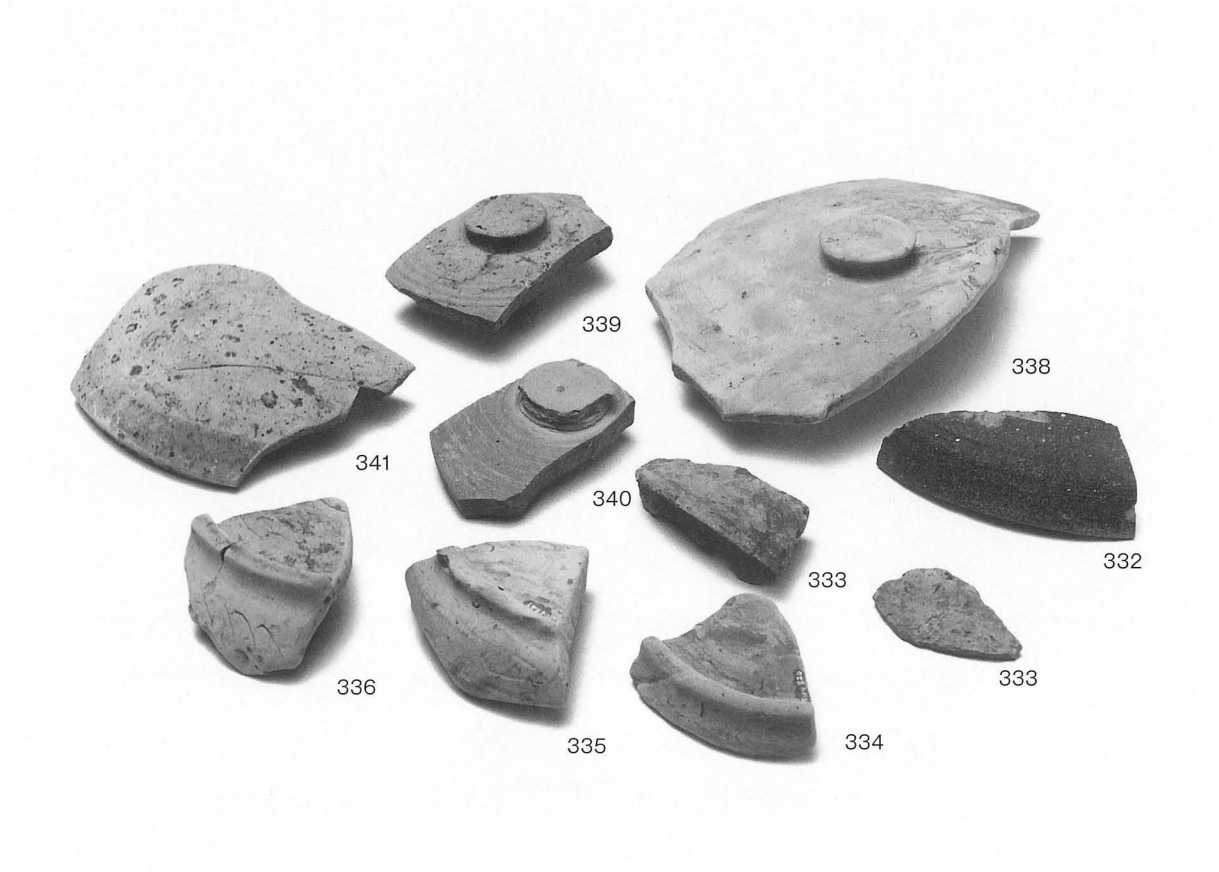

367
372
375
388
365
358
364
400
359
366
360
362
407
374
363
361
373

出土遺物９

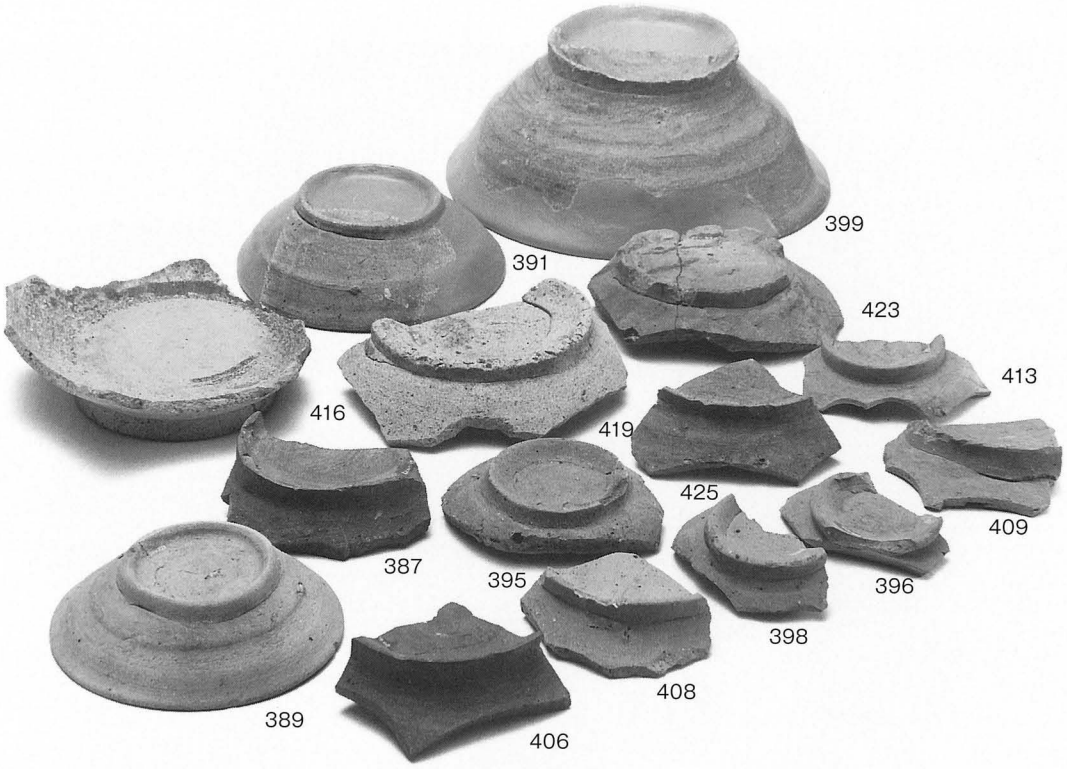
図版 66



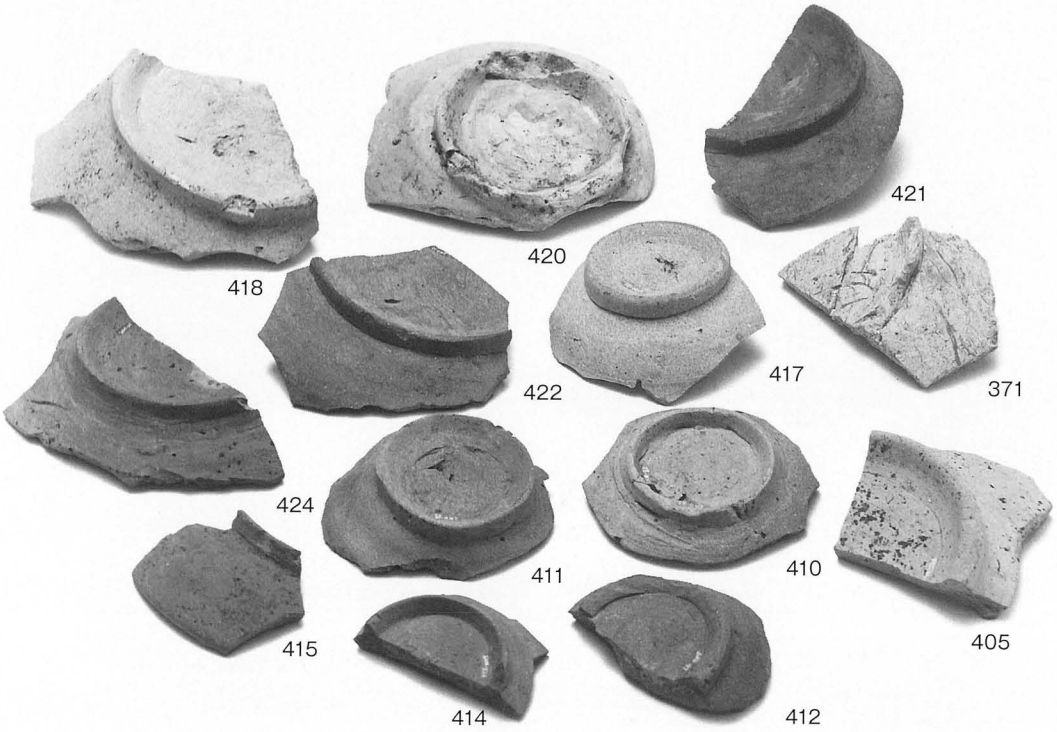
出土遺物 10



出土遺物 11



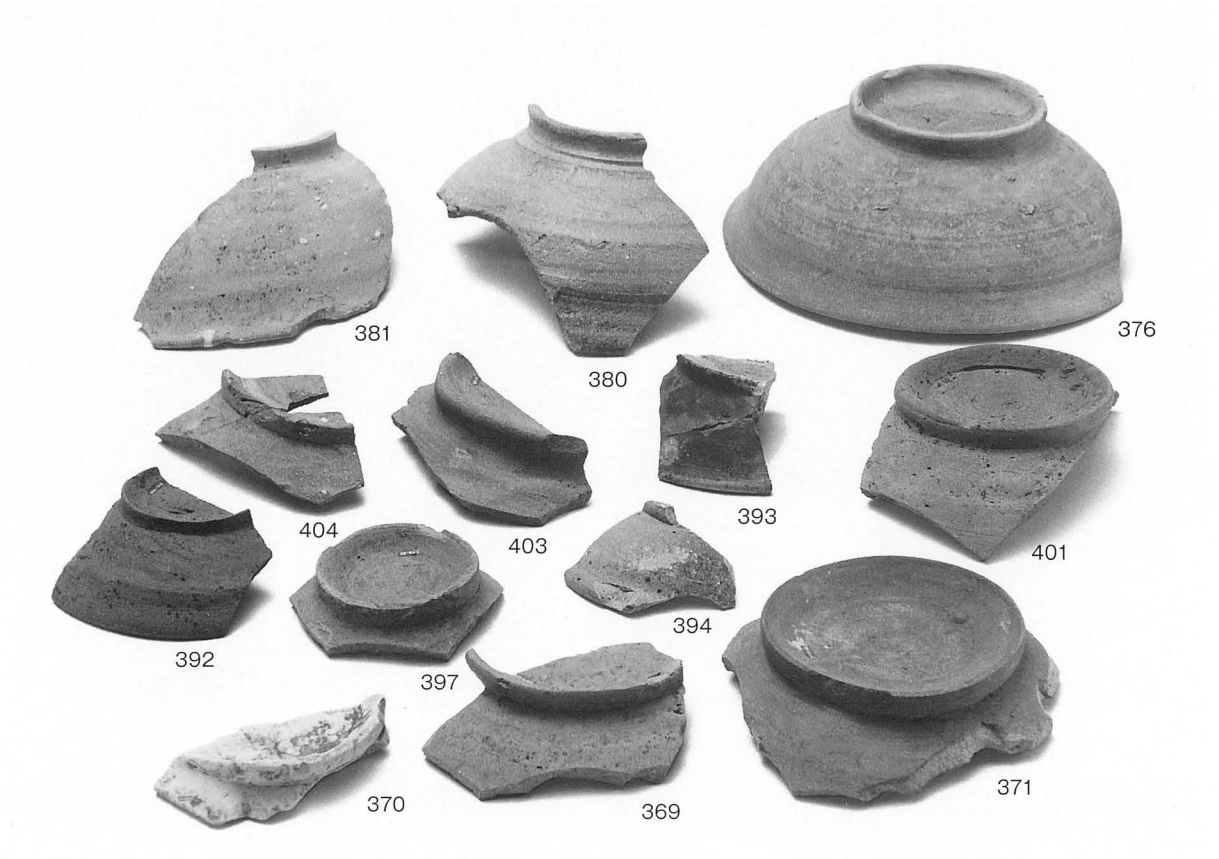
出土遺物 12



出土遺物 13

図版 68

出土遺物 14



出土遺物 15

報告書抄録

ふりがな	なかのごういせやまいせき・なかのごういせやまこふんぐん・なかのごういせき
書名	中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	藤枝市－2
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第215集
編著者名	前嶋秀張
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20 TEL　054-262-4261（代表）　FAX　054-262-4266
発行年月日	2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町名	コード 遺跡番号	北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査期間	調査面積	調査原因
中ノ合イセ山遺跡	藤枝市 中ノ合	22214	23	34° 54′ 28″	138° 15′ 7″	20020419 ～ 20020530	270㎡	開発等の事業に伴うもの（道路）
中ノ合イセ山古墳群						20020301 ～ 20020322 20030211 ～ 20030331 20030407 ～ 20031226	2950㎡	
中ノ合遺跡								

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中ノ合イセ山遺跡	集落	縄文時代早期末	土器・石器の集中部	縄文土器　石鏃　削器 石核	小規模集落
中ノ合イセ山古墳群	古墳	古墳時代後期	横穴式石室墳２基	鉄鏃　刀子　須恵器	
中ノ合遺跡	集落	古墳時代前期	竪穴式住居跡17基	須恵器　土師器	

要約	中ノ合イセ山遺跡は、縄文時代早期末の集落遺跡である。 中ノ合イセ山古墳群は、古墳時代後期の古墳を２基検出した。 中ノ合遺跡は、古墳時代前期と古墳時代後期の集落遺跡である。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第215集

中ノ合イセ山遺跡

中ノ合イセ山古墳群

中ノ合遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市－2

平成22年3月31日発行

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20

TEL　(054)-262-4261(代)

FAX　(054)-262-4266

印刷所　松本印刷株式会社

〒421-0303　静岡県榛原郡吉田町片岡2210

TEL　(0548)－32－0851（代）